

山 岳



XLV



夢さそう

スイスティーの爽かさ!

旅に一罐

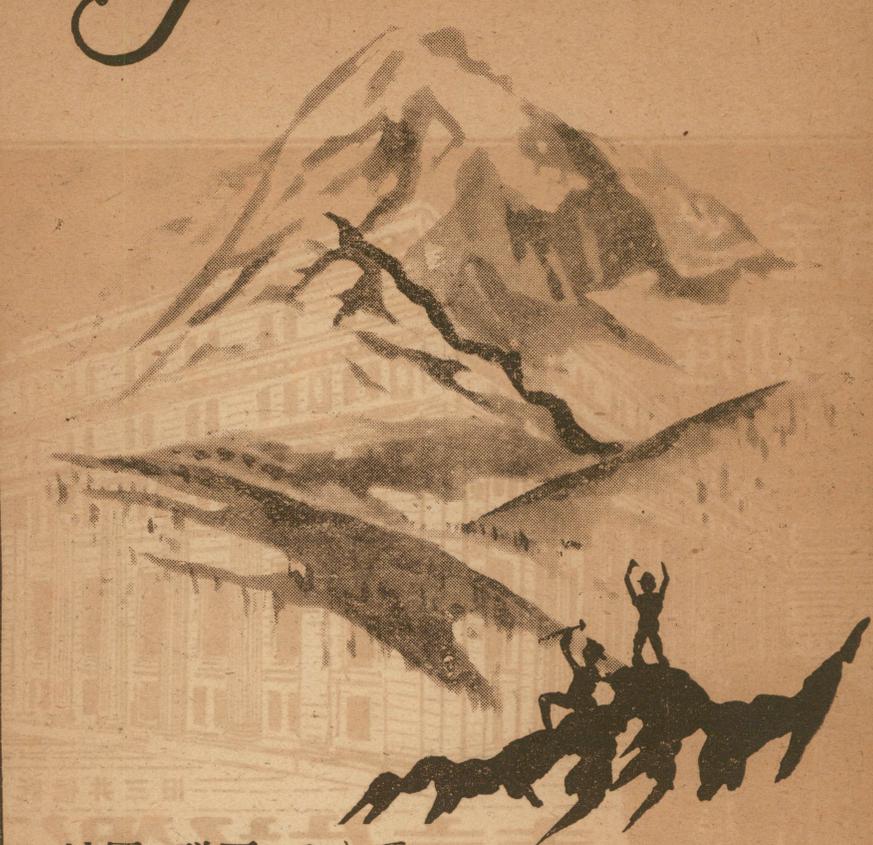
日東紅茶

製造元 日東農林株式會社

發賣元

東京食品株式會社
極東物産株式會社

Meiji

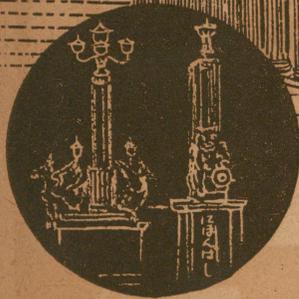
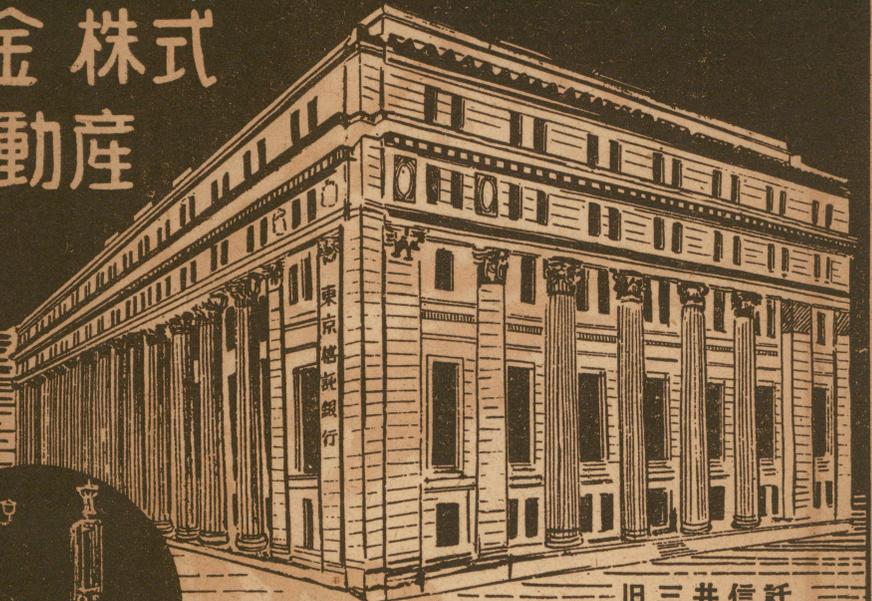


地圖・磁石・そして……

明治チーズ

明治バター・明治乳業

預金株式
不動産



旧三井信託

東京信託銀行

本店 日本橋 三越隣 都内支店 人形町・新橋交叉点角
横 浜・名古屋・京 都・大 阪・神 戸・福 岡・金 沢

金銭信託

安全有利な複利増殖



お客様へのたごる奉仕

Φ 中央信託銀行

本店 東京都中央区日本橋吳服橋際
支店 新宿・大阪・京都・名古屋
福岡・札幌・神戸・新潟

山靴・スキー靴

名人氣質の店
納期正確
舊倍の御愛顧を
御願申上ます



東京都新宿區三榮町3 TEL四谷(35)1912

ブライスリスト
進呈

テント、キスリング型ルックサック、アノラック製作
登山用具 スキー用具 一切販賣

片 桐

東京都文京區湯島天神町三の十九
(湯島天神下電車通り)
電話 下谷 (c3) 701 (呼出中村)



R. K. Mizuno Co., LTD. OSAKA · TOKYO

豊山岡品



美津濃

本店・大阪 淀屋橋 支店・東京 神田小川町

1 人分の掛金で御家族 3 人まで入れる

☆小學校へ御入學の時は、お祝金を差上げます

☆不時の災害で大怪俄された時は、傷害給付金

をお支拂いします

舊安田

光 生命の
家庭保険

案内書進呈——東京都中央区日本橋小網町2ノ2

各 種 文 房 具
高 級 雜 貨 類

販 賣 · 貿 易

★ ★ ★ ★ ★ ★

株 式
會 社

刈 間 商 店

東 京 都 中 央 區 橫 山 町 八 番 地

電 話 (66) 6 8 6 1 番

資本金五億二千萬元



東京瓦斯株式會社

取締役社長

高田五郎

東京都港区芝海岸通一―一五

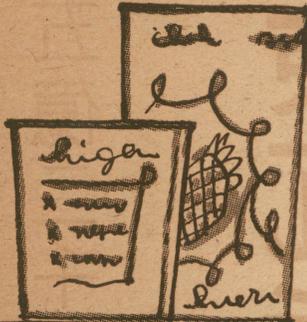
電話芝(43)二一一(8)一四四(2)

FOUNDED IN 1886

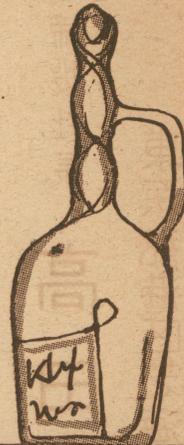
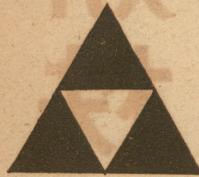
MEIDI-YA O.S.S.

WITH EXPORT BAZAAR

TOKYO
 (KYOBASHI & MARUNOUCHI)
 YOKOHAMA, NAGOYA
 KYOTO, OSAKA, KOBE
 MOJI, FUKUOKA, SENDAI
 & SAPPORO



FOODS, LIQUORS, TEXTILES, SUNDRIES



東京橋座
 銀座内
 丸野中
 横濱倉
 鎌倉古
 名京都
 大大阪
 芦神戶
 須磨

山島司倉岡本澤井山湯塚館帆
 岡廣門小福熊金福富新仙函札

和洋酒，一般食料品，雜貨，製造販売輸出入



株式會社

明治屋

山

岳

第四十五年

山 岳 第四十五年 目次 (一九五〇年度)

改稿・中央亞細亞の山と人……………故木 暮 理太郎…一
 回想のヤング尾根……………田 口 二郎…六
 冬のペテガリ岳……………早稻田大學體育會山岳部…八
 ウイルダー・カイザーに於ける登山指導者講習會……………高 木 正 孝…一〇八
 アイス・ピッケル調査に就いて……………器具調査委員會…一三六
 白馬岳志雜攷(中)……………中 島 正文…一三〇

追 悼

榎 谷 徹 藏……………西岡 藤 木 九一 三雄…一三
 飯塚 篤之助……………冠 松 次 郎…一六
 宮 崎 武 夫……………淺 井 東 一…一七
 湯 淺 巖……………小 原 勝 郎…一七
 雜錄(新名譽會員―アルバータの紀念ピッケル―一九五〇年度役員)……………一八

圖 版

ブライト・ホルンの北面(藤島敏男氏撮影)……………三〇
 ヒンテル・ペーレンバードの小舎……………二二
 プレディクテウシユテウール北尾根と
 フライシユバンク北尾根……………二二
 トーテンキルヒル……………二二
 プレディクテウシユテウール北峰と主峰の西壁……………二三
 名 譽 會 員……………二〇
 アルバータの記念アイス・ピッケル……………二一

挿 圖

中央亞細亞山脈概念圖……………三
 テイリチミア山群概念圖……………二六
 フンザ・クンジイ山群概念圖……………二六
 クンジュウト山群概念圖……………二九
 ケイ二山群概念圖……………三三
 ナンガ・ペアバット、ドイツ登山隊登路概念圖……………三三

シアチェン氷河附近山群概念圖……………三八
 シオク・ヌブラ分水概念圖……………三〇
 ナンダ・デヴィ山群概念圖……………四一
 ダウラギイリイ山群概念圖……………四五
 アンナパアナ山群概念圖……………四六
 ガネツシユ・マナスルウ山群概念圖……………四七
 エヴェレスト山群概念圖(其一)……………四八
 (其二)……………四九
 エヴェレスト登路概念圖……………五一
 カンチェンジュンガ山群概念圖……………五三
 カンチェンジュンガ登路概念圖……………五四
 クラカンリイ山群概念圖……………五六
 ヤング尾根ルート圖……………五六
 ペテガリ岳遠征概念圖……………六六
 ペテガリ岳遠征各隊行動表……………六六
 ウイルダー・カイザー概念圖……………二〇
 元祿十三年御政・奥山御境目見通繪圖(部分圖)……………二四
 越中國新川郡村々組分繪圖(部分圖)……………二五

(表紙 佐藤久一朗)

改稿 中央亞細亞の山と人

故木暮理太郎

第一章 中央亞細亞の山

一 概 説

こゝにいふ中央亞細亞とは、アフガニスタン、東西トルキスタン、西藏、印度、ネパール、シッキム、ブウタン、及び支那四川省等に互る高峻山岳の所在地に總括的に與へた名であつて、實際その地方が亞細亞の中央に位置してゐるといふ意味からでは決してない。地理上からいへば、中央どころか寧ろ南に偏してゐるのである。もと中央亞細亞なる稱呼は、支那、露西亞、イギリス（印度）三帝國の接壤せるパミール（Pamir）高原附近をさしていふたものらしく、恐らく文化未開の深奥地であるといふ考と、この一萬尺を超えた高原一帯は、亞細亞大陸の屋根であり分水嶺であるといふ考とが結合して、亞細亞の中央なるかの如き觀念を歐洲人に抱かしめ、こゝに中央亞細亞なる名稱が生じたものと想はれる。この漠然とした中央亞細亞の範圍を更に東方に向つて途方もなく擴大延長したのは、便宜上假に其名を用ゐて、今日迄に知られてゐる七三一五米（二四〇〇呎）以上の高峰を其中に網羅せんと試みた爲に外ならない。

世界の高山は亞細亞に集つてゐる。之に次ぐものは南米であるが、最高峰のアコンカグア（Aconcagua）は七

○三五米に過ぎぬ。七〇〇〇乃至七三〇〇米級の山は、亞細亞に在りては第五流以下に位するもので、其數は六七十座に達するであらう。筆者は曾て之が採録を企圖したのであつたが、第一に根據とする印度測量部發行の三角測量成果表 (Triangulation Pamphlets and Charts) を或る山の會の展覽會に貸與した際紛失されたので、力及ばず中止して了つた。況や七〇〇〇米以下となれば、他の大陸にありては、それが稀有の存在であつても、亞細亞に於ては先づ團栗の背較べにも比す可く、人の注意を惹くに足りない。しかも七三〇〇米程度の山は、ヌン・クン又はチュモラァリイ山塊などのやうに、獨立孤高してゐるものは割合に少なく、高い主峰を中心として側峙してゐる場合が可なり多いから、登山者の華々しく活躍する舞臺としては、稍物足らぬ感があるのも止むを得ぬことであらう。こんな豪奢な贅澤が言へるのは、中央亞細亞の登山に限つたことである。

斯の如く亞細亞は世界の高山を獨占してゐるが、中央亞細亞は更に亞細亞の高山を獨占してゐると稱してよい。就中七三一五米以上の高峰となれば、其所在は印度西藏の國境に互り、之を中心として西はパミール高原から東は支那の四川省に至る長さ凡そ三千五百軒、幅凡そ三百乃至四百軒を有する細長い地域に限られた觀があつて、其他の地方には未だ一座も發見されないものである。曾て崑崙山脈の中に七四〇八米の高峰あることが報告されたが、其位置に斯の如き高峰の存在せざることが後になつて明にされた。勿論實際を知らぬ人には、一寸想像し難い程の交通極めて容易ならざる高峻な山地の奥であるだけに、測量班は言ふ迄もなく、探検者も未だ足跡を印しない區域が隨所に残つてゐる筈で、將來精密なる測量が施され、周到なる探検が行はれるに連れて、七三一五米以上の高峰が發見され得る可能性は充分にあるにしても、其等はこの地域か、然らざるもこれを去ること餘り遠からざる地點に於て、あらうことが豫想される。

この細長なる地域に於て、歐亞兩大陸に走る大脊梁山骨たるアルパイン・ヒマアライヤ山系 (Alpine-Himalaya Mo-

mountain System) は、最大の隆起を示し、こゝにヒマアラヤ山系を作り、七三一五米以上の高峰のみにて、優に百餘座を數ふ可く、是等山の巨人群が幾多の側峙峰を左右に侍らせ、四〇〇〇乃至五〇〇〇米に達する大扶壁を押し堅てながら、天空を劃して、千古の氷雪に輝く偉容を聳やかし、儼然として大氷河の源頭に君臨する光景は、豪宕崇高、蓋し言語を絶した壯觀であらう。

二 山 脈

ヒマアラヤ山系は、略ぼ平行して北西より南東の走向を取れる十餘條の山脈からなつてゐる。之を南から順に列舉すれば次の通りである。

- 一、シワリク山脈 (Siwalik Range)
 - 二、小ヒマアラヤ山脈 (Lesser Himalayan Range)
 - 三、大ヒマアラヤ山脈 (Great Himalayan Range)
 - 四、ザスカア山脈 (Zaskar Range)
 - 五、ラダアタ山脈 (Ladakh Range)
 - 六、カイラス山脈 (Kailas Range)
 - 七、ヒンドゥ・クシュ山脈 (Hindu Kush Range)
 - 八、大カラコラム山脈 (Great Karakoram Range)
 - 九、サリコル山脈 (Sarikol Range)
 - 十、アギール山脈 (Aghil Range)
 - 十一、葱嶺山脈 (Kashgar Range)
 - 十二、崑崙山脈 (Kun Lun Range)
- 尙ほ其東には、西藏の東南境を越えて大雪山脈 (Tashuñ Shan Range) が四川省の西部に蟠幅し、其北には、タリム盆地 (Tarim Basin) を隔て、アライ及トランス・アライ (Alai and Trans Alai) の兩山脈が天山山脈 (Tien Shan Mountains) となつて、長く北東に延びてゐる。

シワリク及小ヒマアラヤ山脈 シワリク山脈と小ヒマアラヤ山脈とは、大ヒマアラヤ山脈に對し、密接なる關係を

有してゐるが、單に高度の點のみからいへば、ヒマアラヤ山系中の最も小なるものである。しかし二者を比較すれば後者の方が遙に大きい。即ち前者は大ヒマアラヤ山脈の前山で、高度も僅に一〇〇〇米前後であるに反し、後者は主脈との分岐點に近きナグ・ティバ (Nag Tibba) 山脈にて、ダウラギイリの西三十九粒に七三九米、八十四粒に六〇五八米の峰、カシュミヤ (Kashmir) 山脈にて五一四三米のハラムク (Haramukh) を有し、パア・パンジャル (Pir Panjal) 山脈にては、四五〇〇米を超える幾多の峰に氷河を懸けたる者さへあるが、遂に七三〇〇米に達するものは無い。此等の山脈を一括して小ヒマアラヤ山脈に屬せしむることに就ては尙ほ異論がある。

大ヒマアラヤ山脈 大ヒマアラヤ山脈は、西は印度河から東はブラマプットラ即ちツァンポツ (Brahmaputra or Tsang Po) 河に至る延長二千二百粒に餘る大山脈で、ヒマアラヤ山系中の最も主要なる山脈である。印度の北境と西藏の南境とを出入して、始は北西より南東に向ひ、半にして東に折れ、終に東微北に轉向し、緩く南方に彎曲すること恰も弦を張りたる弓の如く、其上管に當る所にナンガ・パアバットが高聳し、下管に當る所にナムチャ・バアワが屹立してゐるのは、偶然かは知らないが面白い相似である。

この長大なる山脈は、便宜上之を四に分けて、印度河からサアトレシ (Sutlej) 河迄をパンジャブ・ヒマアラヤ (Punjab Himalaya)、サアトレシ河からカアリ (Kali) 河迄をクマオン・ヒマアラヤ (Kumaon Himalaya)、カアリ河からティスタ (Teesta) 河迄をネパアル・ヒマアラヤ (Nepal Himalaya)、ティスタ河からブラマプットラ河迄をアッサム・ヒマアラヤ (Assam Himalaya) と稱してゐる。ヒマアラヤは譯して佛經に雪藏又は雪貯といひ、雪の居所を意味し、印度から北方に望まれる恆雪の大山嶺に印度人が興へた梵名である。

パンジャブ・ヒマアラヤは長さ凡そ五百五十粒、カシュミヤの中央を斜に北西から南東に向つて連亘してゐる。最高峰は峻峻を以て聞えたナンガ・パアバットで、八〇〇〇米を超えてゐるが、其他にはスリナガア (Srinagar) の東

百三十五軒の所にヌン・クン山塊があるのみで、其間を埋むる七〇〇〇米以上の峰に缺けてゐる。此山脈の特色として、南の斜面は森林に富み平地に乏しく、北の斜面は禿げて礫確であるが、湖水や高原が多い。

クマオン・ヒマアラヤは又ガワファル・ヒマアラヤとも呼ばれ、長さ二百七十軒で、凡そ三の山群に分れてゐる。其中バァギイラティ (Bha girathi) 河以西の一群は、特記するに足る者もないが、ガンゴトリ (Gangotri) 河の水源を取り巻くバドリナート、ケダルナート及びナンダ・デヴィの二山群は、近く北方に聳峙するカァメット山群と共に比較的狭い範囲内に多数の高峰を有し、此處を目標とする登山者が近來頗る増加するやうになつた。

ネパール・ヒマアラヤは、エヴェレスト、カンチエンジュンガ、マカルウ、ダウラギイリイ等、超特級ともいふ可き八千米以上の世界の高峰十五座の中十座迄を獨占した長さ八百軒の連嶺である。西部はカァリ河の東に漸く七〇〇〇米を超えるアビ、ナムベの山群あるに止まり、中部東部に比して遜色あるを免れないが、其東南二百六十軒を隔てダウラギイリイ山群が崛起し、續いてアンナパアナ、マナスルウ、ガネッシュ、ゴサインクアン等の山群を経て、エヴェレスト、カンチエンジュンガの二山群となり、豪宕無比の大山岳景觀を展開してゐる。孰れも巨人中の巨人でヒマアラヤの名も畢竟是等の大雪嶺に對するヒンドゥ人の畏怖尊崇の念を表現したものであらうことが強く首肯される。

アッサム・ヒマアラヤは、長さに於てはネパール・ヒマアラヤに次ぎ、六百六十軒に互つてゐる。唯高峰群に乏しく、緊張の後に來る倦怠といった感じがある。西部ティスタ河の東にカンチエンジュンガ山群と脈を連ねてゐるカンチエンジャウ、パウフンリイの二山を起し、東微南に延びてチュモラアリイ山群となり、東微北に向ひ、クラ・カンリイ山群に隆起を増し、それよりシオ (Shio) の東に蟠る山塊 (最高峰七〇九三米) に至る迄は、大略二十八度の緯度線に沿うて出入し、高度も六一〇〇米を下ることは少ないが、こゝで急に東北に轉向すると共に、二百八十軒の間

に一として五五〇〇米に達する者なく、最後にブラアマブトラ河の大屈曲點に當り、ナムチャ・バアワの高峰が對岸のギアラ・ペリイ (Gyala Peri, 七一五一米) を後目に唯我獨尊を誇つてゐる。

ザスカア山脈 ザスカア山脈は、アピ・ナムパの附近でヒマアラヤ山脈から分岐し、其北側を西北に延びて、スン・クン山塊の東方に至る山脈で、人に由りては西北部一帯を州名に因みて、ザンスカア・ヒマアラヤ (Zanskar Himalaya) とも呼んでゐる。バドリナアト山群に近くカアメット山群があり、サアトレシ河の西にリオ・パアルギア山塊があり、西北にシルラ (Shilla) 山塊 (最高峰シルラは七〇二六米) がある。此山脈はクマオン・ヒマアラヤ西藏間の分水嶺である所から、高い峠が非常に多く、リプッ・レク (Lipu Lekh, 五一〇五米)、ダママ (Dharma, 五四八六米)、ウンタドゥラ (Utadhura, 五三三四米)、クングリ・ビンググリ (Kungri Bingri, 五五七八米)、シャルシャル (Shalsar, 四九三八米)、ニティ (Niti, 五〇三〇米)、マナ (Mana, 五四五三米) 等は、其中の主なるものであるが、孰れもカアリ、ダウリガンガ、ヴィシヌガンガ等諸河の流域から西藏に踰える峠である。

ラダアク山脈 ラダアク山脈は、次のカイラス山脈と共に其名稱に就て異論がある。この名はラダアクの首府レエ (Loe) の北に蟠蜿せる連嶺に州名を冠して呼んだのが基で、これと略ぼ同一線上にあるものと想はれる幾つかの山頂線を、西はギルギット (Gisgit) から東はアッサムに至る長い山脈に統一し、同じ名で呼ぶことにしたので無理だつたのである。それで此名は其範圍を生れ故郷の山脈に局限し、他は新に命名されることになつた。マナサロワール (Manasarovar) 湖の南東に延互する雪嶺に、ネパアル・チベット分水山脈 (Nepal Tibet Watershed) なる名が與へられたのは其一例である。しかしこれもしつくりと當て嵌つた名ではないといはれてゐる。マナサロワール湖の南に其名の如く天幕形を呈して峙立するグアラ・マンダアタは即ちこの分水山脈に屬し、謂ふ所のラダアク山脈を通じて七三二五米を越ゆる唯一の山である。

カイラス山脈 此山脈はマナサロワール湖の北二十五軒に在る印度教の聖山カン・リンポチエ (Kang Rimpoché) 譯して「雪の尊者」といはれてゐるカイラスから導かれた名で、之がラダク山脈と同様に、ギルギット河の水源からカラコラム山脈と並んで、ブラアマブットラ河の北を東走するものと假定された、半は想像から成る長い山脈の名に充てられて世に廣まつた。果して斯くも長く連続した山脈が存在するかは甚だ疑はしい所から、此名もカイラス山の近傍にのみ止め、西藏の國境以西はカイラス・カラコラムと改稱することが提案された。又國境以東はトランス・ヒマアラヤ (Trans Hima'aya) の名で總稱する人もあつて、スウェン・ヘディン (Sven Hedin) はその熱心なる主張者である。カイラス・カラコラムの最高峰ラカポシイは、フンザの土人は其名を知らず、ドゥマニイ即ち「雲の母」と呼んでゐる。恐らく初めてバグロット (Bagrot) 地方を旅行した英國の官吏が南方から此山を望みて、ラカポシイ即ち「悪魔の尾」なるギルギットの稱呼を用ゐたものであらうといふ。フンザ河の東岸六軒半の所に尖く屹立してゐる山である。

大カラコラム山脈 大カラコラム山脈はヒマアラヤ山脈と相聯んで、世界最大の山脈である。高さはヒマアラヤに比して少しく劣り、長さはパンジャブ・ヒマアラヤの五百五十軒にも及ばぬ五百十五軒であるが、其特長として世界最長の大氷河を多數抱擁してゐることは、ヒマアラヤの遠く及ぶ所ではない。カラコラムはもと峠の名であつて、天山南路から西藏又は印度に入る通商路が古くより此峠を踰えてゐる。それで便宜上其山脈に峠の名を冠して呼ぶことになつたのである。これもラダクやカイラスと同じく、ヒマアラヤのやうに適切な土人の稱呼が知られてゐない爲であつた。然るにカラコラムの主脈にはムズ・タグ即ち「氷雪の山」といふヒマアラヤと似た稱呼のあることが確實となり、且峠も其北に在るアギール山脈を横斷するものであることが明になつたので、名稱の混亂や疑惑を防ぐ爲に、カラコラムの主脈をムズタグ・カラコラム、其南支と見られるカイラス山脈をカイラス・カラコラム、北支と

見られるアギール山脈をアギール・カラコラムと改稱し、カラコラム山系をカラコラム・ヒマアラヤと呼ぶことにしたならば妥當ではあるまいかと、附近の地理に精進せるケニス・メイソン (Kenneth Mason) から提案された。いづれ英國地學協會で協議會を開いて、其稱呼を決定するとの事である。

(註) この協議會の最後の決定は一九三七年に行はれ、その結果はケニス・メイソンによつて "Karakoram Non-enclature" の題名の下に發表された。Himalayan Journal X, 1938 或は Geographical Journal vol. 91, 1938 参照。尙日本山岳會報九三號附録所收のカラコラム遠征年譜に附された地圖及び表によつてその概要がうかゞへる。それによると決定された山脈名は木暮氏の述べた當時のものとは、更に大分改訂されてゐる。(編者)

主脈は従來考へられてゐたやうに、カラコラム峠の方へは向はず、テラム・カンリイから東南を指して、シオク (Shyok) これは Shaiok の方が正しくシャイオ又はシャヨウに近い發音をなし、従つて英語化した綴りもシヨウと讀むので、クはサイレントであらうと思ふ) 河とヌブラ河との間を走り、シオク・ヌブラ分水山脈を成し、シオク河を越え、稍東に轉向して西藏國境に達してゐることは、カラコラム山系の主軸に特有なる同じ花崗岩塊と石灰岩とに依りて構成された山脈を追跡し得ることから明かであるとされてゐる。そこから世界第二の大山脈も急に高度を減じ西藏高原に二三の孤立した雪の山塊を見せるのみで、其行衛は今尙ほ探究されてゐないので不明である。

大カラコラム山脈は、フンザ・クンジイ、カンジュット、ケイニ、シオク・ヌブラ分水等の山群に大別される。フンザ・クンジイは、フンザ河の西に在りてヒンドゥ・クシュ山脈に連り、最高峰は七七三三米に達する。此山群には雪崩のみならず、岩ナダレが屢起るので危険であるといふ。フンザ河の東に在るものはカンジュット山群で、最高峰ダストオ・ギール山群の北部に位してゐる。ケイニ山群はバルトロ氷河を圍りて、最低六千米を下らざる大障壁を堅て連ね、ガッサアブルム、プロオド・ピイクなど八〇〇〇米以上の高峰四座を有してゐる。主峰ケイニは片麻岩か

ら成り、殆ど獨立した完全なる圓錐體である。名にし負ふムズタアグ・タワア (Muztagh Tower、氷雪塔の意) は鳳凰山の最大岩 (地藏佛) を數百倍したやうな、瞠目に値する花崗岩の岩塔で、海拔七二二三米 (ディレンフルトに據れば七二七三米)、直立の岩塔のみにて二千米を超え、初めてバルトロ氷河に踏み入る人の足を釘付けにして、其心膽を寒からしむに充分である。これに限らずバルトロ氷河の右岸には、大小幾多の岩塔が羅列してゐる。花崗岩から構成されてゐることが其主因であらう。バルトロの東にはシアチュン大氷河が東南の方向に展開し、其兩側に高い峰が氷海に浮ぶ氷山のやうに點在してゐる。其東側の高山列が更に東南に延びたものが即ちシオク・ヌブラ分水山群である。此山群に就ては從來餘り知られてゐなかつたが、昨年既に印度測量部では改測を終つたから、近く其結果が發表されるであらう。

ヒンドゥ・クシュ山脈 ヒンドゥ・クシュ山脈は、大カラコラム山脈の延長したものが場所の異なるに従つて亦其名を異にしたものである。其限界はバツラ氷河の源頭、東經七十四度の邊とされてゐる。アフガニスタンの國境に近づくと、大きく弧を描いて西南の方向に屈曲し、同國內を横斷して、末は幾つかの支脈に分岐してゐる。最高峰はチトラル (Chitral) の西でアフガニスタンの國境に在るテイリチ・ミイアである。其東の連脈中には六〇〇〇乃至六七〇〇米の高峰數座が見られる。クシュは印度語「連山」の義であるといふ。

サリコル及アギル山脈 サリコル山脈は、葱嶺山脈と並行して、パミール高原の東側を成し、北々西から南々東に向ひ、ムズタアグ・カラコラムの北に在るアギル赤色山脈と連続するものと推測されてゐる。亞細亞の分水嶺であるといふ重要な位置にはあるが、六千米に達する山は殆どない。しかしアギル山脈には、アギル・カラコラムと同様に、六五〇〇米級の高峰が多數存在してゐる。

葱嶺及崑崙山脈 葱嶺は即ちカシュガル山脈に與へた支那人の稱呼である。玄奘三藏の大唐西域記には

葱嶺者、據臚部洲中、南接大雪山、北至熱海千泉、西至活國、東至鳥鍛國、東西南北各數千里、崖嶺數百里、幽谷險峻、恆積冰雪、寒風勁烈、地多出葱、故謂葱嶺。又以山崖葱翠、遂以名焉。

と説明されてゐる。葱はギヤウジャンニクの類であらうか、しかしタクラ・マカン (Takia Makan) の大沙漠が東にある關係などから、山が霞んで見えることが多いのではあるまいか。山崖の葱翠なるを以て名としたといふ方が尤もらしく思はれる。ムズタッグ・アッタ、クングル第一第二の三山は、共に七三二五米を超えてゐる。

崑崙山は葱嶺と同じく、支那人によりて命名されたもので、其山嶺には玄圃・閩風・瑤池などいふ仙境があると想像されてゐた。葱嶺山脈が東經七十六度のあたりで、東南東に彎曲し、崑崙山脈となり、大略三十六度の緯度線の北側に沿うて西藏の北部を遠く甘肅省に達するものと見られてゐるが、勿論詳細は未だ不明である。東經八十五度の附近からアルティン・タッグ (Altin Tagh) 山脈が北に分岐し、三十九度の緯度線の南を青海の北方に至り、ナン・シヤン (Nan Shan) 山脈と呼ばれ、數條の山脈となり、其中スエス (Suess) 山脈の如きは、五五〇〇乃至六〇〇〇米に達する高峰多數を有してゐる。

崑崙の主脈は、和闐 (Khotan) の南方、カラ・カシュ及びユルン・カシュ (Kara Kash and Yulung Kash) 兩河の水源地に六〇〇〇乃至七〇〇〇米の高峰蟠集し、其數三十座を超え、中にもムズタッグは七二八二米、今日迄知られてゐる崑崙山脈の最高峰で、之に次ぐものは七二四一米の無名峰である。

天山、アライ及トランス・アライ山脈 天山山脈は、パミール高原の北縁を成すアライ及トランス・アライの兩山脈を南に連ね、タリム盆地の北を限りて東北に延互し、ヅンガリヤ (Dzungaria) の北境「ヅンガリヤ地峽」にてアルタイ (Altai) 山脈と分たれてゐる。最高峰カン・テングリイ (Khan Tengri) は始め七一九三米と測られたが、

後に六九九六米と改められ、一九一三年露國の陸軍測量班は六九八〇米と測定し、更にサポシニコウ(Saposhnikow)の更生せしものは、六九五〇米となつてゐる。カラコラムに次ぐ長い氷河があるので名高い。メルツバッヘル(Merzbacher)に據ると、頂上附近に氷河湖があり、之を渡らなければ登路がないので、止むなく登高を斷念して引返しなすである。其後キャンパス・ポオトを携帯した登山者の一隊は、湖水を渡ることには成功したが、遂に絶頂を窺め得ず、一九三一年の露國探検隊に依りて、初めて登頂されたといふことである。他にも五四〇〇乃至五七〇〇米の峰には乏しくないが、七〇〇〇米に達するものはないらしい。しかしシュムバアグ(F. Schomburgk)は、既刊の地圖には誤が多いから改測する必要がある、マナス(Manas)山塊には七三〇〇米を超える峰があると報告してゐる。若しそれが誤でなければ勿論最高峰で、其位置はカン・テングリイを東に去ること三百六十軒、東經八十五度の邊であらう。

トランス・アライの最高峰は七一三〇米のピク・レニン(初めカウフマンと稱す)で、兼て露領第一の高峰と目されてゐた。然るに一九二八年獨露合同のアライ・パミール探検隊はセルタウ(Setau)のビータア大帝山脈に於て、七四九五米の高峰を發見し、ガルモ(Garmo)と名付けた。一九三一年露國の登山隊は、ガルモの名を附近の六五〇〇米の峰に移して、露領内に於ける最高峰をピク・スタアリンと改名し、頂上を極めんとしたが果さず。一九三三年更に登攀を續行し、途中キャンプを作ること三箇所、最後の五百米は困難甚しかりしも、遂に二人の登攀者は頂上に達することを得たといふ。ピク・レニンは一九二八年の探検に際し、シュナイダア(Schneider)の一行三人によりて登頂されたのである。

トランス・アライの北に在るアライ山脈には、五八〇〇米を超える峰はない。

大雪山脈 大雪山脈は支那本部の山脈である。此名は支那の地圖に早く記入され、其處に高い雪山の聳立してゐる

ことは、其名が既に之を顯はしてゐる。わが陸地測量部の東亞輿地圖にも、打箭爐の西に當り、大雪山山脈と大書し、其南の山塊に大雪山と小さく書かれてゐるが、惜い哉標高が記入してないので、巴塘鹽江ベヤクリンあたりを旅行した英人の旅行記の附圖に據りて、五六千米の山は有るであらうと想像してゐた。然るに一九三二年十月、四人より成る外人登攀隊は、最高峰ミニヤ・ゴンカアの登頂を企て、四週間を費して一行中の二人は遂に絶頂を踏破したことが報告されたのであつた。それで憶ひ出したのは、クレイトナア (Kreiner, クライトネル?) が大雪山の或峰を測つて、二六〇〇呎 (七九二五米) の高度あることを發見し、且楊子江の西には更に高い山があると書いた記事や、又「ジャイアント・パンダを追跡して」と題するロオズヴェルト兄弟の著書にコオンカ (Koonka) 山に就て、「この巨峰の高度は知られてゐない。けれども三萬呎 (九一四四米) 以上で、世界の最高峰だと主張する人々がある」と書いた二三行の文字である。支那の地圖に大雪山の名は珍らしくないが、これ丈は名實共に大雪山であることが證明された。

大雪山脈は、ヒマアラヤ山系の造山運動と時を同じくして隆起したもので、ヒマアラヤ山系はアッサムに於て全部南に曲つて了つた譯ではなく、一部は東方に波及し、四川雲南を経て貴川湖南に達してゐる。其高山列は略ぼ東西に走る二線をなし、北に在るものは大雪山脈で、南に在るものは麗江山脈である。唯此等の山脈は、平行して南下する三四の大河に横斷されてゐるので、普通の旅行者は南北に向ふ山脈を観察するに過ぎないのだといふ。ともあれ此山脈には、尙ほ登山遠征隊を待つて闡明さる可き多くの問題が残されてゐる。地理地質動植物等の科學的方面を閑却しても (この閑却は許されるにしても、遠征隊には望ましいことではない)、未知の地方に七〇〇〇米を超えた高い處女峰を發見して、其氷河に、岩稜に、白雪に、日頃自慢のピッケルを打ち込みつゝ、一步一步と頂上に近付くことを想ふ時、誰か心の躍らない者があらうか。

以上は極めて粗雑であるが、次に紹介せんとする高峰の位置を説明する便宜上、中央亞細亞の山脈に就て其大要を

述べたのである。詳細なる科學的記述は筆者の能はざる所で、こゝでは又それが目的ではないことをお断りして置く。尙ほ西藏の内部には、僅に其外貌を知られたに過ぎない幾つかの山脈があり、七三〇〇乃至七六〇〇米の高峰あることが探検者に依りて報告されてゐるが、その或ものは後に實測の結果、斯る高度を有せざることが明にされた。出來る丈多くの高峰を採録することは、筆者の希望する所であるが、相當な測量を経たものでなく、探検者の概測した程度のもので、茲には暫く除外することにす。

三 氷 河

わが國の高山に生きた氷河の存在しないことは、眞に千秋の恨事である。國粹論者であつた日本風景論の著者も、「日本に氷田（インレー）を見るべからざるは大遺憾」となし、「然れども既に榕樹椰樹を見、兼て亦た氷田を看んとす、是れ貪慾饜くを知らざるもの、既に隆夏針木嶺上二里四方の雪田を看、又た嶺の谿間小部分に氷河を見る、亦た以て氷田の看を做して可」と自ら慰めてゐる。この氷河といふのは萬年雪をさしたものであらう。今ではこの萬年雪に埋められた多くの圍谷が発見され、其圍谷は過去の氷河問題に議論の花を咲かせる種とはなつた、されどあ遺跡、遂に人力を以て再び生きた氷河に回春せしむる術なきを如何せん。

そこで暫く議論の花を餘所に、眼を轉じて中央亞細亞の山脈を眺めると山が楯外れに大きい丈あつて、氷河も亦素派らしく大きいのである。しかし大氷河はヒマアラヤよりもカラコラムに多い。カンチエンジュンガのゼムウ(Zemu)氷河は、ヒマアラヤでは最長のものであるが、漸く二六千を測るのみで、アルプスのアレッチ(Aletsch)氷河と匹敵し得るに過ぎない。他は皆二五千以下である。尤もクマオン・ヒマアラヤのガンゴトリ氷河はゼムウ氷河よりも長いのではないかといはれてゐるが、完測の結果ゼムウ氷河と等しく、ほと二六千であることが判明した。然るに

カラコラム山脈では、五〇籽以上五、三〇籽以上少くとも四を數へ、天山さへもカン・テングリイに三〇籽以上三を有してゐる。一九二八年トランス・アライにフィヨドチェンコ氷河が発見されて、亞寒帯外に於ける世界最長の氷河たる名を擲にするに至つた。次に掲ぐるものは亞細亞の八大氷河である。

名	稱	長さ	山脈	高度(末端)	方 向
フィヨドチェンコ	(Fiodchenko)	七七・三籽	トランス・アライ	三〇一二米	南——北
シアチェン	(Siachen)	七二・五	大カラコラム	三七〇三	北西——南東
イヌイリチヤク	(Inyalek)	七一・八	天 山	二七七三	北北東——南南西
ヒスバア	(Hispar)	六一・二	大カラコラム	三二三一	東南東——西北西
ピアホ	(Piako)	五九・六	同	三一五八	北西——南東
バルトロ	(Baltero)	五八・〇	同	三五三〇	東——西
バツラ	(Batura)	五八・〇	同	二四四八	西——東
コイカフ	(Koiak)	四九・四	天 山	三四五〇	北北東——南南西

コイカフを除き孰れも五〇籽以上である。其方向から察すると、長い氷河は大體に於て山脈の走向と一致してゐる場合が多い。此外大カラコラムのカンジュツト山群には、四八籽のクアドピン (Khurdopin)、四一・九籽のヴァジェラブ (Virjerab)、三七籽のヤズギール (Yazghil)、小カラコラムには三八・六籽のチヨゴ・ルンマがあり、天山には三二・二籽のセミノフ (Semenoff) がある。カラコラムのシアチェン以下四大氷河は、長さにはフィヨドチェンコに劣つてゐるが、幅に於ては優つてゐるといふ。天山のものは概して細長い。

フィヨドチェンコ氷河が獨露合同のアライ・パミール探検隊に発見される迄は、シアチェン氷河が最長のものとされてゐた。此氷河は一八四八年ヘンリイ・ストラチイ (Henry Strachey) に発見されたものであるが、長い氷河であることを知られたのは、一九〇九年にドクタア・ロングスタッフが初めて其上部を横斷した際であつた。一九一二

年ワアクマン夫妻の遠征隊に依りて其全長が測られ、意外にも四十五哩に亙る大氷河であることを知つたワアクマンは、吾こそ世界第一の大氷河を發見したと鬼の首でも取つたやうに喜んだのであつた。それまで第一位を占めてゐたイヌイリチエクは従つて、第二位となり、十六年後にまた第三位となつた。氷河若し物言はず上には上があるものと歎息したことであらう。

ヒスパア氷河はピアホと、其源頭約五三五〇米のヒスパア峠に於て、互に相連つてゐる。若しヒスパアを遡つてピアホに下れば、一二〇粒に餘る氷河旅行が出来る。一二〇粒といへば約三十里で、越中の黒部川が鷲羽岳から日本海に至る河口まで氷河となつたものに等しい。ピアホの末端から東に河原を辿ること十八粒で、バルトロに達し、再び氷河上を歩むこと五十八粒、其源頭に聳立するクイン・メリイ峰の尾根から、都合よくシャチェンに下ることを得れば更に七十二粒の氷河上を跋涉する豪快な旅が続けられやうといふものである。このバルトロとシャチェンを連絡することは、未だ實行した人がないので、下れるか否か不明である。一昨年ディレンフルトの一行は、バルトロを遡つてクイン・メリイに登つてゐるが、シャチェンへは下らなかつた。果して何人に依りて其可能なることが實證されるか、氷河に關心を持つ人に取りて興味ある問題である。想像する所では、通行不可能といふよりは、寧ろ交通最も不便な山地の奥に在る一三〇粒の氷河を上し、其間に高峰の一でも登らうとするには、三四箇月に亙りて必需品の運搬に數十百人の人力と多大の費用とを要する爲に、未だ之を試みる人がないのであらうと推察する。

四 高 山

印度測量部では、一九〇六年秋の集會に於て、「此頃ヒマラヤ及西藏地方への旅行者が増して來た、そして此等の地方に關する地理に就て、一般の人々が興味を感じてゐることは明かである。此際現に知られてゐる地理的狀態を

一括した書を編纂したらよからう」といふことに決して、一九〇七年から八年にかけて刊行したのが「ヒマアラヤ山脈及西藏の地理地質概略」(A Sketch of the Geography and Geology of the Himalaya Mountains and Tibet, 以下略して単に「概略」と稱する。)であつた。此書は四部に分れ、第一部は亞細亞の高山、第二部は亞細亞の主要なる山脈、第三部はヒマアラヤ及西藏の諸河、第四部はヒマアラヤの地質といふ順序で、バアラド(S.G. Burrard)及ヘイドン(H.H. Hayden)の共著に係り、獨りヒマアラヤ・西藏のみならず、中央亞細亞の地理を知るには極めて必要なものである。本篇の記事も此書に負ふ所が甚だ多いのである。しかし其後二十餘年を経過する間に、中央亞細亞の探檢は其歩を進め、ヒマアラヤ・カラコラムに遠征する登山隊は増加し、印度測量部でも亦銳意改測を斷行した結果、既知の部分は勿論、從來知られてゐなかつた地理的狀態さへ、次第に明瞭となつたので、こゝに改版の必要を痛感し、一九三三年から三四年にかけて、訂正第二版が出版されたのである。筆者はまだこの改訂版を見る機會がなく、之を参照し得なかつたことは、實に遺憾であるが、能ふ限りの範圍に於て他書を涉獵することは怠らなかつた。

(註) 當時虎ノ門の日本山岳會圖書室には會員三田幸夫氏手澤の本書の舊版しかなく第二版は藏されてなかつたが、木暮氏は後年その第二版を親しく閲覽するの機會を獲るに及び、同書によつて本稿に朱を加へられた。この點は本稿の隨所に見られる第二版によれば云々等の記入によつても十分知られるであらう。(編者)

前に概説に於て述べたやうに、七〇〇〇米以上の高山を網羅することは、最も希望する所であつたが、其數が餘りに多いので、「概略」に倣つて高度を七三一五米以上に限る事とし、第一版の七十五座を訂正増補して百二十六座を得た。(註) 勿論是等の中には、一峰として認むるに躊躇されるやうな峰もあり、探檢者の測定を経たのみで、公認されてゐないものもあるが、相當の根據ある者は皆採録することにしたのである。其他圍上では明に高度の資格を備へてゐるが、或は標高の記入を缺き、或は標高は記入してあるも、一峰と認め得可き根據(たとへば寫眞の如き)なき

ものは採録しなかつた。山の標高は容易に決定し得るものではない。低い山ならば格別、七〇〇〇米以上の高峰となれば、測量者を異にするに従つて數値を異にし、改測の度毎に三〇米乃至五〇米の相違あることは、當局者も之を認めてゐる。こゝに掲げたものも近似數であつて、上記の範圍内で正しいものとされてゐる。是等は振子、潮汐、磁氣量地等に就て、精密なる觀測が行はれた後に、適當な更正が加へられ、始めて標高が確定するのである。

(註) 舊稿には百七座とあつたが、改稿は百二十六座に増補された。よつて此處の箇所は、『概略』第二版の八十六座を訂正増補して百二十六座を得た」と書きかへた方がよいと思はれるが、原文の儘にしておいた。(編者)

山名の知られてゐないものは、符號で表はしてある。例せばKはカラコラム山脈中の第二の峰であることを示し、羅馬數字が用ゐられてある者は、多くネパールの山で、古い測量當時の番號が其儘残つてゐるのである。エヴェレストはXVで表はされてゐた。それも一九二四年から二七年にかけて改測された結果、多數は地方の山名が置き換へられるやうになつた。B又はRは其地方を測量した測量官の頭文字を取つたもので、Barckley 又は Ryder の略である。ピック五/四十二ピーに就て言へば、印度測量部發行の百萬分一圖は、一枚が經緯度共に四度宛で、之に地名の代りに圖幅番號(例へば四十二)を記し、更に之を十六分した經緯度一度宛の者は、縮尺二十五

42

A	E	I	M
B	F	J	N
C	G	K	O
D	H	L	P

萬三千四百四十分の一に當り、デイグリー・マップの稱がある。此圖の左上隅をA、右下隅をPとし、其間にBからOまでアルファベットが順に充てゝある。そして測量された峰が恐らく高度順に番號をうたれてゐる事と思ふ。ピック五/四十二ピーは、即ち圖幅四十二號デイグリー・マップP圖幅の第五の峰であることを示したもので、この方法は一般に採用されてゐるから知つて置く必要がある。又英國では決してオフィシアルに米を用ゐな

い。山をアイデンティファイするには呖をも記入して置いた方が好都合であらうと思つた。

中央亞細亞の高山目錄

山名	又	は	符	號	高度	所屬山脈名
一	マウン・ト・エヴレスト	(Mount Everest or Chomolungmo)		37772 I	28580 米	ネパアル・ヒマアラヤ
二	ケイ ¹	(K ² or Godwin Austen or Lamlu Pahar)		1352 A	28211	ムスタアグ・カラコラム
三	カンチエンジエンガ第一	(Kangchenjunga I)		10478 A	28200 — 28150	ネパアル・ヒマアラヤ
四	ロオ・ツェ	(Lho Tse or F ²)		72 I	28201	同
五	カンチエンジエンガ第二	(Kangchenjunga II)		10278 A	28200	同
六	マカアールウ	(Makalu) 2/72 M			28202	同
七	ダウラギリ	(Dhaulagiri or Dhaulagiri D)		9/62 P	28201	同
八	チョ・オイウ	(Cho-Oyu or T ⁵)		5/71 L	28200	同
九	マナスルウ	(Manaslu or Peak XXX or Kutang I)		14/71 D	28200	同
一〇	ナンガ・パマハット	第一 (Nanga Parbat I)		48/43 I	28200	パシヤブ・ヒマアラヤ
一一	アンナパナ第一	(Annapurna I or Peak XXXIX or Morshadi)		62 P	28200	ネパアル・ヒマアラヤ
一二	ガッシャアブルト第一	(Gasherbrum I or Hidden Peak or K ²)		23/52 A	28200	ムスタアグ・カラコラム
一三	ブロード・ピイク第一	(Broad Peak I)		16/52 A	28200 (K ²)	同
一四	ガッシャアブルト第二	(Gasherbrum II or K ³)		21/52 A	28200	同
一五	ゴサインタアン	(Gosainthan or Shisha Pangma)		46/71 H	28200	ネパアル・ヒマアラヤ
一六	ガッシャアブルト第四	(Gasherbrum IV or K ³)		19/52 A	28200	ムスタアグ・カラコラム
一七	ガッシャアブルト第三	(Gasherbrum III or K ³)		20/52 A	28200	同
一八	アンナパナ第二	(Annapurna II or Peak XXXIV)		3/71 D	28200	ネパアル・ヒマアラヤ
一九	ブロード・ピイク第三	(Broad Peak III)		15/52 A	28200	ムスタアグ・カラコラム
二〇	ギャチュンカン	(Gyachung Kang or T ⁵)		3/71 L	28200	ネパアル・ヒマアラヤ
二一	ダストオ・ギール	(Dasto Ghil or Distoghil Sar)		20/42 P	28200	ムズタアグ・カラコラム

二二	ヒマアルチユリノ (Himalchuli or Peak XXVIII) 19/71 D	七六四	二五〇1	ネハアル・ヒマアラヤ
二三	ブロード・ポイント第11 (Broad Peak II)	七六一	二五〇二	ムズタアグ・カラコラム
二四	カムパチェン (Kangbachen) 9/78 A	七六六	二五〇三	ネハアル・ヒマアラヤ
二五	ゴイ七百八十一 (B78 or Ngojumba Kang) 2/71 L	七六七	二五〇四	同
二六	ゴイタ第二十九 (Peak XXIX or Kutang II) 16/71 D	七六八	二五〇五	同
二七	ヌブ・シキ (Nub Tso or E?) 72 I	七六九	二五〇六	同
二八	マシシャアブルト東峰 (Mascherum or K1 East) 7/52 A	七七一	二五〇七	ムズタアグ・カラコラム
二九	ナンダ・チヴイ (Nanda Devi) 115/53 N	七七二	二五〇八	クマオン・ヒマアラヤ
三〇	ナンガ・パアパット第11 (Nanga Parbat II) 47/43 I	七七三	二五〇九	パンジヤブ・ヒマアラヤ
三一	チョモ・レンゾ第1 (Chomo-Lönzo I) 1/72 M	七七四	二五10	ネハアル・ヒマアラヤ
三二	マシシャアブルト西峰 (Mascherum or K1 West) 8/52 A	七七五	二五11	ムズタアグ・カラコラム
三三	ラカホシノ (Rakpeshi or Daman) 27/42 L	七七八	二五12	カイラス・カラコラム
三四	フンザ・クンジュ第1 (Fanza-Kunji I) 32/42 L	七七九	二五13	ムズタアグ・カラコラム
三五	カンチェンジュンガ第III (Kangchenjunga III)	七八〇	二五14	ネハアル・ヒマアラヤ
三六	ガツシヤアブルト第1南峰 (Gasherum II South)	七八一	二五15	ムズタアグ・カラコラム
三七	クンジュット第1號 (Kunjut No.1 or Kunjut Star) 12/42 P	七八二	二五16	同
三八	カアメツヤ (Kamer) 49/53 N	七八三	二五17	ザスカアル
三九	ナムチャ・ハアワ (Nancha Parwa) 5/52 O	七八四	二五18	アツサム・ヒマアラヤ
四〇	ダウラギリノ・コルマ第11 (Dhaulagiri Himalita) Peak XI, III) 5/52 P	七八五	二五19	ネハアル・ヒマアラヤ
四一	ケイ十 (K10 or Korakoram No.2, or Bakoro Kangri I) 36/52 A	七八六	二五20	ムズタアグ・カラコラム
四二	ゲアラ・マンダアタ (Gurla Mandata or Memo-Nam-Nyime) 7/52 F	七八七	二五21	ネハアル・チベット分水
四三	ケイ二東稜肩 (K2 Shoulders) 14/52 A	七八八	二五22	ムズタアグ・カラコラム
四四	ジャンノオ (Jano or Janu) 13/78 A	七八九	二五23	ネハアル・ヒマアラヤ
四五	フンザ・クンジュ第11 (Fanza-Kunji II) 31/42 L	七九〇	二五24	ムズタアグ・カラコラム

四六	ケイ十一 (Kii or Karakoram No.4 or Saltoro Kangri II or Shergang ID) 35/52 A	430#	25000	ムスタアグ・カラコラム
四七	サセール・カングリ (Saser Kangri or K ²² or Shyok Nubra Watershed) 29/52 F	430#	25000	同
四八	ダウラギリイ・ヒッパル第三 (Dhaulagiri Himal III or Peak XLIV) 6/62 P	430#	25000	ネパアル・ヒマアラヤ
四九	ティリチ・シニア第一西峰 (Tirich Mir I) 7/37 P	430#	25000	ヒンドウ・クシュ
五〇	ビイク五/四十二イイ (P.K. 5/42 P) (ヌクタン山群)	430#	25000	ムツタアグ・カラコラム
五一	ティリチ・シニア第一東峰 (Tirich Mir I)	430#	25000	ヒンドウ・クシュ
五二	クングウア第二 (Qungur II)	430#	25000	葱嶺
五三	クングウア第一 (Qungur I) 4/42 N	430#	25000	同
五四	ビイ五百四 (B ⁵⁰⁴ ヒサソントン第一峰) 44/71 H	430#	25000	ネパアル・ヒマアラヤ
五五	マカアルウ第一 (Makalu I) 72 M	430#	25000	同
五六	チヨリサ (Chogolisa or Bride Peak or K ⁶) 25/52 A	430#	25000	ムスタアグ・カラコラム
五七	クンジュット第四號 (Kunjut No.4)	430#	25000	同
五八	ダウラギリイ・ヒッパル第四 (Dhaulagiri Himal IV or Peak XLVII)	430#	25000	ネパアル・ヒマアラヤ
五九	フンザクンジイ第三 (Funtza-Kunji III) 33/42 L	430#	25000	ムスタアグ・カラコラム
六〇	ナンガ・バアバツタ北東峰 (Nanga Parbat North-East)	430#	25000	パンジャブ・ヒマアラヤ
六一	ミニヤ・ゴムカア (Minya Gongka)	430#	25000	大雪山脈
六二	ダウラギリイ・ヒッパル第五 (Dhaulagiri Himal V or Peak XLV)	430#	25000	ネパアル・ヒマアラヤ
六三	ビイク八/四十二イイ (P.K. 8/42 P) (Moonhill group)	430#	25000	ムスタアグ・カラコラム
六四	アンナバアナ第三 (Annapurna III or Peak XXXVI)	430#	25000	ネパアル・ヒマアラヤ
六五	四十二イイ (42 ²) (Distaghil 山群)	430#	25000	ムズタアグ・カラコラム
六六	クウラ・カンリイ (Kula Kangri or Kula K.)	430#	25000	アツサム・ヒマアラヤ
六七	チヨリサ第二 (Chogolisa II) 24/52 A	430#	25000	ムスタアグ・カラコラム
六八	スタアケイス (Saserise or Sisyang Kangri) 12/52 A	430#	25000	同

六九	クウラ・カンリイ第一 (Kulha Kangri II or Kangri I)	㊦㊧	11,420	アッサム・ヒマアラヤ
七〇	チャン・ツェ (Chang Tse or F ³)	㊦㊨	11,410	ネパール・ヒマアラヤ
七一	ヤルン・ポイク (Yalung Peak)	㊦㊩	11,311	同
七二	クウラ・カンリイ第三 (Kulha Kangri III or Kangri II)	㊦㊪	11,210	アッサム・ヒマアラヤ
七三	マモストン・カンリイ (Mamostong Kangri or Karakoram No.5 or K ²⁵)	㊦㊫	11,240	ムズタアグ・カラコラム
七四	アンナパurna第四 (Annapurna IV or Peak XXXV)	㊦㊬	11,240	ネパール・ヒマアラヤ
七五	クウラ・カンリイ第四 (Kulha Kangri IV or Kangri III)	㊦㊭	11,240	アッサム・ヒマアラヤ
七六	シオク・ヌブラ分水第三號 (Shyok Nubra Watershed No.3 or K ²⁴ or Saser Kangri) 31/52 F	㊦㊮	11,240	ムズタアグ・カラコラム
七七	ガッシヤアブルム第一南峰 (Gasherbrum I South)	㊦㊯	11,240	同
七八	シオク・ヌブラ分水第四號 (Shyok Nubra Watershed No.4 or K ²⁵ or Saser Kangri) 30/52 F	㊦㊰	11,240	同
七九	ピク・スタアリン (Pik Stalin)	㊦㊱	11,240	ビイタア大帝
八〇	クンジュット第二號 (Kunjut No.2 or Punarikish) 11/42 P	㊦㊲	11,240	ムズタアグ・カラコラム
八一	ノシヤク (Noshag)	㊦㊳	11,240	ヒンドウ・クシユ
八二	テイリチ・シイア第一 (Thrich Mir II or Mushao)	㊦㊴	11,240	同
八三	チヨモ・レンゾオ第一 (Chomo-Lonzo II)	㊦㊵	11,240	ネパール・ヒマアラヤ
八四	ケイ十一 (K ¹¹)	㊦㊶	11,240	ムズタアグ・カラコラム
八五	ガッシヤアブルム第二東峰第一 (Gasherbrum II East II)	㊦㊷	11,200	同
八六	ピラミッド・ポイク (Pyramid Peak)	㊦㊸	11,200	カイラス・カラコラム
八七	フンザ・クンジイ第五 (Hunza Kumi V or Peak 35/42I)	㊦㊹	11,200	ムズタアグ・カラコラム
八八	テラム・カンリイ第一 (Teram Kangri I) 15/52 E	㊦㊺	11,240	同
八九	ジョンソン・ポイク (Jonsong Peak or Dongme Kang)	㊦㊻	11,211	ネパール・ヒマアラヤ
九〇	印度・ナガア分水第二號 (Indus-Nagar Watershed No.2) 46/42 L	㊦㊼	11,240	カイラス・カラコラム
九一	テイリチ・シイア第三 (Thrich Mir III)	㊦㊽	11,241	ヒンドウ・クシユ
九二	ナンダ・デウイ東峰 (Nanda Devi East)	㊦㊾	11,241	クマオン・ヒマアラヤ

九三	ムズタアグ・アアタ (Muztagh Ata)	7,533	25,000	葱嶺	ムズタアグ・カラコラム
九四	ケイ十二東南峰 (K12 South-East)	7,512	25,000		
九五	シア・カンリイ (Sia Kangri or Queen Mary Peak)	7,511	25,000	同	ネバアル・ヒマアラヤ
九六	ドモ・ビイク (Domo Peak)	7,510	25,000		
九七	シオク・ヌブラ分水第六號 (Shyok Nubra Watershed No.6 or close companion of K23 & K24)	7,510	25,000		ムズタアグ・カラコラム
九八	テラム・カンリイ第二 (Teram Kangri II)	7,509	25,000	同	ネバアル・ヒマアラヤ
九九	ガネツシユ・ヒマアル (Ganges' Himel or Peak XXVI)	7,508	25,000		
一〇〇	マウント・ゲント第一 (Mount Ghent I) 50°/52 A	7,501	25,000		ムズタアグ・カラコラム
一〇一	ティリチ・ミニア第四 (Tirich Mir IV or Is-or-o-Nal)	7,500	25,000		ヒンドウ・クシユ
一〇二	ハラモシユ (Haramosh) 55/43 I	7,500	25,000		カイラス・カラコラム
一〇三	ペタン・ツェ西峰 (Petan Tso West)	7,500	25,000		ネバアル・ヒマアラヤ
一〇四	リモ・ユイク (Rimo Peak or Pk. 51/52 E)	7,500	25,000	同	ムズタアグ・カラコラム
一〇五	テラム・カンリイ第三 (Teram Kangri III) 14/52 E	7,500	25,000		ザスカアル
一〇六	西アビ・ガミン (West Abi Gamin or West Tui Gamin)	7,500	25,000		ムズタアグ・カラコラム
一〇七	リモ・ビイク北東峰 (Rimo Peak North-East or Pk. 50/52 E)	7,500	25,000		ネバアル・ヒマアラヤ
一〇八	カブルウ北峰 (Kabru North)	7,500	25,000		ザスカアル
一〇九	東アビ・ガミン (East Abi Gamin or East Tui Gamin)	7,500	25,000		ネバアル・ヒマアラヤ
一一〇	チュナン・ヒヤマ (Churen Himel or Peak XLVIII)	7,500	25,000		ネバアル・ヒマアラヤ
一一一	テント・ビイク (Tent Peak or Guryhar)	7,500	25,000	同	ムズタアグ・カラコラム
一一二		7,500	25,000		
一一三	トウインズ (Twins)	7,500	25,000		ムズタアグ・カラコラム
一一四	サッド・イシトラマツ (Sad Ishtagh)	7,500	25,000		ネバアル・ヒマアラヤ
一一五	パルン・ビイク (Palung Peak)	7,500	25,000		ヒンドウ・クシユ
一一六	クル・ドビン山群 (Khur dopin Group) 42 P	7,500	25,000		ネバアル・ヒマアラヤ

一一七	クンジュネット第三號 (Kunjut No.3 or Mombi Sar) 7/42 P	七三三	二四〇〇	ムズタアグ・カラコラム
一一八	マウント・ゲント第11 (Mount Ghent II) 537/52 A	七三三	二四〇〇	同
一一九	テイリチ・ミイア第五 (Tirich Mir V)	七三六	二四〇六	ヒンドウ・クシユ
一二〇	ナルカンカアル (Nalkankar)	七三三	二四〇六	ネパアル西藏分水山脈
一二一	K ² 西北西八軒峰	七三〇	二四〇六	ムズタアグ・カラコラム
一二二	フンザ・クンジイ第四 (Hunga-Kunji IV or Pajohaghar Duanshi) 34/42 L	七三二	二四〇三	同
一二三	クンジュネット第六號 (Kunjut No.6) 42 P	七三三	二四〇〇	同
一二四	ガッシュヤブルム第五 (Gashshbrum V)	七三三	二四〇二	同
一二五	チャムラン (Chamlang)	七三二	二四〇三	ネパアル・ヒマアラヤ
一二六	カブルウ (Kabru)	七三二	二四〇三	同

以上は手近にありて引用し能ふ限りの圖書から略ぼ信憑して差支ないと思はれるものは、すべて之を採録したもので八〇〇米以上十五座、七九〇〇米級四座、七八〇〇米級十三座、七七〇〇米級十七座、七六〇〇米級十座、七五〇〇米級十八座、七四〇〇米級二十三座、七三〇〇米級二十六座となつてゐる。「概略」の訂正第二版には、八十六座が記載され、他に七三一五米以上の峰で七座は未だ表中に入れる程其位置と高さとは能く知られてゐないからといふので、別表として掲げ通計九十三座を採録してゐる。之に對してケニス・メイソン (Kenneth Mason) は「自分は最近まで二十五年間に百十七座を目錄した」といはれ、「概略」に採録した数の少ないことを指摘してゐる。同氏の如く長く印度測量部の要職に在りて、ヒマアラヤ、カラコラムの實際に精通せる人の言葉として、これは當然であらう。思ふに「概略」はオフィシアルのもののみを取扱ひ、疑はしきは之を省いた爲に百座にも達しなかつたものか。他人は知らずメイソンのやうな人の採録したものならば、充分信を置くに足りやう。唯それが發表されないのは遺憾である。

第二章 山群と登攀

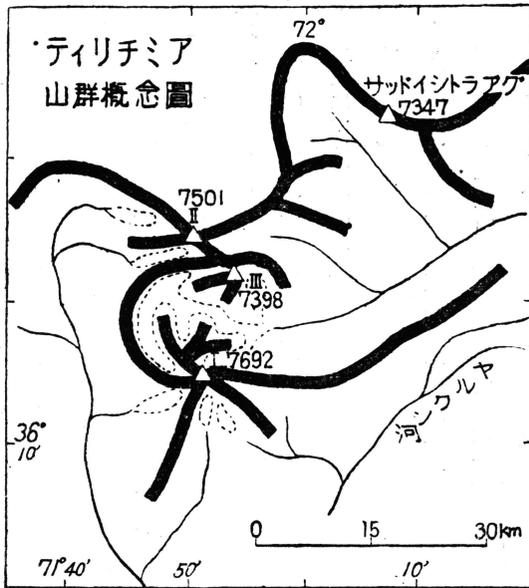
本章に於ては初め山群に就て小しく説明を試み、次に其探検を略敘し、最後に著名なる登攀二三に關して記述する豫定であつたが、時日と紙面の都合に依り適宜之を併記するの止むなきに至つた。従つて遺漏も多い、幸に諒恕を願ひたい。

ヒマアラヤ山系のやうに褶曲に因る大山脈には、火山と違つて獨立孤聳してゐる山はない。しかし其間を幾多の河川によりて横斷されてゐるので、長短の差はあるが又自ら幾多の山脈に分たれてゐる。殊に恒雪線を越えた六〇〇米以上の峯となれば、如何に高大な山脈と雖も其數には限りがあり、従つて是等の山は外觀上、最高峰を主峰とした幾つかの山群に纏つてゐる。そしてナンガ・パバットの如く、九十六軒以内にてはどの山よりも五二〇〇米、百九十軒以内にては三〇〇〇米を超えてゐるといふやうな場合には、山群といふよりも寧ろ孤立した山塊といふ感じを與へるであらう。

こゝにいふ山群は、前掲の七三一五米以上の峯を、距離には餘り關係なく、地方別に一括したもので、ナンガ・パバットのやうに適切な場合は極めて少ないのである。

恒雪線の高度は、緯度により又山の南北によりて相違はあるが、大體ヒマアラヤにては四五〇〇乃至五七〇〇米、ザスカアにては五九〇〇乃至六〇〇〇米、ラダクにては五六〇〇乃至五七〇〇米、カラコラムにては五五〇〇乃至五六〇〇米、天山にては三三〇〇米、アライにては四二〇〇米であつて、東南西藏にては三九〇〇米、西部西藏にては六〇〇〇米であるといふ。

ティリチ・ミイア ヒンドゥ・クシニ山脈の高峰群で、印度の大三角測量 (Great Trigonometrical Survey of India, 以下略して G・T・S とする。) に據れば、最高峰第一は七七五〇米 (二五四二六呎)、第二は七五〇一米 (二四六一一呎)、第三は七四二〇米 (二四三四三呎) となつてゐるが、一九二五年より三一年に至る七年間に行は



第 2 圖

た改測の結果、更に三座が加へられ、各峰の標高が更正された。「概略」第二版には第五を別表に載せてあるが、エム・バアン (D. M. Burn) の圖にては七三二五米を超えてゐることは確である。此改測の際一九二九年にエム・バアンの一行四人は、第四峰の登攀を企て、七月十八日にティリチ・ミイア氷河から九百十四米を登つて、五〇二五米の地點に第一キャンプを作つた。第一キャンプに九夜を過した後、氷河上のベース・キャンプに下つたのであつた。第三キャンプは雪の尾根の六七〇〇米附近に作るのが望ましい。最後の六百米は打克ち難き障壁に出逢ふか、それとも喘ぎ喘ぎ登りさへすればよいのか、何とも言ふことを得ない。

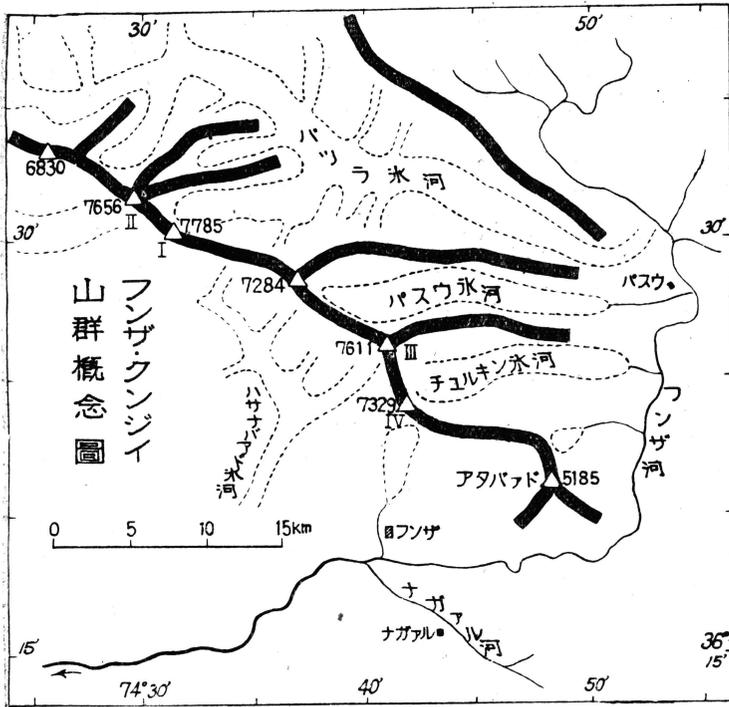
唯迷信に充ちた、氷雪に慣れないチトラルの人夫のみを頼りにしては、何人も近い將來にこの山に登り得る望はないとバアンは曰ふてゐる。そして山は意地の悪い妖精の棲家であり、氷河は奇怪な悪魔の屯所である。是等の妖魔は綺麗好きであるから、あの汚い人どもを連れて山へ登るとは、何たる愚さであらうと土地の或る護衛將校から受けた

忠告は、全く適中して、四日も降り續いた雪は人夫を返した翌日から晴れ、速に測量を完成したと、さまざまな迷信の例と共に書き加へられてゐる。「概略」第二版のナシヤクは即ち G・T・S の第二と同じものであるが、其位置の經度に東經七一度〇五分〇八秒とある〇五分は五〇分の誤りであらうと思ふ。又第一はバアンの圖に據れば東西の二峯に分れ、其間一稜を隔てゝある。しかも「概略」第二版の二五二六三呎（七七〇〇米）の峯は其經緯度から推せば明に西峰である。第四峰の第二回の登攀は一九三五年の八月デニス・ハント（Denis Hunt）及びジェイ・ラウダー（J. Lawder）の二人によつて行はれた。

サッド・イシトラアグに就ては知る所がない。恐らく之を主峰とする別の山群に分つ可き者であらう。テイリチ・ミア山群には尙ほ七三一五米以上の峰が二三座はあるらしい。因に第四のイスタア・オ・ナルは馬蹄の意であるといふ。

ムズタアグ・アアター クングアル第一及第二と共に葱嶺山脈に屬してゐる。スウェン・ヘディンに據れば、此山はタクラマカン砂漠の内部からも、航路標識のやうに望まれるとの事である。クングアルの二峰が高い連脈上の二隆起であると異り、附近の群峰を超越して高聳せる爲に、クングアルよりも遙に美しい孤立した山だとの感を懷かせ、キルギス人が之をムズタアグ・アアター（氷山の父）として尊崇し、多くの傳説が語り傳へられてゐるのは、さもこそと首肯される。一八九四年の八月、ヘディンはキルギス人を伴ひ、犂ウラに乗つて北側のヤムブラ（Yam-bulak）氷河から三度登攀を試みたが、常に悪天候に妨げられて、僅に六一四五米の高度に達したのみであつた。

クングアルの第二は、アウレル・シュタイン（Aurel Stein）の測定に従つて G・T・S には七六三四米となつてゐるが、一九二二年より二四年に至るピイ・スクライン（P. Skrine）の探検測定の結果を綜合斟酌して、ケニス・メイスンは第一より少し高しとなし、前記の如く改めたが、これは未だ確定のものではなく、兩者孰れが優るかは今



後の問題とされてゐる。

ピク・スタアリンに就ては既に述べた。

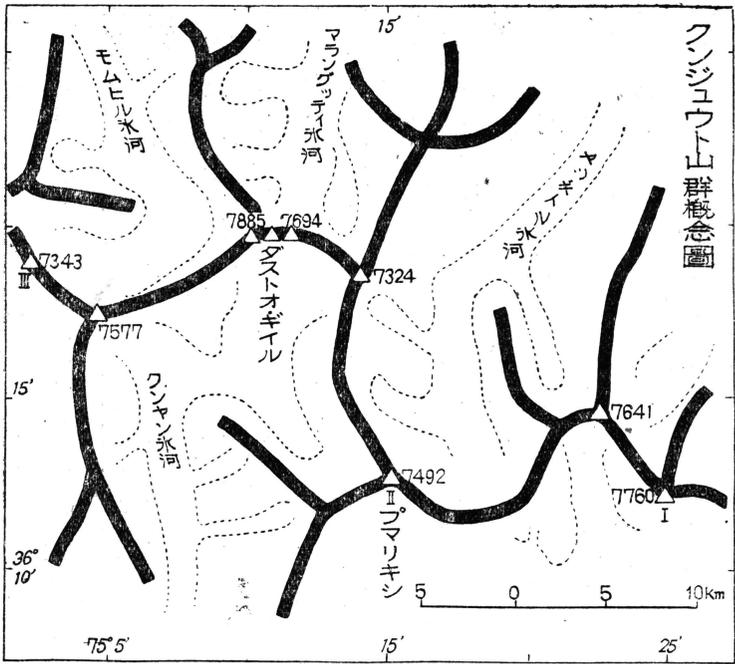
フンザ・クンジイ フンザ河の西に在るムズタグ・カラコラムの一群で、略々南西より北東に走る一連の山脈上に位置する四座の高峰であるが、其北面が探られたのみで、南面は未だ白紙の儘に残されてゐる。

圖

G・T・Sに據れば第一は七七三三米(二五二七〇呎)、第二は七六五六米(二五一一八呎)、第三は七六三五米(二五〇五〇呎)、第四は七三一九米(二四〇四四呎)で

第

「概略」第一版は之を採録してゐる。然るに一九二五年和蘭の登山家フィッサア(C. Visser)夫妻の探検に隨行した印度測量部のアフラズ・グル・カン(Afraz Gul Khan)は、第一を七七五四米(二五四四〇呎)、第三を七六一米(二四九七〇呎)と測定したが、G・T・Sは更に是等を更正したも



第 4 圖

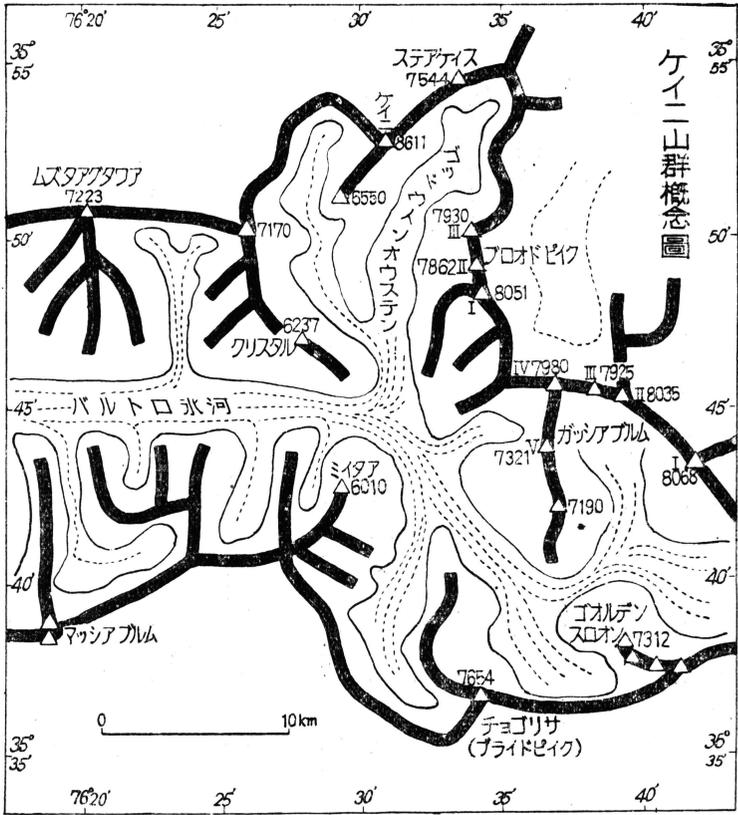
のか、「概略」第二版には第一を七七八五米、第二を七七一〇米とし、第三は七六一一米を採用してゐるが、第四は未確定として別表に載せてゐる。今は「概略」第二版に従ひ、第四をも表中に加へた。長さ三二籽として知られてゐたバツラ氷河が五八籽あることを発見されたのも此際であつた。

クンジュウト フンザ河の東にある山群で、南はヒスバア大氷河に限られてゐる。「概略」の第一版には一號、二號、三號の三座しか擧げてない。最高峰ダストオ・ギールは一八九二年にコケレル將軍 (General Cockerill) によりて発見され、マルンギ・ディマス (Maurici Das) として報告されたが、之はマルングッテイ・ヤズ (Mahunguti Yaz) 即ちマルングッテイ氷河の聞き誤りであることがフィッサアに依りて明にされた。ヤズは氷河の意である。三峰より成り、中央が主峰なるも、ピイク五／四十二ピ

イは、東西孰れの峰を指すものであるか不明なので、寫真から判斷して假に東峰を充てた、或は西峰であるかも知れない、高さは殆ど伯仲の間にあるらしい。主峰の高度は一九一三年に測定され、其後ケニス・メイソンは七八二四米（二五六六八呎）と更正してゐるが、ケイニ以西の最高峰であることに變りはない。其他の三峰の中、ピークハ／＼四十二ピーの外は稱呼も符號も知らないので、假に高度順で第四第五と充てたのである。フンザ・クンジイと同様に、登山を目的として入り込んだ者は未だ一人も無い。

ケイニ 一八五六年にスリナガアの北に在るハラムクの山上から、デオサイ (Deosai) の高原を超えて、測量官モントゴメリイ (G. Montgomerie) によりて八九三一米と測られ一八六一年ゴドウィン・オオステン (Godwin Austen) によりて、其山麓に横たはるバルトロ氷河が探検されて以來世界第二の高峰としてケイニの名は漸く人の注意を惹くやうになつた。實際バルトロ氷河を取り巻いて花崗岩若くは片麻岩或は石灰岩から成る巨峰の簇立してゐる光景を眺めると、エヴェレスト山群に比して高度が稍々劣るのみで、壯觀は之に優ると稱せられてゐる。東北面には恐る可き氷壁をめぐらし、西南面には測り難き岩崖を懸け連ねて、方錐體とも圓錐體とも見られる主峰ケイニは、峻峻なうちにも一種のやさしさを見せて、登山者を魅惑するに充分であるが、交通の不便だけでも容易く人の近附くことを許さない。槍の笹穂のやうに鋭く尖つたマッシュアブルムの絶頂は、何時の日にか人はある頂上に立つて征服慾を満足させ得ることであらうぞ。「輝く峯」の名にふさはしいガッシュアブルムの五峰は、孰れも巨大なる屋根形天幕の棟を極度に小さくしたやうな類似形を持つてゐる。獨りガッシュアブルムのみに限らず、バルトロ氷河の山群は、皆共通した形似性があるのは面白い。プロオド・ピークはハラムクからはマッシュアブルムに遮られて、モントゴメリイに測定されなかつたが、一九〇九年アブルジ侯の遠征隊によりて八二七〇米（二七一一三呎）と測られ、ステァケイスは七三三九米（二四〇七九呎）、ガッシュアブルム第五は七三二二米（二四〇一九呎）の高度を有することが

八〇米（二六一八〇呎）と改訂してある。



知られた。然るに一九二六年ケニス・メイソンは寫眞測量に因りて、フロオド・ビクを八〇四七米、ステアケイスを七五四四米と測定したので、こゝにはそれに従つた。フロオド・ビクは三峰から成り、周圍の山と比較して肩幅が廣い。第二峰も七九二五米を超えてゐることは確であるが標高が記入してない。第三峰はメイソンに據れば、七四六七米を少し超えてゐる程度である。之も標高が記入してないので、暫くアブルジ侯の測定に従ふことにした。ディレンフルトは中峰を八〇〇〇米、北峰を七七〇〇米としてゐる。「概略」第二版にはガツシアブルムの第三を七九五二米（二六〇九〇呎）、第四を七九

第 5 圖

を七五四四米と測定したので、こゝにはそれに従つた。フロオド・ビクは三峰から成り、周圍の山と比較して肩幅が廣い。第二峰も七九二五米を超えてゐることは確であるが標高が記入してない。第三峰はメイソンに據れば、七四六七米を少し超えてゐる程度である。之も標高が記入してないので、暫くアブルジ侯の測定に従ふことにした。ディレンフルトは中峰を八〇〇〇米、北峰を七七〇〇米としてゐる。「概略」第二版にはガツシアブルムの第三を七九五二米（二六〇九〇呎）、第四を七九

伊太利遠征隊（アブルジ侯）の結果に成るデシオ（Desio）の圖には、第一から第四に順次、八〇六八米、八〇三五米、七九五二米、七九二五米の標高が與へられてゐる。尙ほメイスンの圖には、第二峰の東徴北六籽の距離に七四六九米（二四五〇〇呎）と記入した峰がある。他に参考とす可き資料はないが寫真測量の結果であるから、採録して置いた。一八九二年マァティン・コンウエイ（Martin Conway）はブルウス其他とヒスパア・ピアホ、バルトロの三大氷河を探検し、ゴオルデン・スロオン（七三二二米）の二峰（六四七二米）に登り、パイオニア・ピイクと命名した。又アブルジ（Abruzzi）侯は前記遠征の際、ブライド・ピイクの七四九八米まで登り、濃霧に覆はれて二時間餘待機せしも、霽れる見込がないので下山したが、これは最近に至るまで登山最高の記録で、一九〇九年七月十八日のことであつた。

ケイ二とカンチエンジュンガと孰れが高きやは、興味ある、しかし容易に解決し難き問題である。グラフ・ハンター（Graff Hunter）は、既往の觀測數字に注意深き更正を施して、ケイ二を八五九三米（二八一九一呎）、バラアドはカンチエンジュンガを八六〇三米（二八二二六呎）と算出したので、個人の間には漸次に之を採用する傾向が生じて來た。殊にそれが獨逸の登山家に多い。孰れにしても兩者の差は僅少であることは確であるが、多くの面倒なる計算を必要とするので、其間に誤差の潜入することは免かれないから、この問題は容易に決定しないであらう。且メイスンの寫真測量によるケイ二山群の標高は、ケイ二を八六一一米としての相對的高度であることは言ふ迄もなく、そしてプロオド・ピイクの外は、殆ど三角測量の結果と一致し、さしたる相違はなかつたといはれてゐる。

ラカボシイ カイラス・カラコラムの最高峰であることは前に述べた。此山から東徴南に延びた山脈は、東經七十四度の邊でチョゴ・ルンマ氷河によりて二岐し、北に在るものはヒスパア、チョゴ・ルンマ兩氷河の間に蟠繞し、南に在るものは東南を指して、印度河とチョゴ・ルンマ氷河及其下流であるシガール（Shigar）河との間に連亙してゐる。

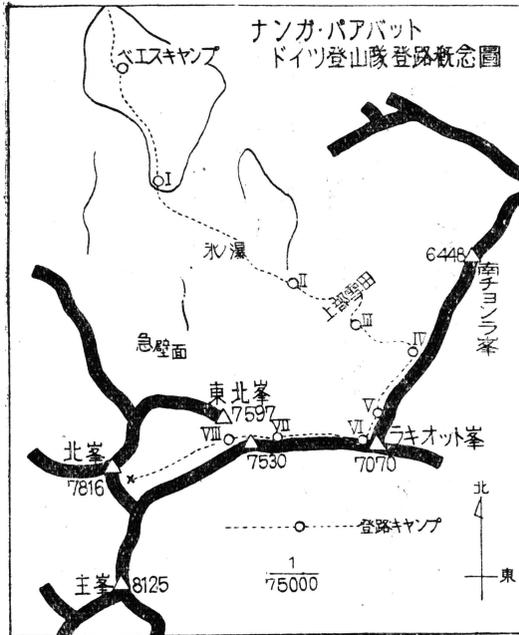
る。其最高峰はハラモシユである所から、ハラモシユ山稜なる名が與へられた。即ち「概略」第一版に所謂印度ナガアル分水嶺（嚴密にいへばヒスパア氷河南岸の山脈が印度ナガアル分水嶺の主脈である）で、分水第二號があり、其東南九軒に第四號（六九五二米）があり、南十八軒にハラモシユがある。

・ピラミッド・ピイクはチョゴ・ルンマ氷河の源頭を隔て、第二號の東北にそれと相對峙し、距離は六軒に過ぎない。一九〇三年にドクタァ・ワアクマン (Dr. H. Workman) がチョゴ・ルンマ氷河探檢の際に發見したもので、第二號より少くとも三百呎は高いと思ふが、確さの範圍を保つ爲に唯三十呎を増したのみであるとワアクマンは書いてゐる。此時ワアクマンは同峰の七一三〇米まで登つて、五十六歳の登高記録保持者となつた。頂上まで登れば登れぬことはなかつたが、歸途夜に入りて、何等の準備もなく雪中に露營する危険を考慮し、完登を斷念したといふ。

ナンガ・パアバット 一八九五年には、有名なる登山家マンマリイと二人のグールカア人を雪崩にて、一九三四年には、獨逸登山隊の熟練せる登山家、隊長メルクル、ウィラント、ウエルツェンバッハの三人と六人の勇敢なる人夫とを吹雪にて、共に悲惨なる山の犠牲としたことによりて、益々有名になつたナンガ・パアバットには、「概略」第二版には第一版と同じく主峰（八一四米）及北峰（七七九四米）の二峰が掲げられたのみであるが、獨逸登山隊に同行したフィンステルワルデル (R. Finsterwalder) の測定せる地圖によりて東北峰を加へ、標高も總てそれに従ふことにした。

一八九五年マンマリイ (F. Mummery) はナンガ・パアバットの登攀を志し、ノオマン・コリイ (Norman Collie) ヘステイングス (G. Hastings) と共に東麓のルパル (Rupal) 氷河に入つた。途中三七九一米のカムリイ峠の頂上から六十五軒の北に初めて此山を望見した時、其壯大雄偉な姿に接して思はず脱帽して敬意を表したといふ。然し南方からの登攀不可能なるを知つて、マツェノ峠を踏え、ディアミライ (Diamirai) 氷河に出で、其左岸にある主峰直下

の岩稜を六一〇〇米の所まで登つたが、同行した人夫が病氣になつたので引返へした。それでラキオット (Rakhot) 氷河に登路を探す目的で、コリイと別れて二人の人夫を伴ひ、ディアマ (Diama) 氷河を登つた儘マンマリイと人夫の姿は遂に再び見られなかつた。



第 6 圖

其後三十七年を経た一九三二年にメルクル (W. Merkl) を隊長としベヒトオルト、ヘラン、ウィスナア、シモン、アッシュエンブレナア、クニーク、ハンベルガー、ノールトン嬢よりなる獨塊米聯合の登山隊は、ラキオット氷河を遡りて、六月二十九日三五九七米の地點にベイス・キャンプを作り、翌日より直に攻撃を開始した。唯運搬の際に人夫四十人分の用具を入れた十個の荷物を盗まれたことは非常な打撃で、豫定表の通り登行が進捗しなかつたことは全くこの爲であつたといふ。キャンプ一は四五七二米の所に作られたが、其夜の大雪崩が附近に落下し、煽りを受けた天幕の

支柱 (竹竿) はマッチの軸のやうに手もなく挫け、驚いた人夫は登高を拒み、強請すれば方外な賃金の割増を吹掛るなど、操縦には少なからず手古摺つたらしい。それにフンザ人はガッシリした體格で頼母しく思はれたが登高には全く役立たず、キャンプ六に登つた者は一人に過ぎなかつた。勿論荒々しいセラックの間を辿つて、六十米も深いクレ

バスに架つた雪橋を幾度か渡るやうな危険な氷河を登るのは、並大抵の事ではなかつたに相違ないにしても。

キャンプ二は氷河の第一段丘の上（五七九一米）の上に作る迄に進んだ。キャンプ三では夕暮の静けさを破つて、東北峰の側面から河の第二段丘の上（五七九一米）の上に作る迄に進んだ。キャンプ三では夕暮の静けさを破つて、東北峰の側面から巨大なる氷塊が雷の如く轟き落つる凄まじい光景を目撃した。氷塊は下なる氷河に撞撃して、濺々たる氷雪の雲は高く立ち昇り、掻き消したやうに全山を包み、あまつさへ氷塊はキャンプ近くにまで殺到し、根が生へたやうに足を止めて茫然と突立つた儘見惚れてゐた人々は、之に驚いて身振ひしつゝ兼て作つてあつた氷の洞穴にもぐり込んだといふ。これは大雪崩の一例として擧げたのである。

かくて七月廿五日キャンプ五を六一九二米に、キャンプ六を六五五九米に作り、廿九日遂に東北峰に連る山稜に達した。其瞬間の幸福は到底筆紙に現し難いとメルクルは書いてゐる。其管であらう、キャンプ五から上は、殆ど人夫の力を借りずに仕事を果したのであるから。高度は七〇一〇米で、そこにキャンプ七が作られた。山稜は東北峰に緩い傾斜で續いてゐる。技術的困難は既に終つた。東北峰からは廣い雪原が主峰に導く。これでもう五六日好天氣が續けば、勝利は吾々のものだとなんは思つた。然し朝になると厚い霧の幕は山を包み、雪は降り止まず、キャンプ七から六へ、六から五へ、五から四へと次第に追ひ戻され、八月廿四日に漸く晴れたが翌日又吹雪となり、新雪は四尺以上も積つた。これで登攀の望は全く雪の下に埋められて了つたのである。キャンプ七に達したのは、メルクル、ベヒトオルト、ヘラン、ウィスナア等五人の獨米人であつた。其中ヘランは歸途埃及のカイロオに近きチェフレン・ピラミッドから墜落して不幸な慘死を遂げた事は、當時の新聞で承知してゐる読者もあらう。此時キャンプ四から南チオンラ（六四四八米）ラキオット（七〇七〇米）の二峰が初登頂された。

一九三四年メルクルは獨逸山岳會員の精銳を選つて捲土重來した。登攀班十人科學班三人の一隊である。人夫も前

回に懲りてヒマアラヤの「タイガア」と呼ばれる連中三十五人をダアジリンから呼び寄せた。中にはエヴェレスト、カンチエンジュンガ、カアメトの登攀にハイ・キャンプを作つた猛者もゐた。五百七十個の荷物は如何に用意が充分であるかを語つてゐた。一行の意氣や推して知る可きである。

此年作つたキャンプの高度は、ベイス・キャンプ三九六七米、キャンプ一から八迄順次に、四四六八、五三四〇、五九〇〇、六一八五、六六九〇、六九五五、七〇五〇、七四八〇米であつた。一・二・四は前回と殆ど同じ場所で、高度の相違は前回の測定が低過ぎたのである。第一登攀隊がキャンプ四を作る時、隊員のア・ドレクセル (A. Drekel) が肺炎で六月八日に死亡し一時攻撃は中止された。第二隊は六月廿六日・廿九日及び七月一日に出發した。そして七月六日にアッシェンブレンナア (P. Aschenbrenner) シュナイダア (E. Schneider) ウェルツェンバッハ (W. Weizenbach) メルクル、ウィラント (N. Wieland) の五人は十一人の人夫と、東北の二峰の間に横たはる眞白な雪の鞍部シルヴァ・サドル (七四五一米) を躑えてキャンプ八を作つた。シュナイダアとアッシェンブレンナアの二人は此キャンプを一層主峰の近くに作る爲に七七〇〇米の地點まで進んで、遅れた人達を待つてゐた。もう主峰まで雪の高原で行進を妨げる邪魔物はない。四五時間あれば、勝利は獲られるものと確信した。

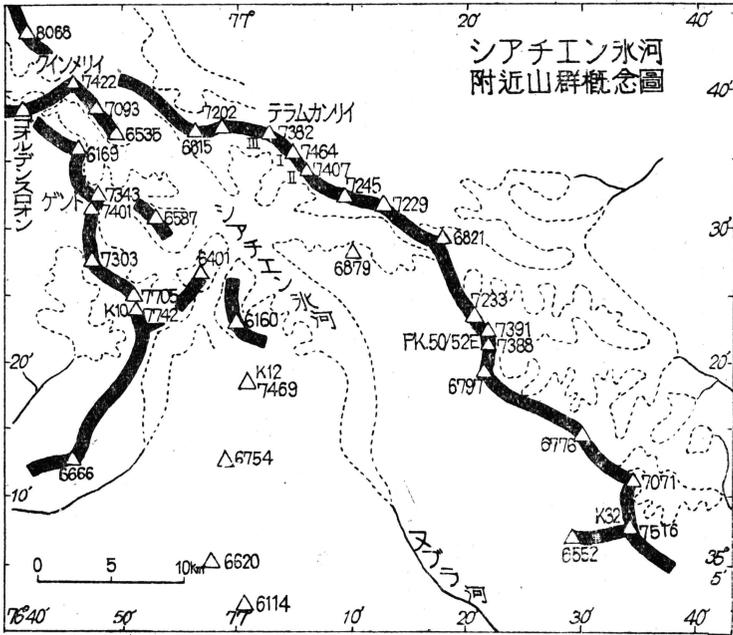
然し夕方から青空にも拘はらず嵐が募つて、夜は颯風にまで發達した。いつでも登高されるやうに待機の姿勢を保持してゐた一行も、八日になつても風が衰へないので下山と決し、シュナイダアとアッシェンブレンナアの二人は先發し、其日の中に疲れ切つてキャンプ四に歸著したが、他の人々は二人が信じてゐたやうに如何して直ぐ後に續かなかつたか、これは解き難き疑問である。ともあれ残りの三人はキャンプ七と六の間で猛吹雪の爲に瘴れ、四人の人夫のみ生還した。キャンプ四から幾度か救援が企てられたが、腰まで埋まる新雪に妨げられて、救を求むる聲を耳にしなから見殺しにする外に途がなかつた。何たる悲劇であつたらう。「吾々の一行は十三人であつた。ヴェニスを立てた

のが四月の十三日で而も金曜日であつた。船の食卓番號は十三で、吾々は十三隊に分れて行進した。」とベヒトオルトは書いてゐる。歐洲の迷信家が氣にする「十三」が重なつてゐたことを想ひ出したのであらう。

序に、ヌン・クン(Nun Kun)山塊は、七三一五米に達する峰はないが、著名な山塊であるから附記して置くことにする。此山塊は三の主なる峰から成り、最高峰ヌンは山塊の中央にありて、ナナ又はセル(Nana, or Ser)とも呼ばれ、高さ七一一九米、次峰クンは其東北約四軒に位置し、高さ七〇七七米、カナ又はメル(Kana, or Mer)の名がある。其東南約二軒半の所に在るものはピンネイクル・ピーク(Pinnacle Peak)で、高度は六九三三米である。ヌンから東に延びた尾根は間もなく弧を描いて東北に向ひ、更に北に輕じてピンネイクル・ピークに連り、北方から其間に深く入り込んだガンリイ(Ganri)氷河の一支は、恰も爪先を東北に向けた靴の形に似、其爪先に當るあたりは一面の大雪原である。小人數で比較的安く、しかも興味ある高い登攀を行ふに適してゐるので、この山塊を訪れる人が増して來た。前にはブルッス(G. Bruce)、ニィヴ(A. Neve)、シムム(H. Sillim)、ファクマン、ピアチェンザ(M. Piacenza)の諸人があり、最近にハァリスン(B. Harrison)がある。殊にファクマン夫妻は一九〇六年殆ど此山塊を一周し、夫人は自ら七一〇二米の高さありと稱する峰を七〇九一米まで攀ち登り、ピンネイクル・ピークと命名し、之を山群の第二高峰であると發表した。即ちヌン(七一四七米)、ピンネイクル・ピーク、クン(七〇九一米)の順序である。然るに一八五九年より六〇年に亘る三角測量の數値は、ヌンが七一一五米、クンが七〇八七米、ピンネイクルは六九五二米で、「概略」の第一版にはこれが採用してある。其後一九一一年觀測所を異にして得たものは、七一六五米、七〇四三米、六九三一米であつた。是等新舊の觀測を綜合し、考慮を加へ、新に計算して得た高度が前に掲げた數字で、殆ど完全に近いものといはれてゐる。ピンネイクルが常に三者中の最低であることは、ファクマン夫人の觀測が誤つてゐたことを證するものである。因にクンは一九一三年ピアチェンザによりて完登された。

シアチェン氷河の山群

此名は適當ではないが、廣い範圍に亘つて分布する高峰を包括する爲に假に用ゐるのである。シアチェン氷河の源頭に在るクイン・メリイ



第 7 圖

記録を破り、婦人登攀の最高記録を残した。唯最初からの目的であつたガッシャアブルム第一の登攀は全く失敗に終

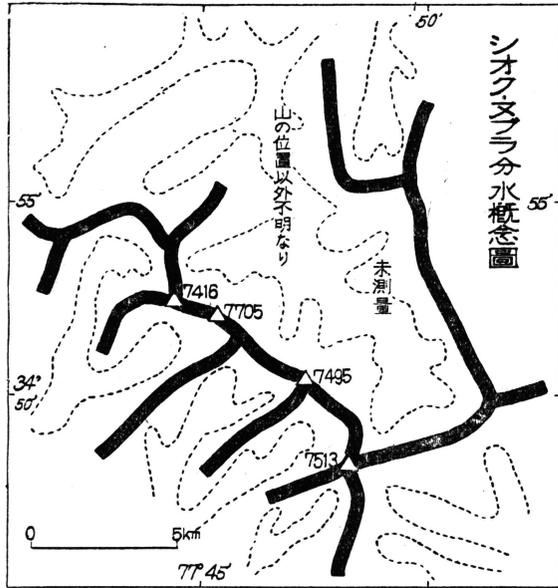
る。シアチェン氷河の源頭に在るクイン・メリイ・ピイクは、一九一二年に同氷河を探検したワァクマンの一行によりて測定命名された。一九三四年デイレンフルト (G. O. Dyhrenfurth) の一行はバルトロ氷河を廻りて、此山の主峰及東・中・西の三峰をも完登し、シアチェン氷河より望見し得るは東峰に外ならずといひ、若し其高度を七四二二米とすれば、西峰は七四三〇米、中峰は七三七五米、主峯は七六七五米となるが、これは最低に見積つたもので、自分の観測では眞高はそれぞれ七五二二米、七五三〇米、七四七五米、七七七五米であると述べてゐる。然しデイレンフルトの観測は三角測量の結果と甚しき差異があるので未だ疑問とされてゐる。さもあれ、デイレンフルト夫人は此時西峰に登つて、一九〇六年ワァクマン夫人がピンネイクル・ピイクで作つた七〇九一米の

つた。

デントの二峰もワックマンの命名に係り、高度は同行のペテルキン (G. Peterkin) の測定によつたものである。ケイ十は昨年 (一九三五年) 四月ワラア (J. Waller) ハント (J. Hunt) 外二名の一行が遠征隊を組織して、登攀を企て東北麓のピイク三十六氷河から南東の尾根に上り、山稜を西北に傳ひて六八〇〇米の高度に達したが、遂に頂上は窺められなかつた。テラム・カンリイは一九〇九年ロングスタッフの發見したもので、八四〇〇米を超えた高峰として傳へられたが、一九一二年ワックマンによりて七四七一米、七四〇七米、七三八八米の三峰が測定された。こゝには一九二六年に行はれたメイスンのシヤクスガム (Shaksagam) 谷探検の報告に従つてある。

ピイク五〇/五十二イイはウッドによれば七三八五米で、双兒峰の南峰と斷つてあるから、こゝにはウッドを同伴してリモ氷河及ヤルカンド河の上流を探検したデ・フィリップ (De Filippi) を隊長とせる伊太利遠征隊のア・アレシオ (A. Alessio) の測定した兩峰の高度を掲げた。コリンスに據れば南峰はピイク五十一/五十二イイ、北峰はピイク五十/五十二イイで、高度は北峰の方反つて低く七三七三米 (二四一八八呎) で、フィッサアは之に従つてゐる。「概略」第二版はリモ・ピイクとしてウッドの測定した南峰の標高のみを掲げてある。ケイ十二はコリンスの測定には七四六九米 (二四五〇三呎) となつてゐる。「概略」第二版は舊測定の儘であるから、今はそれに従つた。(ケイ十二は二峰あり。従來七四二八米 (二四三七〇呎) のみなりしが、一九一四年の「東部カラコラム及ヤルカンド河の上流探検」に附せる三角測量圖に七四六九米 (二四五〇三呎) と記せるを見しも、之は同一の山なりと思ひしに經緯に相違あり、且つシア・カンリイの中腹より撮りしディレンフルトの寫眞には明に二峰となれるを以て、今之を分つて掲載せり。)

シオク・ヌブラ分水 サシイル (Sasir) 峠の南に在るムズタァグ・カラコラムの主脈に與へた稱呼である。此山群

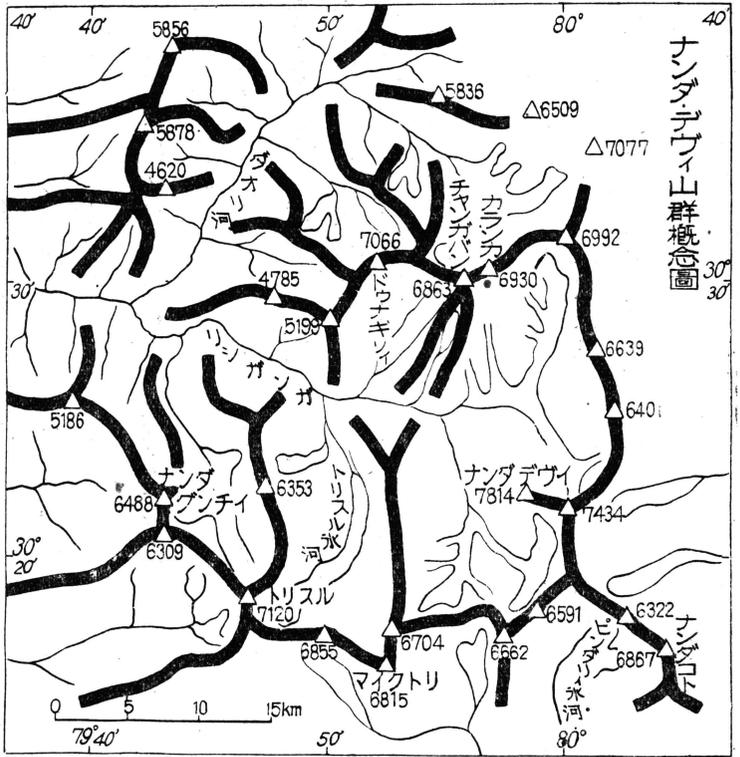


第 8 圖

は雪を載く高峰が遠方から測定されたのみで、詳しい地理は最近まで知られてゐなかつた。曾て一九二〇年代にフィッサアによつて探られたことはあるが、これはエクスペディションといふ程のものではなかつた。G・T・Sの古いディグリー・マップは、南から順に三號より五號までの標高を記入し、四號は二四九九呎、五號は二五一八三呎となつてゐる。今はウッドに據りて五號の標高を更め、其西北二軒に在る一峰を假に六號として表に加へて置いた。新地圖が發刊されたならば、更に變更があらうと思ふ。茲に掲げた概念圖は全く山の位置を示すに止まり、其他は古いディグリー・マップの儘であるから、殆ど信を措くに足らないものである。

ナンダ・デヴィ 幾度か攻撃的となつた難攻不落のナンダ・デヴィは、恰も火口壁に圍まれた中央火口丘のやうに、周圍凡そ百十一軒、最低五二〇〇米最高七〇〇〇米に上る楕圓形の大障壁をめぐらし、内部分盆地の水を集めたりシガンガ (Rishiganga) は、火口瀨の如くこの障壁を突破して、險惡なリシ峡谷を作り、西に向つて奔下してゐる。一八八三年以來グラハム (W. Graham)・ロングスタッフ (G. Longstaff)・ラトルレッジ (H. Rutledge)・ソマヴァヘル (H. Somervell)・ウイルスン (C. Wilson) 等の人々が、この峡谷と障壁を乗り踰えて、ナンダ・デヴィの内院に侵入

地には野花妍を競ひ、藍靛の湖水は大山岳の影を醸し、群れ棲む鳥や白羚羊は馴れて人を恐れないといふ有様で、銃を携帯しなかつたことを二人は心から喜んだ程であつたといふ。かくて主峰北側直下の氷河を探り、障壁上の一峰を



第 9 圖

を企てたが、一回も成功せず、唯一九〇五年にロングスタッフがミラム (Mt. Lham) 溪谷のマルトリイからルワンル (Lwan) 氷河を遡りて、ナンダ・デヴィ東峰の南の障壁に攀ち登り、初めて内院を下瞰し、其秘奥の一端を窺ひ得たのであつた。此時ロングスタッフは西トリスル (West Tirisul) を望見して、北方よりの登攀可能なることを確め、一九〇七年に登頂を完了したのである。

一九三四年シプトン (E. Shipton) ティルマン (W. Tihman) の二人は、リシ峡谷の險を踰えて六月六日に初めてこの内部に入り、堆石に蔽はれた氷河の深い谷と思ひの外、打ち開けた草

攀ちて仔細に地形を觀察し、三週間の後來路を辿りてジョシマアト (Joshimath) に出で、其西北に在るバドリナアト山塊の氷河を踏査して雨期を過し、九月八日再びナンダ・デヴィ盆地に入り、南側の氷河を検し、六八一五米の東トリスル (一名マイクトロイ (Maktoi)) を完登し、一九三二年ラトレッチが南側より試みて成功せざりし障壁越えを、北側より登りて下降に困難を極めたりしも、遂にピンダリイ (Pindari) 氷河に出づることを得たのであった。實にナンダ・デヴィの内院は、二人に依りて初めて足跡を印せられたのである。

ナンダ・デヴィの西北八十軒に在るバドリナアト山群には、クマリシ (Kumalish, 七一三八米)、バドリナアト第一 (Badrinath I, 七〇六八米)、第二 (六九七四米)、第三 (六八五三米) の諸峰があり、其西北にはガンゴトリ氷河の東にサトパント (Satopanth) 連峰 (主峰は北に在りて高度七〇九一米) があり、西にケダアルナアト (Kedarnath) 山群 (主峰六九四〇米) がある。一九三三年エム・パリス (M. Palis) の遠征隊は、ガンゴトリ氷河の中央部に根據地を置き、五月より七月にかけて此山群の氷河を探り、登攀を行ひ、サトパントの中峰 (六七二四米) を始め、六一〇〇米以上の峰が隊員によりて幾つか完登された。一行は七月半に根據地を撤し、西北百五十軒を離れたサアトレジ河の右岸に在るサスカアル山脈のレオ・パアルギアル (Leo Pargial, 南北の二峰ありて南峰は六七五七米、北峰は六七七〇米。一八一八年キャプテン・ジュラードが五九一三米の所まで登つてゐる。) に向ひ、南北二峰間の氷河を南より上りて八月十日に北峰を完登した。午後二時半頂上直下に達した時、急に霧が捲いて、南峰も氷河も掻き消すやうに姿を隠し、一陣の冷風が吹き過ぎたかと思ふと、ピッケルが執拗に唸り出し、頭髮は逆立つて調子を合せるやうにパチパチ音を立て、迅雷山を震はして殷々と轟き渡つた。これで登頂の望は打碎かれたかと思はれたが、間もなく嵐の収まつたことは、一行に取りて非常な幸運であつた。一九三三年オリヴァ (R. Oliver) 外一人は西トリスルに完登してゐる。

レオ・パアルギアルと同じザスカアル山脈のカアメットは、一九三一年スマイス(S. Smythe)・シブトン、ホルツォス(L. Holdworth)等の一隊五人によりて頂上を極められ、ヒマアラヤの巨峰中で今までに完登された最高の峰である。(註)一九〇七年ロングスタッフ、マム(L. Mumm)・ブルウスの一行が南麓のライカネ(Raikane)氷河から東カアメット氷河を踏査して以来、征頂の鬪志に燃えたミイド(F. Meade)・ケラス(M. Kellas)・スリングスビー(M. Slingsby)の諸人が相繼いで、西側より再三攻撃を行つたにも拘はらず、すべて不成功に終つた。それで一九一三年ミイドは道を轉じて、南側より東カアメット氷河を上り、初めて東アビ・ガミンとの鞍部七一六三米のミイド・コルに達し、最早勝利は手の内と思はれたが、人夫に病者續出し、且悪天候に妨げられて、空しく好機を逸してしまつた。然し頂上に達し得可き唯一の登路を發見したことは大なる收穫で、後續の登山者に非常な便宜となつた。一九二〇年ケラス、モオズヘッド(T. Morshead)の二人も同じくミイド・コルまで登つたが、又人夫に病者續出し、良好の天候にも拘はらず、中途にして引返すの止むなきに至り、遂に周到なる準備のもとに敢行されたスマイス隊に凱歌は揚つたのである。此一行はカアメットからの歸途、アルワ(Arwa)谷を遡り、其源頭の氷河を圍む五五〇〇米の山を十一座も登つてゐる。

(註) 著者が本稿執筆後この記録は更新された。即ち一九三六年ナンド・デグイ(七八一七米)がティルマン以下の英米隊により登頂されたから、この峰が最高峰である。併し最近の報によれば一九五〇年六月フランスの遠征隊はネパール・ヒマアラヤのアンナ・パアナ(八〇七八米)に登頂した由であるから、若し其れに誤なくば更に此の峰に記録が改められる譯である。(編者)

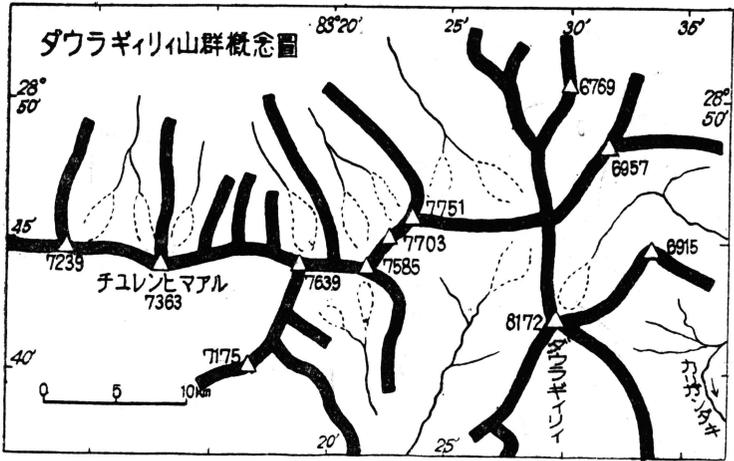
西アビ・ガミンは東アビ・ガミンの西北に連る山稜上の一峰で、この兩者の鞍部が西側からのカアメットの登路として選ばれたのであるが、行程が長く且途中東アビ・ガミンを躓えなければならぬ困難があるので、放棄されたのである。東アビ・ガミンより少し高い。東アビ・ガミンは一九二〇年に印度測量部の助副監督ラルタン・カンに依つて七三七〇米と測定され、其後の地圖は皆之を用ゐてゐるが、「概略」第二版には七三六七米(二四一七〇呎)とな

つてゐる。第一版には載せてない。カアメットの南には七二七三米のマナ・ピーク (Mana Peak) がある。其他には七〇〇米に達する者はない。

一八五五年八月アドルフ及ロバート・シュラァギントワイト (Adolphe and Robert Schlagintweit) 兄弟は、西藏側より東アビ・ガミンに登り、ハイ・キャンプを五八九〇米の所に設け、六七七九米の高度に達した。又測量官ポォロック (S. Poocke) は一八七四年にマナ側よりカアメットに登らんと試み、六七一八米の所に平面測器を据うることを得た。恐らく東西アビ・ガミンの孰れかの斜面を登つたものであらうが詳細は傳つてゐない。

ネパール西藏分水山脈のグアラ・マンダアタは西藏の山で、主峰の外に六七〇〇米前後の高峰二三座を有してゐる。一九〇五年シェリングの西藏行に同伴したロングスタッフは、此山の登攀を企て、頂上直下三四百米の地點まで登つて引返した。雪崩にのつて三百米も墜落したり、防寒具なしに雪中で二夜を過したり、食糧が充分でなかつたり、出發點に於て登路の選擇を誤つたりした結果、疲勞の爲に登頂がはたせなかつたので、ヒマアラヤに經驗ある人ならば此山を完登することは困難でないとロングスタッフは述べてゐる。同じ山脈のナルカンカールはネパールと西藏との國境上に聳立し、タクラコートの東約二十四軒に位置してゐる。恐らくネパールの改測の際に發見されたものであらうか。ガンサーの圖には七三二五米となつてゐる。

ナンダ・デヴィ、バドリナート、カアメットの三山群は近く相接して、比較的狭い範圍内に六一〇〇米以上の高峰百座餘りを擁し、地域の殆ど總てが英領で、面倒な國際關係もなく、交通も支障が少ないので、近年此地方に入り込む英國の遠征隊が頗る増加したやうである。實際大登攀を志す小手調べの練習場としても、又觀光がてら登攀の慾望を五六千米級の山に止むるにしても、ヒマアラヤの如何なる者なるかを知らうとする人に取りて眺向きの場所であらう。今夏 (一九三六年) 編者) 立教大學山岳部のヒマアラヤ踏査隊が我國最初のヒマアラヤ遠征として、此地方を選ん

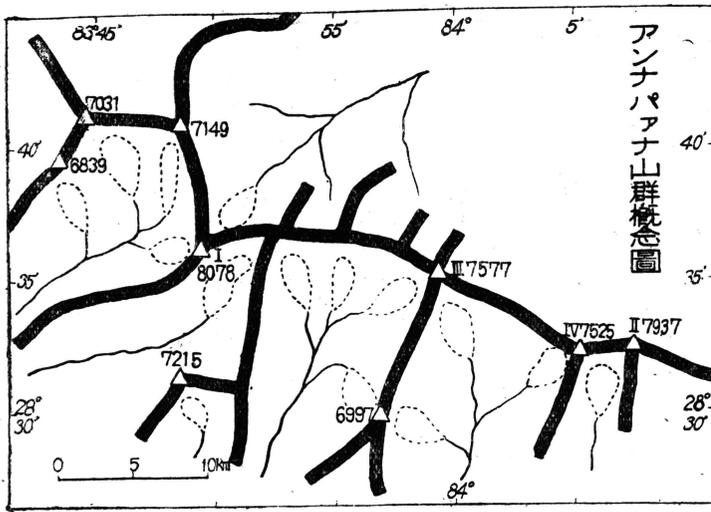


第 10 圖

だことは、誠に當を得たものといふ可きである。

ダウラギリイ ネパアルには國境上のエヴェレスト、カンチェンジュンガの兩山群及ゴサインタンを除いても、國內だけで高度に於てナンガ・パバットを凌ぐダウラギリイを始め、マナスルウ、アンナパアナ第一と、合せて八千米以上の高峰が三座ある。多くの登山家が競うて八千米以上の大物を目標とする今日、これが狙はれてゐない譯はない。唯ネパアルでは他國人の入國を禁止してゐるので、如何とも爲し難いのである。然し時勢は変わりつゝあるから、登山隊が入國を許されるのも遠いことではあるまいと思ふ。一番駆けの功名は果してどの國の人の手によりて行はれることであらうか。

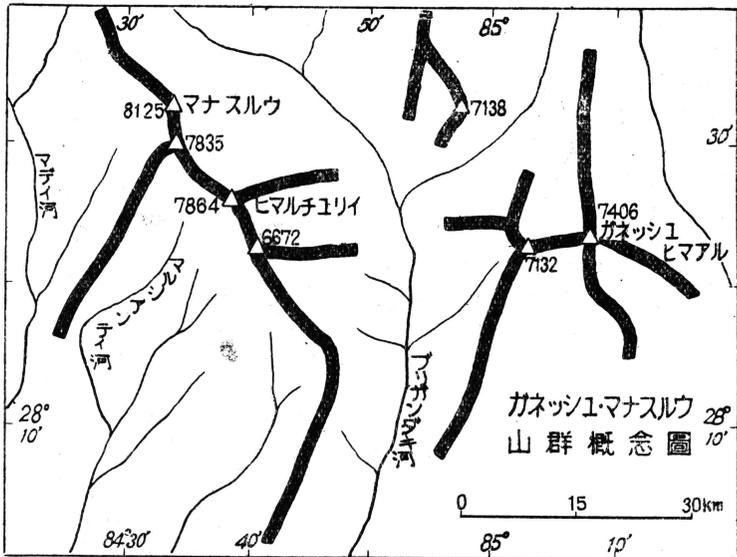
ネパアルの鎖國は八九十年前までは、今よりも嚴重に行はれてゐたので、印度測量部では印度人に測量術の概要を教授し、変装して谷筋を旅行させる手段を取つた。同時に國境近くに觀測所を設け、遠方から雪の山を測定した。元より山名の知れやう筈もないから、東から順に羅馬數字を充てゝ山の符號とした。この符號は山名が判然するに従つて抹消され、殊に一九二四年から二七年に互り、特にネパアル當局の承諾を得て、大部分の改測を行つた結果、其數は益々減少したのである。此改測の後に發行されたネパアルの地圖は、



第 11 圖

殆ど舊圖の俤を止めざる迄に面目を一新し、従つて山の標高にも増減を來した。前にも屢々述べた如く、改測の度毎に高度が多少の増減を示すことは、今後と雖も免かれぬであらう。舊圖はダウラギリイ八一六七米、チュレン・ヒマール七三六一米となつてゐる。「概略」第二版も同様である。こゝに訝しく思ふのは一九二九年發行の新圖に第三第五の二峰とも標高が記入してないことである。第三はそれかと思はれるコントロールがあるので判断もつが、第五は少しく曖昧である。然し山の位置は測定してあるのであるから、圖には殊更に省略したのかも知れない。

アンナパアナ カアリ(又はクリシュナ)・ガンダキ(Kali Gandaki)河を隔て、ダウラギリイの東に在る山群である。G・T・Sの舊測定は、Iが八〇七五米、IIIが七五四四米となつてゐる。「概略」第二版は之を採用してゐる。海拔二七四三米のカリ・ガンダキの流域から、十六料の西にダウラギリイ、二十一料の東にアンナパアナの二峰が河を挟んで、五三〇〇米以上も屹立してゐる光景は、印度河の畔から仰いだナンガ・パアバットの壯觀に劣らぬものがあらう。東經八十四度附近から東の山群は、時としてラムジュン・ヒマール(Lanjung Himal)の名で呼んでゐる。六九九七米の



第 12 圖

峰はマアチャア・ブチャアル (Macha Puchar) の名がある。マアチャアはネパール語にて魚、ブチャアルは尾を意味し、頂の双尖が恰も魚の尾を立てた形をしてゐる爲に此稱があるといふ。

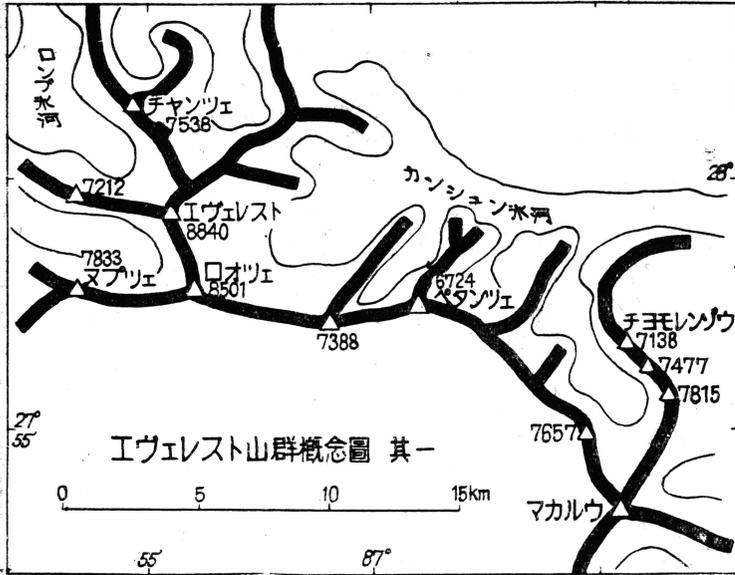
マナスルウ マアルシアンディ (Marsyandi) 河を隔て、アンナパアナの東に在る山群で、マナスルウ、ヒマアルチュリイ、マナスルウ第二と、七八〇〇米以上の高峰三座を有してゐる。其東にはブリ・ガンダキ (Buri Gandaki) 河を隔てガネツシユ・ヒマアル山群があり、更に其東にはトリスリ・ガンダキ (Trisuli Gandaki) 河を隔て、ランタン・ヒマアル山群があり、其北にはゴサイントン山群があるが、是等の山群に就ては尙ほ記載す可き資料に乏しい。ゴサイントンは印度教徒に聖山として仰がれ、毎年八月の候多數の巡禮者が其神殿に参詣し、ムクティナート (Mukthinath) と共にネパール國內に於ける印度教の神聖蹟罪の四大道場の一といはれてゐることである。

エヴェレスト エヴェレストが世界最高の峰であることは周知の事實であるが、其高度に就てはバアラッドは八八八二米とし、ハンタアは八八八四米とした。然るに

其後の調査によりて八八六四米となり、遂に五米前後の差はあるものとして八八五四米が恐らく實際に近いものであらうといふことになつた。エヴェレストの高度を變更すれば、相對的に測られた附近の山の高さも變へなければならず、其他種々の面倒があるので、オフィシアルには從來の高さを變へない事になつてゐる。

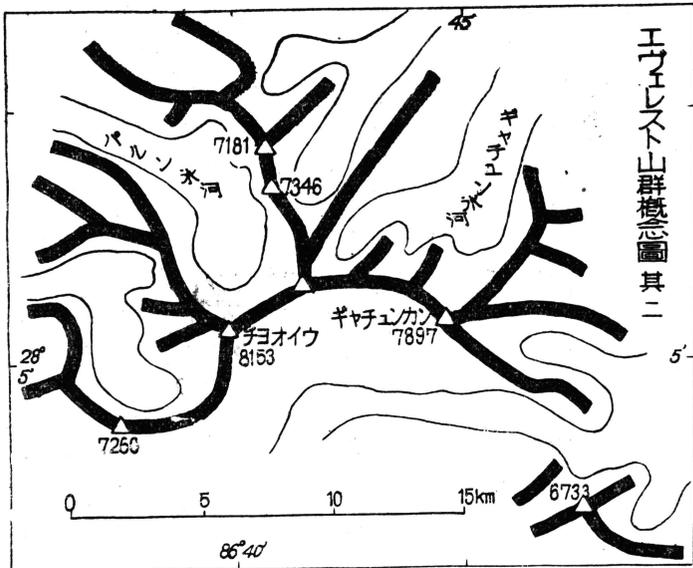
この山群は又自ら三の山群に分れてゐる。西に在るのはチョ・オイウを主としたもので、ギアチュンカン、ゴジユムバ・カン、パルン・ビイク等が之に屬し、南東に在るのはマカルウの一群で、チョモレンゾオ、ペタン・ツエ等が之に屬してゐる。中央はロオツエ、ヌプツエ、チャンツエ等を含むエヴェレスト主山群である。G・T・Sの舊圖には、マカルウ八四七〇米、

ティ四十五(チョ・オイウ)八一八九米、ティ五十七(ギアチュンカン)七九二二米、ピイ七百八十二(ゴジユムバ・カン)は七八九七米、エン五十三(チョモレンゾオ)七七四六米を載せ、尙ほ七六八二米のピイ五百八十三、七七五二米のティ四十二が記入してゐる。然し一九二一年の第一回エヴェレスト遠征隊に依りて、前者は一峰と認められず、後者は指定の位置に



第 13 圖

エヴェレスト山群概念圖其二



第 14 圖

斯る山なきことが明にされたので共に削除し、エヴェレストの標高を基として改測されたウィイラア (O. Wheeler) の寫真測量の測定に従つて改めた。印度測量部では何故かマカルウのみは從來の標高を用ゐてゐる。此遠征隊によりてエヴェレスト山群の全貌は初めて世に知らるゝに至り、數座の高峰は新に發見されて命名され、在來の符號は山名と置き替へられた。唯ペタン・ツェ西峰、パルソ・ピーク等は筆者が假に命名したのである。

エヴェレスト初登攀の企は、カンチエンジュンガ及ナンガ・パアバットのそれと共に登山史上に特筆さる可き大壯舉で、今日まで七回に互りて行はれた。第一回は踏査を主とし、ハワアド・ベリイ (K. Howard-Bury) を隊長とし、マロリイ (G. L. Mallory)、『ロッキン (H. Bullock)』ケラス (M. Kellas)、『レヘンブアン (H. Raeburn)』、チオズヘッド (T. Morshead)、『ウィイモラン (O. Wheeler)』、『クロン (M. Heron)』、『ウォラストン (F. Wollaston)』の九人より成る一

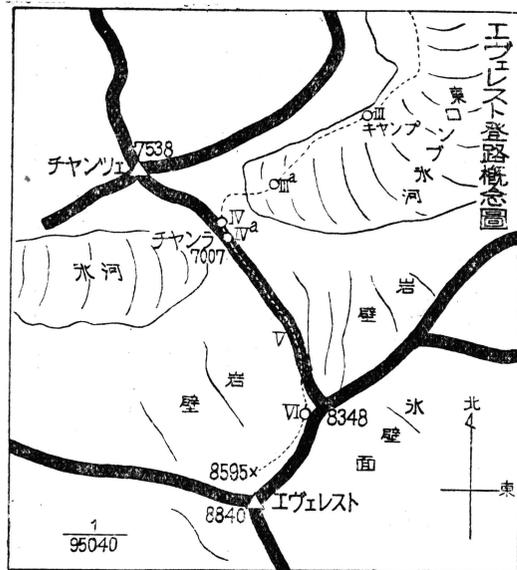
行は、シッキムよりプウタンを経て西藏に入り初はティングリー・ジョン (Tingri Dzong) を、後にはポオン溪谷のカアルタ (Kharata) を根據として、七月より十月初旬に至る三ヶ月の間に、エヴェレストの南方を除くすべての

溪谷を探り、中にも登攀隊に選ばれしマロリイとブロックの二人はエヴェレストの登路を發見することに専心努力しロンブ (Ronbuk) 水河を踏査して兩側よりの登攀が不可能なることを知るや、轉じてカアルタ溪谷を遡り、其原頭のラクパア峠を踰えて一氷河 (これがロンブ氷河の一支東ロンブ氷河なることはヘロンによりて確められた) を發見し、それを横斷して北峰と主峰との鞍部ノオス・コル (North Col) に登り、こゝにエヴェレスト登攀の前途が開かれたのであつた。ケラスは不幸にも往路の途中で病歿した。

翌廿二年の第二回から人と山との激しい鬭争が始まる。ブルウス代將 (Brigadier-General G. Bruce) を隊長として前年の遠征に参加したマロリイ、モオズヘッドを始め、フィンチ (G. Finch) ノオトタン (F. Norton) ソマアヴェル (H. Somervell) チェフリー・ブルウス (G. Bruce) ストラット (I. Strutt) ウェクフィールド (Dr. Wakefield) クロオファド (G. Crawford) モオリス (G. Morris) ノウエル (B. Noel) の諸人に、宿老ロングスタッフも加はつて十三人の一行は、前年の調査に基き近路をして、シエカル・ツォン (Shekar Dzong) より直にロンブ氷河に入り、ロンブ寺院の傍をベイス・キャンプとし、東ロンブ氷河を進み、一・二・三のキャンプを設け、ノオス・コルをキャンプ四として、第一班のマロリイ、ノオトタン、ソマアヴェル、モオズヘッドの四人は、愈々北山稜よりの登山を開始し、五月二十日ノオス・コルを出發して、七六三〇米の邊にキャンプ五を設け、翌日モオズヘッドを此處に残し、三人は八二二五米の地點に達した後、午後二時半引返してモオズヘッドと共に午後十一時にキャンプ四に歸著した。此時疲れ切つて歸つた人達を迎へる誰もが居なかつたことは、手落ちであつたといへる。

第二班のフィンチとデューフリー・ブルウスの二人は、五月廿五日ノオス・コルを出發し、酸素吸入器を用ゐ、七七〇〇米附近に達してキャンプ五を作つた。午後以降り出した雪は夕方から嵐となり、翌日の午前一時頃最も猛烈を極めた。夜が明けると雪は歇んだが風は衰へない。それが午後一時にはバツタリ止んだので、更に一夜を過して二十七

日八三二一米の高さに達して引返し、其日の中にキャンプ三に歸著した。第二班が第一班に比して成績が良好であつたのは、全く酸素を用ゐたお蔭であるとフィンチは書いてゐる。尙ほ第三班も編成されたが、ノオス・コルに登る途中雪崩に遇ひ、七人の人夫を失つたので、これは挫折して了つた。



第 15 圖

筒より成る酸素吸入器を背負ひて出發し、五及六のキャンプに各一夜を過した事は、マロリーの連れた人夫がキャンプ四へ下る際に、サッポオタアとしてキャンプ五に泊つてゐたオオデルに送つたメッセイジから判断されるのみならず、八日に東北山稜の直下まで登つたオオデルは、最後の峰頂に達する第二階段の所で二個の人影を認めたことによ

第三回は一九二四年に行はれた。隊長はブルウス代將であつたが、途中マラリアに罹り、指揮をノオトゥンに譲つて印度に歸つた。前回のマロリ、イソマアヴェル、デョフリイ・ブルウス、ノオトゥンの外にオオデル (E. Odell)、アアヴィン (A. Irvine)、シェビヤ (O. Shebhear)、ヘジャド (Hazard)、ヒングスタン (G. Hingston)、ビイスアム (B. Beetham) 等が加はつた。マロリーとブルウスは六月一日に北山稜を上つてキャンプ五を七七一米の地點に作り、翌日ノオトゥンとソマアヴェルは其處に一夜を過し、三日に主峰の頂上より東北に走る主山稜の八一六九米の所にキャンプ六を設け、翌日八五五五米の高所に達して引返した。續て六日マロリーとアアヴィンは二本の圓

つて明かである。然し間もなく雲に掩はれて、二人の姿は隠れた儘行方不明となり了つたのであつた。第二階段の附近に人らしく見える岩のあることは、第四回の登攀の際にスマイスによりて證されたので、オオデルはそれをマロリイ等と見誤つたのではないかと疑はれるのである。

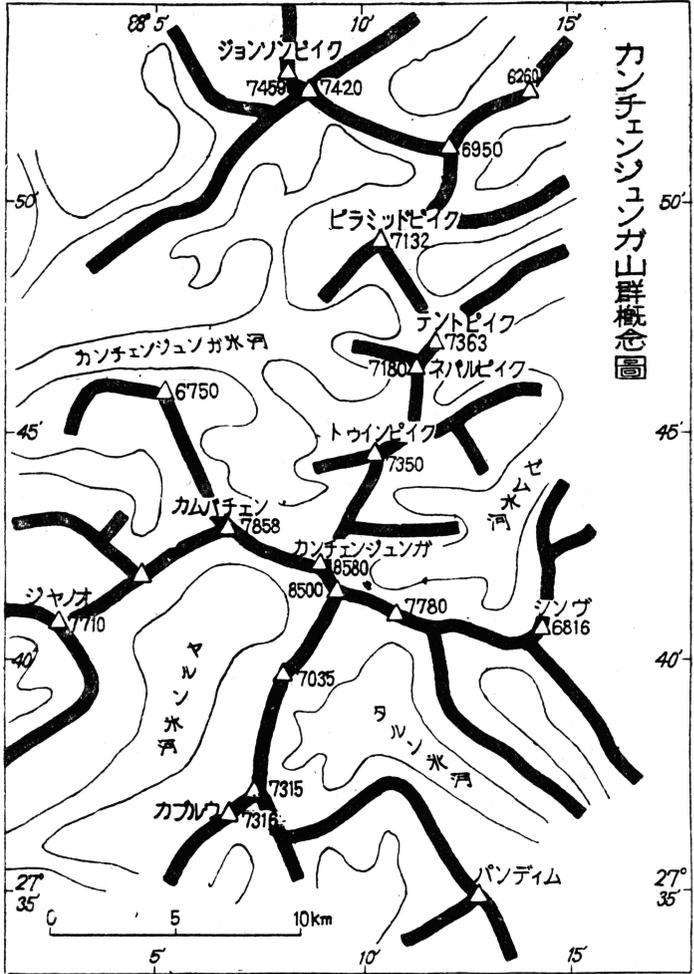
第四回は九年後の一九三三年に行はれた。ラトレッチを隊長とする一行七人は一人を除くの外總て新人で、前三回の經驗に鑑みて更に周到なる用意のものゝ遂行され、五月廿二日キャンプ五を七八三三米に、同廿九日にキャンプ六を八三五二米に作り、卅日にウイン・ハリス及びウエイジャア (P. Wyn Harris and R. Wager)、六月一日にスマイス及シプトンと二回に互りて攻撃を取行したが、頂上直下の大懸谷附近は意外に手剛く、遂に頂上に達し得ずして引返した。

第五回は今年三月に出發して五月には既に攻撃を開始してゐる筈である。快報の來るのも近いことであらう。

(註) 第五回は一九三五年、第六回は一九三六年、第七回は一九三八年と相次いで遠征隊が送り出されたが、未だに征頂されてゐないことは周知の通りである。唯この間エヴェレストを取捲く六―七千米級の山々が幾つか登頂されたが、その中でカルタフ(七二〇五米)、ケラス・ロック・ピイク(七〇六五米)、カルタ・チャンリイ(七〇三二米)等は代表的のものである。(編者)

カンチエンジュンガ 高度はエヴェレストに劣るが、山塊の大きさは寧ろ優つてゐるであらう。一八九九年ダグラス・フレッシフィールド (Douglas Freshfield) により、初めて其山麓が殆ど完全に一周された。「概略」第一版の表には、七峰を擧げてあるが、こゝにはウイン (K. Wien) の寫真測量の結果に成る地圖に従つてトゥイン・ピイクと第三とを加へ、第二及テント・ピイク (G・T・S) には七三四二米即ち二四〇八九呎となつてゐる。「概略」第一版及第二版とも之に同じ。) の標高を改めた。此圖は第一の標高八五七九米を基として作製され、可なり精確なもので、誤差は恐らく十米以内に過ぎまいといはれてゐる。第三はカンチエンジュンガ即ち「雪の五大寶庫」の第一峰に當る

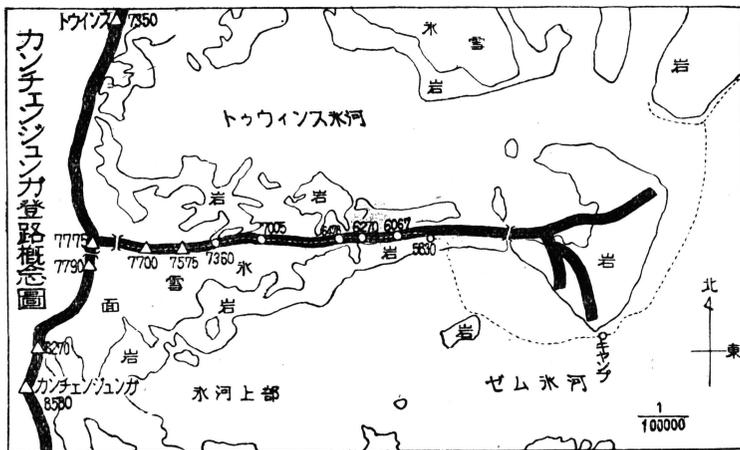
に當るカムバチェンとの間に在る第四峰には、未だ標高が記入された地圖を見ない。ディレンフルトは「八千米目録」に約八五〇〇米（二七八八呎）として載せてゐるが、少し高きに過ぎてゐるやうに思はれる。ジョンソン・ピ



第 16 圖

もので、今まで標高が測定されてゐなかつたものである。之も假に第三として補足した。第三峰に當る第一と第五峰

イクは東西の二峰に分れ、西峰は東峰より三九米高いことがダイレンフルトの登頂によりて知られた。ヤルン・ピイ



第 17 圖

クはカムバチエンとジャンオの中間に在る無名峰であるが、これはクルツ (M. Kurz) の圖に據り假に氷河名を山名として補つたものである。

附近の地點に達したが、其日の中に東北山稜の八〇〇〇米近き隆起に達することの不可能なることを知つて引返し、

一九二九年パウエル (P. Bauer) アルワイン (E. Alwein) 等獨
 塊山岳會員より成る九人の一隊はカンチエンジュンガの頂上を目指
 し、ゼム氷河に入り、地形を偵察して主峰の東北山稜上、頂上を
 去ること一・八軒高度七七七五米の一隆起より東に派出した氷の山
 稜を登路と定め、其末端の東南直下にキャンプ六を作つた。しかし
 此山稜の上まで登るのが容易なことではなく、途中にキャンプ七を
 作つたが、悪天候の爲に幾度か追ひ返された後、足場を切ることに
 數日を費した勞は報ひられて、九月十六日待望の山稜上に出づること
 とを得たのであつた。これからは未だ會て出遇つたことのない形相
 の氷と血みどろの闘ひを演じつゝ、絶えず下方と連絡を取りながら
 徐々と確實に歩を進めて、行く行く六二七〇米にキャンプ八、六五
 七〇米にキャンプ九、七〇二〇米にキャンプ十を作り、十月三日午
 前十一時にアルワイン、クラウス (K. Kraus) の二人は七三五〇米

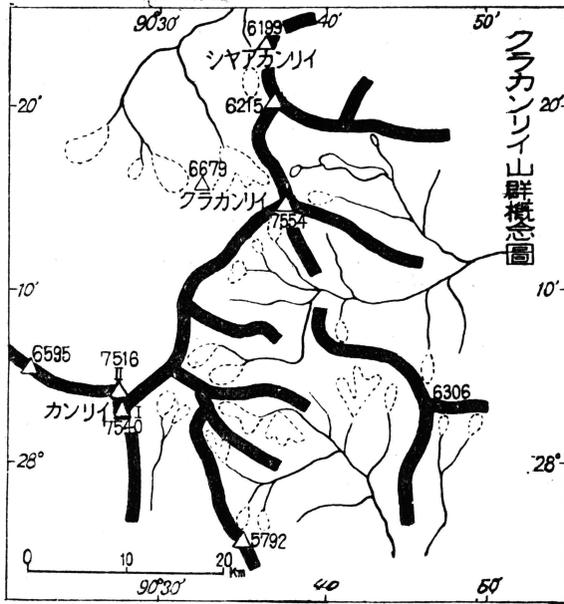
續いて登つて來たパウエル一人と居残つてゐた二人と共に、六人の登攀者はキャンプ十にて充分に支度を整へ、夜の明るるを待つて八〇〇〇米附近に登る筈であつたが、其夜から暴風雪が降り續いて、下山の際に非常なる困難に遭遇したのであつた。是等のハイ・キャンプは總て氷を穿つて作つた洞穴で、風の當らぬやう入口を狭くし、甚だ暖かであつたといふ。又進路を妨ぐる氷の山に八米のトンネルを掘鑿した事もある。この高所に於ける其勞力は實に驚嘆に値するものであつた。

第二回は一九三一年に前回と殆ど同じ隊員によりて、同じ努力が同じ山稜に於て續けられ、七三六〇米の地點にキャンプ十一が作られ、九月十八日アルワイン及ウインの二人は、七七〇〇米の高度に達したのであるが、東北山稜へは遂に登ることを得なかつた。豫想に反して東山稜は東北主山稜と互に頂線を以て接續することなく、東北山稜の頂線を下ること九十米に餘る斜面に連つてゐることを知つた。而も此斜面は危険なる雪に掩はれてゐるので、より以上の登攀は望めなかつたのである。パウエル隊のあらゆる困難に堪えて最大の努力を示したこの勇敢なる行動は、深く登山者の心に訴ふるものがあるので、若しカンチュンジュンガにして登られるものならば、山の中でも最も尊い壯嚴な其頂を踏むに値するパウエル隊に登らせたいものだと思ふも書いてゐる。

其間一九三〇年にオスカール・ディレンフルトを隊長とした國際登山隊がカンチュンジュンガを攻撃した。そして西北方のカンチュンジュンガ氷河から主峰とトゥイン・ピイクとの間に登り、東北山稜を頂上に向ふ計畫であつたが、此方面は絶えず氷雪雪崩の危険に曝される場所、これが爲に一人の人は殺され、全員危く埋没の厄を免れた程であつた。それで登攀を斷念し、ジョンソン峠を蹠えてゼムウ氷河に出づるに際し、ジョンソン・ピイクの登攀を企て六月二日にシュナイダ、ヘルリン(H. Herlin)、八日にスマイス、クルツ、ディレンフルトと合せて五人が完登したのであつた。尙ほカンチュンジュンガ山群の外にチョミオモ、カンチュンジャウ、パウフンリイ等、シッキム

の山に多くの登攀が行はれてゐるが、其等に就てはすべて略することにした。

クラカンリイ プウタンの北境にあつて西藏の國內に連互する山群である。北西から眺めたクラカンリイは、約六



第 18 圖

〇〇〇米の山稜上に一五〇〇米に達する整然たる金字塔を聳やかし、頗る偉觀であるといふ。G・T・Sの舊圖には、カンリイ第一第二にクラ・カンリイの名が與へられてあるが、一九二二年印度測量部のミイド(C. Meade)がシッキム駐在の政務官ベイリイ(M. Bailey)と、プウタンより西藏南部を測量せし際、其誤を發見し、眞のクラ・カンリイは其東北二十五籽の距離に在る山なることが知られた。然し「概略」第二版には是等をクラ・カンリイといふ總稱の中に含めてあるので、それに従ふことにした。此山群と西の方百二十五籽を隔つるチュモラアリイ(Chumohari)山群との間は、全く未探檢の地であるが、六九〇〇乃至七二〇〇米に達する二三の山は

測定されてゐる。後者は従來七二九四米として記載されてゐるが、ミイドの圖には七三一四米となつてゐる。

ナムチャバアワ プラアマブウトラ河が西藏から印度平原に向ふに當り、大ヒマアラヤ山脈を横斷する屈曲點に高聳する孤立した山群の主峰である。北山は一八七九年に印度測量部の探檢家ネム・シンに、次で一八八一年には同じ

く探檢家キントゥブに、一九〇〇年にはシシュミからロバートソンによりて望見されてゐるが、一九一二年にオウクス及フィルドの二人が初めて其高さを測定したのであつた。一九二四年に植物學者キングドン・ワード (Kingsdon Ward) は採集旅行の序に大峽谷の此部分を探つて、流程三百五十里に餘る大河が屈曲極りなき幅僅に十五間の河道を瀧津瀬となつて奔下する様に驚嘆したと書いてゐる。

ミニヤ・ゴンカア 支那四川省打箭爐の南西約五十八軒の所に在る山で、東經百二度二十分、北緯二十九度四十分附近に位してゐるから、ナンダ・デヴィよりは緯度で四十分程南に寄つてゐる。一九三二年四人の米人より成る一隊は、豫め地形偵察や山地測量を行つて、登山路を探究し、其北西山稜よりの登攀可能なることを確め、十月二日測量の根據地であつたゴンカ・ゴンパを出發し、北西山稜の麓なる四二〇六米の草地にベイス・キャンプを設け、以後人夫を使用せず、各自に野營の準備品を背負ひ上げつゝ次第にハイ・キャンプを作ることとし、四日五一八二米にキャンプ一を、十日五七九一米に二を、十三日六〇九六米に三を作つたが、これは十六日夜の暴風に吹き倒されたので、二十二日再び之を作り、二十五日六五五三米に四を作つた。かくて二十八日バツアル (L. Barsall)・ムウア (T. Moore) の二人は午前五時出發して午後二時四十分頂上に立つことを得た。頂上に近付くに従ひ山稜は狭く急となり小さい壁などもあるが、ステップも切らず大した困難もなかつたといふ。一行が打箭爐 (Tatsienlu) に歸著したのは十一月五日であつた。ハイム (A. Heim) の圖に據れば、此山群には尙ほ主峰の東北七軒に七〇〇〇米の孫逸仙山、北十五軒乃至二十軒に六四四〇米のレッドメイン、六九四〇米のグロスヴェノル、六九五〇米前後のエドガア、七二〇〇米のジャゼ・ゴンカア等の諸山が記載されてゐる。今後探檢の進むに連れて四川雲南の奥地には、更に幾多の高峰が発見されるであらうと思ふ。

中央亞細亞には七〇〇〇米以上の高峰が斯くも多數に存在し、僅に其少數が完登されたのみである。而かも歐米登

山界の趨勢は、攻撃の鋭鋒を次第に是等の高峰に向つて加へんとしつゝある。トリスル、ジョンソン・ピイク、カア
メット、クイン・メリイ、ミニヤ・ゴンカアの諸峰は既に完登され、エヴェレスト、カンチエンジュンガ、ナンガ・
パアバットは幾度か猛襲を受けても、其都度異常な高度、激烈な寒氣、強暴な風雪、雪崩、氷壁等に護られて、未だ
陥落するに至らないが、氣紛れ者の天候にして人間に味方せんか、其運命や知る可きのみと高言したい。兎もあれ、
是等の高峰を目指す登山者に取りて、最高の登山技術と高潮した健闘克服の精神と、寸分の油断も隙も許されない周
到な注意とが、求めずして要求されることは、大なる満足であらう。

八千米はさて置き、七千四五百米級の山でも初登攀となれば、正しい登路を發見する迄に意外の日子を要するので、
一隊少くとも四五人の登攀者が必要であり、且つ急速に登攀を敢行することは、高度馴化の不足と、空氣稀薄なる高
所に於て過度に働く疲勞とから病者を生じ易く、しかも其恢復には時として平地に於ける靜養を絶対に必要とするの
で、失敗に終る場合が多いことは、比較的困難でないとしてされてゐるカブルウやグルラ・マンダタの登行が之を説明
してゐる。此場合でも猶ほ豫備の登山班が一組あつたならば登頂可能であつたと考へる。

あ と が き

本篇は中央亞細亞の山を紹介することを主とし、紙數の大部分を之に費した爲に、人に就て別に章を設けることを
得なくなつた。それで止むなく最近に行はれた登攀を山群の部に略説して僅に責を果すことにしたので、不統一であ
る上に遺漏が甚だ多いのは遺憾である、これは深くお詫しなければならぬ。又山名や地名等の發音は、主としてシ
ュラアギントワイトの語彙に據つたものであるが、西藏語源のものにはGやKなど發音せぬ場合があり、且つ多くは

英語化してゐるので、頼りないものであると承知して頂きたい。参考書も二三十種に上るので、總て省略することにした。

追記

本稿の舊稿は昭和十一年共立社刊行の山岳講座第七卷に収載され、同講座中最も充實したものの一つとして、また當時のわが國に於けるヒマアラヤ研究者が一度は必ず眼を通すべき貴重な文献として長く記憶にのこつてゐることは、今更贅言を要さないことと思ふ。それはバラアドの名著「ヒマアラヤ及び西藏の地理地質概略」を主たる参考書とし、改稿に使用されたものをも合せれば恐らく五十に餘る群書を涉獵された立派な研究で、この分量にこれだけの内容を盛つた文献は海外に於ても殆ど絶無であらう。唯木暮さんがこれを執筆された當時使用されたのはバラアドの舊版（一九〇七年版）だつたので、その後新版（一九三三年版）が出るに及び、新版によつて全面的な改訂を希望してをられた。

それは丁度昭和十五年頃のこと、記憶するが、當時その新版は日本山岳會の圖書室にもなく、偶々會員田邊主計氏が所藏されてゐるのを知り、木暮さんは主としてそれによつて改稿に着手された。そしてその成果は「ヒマアラヤ」と銘打つて龍星閣から出版される豫定であつた。併し日に増し倍加された戦時中の逆境や、何にもまして木暮さんの健康の衰へと敗戦前年の長逝と云ふやうな不幸な事實のため、「ヒマアラヤ」は遂に陽の目を見ずになりましたのである。昭和十六年以來七年近くを東京から離れて暮した私はその間の事情を詳にするものではないが、あとからそのやうに想像するばかりである。そして木暮さんが遺された原稿もよし戦火をまぬがれたにしても、恐らく敗戦當時の混乱のため散逸されたのではなからうかと思つてゐた。

ところが最近木暮さんの往時の研究を物語る遺稿に親しく接する機會を得た。それは山岳講座版の活字の原稿にまがうかたない木暮さんの筆蹟を以て克明に書き加へられ、削除され、或ひは訂正された改稿である。唯それが完成されたものでないことは、地域によつて増補の程度に精粗があり、固有名詞の読み方等も一部統一を缺いてゐることなどから想像される。茲にかゝげたのが即

ちその改稿を整理したものに他ならない。

本稿が遺稿であると云ふことから、あくまで原文に忠實であることを第一とし、編者の加筆は全く之を避けた。然し今日から見て若干の説明を加へなければ意味の分明しない點は(註)の形で挿入したが、これとても最小限にとどめた。固有名詞の讀み方は新たに訂正されたものに從つて出来るだけ統一した。文中の高山目錄(表)は整理に最も苦心した箇所であるが、この中には例へば「スポレットに依る」とか「スペンダーの測圖に依る」と云ふ類の覺え書が隨所にかゝれてゐるが、これらは凡て印刷の關係上割愛したことを諒とされたい。挿入された略圖にも一部訂正がほどこされてゐる。

本稿は過般某書肆から出版の計畫があつて、會員田中榮藏氏が原稿の整理に手を染められたが、その後立消えの形となつてゐた。本稿が前にも記した通りヒマアラヤ研究者にとつて極めて價値の高い基本的な文獻であるところから、このまゝ篋底にうづもれるにしのびず茲に掲載した次第である。(望月達夫)

回想のヤング尾根

—一九四三年七月—

田 口 二 郎

ブライトホルンの北面を登るその前の晩、ガンデックの小舎で、私はなかなか寝つけなかつた。

前の日に、都會から遙々やつてきた足でいきなり四千米のオーベルガーベルホルンのアルベン尾根を登り、その日はシェーンブートル小舎から遙々やつてきたので、無理が崇つて體の節々が年寄りのように痛む。おまけに、小舎に着いてから附近の岩床で、テオドル氷河越しのどぎつい夕陽を身に浴びながら、ながながとトカゲをきめこんだものだから、神經も少々たかぶつていた。

眠られぬまゝに、私には、ツェルマットに着いた日の情景があれこれと思い出された。それもつい三日まえのことなのに、その日から、谷に入り山に登り、距離にしても高さにしても、大いに動きまわつたせいか、十日も前のよう
に感じられるのだつた。

久しぶりで訪れたツェルマットは、戦争で外來客が途絶え、さぞかししけていると豫想して來たのに、思いの外の賑いぶりだつた。客といつてもスイス人ばかりだが、繪葉書屋や土産物屋の店頭には都會人が人だかりしているのや、

その間をむさ苦しい風體の年配の山案内達が、髭面にパイプをくわえ、両手をズボンにつまこんで、退屈げに行きつもどりつしている風景は、戦前のそれと少しも變りはなかつた。その村の狭い一本道を、ウィンパーのレリーフのかかつたホテルモンテロイザの手前まできたところで、顔馴染みの案内オットー・フリーラーが屈托のない足取りで下りてくるのに出くわした。私の出現は思いがけなかつたのか、彼の皺ちやくれの陽灼け顔にほうという驚きの色があらわれた。それも束のまで、ついでベルンで物故した私の兄についての親切な悔みの言葉がのべられた。その飾らない言葉と顔付は、私を悲しませたが、フリーラーは、それを知つてか突差に話題を變えてこう聞いた。

『どこに行くのかね。誰と』

ツェーリヒ市から仕事を脱け出し、飛びたつようにやつてきた私には、實の所こうと決めた計畫もない。しかし、ともかく、良い男に會つたものだ、と思つた。スキーで名高いオットー・フリーラーは、山案内仲間でもマッターホルン・フリーラーの異名をとるくらいに大兄貴分である。彼が山登りを豫約されていることは問はずともわかつているが、彼なら私の相談に乗つてくれるだろう。

當代スイスで第一人者といわれるアレクサンダー・グラウヴンの名前をもち出すと、アレクスはシェーンブール小舎に在ると思うが、いつ下りてくるか、内儀に聞こう、と今來た道を私と並んで歩き初めた。

教會の廣場を右にそれて石疊の坂道を五分も登るとトリフトバッハの急流にかゝつた木橋の對岸に、箒で河岸に掻き寄せられたように、屋根や壁を雜然と重ねた百姓小舎の一むれが目につく。アレクスの家は、飼糧や漆喰や古材木のすえた香いが立ちこめたそのなかにあつた。狭い露路にはシャレーの庇が重なり、そのあい間から、針葉樹のまばらに生えたヘルマットの土色の裸の肌がのぞかれ、その遠景の、庇にさえぎられた狭い視界の殆んど全部を占めて、マッターホルンの重たげな三角の頭が、いぶし銀色に鈍く輝いて見えた。



ガンデック・ヒュッテより見たブライトホルン北面

×印は東峰の頂上、右方の雪の頂が西峰

—はヤング尾根のルートを示す。 (1938年4月 藤島敏男氏)

濕ぼく暗い百姓小舎の中から、アレクスの内儀と一緒に、ひよる長い四五六の男がのつそりと出て来た。そして『弟のアレクスは、この好天気では、暫らくは歸つてこないだろうから、自分を傭つてくれまいか』と、フリーラーを通じて私に申し込んできた。アレクサンダーの兄のアロイスである。

間もなく町に引き返してフリーラーと二人で酒場ヴァリサ・シュトローベの門をくゞつたのだが、今しがた、私がガンデック小舎で寝そびれているのも、この地酒屋と深いつながりをもっている。というのは、偶々そこで久しぶりに會つた老クヌーベルに、ヤング尾根を強く勧められたからだ。

いうまでもなくヨセフ・クヌーベルはヤング尾根の初登攀者の一人である。土地の者はこの尾根をクヌーベル尾根とさえ呼んでいる。

『素敵に面白い氷の尾根です。が、アロイスと二人だけではいけない。最後のトラバースとクローアールはなかなかの悪場だから。』

クヌーベルのこの言葉は、私の即決を一も二もなくうながした。まどろみながら、私はいつしか一昔前のシェーンブール小舎の夜の光景を追っている。

兄と私にスイス登山の手引きをしてくれたグリンデルヴァルドのブラバンドと初めてシェーンブール小舎に泊つた晩のこと、——夕食を終え石油ランプにうす暗く照し出された部屋の隅々を私達が今更のように眺めた時、きびしい顔付のブラバンドがいつになく目を輝やかせて、私の兄に囁いた——あの隅のカイゼル髭の小男の年寄りが、クリスチャン・アルマーのさらに肩の上に立つたといわれる偉大なガイド、クヌーベルだ、——そう云いざま立ち上つて彼は年寄りに挨拶にかけた。國會議員としてスイス全國に名前の知られているブラバンドが、皺ちやくれてヴァリスの土塊そのもののような小さな老人に、さも尊敬をこめて挨拶している情景は、一流の山案内人の間にだけ通つて

いる職業的自負というものを私達にいかにも感じさせるものだった。

それから或る年のうらゝかに晴れ渡つた夏の日に、クヌーベルと再會したツイナルロートホルンの岩尾根……こうして私は過去のつながりを追つていのだが、數刻の後に私の甘い夢は『起きなさい、時間です』という邪険な聲に破られた。

星の多い、風のない、夜氣のひきしまつた早曉である。

蒼白い暗さが氷河の面をしめやかにつゝみ、目を凝らすと、漆黒に塗られて蹲くまつた山々が、闇の中でお互をじつと見つめ合つていゝような氣がする。

間もなく、不氣味に靜まりかえつた夜の氷河を、ちつぽけな三つの影が、螢の光にも似たかよわげな燈にみちびかれて、懸命にまえへまえへとうごめきはじめた。

ヤング尾根にとりつুকたためには、ブライトホルンの北面にその源をもつ二つの氷河を渡らねばならない。

最初の氷河（クラインマッターホルン）を涉つて、西峰北面のバットレス状の西尾根のつけ根を乗り越える頃、モンテローザ越しの東の空はようやく白んできた。陰鬱な灰一色が紫模様に變り、それも間もなくうすらいで明るい藍色が力強く伸びひろがつて行く。

ツェルマットの深い山峽は暗闇に沈んでいるのに、その頭上に立ち並んでいるヴァイスホルン、ロートホルン、オーベルガーベルホルンの高い尖塔の穂先には、早くも朝の光がさつと投げられ、岩と氷は火がついたように赫く燃えさかる。

西尾根のつけ根——岩の凹みから、六十米ほどの容易しいチムニーづたいに、第二の氷河ブライトホルン・グレッ

チャーに下りついたが、北壁の蔭になつたこのすり鉢のような圈谷は、七月というのに、膝までとゞく深い粉雪におわれていた。千米の高差で目の前におゝいかぶさるように立つている氷の壁はまだほの暗く、その上を寒々とした灰色の幽氣がたゞよつている。ウインドヤッケに革手袋という私達もまた冬装束。

先頭のゴットフリード・ベーレンは、ヤング尾根のつけ根にむかつて、氷河をどんどんラッセルして行く。

小舎番の昨夜の話では、一週間程前にパーティーがヤング尾根を通過した、とのことだつたが、粉雪の氷河にはそのあとかたも残つていない。

朝の六時——小舎を出てから三時間で尾根のつけ根に到着した。

こゝで私はブライトホルンを手短かく紹介せねばなるまい。

ツェルマットから登山電車で小一時間、高差にして二千米を引き上げられるとアルプス最大の展望臺ゴルナーグラートの尾根に出る。この高臺からは、ヴァリス・アルプスのすべての四千米級が一望の中に收められる。

前面にはマッターホルンを手初めとし、ダンブランシ、オーベルガールホルン、ウエレンクッペ、ロートホルン、ヴァイスホルン等の尖頂が、蒼空にその鋭い牙と高さを競い、右手にはミシヤベルの連山が牙をならばせ、後方はモンテローザとリスカムが白と灰色の二匹の巨象の姿を横たわらせている。

さらに目を南に轉じると、イタリアの空を區切つて、わがブライトホルンのそいで切り落したような幅のひろいバットレスが、一枚の長屏風の格好で、このペノラマに一つの特異な風景を占めている。

登山者の目と心をもつて、もつと仔細にこの山を觀察すると、スイスとイタリアの國境線をなしている、この山の長い稜線が、二つの頂をもつてに気がつくだろう。すなわち右寄りの白いドームが西峰（四一七一米）であ



BREITHORN, SOMMET E (4148 m.).
 Détails du Klein Triftjegrat (Younggrat).

ヤング尾根ルート圖

(72と記入されているルートが
 ヤング尾根のルートである)

り、稜線の中央部の塔状の岩峰が東峰（四一四八米）である。

面白いのは、この山の北面が、中央の東峰のあたりを境として、右と左とに地形的なコントラストを作っていることだ。

西寄りの壁は、懸垂氷河が相重なつて、しかもそれが國境線のあたりまで、危げに這い上つている主として氷雪のバットレスであるのに反して、東寄りの壁は雪もとどめぬ殆んど垂直の黒い絶壁である。

ブライトホルンの北面は、早くも一八九七年に二人の英國登山家とニコライ谷の三人の山案内の一行によつて登られた。地圖ではトリフト尾根と呼ばれている西峰のバットレスに登路を求めたものである。

しかし、北壁にはもう一つの尾根がある。東峰の直下に、一本の糸のようにぶら下つている氷の尾根だ。

これがゴルナーグラートの観光客の目に、尾根として映らないのも無理はない。それは餘りに細々と壁に縫い込まれているからだ。

地圖の上ではクライン・トリフト尾根、一般にはヤング尾根、地元ではクヌーベル尾根と呼ばれているこのアレートは、一九〇六年の八月、英國の名登山家 G・W・ヤングとロバートソン大佐、それにヨセフ・クヌーベルとモリツ・ルーペンの兩ガイドの一行によつて初登攀された。

どれくらい、この尾根はまる二十二年間手をつけられないまゝでいた。そして一九二八年にフランス登山家の一隊が、久々ぶりに北壁の靜寂を破つた時、頂上直下の最後の難場で全員が墜死するという悲劇を生んだのであるが、それについては後程やゝ詳しく書こう。

二十九年にケール博士の一行によつて第二回の登攀が成功し、三十年には、英登山家グラハム・ブラウンが初登攀者であるヨセフ・クヌーベルと、アレクサンダー・グラウヴンの二人の秀れたガイドを伴つて第三回目の登攀を行った。

私の聞いた話では、それくらい、毎年一組二組の登攀が行われて来たらしいが、ツェルマットの案内仲間でもこの尾根の案内を二言目に應諾するものは、わずか十人餘りだろうとのこと。フランス隊の悲劇が祟つて今でもこの尾根は繁昌していないのだ。

ヤング尾根のつけ根——そこからは、北壁にかゝつた懸垂氷河の底迹がこの圏谷のどんつまりとぶつかつて大きなベルグシュルンドの口をあけているのが、目と鼻の近さで見えるところなのだ、その一寸手前で私は、北壁を仰いで寫真をとつた。

ブライトホルンの國境線は、こゝから八百米の高差で仰がれる。八百米というのは高差としてはさき程でもないが、頂が驚くほどの近さにあるので、見上げるとうしろにひつくりかえりそうな仰角である。

問題の尾根の下半分は、一本の雪の梯子のように北壁にむかつてよりかゝり、屹立した特徴的な大きなジャンダルムが尾根をいつたたくびつて、さらに上の半分は、別個の氷稜になつて頂上直下の絶壁むけて斜めに走り上つている。

とりつきに來て、真正面に仰いだとき、素晴らしいな、と思つた。いかにもアルプス的な、さも挑戦をかけてくるような剃刀の尾根である。約二百米ばかりの高さに心もち左にかしいだ岩塔が見える。やせ尾根はそれにむかつていくつかの鋭い小さな、くの字を畫きながら伸び上つている。

アロイス、次にベーレン、殿りに私という順序で登りはじめた。五米位の短かい間隔である。左手のシュヴァルツェツグ氷河側の斷崖には小さな雪庇が出ているので、稜を右にとつて高度を高めて行くのだが、傾斜は終始胸をつくほどの急さで、トレーニング不足の私はたちまち息切れがしてよわつた。先刻とりつきから見た目には、ごく近くに

平らに横わつていたブライトホルン氷河のどんつまりの小さな雪の盆地が、みるみる中に下に遠のいて行つて、私は間もなく、その盆地めがけて滑り落ちてゐる蒼い氷壁の上の縁をへつてゐることに気がついた。

尾根の雪が氷に變つたり、また傾斜が急過ぎて氷の上の雪層がアイゼンの齒を下に流してしまふような箇所——それはくりかえし、くりかえしやつて來たのだが——そこにかゝるとアロイスが丹精に雪を拂つて足場を切る。

氷と雪の違いは、雪をかぶつた氷面を知つて初めて味う、といえぬものだろうか。ともかく、登り初めて私は、萬一こゝを引き返さねばならぬ破目に陥入つたらどんなに不氣味なことか、と取越し苦勞を初めた。概してアルプスでは、如何なる登りも快適だが、下りは疲勞も手傳つて重荷である。日本の山のようにかけ下りるという樂な路がないからだ。まして氷の降り道においてをや。五年前に登つたダンデラン下山のさいのあの愚かな恐怖が私の頭をチラとかすめた。頂上からティーフエンマツト氷河に落ちる高さ七百米の雪の斜面をアイゼンの踵をふみふみ下りるのだがその大斜面は中どころがふくらんでゐるので底が見えない。下半分のつけ根に大きなベルグシュルンドがすり鉢の底をくまどるように黒い輪をめぐらせてゐるのが、私の目の底にハッキリ残つてゐる。雪のこの斜面を下るには、冬の富士山を下る技術と馴れだけで充分であるはずなのに、杖代りに雪につくピッケルの石突きが石につまづいたようにカッチンと、雪層の下の氷の面から弾きかえされるのが、私にはやり切れないのだつた。滑つたらお仕舞だという敗北感にすつかりしてやられていたわけだ。後程、私は小さな發見をした。氷を恐れない方法を見出した、等と云えば眉をひそめる人達もいるかも知れぬが、その發見は實の所、記すも恐縮なほどありきたりのことなのだ。試みに大きな急な山を——それは次善として日本の山でも差支えない——三日と置かず三つ四つ續けて上つてごらんさい。四番目位に突然、全く突然貴方はどんな氷の斜面も、下にクレバスがアングリ口をあけてゐる斜面さえも、自信をもつておびえずに登り降りできるようになる。要は氷にたいする恐怖の原因の大半は、目と神經が傾斜と斜面の大きさに

馴れていないことにある。一シーズンに大きな山を四つも五つも登つても、翌年のシーズンの緒戦には、必ず昔の「恐怖」を大なり小なりに味うものである。楨さんとアイガーに登つたブラバンドでさえ、三年も山に登らぬと怖くなるよ、と云つたものだ。いや、私の「発見」が嘘でない第一の證據は、都會から來たその足で早速取り組んだヤング尾根で私の膝がかすかに震えていることだ！

第一ジャングルム——とりつきから見えた最初の岩塔の下までくると傾斜はめつきり急になつて、尾根も裸の氷になつてきた。

しかも、その氷尾根は一箇所かぶりぎみの大岩にさえぎられていて、尾根はそこかぶつた岩からさらに左上に伸びている。

ヤング尾根の下半分の傾斜は平均四十五度——五十度というところであるが、全登路を通じて、上半部のアレートとクローアールを除けば、この岩塔へのアプローチが一番手強いように思われた。

流石ヴァリスの山案内、アロイス・グラヴンは氷の足場から、かぶりぎみの岩に大手をひらいてむんずととり組む。私が幾度見て幾度感心させられたかわからないあの豪膽さをもつて。右へ左へといくつもの氷の斜面の小さなトラバース。カリンカリンと刻まれた氷片がはるか下で渦巻をまいている氷河めがけて断崖超えて碎けながら飛んで行く。

こゝで私達の指先は相當こみ入つた仕事をまゝせつつかつたが、岩塔の下で、小さな岩のテラスを見出した時、二人のガイドはまるでツェルマットでそのことを謀し合せてきたように黙りこくつてそこに腰を下した。とりついてからまる二時間、登るか下るか、何れにせよ長くは立ちん棒出來ないようなやせ尾根つゞきだつたのだ。

ヤング尾根には落ち着ける休み場所はない。私達が腰を下した岩下の凹みが五六人のパーティーでもさ程窮屈しない唯一のたまり場である。

テルモスから温い茶を啜り、煙草をふかすその楽しさ。先を案じる気持には變りはないが、北壁のふところに入つてしまつてから私の覺悟もきまつた。それは冒険にたいする楽しい氣構えというものかも知れない。

第一ジャンダルムに立つた時、私は長さと高さにしてヤング尾根の丁度三分の一を後にしたと目測した。

岩塔からはロープで懸垂して下りる。尾根の傾斜はぐつとゆるくなるが、ますますやせてくる。いくつかの快適な岩塔を乗り込め、あるいはへつり、それ毎に小さな水の急斜面に足場をきざんで、やがて尾根の中どころにある大ジャンダルム（三七四一米）をすぐ目先きに仰ぐところまでやつてきた。

大體ヤング尾根の岩登りはいつもアイスワークとつながつていて、十米の岩棚を登れば次には十米の水を切るという具合に變化に富んでいるのだが、大ジャンダルムを左手（東側）にからむトラバースは一番その面白さを持つていた。しかもそれは、ブライトホルンの東寄り岩壁の下を流れるシュヴァルツァ氷河にむかい數百米の高差でそげ落ちている斷崖の尾根の庇に沿つて行われるのだから、露出されているという緊張感は満點である。

からみ終つて大ジャンダルムの上に立ち、東峰（四一四八米）直下の岩壁から一本の白糸のように吊り下つている危げな氷の尾根を見出した時、私は絶大の自信をもつて思はず心でつぶやいた——これこそが本當のヤング尾根なのだ。今までの登攀はいわば前座に過ぎなかつたのだと。

その尾根はつけ根から——そこまで私達は降りて行かねばならぬのだが——頂上の岩壁直下まで高差にして三百米程、半ばところの高さで左手にやゝ彎曲しそこからは尾根というより恐ろしく急な氷の斜面となつて頂上直下の垂直の岩壁に消えている。

頂上の岩壁を眞直登るのはもとより不可能だが、それではどこに脱け道はあるのか。

氷尾根が岩壁に消えようとする十米——二十米下の所で、さらに右手に氷尾根と殆んど平行してそれと名付けるに

は餘りにひらたいクローアールがチラと姿をみせている。それは長さにして僅か二三十米、下は逆層の北壁の岩崖。最後のクローアール——これこそがヤング尾根登攀の最後の脱け道であり、登攀の成否を決する最大の鍵でもある。ヤング尾根の登攀がドラマチックなのは、こうした「構成」上の面白さをもっているからだ。

登攀を初めるまえにベーレンがアロイスに代つて先頭に立つた。とりつきの岩場を終えていよいよ尾根に近づくと稜というより稜めいた氷壁という感じが強くなる。

アロイスよりも低背でずんぐりして、みるからに粗野なヴァリスの山案内人風のゴットフリード・ベーレンが、硬い蒼氷に發止とビッケルを打ちこむ。バシン、と岩板をたゞいているような重たげな音がした。

氷の切りようも十人十様であるが、大まかに云つて、オーバーランドの案内とツェルマットの連中とは、そのスタイルが大分違ふように思われた。シュレックホルンの東壁で、兄と私はサミュエル・ブラバンドが打ち砕く何百の氷のかげらを頭上に浴びせかけられたが、勿論その時は、見事な彼の氷の切り振りを、嘆賞できるようなのんびりした場所柄でもなかつた。しかし、『氷切りには、乾草刈りと同じようにコツがいるものだよ』とあとでブラバンドは私達にいつたものである。そして、コツとはこれだと教えてくれたのが、ブラバンドの後輩でマッターホルンの北壁を登つたヘルマン・シュトイリだつた。彼によると、能率の良い氷切りのコツは、ビッケルを打ちこみしなに、右の手首で内側にひねりをはかることにあるという。ヘルマンの兄でヒマラヤに行つたフリッツも同説を支持して、これだよ、と彼の右の手首の、内側に盛り上つた筋肉のこぶを見せて笑つた。この三人は、ガイドでいながら、アマチュアのような文化的、スポーツ的登山感覚の持主ではあつたが、それはそれとして、ヴァリスの連中が、グリンデルヴァルドの同業にくらべて、技術にかけても大まかで荒けすりだということは、一般的にもよく耳にすることである。

ツェルマットをめぐる山々の大きさと荒々しさが、彼等をそう育て上げる大きな原因であることはまず間違いないさうだ。ともあれ、ヤング尾根の最後の氷稜に立ちむかつたベーレンから、私は、荒武者の風格を受けとつた。立ちむかうまえに彼が氣つけ(？)のコンヤックをぐっと一杯ひっかけたという話はこゝでは内緒にしておいて。

ベーレンは一步一步と足場を刻んで登つて行く。三十米のザイルが殆んど伸び切つた時、彼は、兩靴共に入り、底邊が内側に傾むいた大きな足場をつくつて、來い、とアロイスに合圖した。アロイスはそこまで登つて先に進むベーレンを確保する。ベーレンの氷切りがまた初まる。兩膝を氷面に押しつけてバランスを堅持しながら、上身を心持ち反らして、バシン、バシンと氷をたたく。三角の大きな氷片がはじめはザラザラとゆるやかに氷面を流れ、次の瞬間空中に跳ね上り、ヒューとうなつて斷崖越しのシュヴァルツァ氷河めがけて飛んで行く。

見上げると、ベーレンは白い壁にへばりついた小さい黒いコウモリのような。

アロイスの合圖で私も登り出し、第一の確保點にたどりつく。私とアロイスの間には第二の三十米ザイルがつながっている。

ベーレンの合圖でまたアロイスが私を残して登り初める。

非常な難場にとりかゝつてゐるのだという意識が、私達三人を異常に緊張させてゐる。

『上はどうだ』というアロイスの短かい鋭い聲が、頭上に威壓してゐる岩壁に木精する。しかしベーレンは答えもせず、兩膝を少しひらいて氷に押しつけ胸を張つて黙々と切りつゞけてゐる。

そのあたりから尾根は段々壁めいてきて、下の私からは、アロイスのアイゼンをつけた靴底が仰げるばかりの傾斜になつてきた。これはたまらぬ、アロイスが滑り落ちたらあのアイゼンが私の頭にグサリとつきさゝるに違いないとかう奇妙な考が頭をかすめたのも、その急な傾斜からくる實感であつた。

上のアロイスは遅々と進まない。大小の氷のかけらが用捨なくふりかゝってくる。一度、大きなかけらが私の肩にツシンとあたつて體のよろめきを覺えたので、私は兩膝兩肘を氷の面に押しつけて龜のように頭もひこませ觀念したように待つことにした。

『來い』というベーレンの叫びが再び聞える。

いくたび三十米のロープが先頭とアロイスの間で伸び切つたことだろうか。

突然、私は私達のいるところ以外の世界では、すべてはまぶしいほどに明るく陽氣で正午も近いことを意識する。さすれば私達はすでに二時間をこの日蔭の氷稜にへばりついているのだ。

アロイスが先頭のためにゆるめるザイルが七度目に二十米近くも伸び出た時、突然、ベーレンが高聲でアロイスに叫んだ。

『クローアールにまへのパーティーの足場が残っている。少し高く登り過ぎた。』

流石の荒くれ男のベーレンも、滑り落ちたら右側のブライトホルン氷河か左側のシュヴァルツァ氷河か何れにしても一萬千里の死の跳躍は免れ得ない、このつびきならぬ氷の壁では、聲もわずかに上づつている。

『登り過ぎたから少し下りる』と合圖したベーレンをアロイスが、あわてゝ、鋭い聲で制止した。

『こゝではまずい。近くまで登つて行くから。』

しかし、この「配置變え」のおかげで私はいやな足場に待たされる破目に陥つた。アロイスはこゝまでに、少なくとも三百餘りの足場を切つてきた。そして——當然のことだが、彼の刻む足場は上に行くに従い段々小さく奥行きも淺くなつてきている。私が待たされたその足場はアイゼンの前の二段の齒が辛じて乗る程度の小さなもので、十五分もたつと足がしびれて、ひきつつてきた。

圓みを帯びた尾根の上でアロイスがアイスハーケンをとり出し氷に打ちこむ。コチンコチンと音は鈍くて沓えなかつた。しかしハーケンの輪にカラピナをつけそれにザイルを通したのを見た時、私はこれで助つた、三人落ちても大丈夫だというアルピニストラしからぬ馬鹿げた安全感をフト覺えたことを告白する。

そのアイスハーケンは、ベーレンの下降とクローアールへのトラバースを確保するためのものだつた。

私達は今や最後の突撃にとりかゝつてゐるのだ。頂も國境線も、手を伸ばせば届くばかりの近さにある。しかし私達の行くては、蒼氷が鏡のようにはりつめた凹んだ氷壁でさえざられている。その氷壁のなかどころに黒い岩角が小島のように突起している。その岩角のむこう側の斜面は、崩れた雪庇が凍りついて、そうなつたものか、舌狀に垂れ下つてかぶり氣味でさえある。

トラバースは、眞中の岩の下をからんで向う側の岩のリップのつけ根まで目測にして約四十米。

ということは、確保する術もないこの氷の凹みに二人の登山者が同時に身を潜めねばならぬ、という危険を意味する。G・W・ヤングによつて「いやな片隅」とよばれたこのクローアールをまえにして私は、一九二八年七月のある日の夕方この氷壁が惹き起した「アルプス史上での最も悲しい致命的なアクシデント」を思わないわけにはいかなかつた。

四人のフランスの登山家が命を奪われたのはこの最後の突撃のさいだつた。

二人の経験ある登山家をふくめたこの一行はヒマラヤ遠征を目論んでいて、その力試しにG・W・ヤングからこの尾根の登攀を勧められた、と私は聞いている。

丁度その日G・W・ヤングはゴルナーグラートの展望臺から備えつけの望遠鏡で一行の登攀を見守つていた。

下の尾根のとりつきから登攀は好調ですゝめられていたが、突然ある箇所で行は立ち止り、全く不可解の理由から五時間も動かなかつた、と報ぜられている。それで一行が、ジャンダルムに立つたのはすでに午後の五時であつた

が、つゞけて上の氷稜を登る姿が見受けられた。

六時半頃、雪雲が北壁をおよつて、ゴルナーグラートから見えなくなつた。半時間の後に再び望遠鏡をのぞくと上の壁から一行の姿はかき消えている。そして國境線直下のクローアールに三四本のたての線が鮮やかに目に映り、七百米下のベルグシュルンドのそばに、一つの死體とルツクザツクが見出されるのだつた。

その翌日ツェルマツトから、撰りぬきのガイドを集めた搜索隊が、ブライトホルン氷河の奥にむかつた。危険を冒して懸垂氷河の壁を登りベルグシュルンドに達したとき、そばでむごたらしい三つの死體が見出された。その中の二人はまだザイルでつながれていたという。

アクシデントは正確にどこで、どうして起つたか。

それには二つの推定が行われている。(A. J. May 1931, No. 242)

ブライトホルンを裏側(イタリア側)から登つた搜索隊が、クローアールを直下に見下ろす國境線の地點から、G・W・ヤングのいう「いやな片隅」への入口の斜面——私達がたつた今トラバースしようとしているその斜面に、四つの完全に刻まれた足場と一つの半ば仕上げられた足場を發見した。

これだけならば、五つ目の足場こそが、四人の生命の最後の名残りであると結論できるのだが、またそれとは別の痕跡が、東峰直下の岩壁に入りこむ小さいルンゼ——これはゴルナーグラートからはかくされて見えないが、クローアールのトラバースを採らぬ場合は、垂直にも等しい岩壁にむかわねばならぬ譯だ——に發見された。しかもこのルンゼ頭上の雪庇が一箇所少さく崩れていたのが、暗示的だつたと報告されている。

クローアールが難かし過ぎたので、「五つ目のステップ」を半ば刻んだまゝトラバースを断念し、直登を試みたものか、そして落石か雪庇に飛ばされたのか、或いは直登が難かし過ぎたのでそれを断念して、クローアールにかゝり、

何等かの原因で滑つた一人に全員がひきすり落とされたのか、何れにせよ、ほの暗い昏の北壁に起つた悲劇の眞因は知る由もないのである。

クローアールの蒼氷の板のような黒づんだ斜面に、新らしいすい氷をかぶつた前のパーティーの足場が、ひとつながりの白點のならばの如く目に映る。それは、岩角をかなり下からんで刻まれていた。

どの高さでトラバースするか、そこがこのクローアールへの目のつけどころなのだ。

周知のように、氷層というものは上からの壓力やその他の理由で目に見えないゆるやかさで動いている。ことに風通りの強い國境線の直下では、雪庇で斜面が重壓を受けるため、わずか數日の間にさえ傾斜に變化をもたらし得る。

前のパーティーが涉つていらい、岩角のむこう側の氷の溝の傾斜に何等かの變化が起きたに相違ないと私は直覺した。というのは、古い足場がそこでは、舌のように垂れたかぶり氣味の氷面を傳つているからだ。あそこを登るのは人間業ではない、という窮地に立つた不安が私の胸をうつた。

二人のガイドも明らかに同じことを見とつたらしく、早口で短かい言葉をさかんにかわし初めた。むこうの溝を登らず、中の岩にとりつこうか、いや岩の上の斜面は悪いぞ、といった切羽つまつた議論である。

しかし、こういう悪場では、古い足場——一度人間が通つた正にその證據である古い足場は、無限の魅力をもつものだ。

はやベールンは、岩の下あたりを一步前に進んで、全注意力を體のバランスの維持にかき集めながら、左肢を氷面に押しつけ、上半身を谷側にくの字に反らせ、丹精こめて足場をきざんでいる。ピッケルの頭が時計の振り子のよう
に正確な半圓を畫いてリズムミカルに上つたり下つたりする。古い足場に新らしいステップをきざんでいるのだ。斜面

が餘り急なのでトラバースの足場は膝の高さまでの側壁と内側にかたむいた底迹をもたねばならない。

氷壁で命の運試しをやつていようなベーレンの一舉一動を、アロイスと私とはまばたきもしないで見守つてゐる。むこうの溝にかゝつた時、アロイスのザイルが伸び切つた。そして動き出すアロイスを私はアイスハーケンで確保した。

二人の人間がクローアールにぶら下つてゐる光景は私の緊迫感を今ひとしおひき立てた。

高い屋根の樋のフチを一羽の鳥がをチョコチョコ歩く、あの危ぶげな足どりでアロイスは足場をたどつて行く。

岩の下まで来た時不自由な足場に立ちながら、彼はリックサックからハンマーをとり出して氷面にアイスハーケンを打ちこんだ。

両手の指先を使つて登らねばならぬ程、急傾斜の溝の氷壁に、先頭のベーレンがとりかゝるのを確保するためである。僅か十五米ばかりの長さのその壁に半時間も費して、岩のリップの最初の硬い岩角をつかんだ時、ベーレンは下のわれわれに顔をむけ、さも嬉しそうに、

『濟んだよ(フェルティック)』

と叫んだ。

そして兩肢を格好の岩角につゝばりザイルをたぐつた。

先頭が安全地帯にたどりついたので私の身内にも一度に安全感が湧いて出た。

一つ一つの足場に無限の愛着を感じながら、私は下は断崖でかくされている氷の急斜面に足をはこぼせた。

最後のおゝいかぶさるような溝の壁でも、氷に刻まれた内側の凹んだ手がゝりを思う存分味いながら楽しくよじ登つた。

國境線に顔を出した時、前方には明るいヴェラの雪原がひろびろと展がっていた。

それからまもなく、東峰（四一四八米）の頂に立つた。午後一時。ヤング尾根に私達は七時間費したわけである。

ヴェラ氷河からブライトホルン峠を越し、いつかの春、藤島さんと兄と一緒にスキーで登ったことのある、ブライトホルンの圓やかな、優しい南面の姿になぐさめられながら、テオドール峠への廣い雪原に疲れた足をひきづつた。

（一九五〇年十一月）

冬のペテガリ岳

早稲田大學體育會山岳部

戦後の混乱からやつと我を取戻した私達が考へた事は學業よりも何よりも山岳部の再建と抑壓されてゐた山への憧れを實現しようとする事だけであつた。こんな思ひを一途に抱いてゐた私達二三人の上級部員は、若い部員達の不安と危惧を押しつけて極地法訓練の着手にとりかかつた。その第一歩として行はれたのが昭和廿二年三月北尾根を経て前穂高岳への計畫である。

僅か十人足らずの人員で三つの幕營を設けて前穂高の頂きに立ち得た我々は、「もう之で早稲田の山岳部も大丈夫だ。此機會に何等かの飛躍をしなければ」等と肩を叩きあつて喜んだが、此處に何か根底を缺いた誤算が胚胎してゐた様な氣がする。

成程當時の學校山岳部としては回復が速く業績も相當なものであつたかも知れないが、夫は現實に部の實力が

向上したから出來たのではなくて、戦前から持つてゐた早稲田大學山岳部としての大きな質量に起因する慣性の現れに過ぎなかつた。之は此頃考へて氣付いた事であるが、眼前の事にのみ追はれた當時は「何か大きな事をやらう。」「兎も角前進しなくては」と云つた調子の我武者羅な功名心に驅られて、とてもそんな反省等は及びもつかなかつた様である。

斯うして一途に飛躍を望むだ先輩達と眼前の成功に氣を良くした現役部員達の夢が結實して、北海道ペテガリ岳遠征計畫と云ふものが出來上つて來たのである。

元來ペテガリ遠征の計畫は昭和十六年第二次冠帽峰遠征の直前にも一度あつた事で、北尾根以來戦前の宿題を解決して行くと云ふ事が暗黙の内に皆の心持にもあつたので、誰が云ひ出したと云ふ事もなくすら、決つてし

まつた。もう一つは日本列島に閉じ込められてしまった我々にとつて、海を渡つて山へ登ると云ふ事が無邪氣な魅力になつてゐた事も疑へない。

我々が考へてゐた當時の遠征目的の一つとして次の様な事が擧げられてゐる。

「永い年月、黙々として習練を重ねて来た早稻田の極地法登山は、まだ多くの未解決の問題を残してゐるが、日本の山岳に於ける登山法としては一應の結論を得るに到つた。然し戦争によつて與へられた空白は實に大きく我々は凡ゆる手段を講じて之を急速に埋めなければならぬ。我々はその爲にパテガリ岳遠征云々……」。私達は誰一人として此言葉を不思議に思つたり、疑がつたりする者は無く皆がその實現に努めてゐたのであるが、今讀み直して見ると何んとなく腑に落ちない。説明が一行抜けた様な文句である。戦時中の空白とは何か、例年極地法登山をやつて来たのが抜けてしまつた丈の事なのか、人間の訓練が出来ずに山岳部が弱體化してしまつた事なのか、私達は何うもこの空白の定義をはつきり決めない

で事を運び過ぎたやうだ。現役部員の感ずる空白と、先輩達の考へる空白とは自ら異なるものがある。此の種類の違ふ空白を識別し得ないで、いきなりパテガリ岳遠征に持つて来てしまつた處に此計畫の目に見えない粗漏れと困難さがひそむ事になつてしまつた。

然し之迄述べた事は最近に到つて氣付いた云はゞ結果論である。當時は誰一人としてこんな事を考へる者は居なかつたのである。善意を以て行動し而も知らずして犯す間違ひの弊は、意識され豫想される間違ひの場合よりも遙かにその補正が困難である。夫丈に内在せる矛盾を意識せずにデッチ上げたパテガリ岳遠征と云ふものは、その計畫から行動に到る間實に多くの無駄と不手際さを残して来たと云へよう。然し、その無駄と失敗を乗り越えて得たものは何か。報告としては稍々機を失した感があるが、三年後の現在、早大山岳部の推移を考へ併せ、再び思ひを新にしてパテガリ岳遠征を振り返り、冷靜な報告を記すのも意義がない譯ではない。

遠征計畫

昭和廿二年の四月頃の先輩達の會合の席上、來年は一つ北海道邊へ出掛けては何うかと云ふ事が話題に上り、元々ベテガリ遠征の腹案もあつた事なので大した議論もなく目標の山は決つてしまつた。然し昭和十八年一月に北大山岳部が國境主稜を南下して登つてしまつたので、昭和十六年頃に抱いてゐた所謂積雪期未登の山としての魅力は消えてしまつてゐたが、我々が持つてゐる極地法登山採用の意義が元々山へ登ると云ふ目的と、より大きな登山へのトレーニングとしての手段の二つを兼ねてゐる以上、交通不便な未知の土地であり、長い尾根を持つた山と云ふ事丈で充分であつた。

此計畫の主要點として、長い尾根に極地法を展開して安全確實な登山をすると云ふ事を考へた我々は、地圖を展いて殆ど瞬間的にベテガリ岳から東方に孤立する約卅軒許りの長い尾根に目をつけた。登る事のみを目的とす

る場合は、最も短期間に、最も容易に登り得る登路は何處にあるかと言ふ事を探す以上、綿密な偵察と検討が必要であるが、我々の場合には寧ろ逆で實に簡單明瞭であり、物足りなくさへあつた。

次に幕營豫定地の選定と隊の構成であるが、現役部員のみで計畫し行動して來た從來の例を破つて、先輩團と現役との協同體として此の計畫を行はうとした處に少々特殊な性格を持つてゐる。

從來常にヒマラヤ遠征を前提として行動し様としてゐた我々は、次々と年代が變つて卒業して行く學校山岳部の現役だけでは、到底その重荷に耐え得るものではない事に氣付いてゐたが、終戦後現役が弱體化したのを補ふ意味を含めて、今後は先輩現役一丸となつて目的遂行に當らうとした。六年間しかなかつた學校山岳部が、十五年に延びたと考へてもちつとも差支へない積りであつた。その試金石が此の遠征計畫である。

従つて大體の計畫、隊員豫定數が決ると資金調達、現地偵察、隊員詮衡等の執行機關として、廿二年八月稻門

山岳會を主體とし現役を含める遠征對策委員會なるものが卅數人の委員を以て結成された。

北海道 小島	出版部 渡邊	技術部 今灘 關村 根波			總務部 長島			責任分野並 責任者氏名
		係糧食	係備裝	係畫企	係務庶	係計會	係外渉	
山崎	山老原 山下、 近藤	桑島、 越智	灘波、 村木	近山笠鈴關 藤崎原木、 村藍宮吉今 木田川阪村	青木	井田、 海老原	灘山下、 折吉 阪井	係員氏名
一、現地に於ける全般 の調査、渉 外關係、資金、食糧 其他の幹 旋、輸送、保管	一、氷雪技術解説書、 報告書其他 の企畫、校正、出版 其他	一、必要品種並に數量 の調査指導 一、地理的並に時期的 緩急度の狀 況調査	一、團體並に個人裝備、 器具及び 燃料等の調査研究 一、新調、修理の調査 並に指導	一、遠征計畫の檢討 一、文獻的研究 一、準備訓練の指導 一、隊員適格者の資格 審査 一、隊員候補者の豫選	一、文書記錄の整理 保管 一、庶務事項の處理 一、輸送狀況調査	一、豫算の審議に關する 件 一、資金獲得運動計畫 に關する件 一、出納事務 一、決算に關する件	一、遠征の意義並に目的 の徹底 一、先輩、校友、新聞社、 現地に 對する連絡並に宣傳	任 務
函館新聞社札幌支社に置く						一、山岳部の準備委員會と 十分に連絡をとつて促進 する。 一、すべての連絡は本部に 於てとる。	備 考	

その内容は大體右に掲げた如く老大なものであつたが總花的な内容は不馴れも手傳つて仲々足並が揃はなかつた。然し一部の人々の強力な推進によつて、資金面も朝日新聞並に學校當局校友の御援助によつて大體見通しがつき隊員詮衡の段取りとなつた。前述の目的から隊の構成は先輩五名、現役十名を原則としてゐたが、その間、先輩候補者の個人的な理由或ひは山岳部の主體性を云々する現役側の申し入れ等によつて、種々の變更が餘儀なくされ、十一月末にやうやく左の如き隊員の最終決定がなされた。

監督 小島六郎 (O・B)

第一隊 野田三郎 秋田實 碓井弘

第二隊 金子實 高橋和夫 鳴原啓佐

第三隊 村木庸益 (O・B) 關口敏 淺山貞夫

第四隊 山形明司 野村英次郎 山本雅之助

第五隊 藍田務 (O・B、隊長) 横川通 小峰和夫

現役の無氣力を激勵する先輩の性急さと、先輩の援助を部に對す壓迫と感じて反撥する現役の氣持がこんがら

がつて、今考へれば苦笑を禁じ得ない様な論争が幾度か繰返へされて來たが、之も脱皮する一つの前提としては止むを得ないものであつたと思ふ。

十一月初旬、野田、横川の二名が北海道へ渡り、現地尾田村との交渉、寄附金の調達等の任務を果して歸り、一應現地の事情、日高の山々の特徴等に關する資料も集つて來た。長い間の于餘曲折を経て我々の計畫もやつと出發點迄到達した譯である。

先發隊及び本隊の行動豫定及び幕營地の配分豫定は次の通りである。

一、第一先發隊 (金子、横川) 十二月二日、横濱より

水川丸にて器材その他大部分の荷物を運ぶ (重量

約七〇〇斤)。

一、第二先發隊 (山形、野村、小峰) 十二月九日、汽車便にて食糧燃料を運ぶ。

食料の大部分は現地支辨とした爲、第二先發隊は食糧買付けの任務を持つ。

一、藍田以下本隊全員は十二月十九日、東京出發。

一、第一登攀隊は一月五日頃ペテガリ岳登頂、第二登攀隊は状況により中ノ岳迄行く豫定。

一、設営天幕と荷上豫定量

EC 東尾根末端、軍用天幕（廿八用）一

八人用ウインパー 一

CI 八人用天幕 一、荷上量、二五〇貫

CH 八人用天幕 二、" 一八〇貫

CHH 八人用天幕 一、" 一〇〇貫

六人用天幕 一、" 一〇〇貫

CIV 四人用天幕 二、" 三〇貫

設営豫定地は概念圖の如くである。我々は北大OBの林和夫氏の話聞いたたり、現地の人々營林署等に問ひ合せて見たが、此の尾根に關する資料は殆ど得られなかつたので一應地圖を信用し、從來の經驗から割出した距離と時間の觀念から以上のやうな四つの幕營地を豫定した譯である。

※

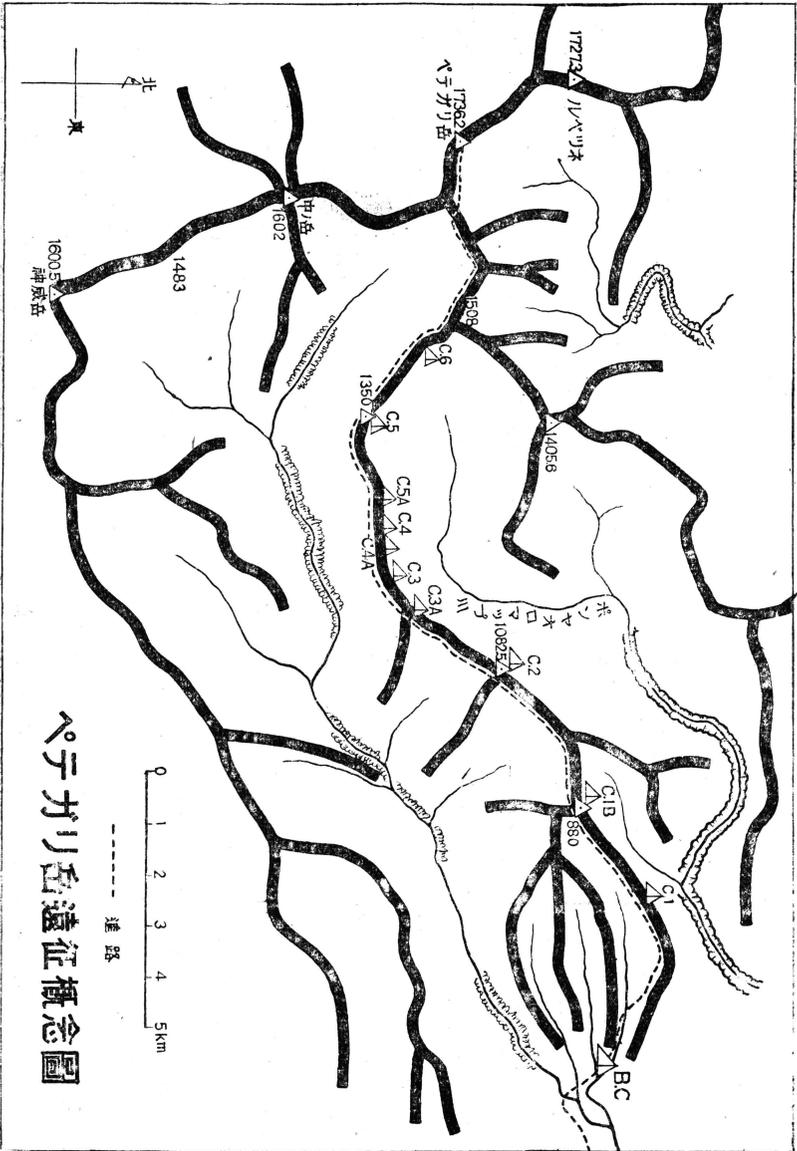
※

先發隊五名の後を追つて十二月十九日上野を出發した我々は、一日たつた一本しかない青森行列車に乗ると云ふ事からして難事業であつた。荷物と人間に押しつぶされさうになりながら一夜を過し、盛岡を過ぎてほととずる間もなく、所謂安全運轉と稱する青森管區の國鐵ストに出會つて何時、何處で列車が停るかも知れないと云ふ不安におびやかされ乍ら、やつと十二月廿日午後十時青森に着く。

體より大きい様なリュックサックを背負ひ、燃料の罐を手手にガラガラぶらさげた乞食行列の様な一行は、何うなる事かと案じた連絡船にも函館新聞大西氏の御骨折でやつと割込む事が出來た。皆、手首にDDT散布濟の證なるゴム印を押され、肉の檢印じやあるまいし等と聊か誇を傷つけられた様な氣になつてくさり乍らも、やうやく自分を取り戻し得た安心感から船の鈍い振動に身をよかせてまどろむのであつた。

十二月二十二日

青森迄廿四時間、函館から又廿三時間、永い汽車の旅



ヘテログリプス遠征概念図

もやうやく終りをつけて午前十一時帯廣へ着く。十勝平原の中心に在る如何にも植民地臭い廣々とした街には、乾いた雪が薄すりと積り馬櫓が鈴を鳴らしながら往來して一寸感慨をそゝる。大樹行きの列車を待つてゐると早速放送局の連絡員に乗り込まれてあれこれ質問されたが、そんな事に不馴れな私達はへどもどして翌日藍田隊長が来るからと云つてはうはうの體で逃げ出した。我々のペテガリ遠征は北邊でも話題になつてゐるらしく、車中見知らぬ人々に話し掛けられて顔の赤くなる様な事もちよい／＼あるので閉口する。午後五時半大櫓着、西川氏が迎ひに出て居られる。心配してゐた器具類も先發隊の努力によつて大部分到着してゐるので、直ちに馬櫓三臺に積んで尾田村へ向ふ。スキー靴の下にキュツキュツと鳴る雪を踏みしめ、皓々たる月をあふぎ乍ら、良くも此處迄たどりついたものだ。と八月以來の皆の苦勞を思ひ出して涙ぐましい氣持にさへなるのであつた。

雪の曠野の中にどこまでも／＼續く眞直ぐな國道を歩いて九時前尾田着、但し目的の山は何處にあるのかさつ

ぱり見當が着かない有様だ。尾田村へ着くと早速佐藤郵便局長の御宅で我々の歡迎會をして下さる。始めて口にする澱粉の濁酒に蕩然として未知の土地に對する不安も幾分薄らぎ、千鳥足で驪遞に歸つて來るともう十二時過ぎであつた。

十二月二十三日

センベイ蒲團の寒さに耐へかねて飛び起きると、窓にびつしり着いた氷の結晶を透かして空の青さが美しい。旅の疲れが出て少し寝坊したが愚圖愚圖しては居られない。全員直ちに器具の整理にとりかゝり、村木、山形、高橋はBC豫定地の偵察に出掛ける。東京で計畫した當時からの頭痛の種であつた、中ノ川渡渉の問題もBC附近は充分凍結して馬櫓の儘渡れる事が確められて一安心する。夜、藍田隊長と關口が到着し、小島監督を除く全員が始めて顔を揃へる事が出來た。

十二月二十四日

相變らずの晴天にすつかり氣を良くする。五臺の馬櫓に約一廻半の器具食糧を満載して九時半尾田を出發、室

蘭に荷上げした行動中の朝晝の主食である乾パンが未だ着かないのが氣掛りだが、何時迄も待てないので着き次第連絡する事にして出掛けたが之が大變な障害になつてしまつた。

ハイソック一つの身軽さで櫓の後になり先になりしてスキーを滑らせて行く我々の前に、遙かに見える日高の連山は前途の容易ならぬものを思はせ、闘志を掻き立てるが、遠征と云ふ大袈裟な名前の爲か、何か心に重くのしかゝつて無邪氣になれないものがある。

馬櫓は中ノ川と中ノ澤合流點の山之神の手前迄入つたが、其處から奥へ行けないので全員で背負つてBC迄運ぶ。BC幕營地も製材飯場の一丁程奥に決める内、忽ち陽が落ちて寒氣はひし／＼と身にせまり、これからBC建設だと思ふと一寸がっかりしたが、誰も弱音を上げる者もなく月光の下に黙々として雪を掘り、踏み固めて始めて廿八斤の大天幕を張る。

十二月二十五日

東京出發以來、常に何物かに追ひかけられる様な氣持

ちでその日その日を過して來たが、此處にBCを建設し終へると又一層前途の見通しのつかない不安と焦蹶感にとりつかれてしまふ。未だ炊事が馴れないので朝食はすつかり遅くなつてしまふが大半のものはBCの整備に一日を費し、藍田、村木、野田の三人は登路の偵察に出掛ける。

中ノ澤は幅約三米位の處もある狭い谷だが、落差が小さくて通路としては通り易く、積雪の状態から云つても雪崩の心配は先づない様だ。一籽半ばかり溯行、適當な處から尾根にとりつき、スキーを脱いでプッシュの生えた急斜面をかき登ると稜線は案外幅が廣い。三時間半許りラッセルを續け、五七三米峯から引返す。

十二月二十六日

二隊日記

朝四時半、高橋が金子、鳴原を起した。今日は二隊が炊事當番だ。ストーヴに火をつけて、飯場へ飯炊きに行く。外はしんと寒く、鼻毛が凍つて鼻くそがたまつたやうな感じだ。「甘度位かな」そう云ひ乍ら、神武天皇の様なオーヴァー・シューズをはいた三人が大鍋、小

鍋を提げて雪明りの澤を歩いて行く。どう見ても二十世紀の姿ぢやない。辨當、朝食と二回飯を炊くと、もう八時だ。夫を持つて外へ出ると寒い譯だ、飯場の寒暖計は零下廿八度を示してゐる。

豫定した晝食用の乾パンは未だ着かない。やむを得ず少し持つて来た乾パンは上の幕營地へ行つてから使用する事とし、當分は飯で代用する事になつたが十五人の食事を二度炊くのは夏と違つて大事だ。出發が遅くなつていらいらするが誰を叱る譯にも行かない。

前日の偵察により相當のラッセルを要求され、ブッシュのひどい事も豫想されるので、一隊を道付けとして先行させ、他の者は全員七貫程の荷を背負て登るがラッセルはあまり抄らず、五七三米峰の一つ先のピークを中繼地として荷物を置いて引返す。

十二月二十七日

今朝は相當寒い。相變らず炊事の都合で出發は遅く十時頃になつてしまふが、寒暖計は零下廿五度を示してゐる。昨日の中繼地から先も豫想外に積雪が深く、ブッシ

ュもひどいので豫定を變更し八八〇米峰直下にCI（第一キャンプ）建設、八人用ウィンパー天幕一張を張つて第三隊が入る。

十二月二十八日

昨日の夕方から温度が上つて雲の様な濕雪が降り出しBCは支柱が積雪のために折れてしまつて夜中に大騒動をやる。CIは停滯、BCは全員荷上げにCI往復、第二隊もCIに入る。

今回の隊編成は前記した通りであるが、行動豫定と各隊の任務について記して置く。

極地法登山に於ける登攀隊の決定と云ふものは、最前進キャンプが設定された時に最良のコンディションにある隊を以てする事が原則であるが、一應豫想され得る隊を決めて、その隊が最良の状態で最前進キャンプに入れる様な態勢を作つてやる事も一つの手段である。

我々が従來行つて来た數回の實驗に於ても、學校山岳部と云ふ一つの羈絆に縛られてゐた爲もあらうが、常にこの豫定された登攀隊と云ふものをはつきり決めた計畫

を行つて來た。

この方法の善惡に就て既に關根氏がルックサク十號『冠帽峰の思ひ出』に於ても論じて居られるが、現在の我々の計畫の程度では如何ともし難いものがある様だ。

今回も一應體力のすぐれた者、將來部を背負つて行つてもらうべき者と云ふ規準によつて第一登攀隊を決め、更
に中ノ岳を目標にして第二登攀隊を作つた。之はペテガ
リ岳のみを目標にしてその補助として第二登攀隊を豫定
してゐたのではない處に從來と稍々違つた點を見出す。

之は昭和十八年横尾々根の計畫の際から試みられた問題
であるが、從來の最前進キャンプが比較的弱體な物であ
つて二、三日惡天候が続くと登攀の機會を失する危険性

を持つてゐたのに對し、一應登攀態勢が整へば數日間吹
雪いてもその儘頑張つてゐられる様な最前進キャンプを
持つて見やうと考へた結果である。當然どうする事によ
つて日本の三千米級の山では力が餘つて來る。その餘つ
た力の表現として第二登攀隊を作り、第一隊と一緒に最
前進キャンプに入れ行動の變化を求めた譯である。

然し今回の目的は飽く迄もペテガリ岳であり、中ノ岳

は若し出來ればと云ふ條件が入つてゐた事は勿論であり
隊の運行計畫の上でも、二隊は支援隊として相當酷使す
る事になつてしまつた。元來隊の構成人員から見ても四隊
五隊は、前進根據地として豫定したCII以上ではそんなに
機動力を期待出來ないので純然たる補給隊として豫定し
幕營の推進は専ら三隊が當り、CII以上では一、二、三隊
のみで前進し登攀隊同様強力な三隊の支援によつて登攀
態勢を作る事、CII以上では隊長との連絡が圓滑に採り得
ない懼れがあるので其處から先は三隊村木の判斷によつ
て處置する事、等が出發前から藍田隊長と村木との間で
腹案として考へられてゐた。

従つて大體二、三隊が協力して幕營を進めて行く事に
なる譯である。

十二月二十九日

昨日の停滯を取戻さうと、小雪のちらつく中を二隊、
三隊は山程背負込んで出發する。八八〇米峰の急斜面は
胸迄もぐるラッセルに惱まされて、重荷を負つた三隊の

道つけは抄らず、八八〇米峰の頂上に着いたのは午後五時過ぎになつてゐた。止むを得ず此處に八人用天幕を張つて三隊が入り、CIIとの中繼地としてCIBと假稱した。

四五隊はCI荷上げ往復、隊長のみ三隊と連絡の爲、CIに入る。

十二月三十日

八八〇米峰から主稜が急に瘦せて落ち込んでゐるので三隊はちよつと間違へて中ノ川寄りの尾根を行つてしまつた。目標の一〇八二米峰へ続く稜線はなく目の下に中ノ川の河原が見えるのに氣付いて引返す。遅れた爲八六六米峰迄しか行けず、荷上げて來た二隊も其處に荷物置いて歸る。五隊はCIに入り、一、四隊CI往復。

夜はCIBに泊つた藍田隊長を中心にして計畫變更の相談をする。現在の状態を考へて運行表を書き直して見ると一月五日の登頂は絶対に不可能な事が分る。尙このラッセルの様子では豫定通り幕營を進める事はむづかしいので、適當に中繼キャンプを設け不必要になつたら撤収する方針に變更した。

十二月三十一日

三隊はCII迄のラッセルに出かける。八六六米峰から先は尾根がすつかり瘦せ、その上、倒木とブッシュに惱まされて、その積りで荷物も四貫目程度に少くして來たのにさつぱり進めない。やつと一〇八二米峰の直下に到ると甘米許りの急斜面に出合ひ、その上日も暮れかゝつて來たので固定綱だけつけ荷物を置いて引返す。五隊はCIBに入り、二隊はCIより八六六米峰往復荷上げを行ふ。

昭和廿三年一月一日

我々には大晦日も元日もない。今日こそはCIIを建設して見せるぞと勢こんで起きて見ると、外はしんくくと雪が降つてゐるので腐り切つて又寢袋にもぐり込んでしまふ。一〇八二米峰の登りに繩梯子を付けることに決め横川にBC迄とりに下つてもらひ、他の者は全員休養、東京の正月風景など思ひ出して何となく苛立たしい一日であつた。

一月二日

曇、未だ雪がちら／＼と舞ひ、少し風がある。昨日の

雪も薄く積つてゐる程度で大した事はない。三隊はCII建設、二隊はCIから直接CIIに向ふ。一昨日のラッセルで送は大部涉つたが、例の急斜面で荷物の吊上げをやつたりして時間をとり、日が暮れてからCIIに八人用天幕を張つて、二、三隊が入る。四隊はCIに入る。

一月三日

二隊日記

CIB 撤收のためCIIより下る。CIBで久振りで四隊に逢ふ。別れて六日目、お互にお目度うを交はす。すでに疊んであつた八人用ウインパーは凍つてリュックに入らないので、金子がザイルで背負つたが、バランスが悪い、木にかゝる。八六六米からたうたう泣き出した。暮れかゝる道をふら／＼と歩き乍ら「俺は泣くぞ」と云ふ金子の聲を聞いて、あとの二人も共に泣きたい氣持だ。何だかとても暗い夜だつた。

三隊日記

風は強いが空は美しく晴れてゐる。CIIから先の偵察に出かける。一〇八二米峯を下つて地圖上の一〇二〇米の

ピークに登つて行くと何うしても一〇八二より高い一〇〇米位はある様だ。タンネの密生した急斜面を這ひ登ると頂上は美しい白樺の疎林をつけたドームで、西日にキラ／＼と映える雪煙と白樺のクリーム色の肌とのとり合せが何んとも云へない。八六六米峯邊り迄は營林署の人達が入つた事がある様だが、一〇八二米峰から先は全く人跡未踏らしいので始めて來たのは俺達だとばかりすつかりうれしくなつて「白樺の丘」と命名する。處が頂上へ上つて驚いた。眞白な日高國境山脈と、右に左にいやにく／＼と曲つて然も鋸の齒の様に凹凸の激しい。ペテガリ東尾根が延々と續いてゐるではないか。

我々はかじかんだ手に乾パンを握つた儘、「長いなあ！」とつく／＼と歎聲を洩らしてしまふのであつた。

この日五隊もCIIに入り、更に六人用天幕を張り、一〇八二米峯登りの急斜面に繩梯子をかける。

夜、藍田隊長を圍んで三隊の偵察の結果を基にして再度の計畫變更を行ふ。二隊鳴原はCII建設の際、足指を軽い凍傷にやられてから身體の調子が悪いので五隊へ編入

する事になる。

一月四日

曇、風相當強し。二隊のサポートで三隊はCIII建設に向ふ。此邊から地圖と實際の地形との相違が甚しく、昨日我々が白樺の丘と名付けた地點から一一二九米峯迄の稜線はぐつと南下し、小さな起伏が波の様に續く瘠尾根だ。相變らずのラッセルと益々ひどいブッシュに悩まされ乍ら白樺の丘を下りる。當初のCIII豫定地は一日で行ける處ではない事が分つたので、CIIIとして尾根の途中の小さなピークに四人用天幕を張る。

一、四隊もCIに上り、始めて前進根據地より上に全員が集結する事が出来た。

一月五日

昨夜來風は相當強く、朝になると雪さへ降り出して來る。三隊はCIIIA九時出發、小さな起伏のある瘠尾根は一向に抄らす午后になると益々天候が悪化して來たので引返さうとすると、CIIを出發した一、二隊の連中が追ひついて來た。止むなくCIIIAから二つ目のピークにCIIIを張つて二

三隊が入り、一隊はCIIIAに引返して泊り、明日CIIIAを撤收し
てもらふ事にする。

四、五隊はCI往復荷上げ。

一月六日

吹雪、風速約廿米。タンネの梢は囂々と音を立て續けてゐる。皆顔を見合してゐるが先の見透しはつかず休養もしてゐられない。外に出て荷物の整理をしてゐるとを撤收して一隊がやつて來たので、二、三隊が支援隊となつてCIV建設に向ふ。地圖上では一一二九米峯に直接續いてゐる筈の尾根が、CIIIから一寸先のピークから南折して延び更に西折して一一二九米峯に取付く點から約三百米も切れこんでゐる。豫定地點迄はとも一日では行けそうにないので、再び豫定變更して一一二九米峯直下の稜線に今日撤收したの四人用天幕を張つてとし一隊が入る。二、三隊は猛烈な吹雪の中を消えかけるラッセルを辿りながらCIIIに歸つて來ると、四、五隊の連中により下から食糧が揚つて來てゐた。よく探すと罐の中には小島監督御心盡しの煙草さへ入つてゐる。すつかり氣を

良くして外吹く風もなんのそのと久振りに駄辯つて夜の更けるのを忘れる。

一月七日

昨日からの吹雪は益々募るばかりだ。各隊停滞。

三隊日記

食事も節約して一食とし、一日寝袋の中でもぢくしてゐる。今日は気温もだいぶ下つて(零下十六度)テントの中は水分が眞白に凍りつき、まるで冷蔵庫の中にある様だ。天幕を持ち上げるやうな強風に顔を見合せ乍ら頻りにCIVAの連中が心配になる。

一月八日

曇、昨日の吹雪で折角つけたラッセルもすっかり消えてしまひガツカリする。村木、淺山は天幕整備に残り、金子等三人がCIVAに食糧の荷上げに出かける。一隊も今日は張切つて偵察に出かけてゐるらしい。午後二時半、CIIから四、五隊の連中が荷上げに上つて来るが、山形のみ今後の打合せの爲CIIIに残つてもらふ。

夜、暗い蠟燭の灯影の下で村木を中心にして再び計畫

の再検討が行はれた。食糧は最大限一週間しか保たない。夫を投じて登攀に全力を盡し撤収用食糧は更に下から補給しなければならぬ様だ。鉛筆のなぐり書きで何通りかの計畫表が作られた擧句、今後CIV建設迄は天幕節約と機動性を増す非常策として二隊金子、高橋を分けて、一三隊に合し四人宛の二隊組織で幕営推進を行ふ事に決定。CIV以上のサポートは四、五隊の組織を解いて山形、野村、横川の三人にやつてもらひ、藍田隊長は鳴原他三名を連れて食糧の補給に當つてもらへないかと云ふ意味の事を手紙に書いて連絡する。然し未だ此時は中ノ岳登頂の望みは棄てゝるなかつた。

一月九日

晴、風は相當強く一一二九米から上の稜線は美しい雪煙を擧げてゐる。昨日の豫定通り二隊の高橋と三隊で建設に向ひ、山形、金子がCIVA迄サポートして呉れる。

への稜線を下り乍ら並木の様な白樺の巨木の間から神威、中ノ岳等の國境稜線が幻の様に浮んでゐるが未だ憧れのペテガリ岳は見えない。

CIVA

から先は一隊のつけて呉れたラッセルを傳つてモリ
モリ高度を増し、途中固定綱をつけた悪場も難なく乗越
し一二九米峯の廣い雪の斜面に立つて上を眺めると、
逆光線を浴びて一隊の三人が飛ぶ様にして降りて来る。

「ペテガリは見えたか」と聞くと「未だ」と云ふ。一寸がっ
かりするがやうやく計畫も最終段階に入つて来た様だ。

四時半一二九米峯上に四人用天幕を張り始めてW旗を
白樺の枝につけて見る。

四隊はCHよりBCに食糧を採りに下り五隊はCIIに入る。

一月十日

南西の風が強いと、何うも餘り天氣が良くないやうだ。
案に違はず起きて見るとガスが捲き小雪もちらついでゐ
る。CIVから次のピーク迄五、六百米の距離が一寸悪く中
ノ川とボンヤオロマツ川マツの兩側に切れた瘠尾根は巾一
尺位の處もあり、物凄い雪庇が波頭のように續いてゐる。
淺山と高橋がアンザイレンしてラッセル、關口はブッシ
ュ切り、村木はシャベルで道付け、と役割を決めて進む。
途中、高橋が雪庇を踏み抜いたりしたがブッシェが多い

ので氣分的には樂で唯頑張る丈だ。然しこの僅かな區間
を乗切るのに大方一日を費してしまひ、一隊の連中が追
ひついて来たので瘠尾根の雪を削つてCVAを張り、三隊は
暮れかゝる途を急ぎCIVに歸る。

一月十一日

吹雪、相變らずの悪天候を恨みつゝ天幕から顔を出す。
しかしCVAに食糧を補給してやらねばならぬのでいやく
出かけて行く。一隊も一寸上の偵察に出て二時間程引返
す。下へ食糧をとりに行つた四、五隊も夫々CII CIIIに入る。

一月十二日

風はおさまつたが、ガスが捲いて視野は全く利かず時
時雪がばらついてゐる。下からの連絡は未だつかない。
未だ見えぬペテガリと、しとく降る雪と食糧不足は我
我の心に暗い影を投げ絶望に叩き入れやうとした。しか
し今や登頂の成否はこゝ數日の頑張りにかゝつてゐる。
三隊日記

天氣は泣きそうだ。もう上げるものではなく、食糧の補
給をまつ丈だ。うかつに動けない状態である。朝は鹽水

の實なし雑炊、夕はすいとん少々、皆黙つてゐる。

始めに記したが、室蘭に荷上げた乾パンは到々間に合はず今日迄過ぎてしまつた。あの乾パンがありさへしたらと誰も考へるがもう絶望だ。寧ろ尾田村の人達の好意でゆづつてもらつた澱粉やソバ粉がある事を感じすべきだらう。御かげで我々も澱粉團子やソバ粉と澱粉混合のすいとんの作り方も上手になつて來たが、その澱粉、ソバ粉さへ足りなくなつて來たのだ。

一月十三日

晴、久し振りの太陽を見つめながらも動きがとれない。

CIVでは全員がいら／＼してゐると、十一時半 CIVI 五隊の連中が上つて來る。風もなく、しんと静まりかへつた天幕の外にサク／＼と云ふ足音を聞きつけて飛び出した我々の前に、藍田隊長以下六人の連中が並んで互の無事を喜びあふ。しかし食糧は後三、四日中に登攀を完了しなければならぬ程切迫してゐるので、時間は少し遅かつたが三隊は CIV 建設に出發、もふ撤收迄は四、五隊の人達には合へないのだと思ふと聊か感傷的な氣分に

なつて別れの握手もそこ／＼に走る様にして出かける。折からの晴天と一隊のつけて呉れたラッセルに道も捗り一氣に一三五〇米峯に CV を設營する。

一隊日記

素晴しく晴れて昨日 CIV に「食糧がこないやうだつたら明日は動かぬぞ」と叫んだ處、「俺達もそうするぞ！」と返答があつたが何しろ非常によい天氣なので偵察旁々出掛ける事にした。ヴィーナスの丘とでも名付けたいやうな美しいピークに、新しい足跡をつけ振り返る氣持よさ、それに足頸迄しか埋れないで快適に歩きつゞけた。丁度一三五〇米峯直下の雪庇を落して上に出たとたん、待ちに待つたペテガリの雄姿が眼前に聳え、たちまち今迄の憂鬱な氣持ちは消しとんでしまつた。毎日毎日、食糧がないとか、まだ地圖のこんな所だ、とか云つていささか弱氣の虫にとりつかれてゐたやうだつたが、今日ですつかりそんな事はどこへやら、新しくファイトが盛りヒつて來た。

今日、動かないと思つてゐた三隊に歸る途中であひ、

確實に今日CVが建設されることになった。

尙、撤收時の食糧補給の爲とCVから上の支援を強力にする爲、四、五隊は編成を解き、山形、横川、野村がCIVに入り、隊長藍田は二年部員三人を連れてBCに食糧をとり降りて行つた。

一月十四日

三隊日記

濃いガスの中をCVI建設に出發する。天候はどうも見込はないが、食糧はギリ／＼で一日の無駄も出来なくなつてゐるのだ。稜線は右ボンヤロマップ川側に凄く切れ、數米の雪庇を出し、左は中ノ川に稍ゆるく下方で切れてゐる白樺の瘠尾根である。午后から本格的に天候が崩れ風さへ強くなつて來た。見透しも利かないので時間の許す限り行ける處迄と思つて進み、午后三時、急斜面の降りがペテガリ岳の側に續く一五〇八米の一つ手前のピークと思はれる頂にCVIを建設し一、二隊と固い握手をしてCVに歸る。

歸りぎはに、二隊に中ノ岳登頂を中止し、ペテガリ岳

へ行く一隊のサポートに専念する様話す。かう追ひつめられて來ると二兎を追ふ事は全く不可能だ。

一月十五日

前夜からの吹雪でCVもCVIもすつかり積雪に埋められてしまふ。

二隊日記

六時半、しびれ切つた高橋が外へ出た。温度は相當高く靴もそんなに凍つてゐなかつたが、靴をはくのの一時間もかゝつた。でもガスに包まれたヤロマップの方から時々嵐の名残りの如き風が吹き通る。テントをすつかり掘りだして、新しく踏み堅めた雪の上に張替へを終つたら既に九時半だ。でも、すつかり新しく張られたテントに落着くと、昨夜のことは夢のやうだ。晝から明日の行程を考へて二隊が偵察に出る。この頃からまた險悪な空からは雪が舞ひ、風が吹きだした。胸までのラッセルに約二時間も進んだが、地圖上約二百米位先のピーク迄も行けぬ。がつかりして歸らうとすれば、往きの踏跡は既に消えてゐる。そしてテントに着いたらもう暗くなつ

てしまつた。一隊に嘘もつけず殆ど絶望に近い氣持がみなぎる。でも明日は是非行つてもらはふ。もう食糧もないのだ。

一月十六日

二隊日記

二時、風は大分弱つて静かになつたやうだ。ラジウスをかこんで二人で炊事を始める。既に一週間近くも食べない米が登攀隊のために炊かれる。四時に登攀隊を起して食事をさせ出發の準備にかゝる。

一隊日記

六時半 CVI より「ペテガリへ」の第一步を踏出した。ガスに包まれて視界は效かず、雪は止んでゐるが風は少し衰へた程度でまだノ、吹いてゐる。「よし行くぞ」「頑張つてくれ、登つたと云ふ聲を待つてゐるぞ」二隊と出發の握手を交し、ペテガリへと向ふ。二隊の歌ふ校歌が次第に遠ざかつてゆく。ヤオロマップ側は垂直に切れて雪疵が大きく出てゐる。小さなピークを越えると、岩と雪の入りまじつた状態だ。一步一步一五〇八米峯へ高度

は増して行く。時々晴れさうになるが、直ぐ元の状態になつてしまふ。一五〇八米に著くと非常に歩行が快適となつた。時々もぐる程度でそれも靴の半分くらいだ。三人顔を見合せ、「行けるぞ」と、につこり笑ふ。國境線の最後の登りを終つて國境線に立つと、正面に風をうけ横を向かなければ息がつけないくらゐだ。手も足も感じがない。白樺が稜線近く生えてゐる。いよ、くペテガリへの登りだ。ザイルをつける。トップ秋田、ミッテル碓井、ラスト野田の順で日高側から吹きつける風に抗しつゝ、一步一步頂上に立つ喜びを秘めて登つて行く。瞬息するたびに瞭がくつきさうになり、ピッケルを握る手、アイゼンをつけた足は感じがわからない。俯向きつゝコンティニウスで登高をつゞける。視界は依然として閉ざされ、實に残念だ。やがて傾斜がゆるくなり暫く登ると平地になつた。二歩、三歩、おう頂上だ。頂上は風の爲か少し岩が露出してゐるが殆ど雪に覆はれてゐる。時に一時廿分、三人は固く握手を交し喜びの數分を頂上にすごした。二十三日間にわたる辛苦はいま報ひられた。

各隊にも聞えよと許り、高らかに校歌を唱ひつゝ歸途につく。國境分岐でザイルを解き、登頂の報を待つCVIへと急ぐ。

CVI 着五時半。

撤 收

十四、十五日とまる二日間続いた猛吹雪は全行程を三尺近くの積雪で覆ひ、折角ついた途も再び猛烈なラッセルを要する状態となつた。此間、CVIの山形以下三人及びBCに下つた藍田隊長他三名の人は前進天幕に食糧を補給する爲、腰迄のラッセルを強ひられながら連日涙ぐましい努力を續けてゐた。

一月十七日

昨日迄の悪天候は忘れた様に晴れ上つてゐる。CVで待機してゐた三隊は、CVIを撤收して來た一、二隊と感激の握手を交はす。爲し残念乍ら喰ふ物が殆どない。その上、CVの天幕は吹雪に埋れ、凍りついてとてもルックザックに入らない。もう半日乾かせばと思ふが食糧もなく、

疲労困憊した現在一刻の餘裕も出来ない。残念だとは思つたが思ひ切つて放棄する事にし、空腹を抱へた八人はとぼ／＼と雪の斜面を下りて行く。パテガリも、もう見收めだと思ふが今はそんな感傷も湧かない。

四隊（山形、横川、野村）日記

晴、しかも全くの快晴だ。張切つて天幕を出る三人の影は長い。昨日迄あれ程もぐつた雪は今朝は嘘のやうに固い。しかしどうしたことが三人が三人とも體の調子が極度に悪い。頑張れ／＼、自分で自分を勵ましつゝ登りに登る。晝食も食えずにひたすら歩む。

三時半、遂に我々は雄大な日高連峯を背にして純白の雪の斜面を靜かに下つて來る八人の姿を認めた。「ヤッホー」を交す聲、そして刻一刻大きくなる影。

「登つたか」「登つたぞ!」

廿數日間の苦闘を物語る髭だらけの口の中からはとばしり出たその聲を聞いた時、我々の今までの苦勞も不安も焦躁もみんな空高く舞上つてしまつた。

その夜、CVIに更に四人用天幕を二つ張つて十一人が泊

る。

一月十八日

CIV の食糧もすつかり缺乏し、十一人に一握りづつの澱粉しか當らない。疲勞の爲すつかり寢坊した一行は、團

子の鹽汁をすゝり凍つた天幕を押し込んで出發しようとする

CIVA

の跡を過ぎる頃日がすつかり暮れてしまつた。幸な事に天氣は落ちついて星空も美しい。勵

し合ひ乍ら頑張り続け漸く辿りついて見ると、食糧が揚つてゐる筈の CIII は雪に埋つて静まりかへつてゐる。一時

は果然と途方に暮れたが、失望落膽の内にも氣をとり直すと、天幕を掘り出し、狭い天幕の中に十一人が轉りこんで、残つた燃料で僅かに暖をとり乍ら一夜を送つた。

BC に食糧を採りに下つた藍田隊長以下四人は、十六日から連日腰迄の積雪と闘ひ乍ら徹夜で頑張り続け、この日 CII に向ひつゝあつた。

一月十九日

山形、關口、金子、横川の四人は袋の中に僅かに残つ

た澱粉で腹ごしらへすると、CII に連絡に出かけ、他の者は空腹を抱へて寢て暮らす。白晝夢のやうな幻想に惱まされて誰も寢たのか、起きてゐるのか分らぬらしい。

山形等は今朝五時半やうやく CII に辿りついた藍田隊長に會ひ、夕方六時、鳴原等三人が食糧を持つて上つて來た。漸く蘇生の思ひをする。夕方、小島監督、他新聞記者三人許りが連絡の爲 CII に上つて來る。

一月廿日

快晴、午前中は風が相當強い。同時に、CII・CIII 撤收。山のやうな大リュックに空罐や鍋のガラクタをくくりつけ、フラ／＼しながら下りて行く。皆口は達者だが疲勞は豫想外にひどい。

CIII 撤收の者は八六六米峯を越える頃は月が皓々と輝き出す。疲勞の甚しい二年部員三名を CI に残し、最後の隊がフラ／＼になつて BC に辿り着いたのは翌日の午前四時頃であつた。

一月廿一日

昨日の夜中から吹き出した南風で氣温がすつかりゆる

んだと思ふと、朝から雨がしとく降り始める。北海道の山で真冬に雨が降るなど氣味が悪いやうだ。全員疲れ切つて一日中泥のやうに寝る。小島監督は連絡のため尾田へ下りて行かれ、山形、金子はCIIの繩梯子の撤收とCIに残つた連中に食糧を届ける爲、又雨の中を上つて行く。

一月廿二日

晴、藍田以下五人はBC整理に残り、他の者はCI撤收に上る。夕方から登頂成功のお祝にと御馳走して待つたが仲々歸つて來ない。心配してゐると野田が腰から下すぶ濡れになつて戻つて來て、昨日からの暖氣の爲川の氷がすつかり溶けてしまひ、朝は通れた澤の中が、全然駄目になつたとの事だ。村木、高橋、横川の三人は早速飛出し、山側にラッセルして新しく道をつけ、残りの者を迎へに行く。

途中木を切り倒して橋を掛けたりし乍ら、全員無事BCに歸りついたので十二時過ぎになつてしまつた。

一月廿三日

晴、また氣温が下つて氷が張つたが、何時中ノ川がゆ

るんで橋が通れなくなるか分らないので、早速BCを撤收する。一月の間我々の根據地として、登攀力の源泉となつて呉れた大天幕も撤收となれば容赦なく剝ぎとられてしまふ。凍りついてすつしりと重くなつた器具を四臺の馬桶に積込み、十二時出發尾田に向ふ。馬桶に揺られながら暮れかゝる日高の山々を眺める時、もう二度と見る事もあるまいと云ふ名残り惜しさと、自分としてやるだけの事はやつたと云ふ安心感が、泌々と湧起つて來るのであつた。

夜は尾田の方々の御好意で、久振りの風呂に垢を落し暖い蒲團にのび／＼と寝かせて戴く。

歸路

我々が山へ入つてゐる當時から食糧その他の事で一方ならぬ御面倒を掛けた尾田村は、都會に育つた私達には桃源境の様に思はれた。

深い雪に覆れた十勝の平原の眞只中に離れ島の様に在る數十個の家々は、お互に援け合ひ勵まし合つて生活し

今は暖いストーブの邊に集つて夏の勞働を休め靜かに冬を樂んでゐる様だ。私達もこの暖い人情につつまれて山の生活の疲れも忘れ有志の方々が催して下さつた歓迎會に臨めば、皆自慢で持つて來られる濁酒に蕩然として果は親不幸聲を擧げる始末だ。部落を擧げての歡待に今更別れにくくなつた我々も、廿五日は乾かした器具の荷造りをして尾田を出發、大樹を経て帶廣に向ふ。

此處で再び校友の催して下さる歡迎會、或ひは放送局の録音等、大した事をしたと思つてゐない我々には却つて苦痛でさへある様な義務が待つてゐる。然も山を下りて三日もすると、持ち續けて來た鬪志も氣魄も鈍りすべてを投げうつて自分の家へ歸り度くなる。

どんなに偉らさうに頑張つても之が人の子の本當の姿かも知れないなどと、帶廣の露天をひやかし乍らつくづくと寂しい氣がして來た。廿六日は校友の御宅に夫々分宿させて戴き、廿七日札幌を経て歸京、凍傷で歩行の不自由な山本、鳴原は、山形、高橋がついて一日先行する。

後書に代へて

私達が一つの報告書の終りに批判、反省めいたものを記す時、自分達のやつた事を、自ら批判檢討して果して正しいか何うか甚だ疑問であると云ふ様な意味の言葉を必ずつけてゐる。之は如何にも正しい言譯の様にも採れるが、大勢の觀衆の面前でブレイをしてその批判を承けられる程、山登りと云ふものは單純なものではない。結局當事者以外誰も事實ありの儘の状態を見てゐる譯ではないので、その當事者自身が素直な氣持ちで事實を報告し、更に嚴正な反省を自分に加へ、その反省を更に第三者の批判の節に掛けて見て始めて自分の物となつたのではないかと考へて來ると、寧ろ之は逃口上めいた響を持つて來る。

私達は徒らに第三者の批判を迎ぐ前に、自分自身のはつきりした立場を説明し、自ら一應納得の行く批判と反省を提出して置く必要がある様に思ふ。

此計畫が終り、春になつてから、先輩、現役が集り一應檢討會を催したり當時出版した「パテガリ岳遠征記」にも批判めいたものを記してゐるが、遠征の熱さめやらぬ我々には未だ本當の反省を爲し得る程の落ち着きは認められなかつた様だ。

その後三年、當時第一線に立つて活躍した人々は皆O Bとなり、最年少部員として参加した者も來年は卒業を控へて最後の山行を楽しんでゐる現在、やつと素直な氣持ちになつて總てを考へ直し見直す事が出來さうである。

云はゞ、當時私達が考へてゐた反省事項と云ふものを再批判して見ようと云ふ譯である。

この計畫の目的は前述した如く戦時中の空白を取戻すと云ふ事に重點が置かれてゐたのであるが、斯る計畫によつてその目的が達せられたか何うか、元來、この種類の空白による部の弱體化を補足するには二つの手段があると考へられる。

一つは現狀に應じた態勢で、基礎的事項を丹念にやり直して行く方法。

一つは強力な外部刺戟を與へ、飛躍した手段によつて引張り上げて行く方法。

我達は後者を選びパテガリ岳遠征を計畫した譯である。之は全般的に見て一應成功したと考へてゐるし、我々としては此の手段以外に自信も持てなかつたのであるが局部的には幾つかの禍根を残した様である。

此目的の爲に稻門山岳會、早稻田大學山岳部協同と云ふ銘を打つてはゐたが現役側のメンバーを以て大半を編成した爲、隊員の力量が揃はず特に未熟な部員が數名入る結果になつた。

小さな隊を以て行動してゐる時は夫程目立たなかつたが登頂直前、應急處置として、四隊、五隊の編成を解き強力な隊員をCIV以上に集中し、二年部員三名を藍田隊長にまかせてBCからの食糧輸送を行つた時その弊を暴露し遂に三十時間の絶食を強ひるやうな結果に陥ちてしまつた。當然、その前に計畫の杜撰による幕營地の増加、食糧計畫の齟齬等が檢討されるべきであらうが、自然を相手とする登山が計畫通り行く事が既に僥倖であるとすれ

ば、斯る危機に臨んでその様な弱點が存在すると云ふ事は全く致命的と考へてよからう。行動中に既に現はれた、この缺陷はその後の部の計畫に於ても後を絶たず、常に大計畫を行ふ際のリーダーの負擔となつて來た様であるがその説明は省略する。之は考へ方を代へて見れば、或ひは學校山岳部が行ふ極地法登山に伴ふ弊害と云へば云へるであらう。

今回の計畫に於て最も大きな障害となつたのは食糧の問題である。室蘭に荷上げた乾パンが遂に未着で、行動中の食糧が缺乏した爲、C、V以上の行動は殆んど晝食抜きとなつて隊員の活動力を著しく殺いでしまつた。然し之は止むを得ざる事としても、食糧補給を尾田に求めた

際、有能な隊員を何遍もBCから部落に派した爲、上方の輸送力を削限したり、小島氏を煩はしてBCに持つて來て戴いた食糧を、上へ補給しないでほつて置いた事等は種々の事情もあるにはあつたが、計画の見透しが甘過ぎた結果だと思ふ。CIIIから村木が計畫變更をCIIに傳へて登頂豫定を十二、十三日と決め、四隊が一月九日、BC迄食糧を取

りに下つたのであるが、此時何故、行動表通りの食糧しか上げなかつたか、當時の天候の状態から考へても五日連続の晴天と云ふものは考へられなかつたし、行動表を書く村木自身が大した確信も持つてゐなかつたのに、僅かな食糧しか上げず、四日後には再び四人の者が食糧をBCに取りに下つて、猛吹雪に遇ふ等と云ふ事は全く確信を缺いた無駄な行動であつた。斯る切迫した状況下に於て、延七人がCIIからBCを往復しなければならなかつたと云ふ事は、計畫の遅延に焦慮した全員が、「一日でも早く登れば良い。」と云ふ希望だけにすがつて冷靜な判断力を缺いてゐた爲で、之は行動表を書き直す者と見る者、總てに對して云へる事であらう。

之は幕營の進め方にも若干影響を及ぼしてゐた。少しでも先へ進み度いと云ふあせりに取付かれた爲に無暗に天幕を張り急ぎ、運行を複雑にし過ぎた嫌がある。CII以後は夫迄の状況に鑑みもつと腰を落着け、延びのある進め方が出來たと思ふ。例へばCIIA・CIVA等は此の例で一旦、途が付けば、一時間程で行ける處に張つてしまつたが當然

送付け丈で済まして置いた方がよかつた様である。

次に隊の構成に就ては先にも一寸觸れたが監督小島氏の役割と行動に明確を缺いてゐた様に思ふ。小島氏が北海道在任中であり、主として外部に對する面を受持つと云つた含みの下に全般的な指導監督の任に當つてもらつたのであるが、本來極地法登山に於て、隊長以外に更に監督と云ふ地位は不要なものである。今回は尾田村からの食糧買付け、新聞社との應接等、一方ならぬ御世話にはなつたが、之は凡ゆる場合に對處し得る食糧と器具を持つてBCを建設すべき原則を破つてしまつた我々の不手際によるものであつて、此點をはつきりさせてあればもつとすつきりした行動がとり得たと思ふ。

隊員相互の關係に於ては、極地法登山に馴れない者が相當多かつた爲、各隊が分れ分れになつて、みんな猛烈なアルバイトを要求されて來ると、自分だけが苦しい目にあつてゐると考へ勝ちで、頭の中では縁の下の力持ちの役割と理解してゐても、目の前に現はれて來る現實をどうする事も出來ず、それが精神的焦躁となり、感情が

尖鋭化したことが度々あつた。然し此の問題はその後漸次解決されて來つたはあるが、感情の動物である人間を以て構成されてゐる以上、多かれ少かれどうしても問題になると思ふ。結局、本當のリーダーシップ、メンバーシップを辨へた隊員を養成する以外には仕方がない事であらう。

大體此處に掲げた事柄は、技術、器具、食糧等の細目に沿つて論ずるつもりではなく、この計畫、行動を通じての無駄と不手際を抽象して見ようと考へた次第であつて、擧げてある條件もあく迄一例の範圍を出てゐない事を諒承して戴き度い。

結局、私達はこの行動が全く無駄であつたかの如く解釋されるのを懼れてゐる。確に缺點だらけではあつたがその缺點に傷き乍らも、取戻し得たもの、新に學び得たものも大きかつた。此の計畫が重病人に對する特效藥として副作用も相當あつたが、效用絶大であつた事も今更の様に認めてゐる。

最後に参考の爲に食糧品並に所要經費の一覽表を附し

食糧品一覽表

主	食	カボチャ	4貫	トコロロブ	1貫
米	1石3斗	調味料		アメ	150本
麥	2斗	味噌	10貫	緑茶	300匁
乾パン	10貫	醬油	3升	食鹽	200gr
コッペン	3貫	カレー粉	16箱	鹽	1貫
小麥粉	7貫	粉ワサビ	5箇	この他、干魚、牛乳、小豆等	
ソバ粉	16貫	ズルチン	10gr	未到着分食糧品	
澱粉	18貫	魚、肉、脂肪類			
野菜		バター	25lb	乾パン	25貫
馬鈴薯	10貫	チーズ	16lb	ソース	5本
干葉	2貫	マーガリン	8lb	トマトケチャップ	5本
大豆	6升	豚肉	2貫	コシヨウ	30箇
キャベツ	4貫	身欠ン	3貫	唐辛子	30箇
玉ネギ	6貫	鮭(アラマキ)	5本	フクラ粉	5箇
ネギ	5貫	その他		甘味入コーヒー	2箇
人參	6貫	ジャム	3貫	紅茶	5箇

て大方の御批判を仰ぐ次第である。

天幕別食糧配分計畫表

天幕	BC	CI	CII	CIII	CIV
比率	40%	18%	28%	8%	6%
各隊天幕別食糧消費豫定表					
	1隊	2隊	3隊	4隊	5隊
BC	54%	23%	23%	45%	54%
CI	0	39%	31%	8%	15%
CII	31%	15%	15%	46%	31%
CIII	0	8%	31%	0	0
CIV	15%	15%	0	0	0

各 隊 行 動 表

昭和22年12月～23年1月

		尾田	573 m	640 m	CT	(880 m) CTh	(1082 m) CII	(1129 m) CIII	(1129 m) CIVa	(1350 m) CVa	CV	CVII	1508 m	ベテガリ		
12	24	晴														B, C25人用軍隊テント建設, 山本ハ火傷ノタメ尾田ニ寝ル
12	25	薄曇														藍田, 村木, 野田偵察, 他ハB, C等端
12	26	晴														山本來ル
12	27	曇 時々小雪														CT 8人用ウィンパーヲ張ル, 藍田, 山本B, C勤務
12	28	晴														藍田, 山形, 雄井B, C勤務
12	29	晴 時々雪														CTbヲ800 mト866 mノ間ニ張ル確定ナルモ屋根分明ナラス, 800 mニ8人用ヲ張ル
12	30	晴														3隊ハ屋根ヲ間違ヘテ中ノ川迄行キ引返ス, 藍田 CTb へ上ル
12	31	晴														1082 m 直下ニ fix (同定網) ラックル
1	1	みぞれ														全隊休養, 横川 B, C へ繩梯子ヲトリ連絡ノタメ下ル
1	2	曇 時々晴														
1	3	晴 風強シ 夜(15m)														CIIノ手前ニ繩梯子(10m) ラックル
1	4	晴 風強シ (10m)														2隊昭原ハ5隊隊編入トナル
1	5	曇 小雨風強シ														野村 CT
1	6	吹雪														CIIIハCIIニ fix ラックル
1	7	吹雪														
1	8	曇														俵
1	9	晴後曇														2, 3 隊中ノ3名 CIVa へ, 1129 m 直下ニ fix, 食糧補給, 4 隊山形 CII へ
1	10	曇 小雪														2 隊ノ金子ハ1 隊へ, 高橋ハ3 隊へ, 4 隊野村, 小峯, 山本 B, C へ食糧補給
1	11	曇														CIVa ~ CIVb = fix
1	12	曇 風強シ														CVa ノ直グ上ニ fix
1	13	晴														CVa ~ CV = fix, 4 隊山形, 横川ヲ以テ編成ス
1	14	雪														野村 4 隊ヲ編入サル
1	15	吹雪 猛烈となる														俵
1	16	吹雪														5 隊ハ B, C, ヲ 5 時 30 分 出發, 翌朝 8 時 CT = 到着
1	17	晴														CV-CVI 搬收
1	18	晴														CIV 搬收
1	19	晴														5 隊ハ CT ヲ 4 時 30 分 出發, CII 派ハ翌朝 5 時 30 分
1	20	晴														CII-CIII 搬收
1	21	雨														
1	22	晴														CI 搬收
1	23	晴														

監督 小島 六郎 一隊 野田 三部 二隊 金子 實 三隊 村木 庸益 四隊 山形 朋司 五隊 藍田 務
 秋田 實 高橋 和夫 関口 敏 野村 英次郎 横川 通
 雄井 弘 昭原 啓佑 浅山 貞郎 山本 雅之助 小峯 和夫

所要經費一覽表

	圓
1) 庶務費 (33%)	
純庶務費	19,802.00
偵察費 (2名 20日間)	6,736.60
先發隊費	17,669.00
宿泊費 (本隊のみ)	10,795.00
旅費	12,139.00
馬櫓代	8,650.00
輸送費	3,063.00
藥品費	1,671.40
2) 團體器具費 (21%)	
天幕修理及補強	26,400.00
支柱新調費	3,860.00
マット改造	1,250.00
テルモス (5ヶ)	2,750.00
コツヘエル (2ヶ)	1,100.00
ローソク代	2,500.00
其他雜品 (寒暖計, ナタ等)	9,593.00
其他雜費	856.00
3) 個人裝備費 (16%)	
スキー靴購入 (中古5足)	10,700.00
スキー靴修理 (9足)	2,620.00
オーヴァー・シューズ (13著)	2,300.00
ウインド・トウルナー (12著)	14,300.00
毛皮手袋 (15ヶ)	5,870.00
其他雜費	3,120.00
4) 食糧費 (26%)	
主食補助費	31,203.00
副食費	16,485.00
調味料	5,727.40
甘味品	6,800.00
其他雜費	2,953.60
5) 燃料費 (5%)	
ラヂウス購入 (2ヶ)	3,000.00
ラヂウス修理	1,200.00
修理具	1,500.00
罐購入	1,200.00
石油購入	632.00
其他雜費	1,400.00
經費總額	239,846.00

ウィルダー・カイザー (Wilder Kaiser)

に於ける登山指導者講習會 (Führer Kurs)

高 木 正 孝

まえがき

1 獨逸山岳會のスノーラー・クルス

話は大分前のことになるが、私が参加したこの講習會の有様を報告しておくのは、私のいわば義務ともいえるので、ここにその大略を報告させていただく。實はこの講習會参加の動機が、私にとつては日本の登山界になんらか参考になりわないか、ということがその主なるものであつたのだ。それ故あらゆる参考資料を集めておいたのだが、戦亂のなかにすべてを失つて、いまはただ私の記憶をたどる他ない始末である。このことを先づあらかじめ了承しておいていただきたい。

この登山指導者講習會はいつ頃から行われていたのか私は知らないが、私が當時屬していたベルリンの大學支部 (Akademische Sektion Berlin) に一九四〇年の春に獨逸山岳會中央委員會から通達があり、この登山指導者講習會参加者の候補者推薦を依頼してきたのに話ははじまる。

當時は第二次大戰既に第二年目であり、現役の大部分は軍務にあり、現役で活潑に動いていたのは私位の者であつた。それに前の年の夏は、私達の支部のカイザー・

ゲビルゲの小舎ガウデアームス・ヒュッテ (Gaudemanns Hütte) の記念祭に現役・先輩すべてが参加し、創立者の一人カイスナー (Keysner) 老夫妻とともに一週間岩登り行をし、更に私と一人の仲間はグロックナー山群を縦走したことがあつたので諸先輩は私をよく知つていた。

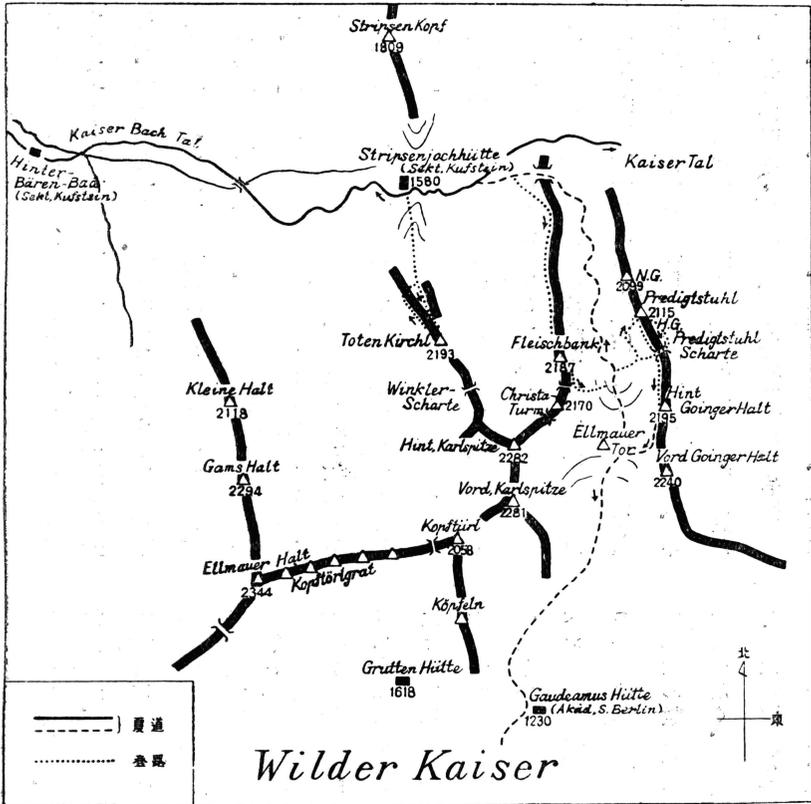
そこで支部委員会の決定は、さし當り推薦する者はないが、當時支部の山行係りに屬している私を推薦してみようということになつたらしく、私にその相談がもちかけられた。ただし日本人なので、外國人の参加が認められるが、一應中央委員会に問い合せようというわけであつた。勿論私は喜んで承知したし、又中央委員会も例外として認めるという返事であつた。

そこでこの講習會の目的及び組織があきらかにされた。これは普通の職業としての山案内のためではなく、獨塊山岳會の各支部がその候補者二名以内を推薦し、中央委員会がこの講習會を組織する。講習會は三部に別れていて、各々期間は五日乃至六日間、第一部は、岩登り、第二部は、氷と岩、第三部は、冬期登山であり、各部は

各々獨立したもので、順序や時間に關係なく、この三部にすべて参加し、しかも試験に合格したものに免狀があたえられ、しかも自分の屬する支部の山行係り、その指導者となる義務がある。そのかわり講習會参加の費用は各支部が負擔する。そうしてこの講習會はすでに永い歴史をもつているとのことであつた。

私の想像するところでは、これは戦争の對策といつた意味も多分に當時にあつてはあつたと思われるが、イギリス人によるスイスの登山が、貴族、市民の富有な人々によつてなされはじめたというのに反して、獨塊山岳會の傳統が貧乏な學生という者の手によつて開拓されていつたという傳統によるものの如くである。それに東アルペンは西アルペンの如く、四千米級の山はなく、石灰岩の岩峯は澤山有するが、山案内の必要も少く、又職業的山案内の數も少いということ、更にスイス程國際的觀光客も少なく、また一般の人々も富有ではない、といつたことに起因するのであろう。

そこでとにかく参加は決定したが、今夏は八月一日か



ら五日迄、ウイルダー・カイザーに於ける第一部の岩登り、と更に續いて七日から一週間の第二部氷と岩、エッツタール・アルペン (Ötzaler Alpen) のウイルダー・シュェビッツェ (Wilderspitze) (3774m) を中心にしたものに参加することになった。そしてここには差し當り第一部岩登りを報告することにする。

2 カイザー・ゲベルゲ (Kaieregenge) 及び根據地シュエツリプセン・ヨツホ小舎 (Stripsenjoch-Hütte)

カイザー・ゲベルゲは歐洲登山史の上で缺くことの出来ない

重要な役割りを演じているところの東アルペンの獨逸國境に近い有名な岩登りの一中心地である。即ち東アルペンのなかの北部石灰岩アルプス (Nordliche Karik-Alpen) に屬する。

ミュンヘンからインスブルックへの急行が、はじめは東南にウィーンへの幹線を約一時間走るとローゼンハイムにつくが、ここから別れてイン (Inn) の谷を真南にさかのぼると四十分位してドイツの國境をこえ、すぐクーフシュタイン (Kufstein) (480m) の古城をもつた町につく。この町の眞東に位するのがカイザー・ゲビルゲである。

このカイザー山群は、東西に走る二脈からなつていて北にあるのをヒンテル・カイザー (Hinter Kaiser) 或いはその山が低く、しかも岩も少ない、芝山といつたおもむきがあるところからツァーメル・カイザー (Zahner Kaiser) 「柔和なカイザー」と呼び、南の、より大きくかつ高く峻険なのを、フォルデル・カイザー (Vorder Kaiser) 或いはワイルドなカイザー (Wilder Kaiser) と

呼んでいる。

前者は最高峯は二千米に達しない。そして岩登りの對象になるのは専ら「荒々しいカイザー」の方で、最高峯エルマウエル・ハルト (Elmauer Hart) (2344m) を始め大體二千米級二十數座がある。

しかしその特徴とするところは、既に標高八百米にして偃松がみられ、森林限界は千三百米であり、その上に草原から大體四・五百米の高差をもつて、石灰岩の堅い岩が、ドロミテの如く、そびえ立っていることである。岩は下部は Hauptdolomit、上半は Wettersteinkalk といわれ、地層は水平でなく垂直である。

さて、このフォルデル・カイザーとヒンテル・カイザーの二脈の間をつなぐ尾根の最低鞍部がシュテッリプセン・ヨッホ (Stripsen-Joch) (1580m) であり、その峠の西にシュテッリプセン・ヨッホ小舎 (クーフシュタイン支部所屬) がある。

何れにしてもこの峠の尾根傳いに南には、有名なトーテンキルヘル (Totenkirch) (2193m) がそびえ、更に

西に向つて流れる谷、カイザー・バッハ・タール (Kaiser Bach Tal) に面した北側からの眺めは壯觀である。それに反してガウデアームス・ヒュッテ、即ち南側からは谷も淺く、ひろくひらけ岩壁の高差もさほどではない。

かくて、このシュテッリップセン・ヨッホ小舎が私達の根據地であり、集合地であつた。

3 小舎まで

私が受けとつた中央委員會からの通達には、七月三十一日迄に、シュテッリップセン・ヨッホ小舎に集合のこととなつてゐた。そこで三十一日の早朝、四日はかし前から避暑に滞在してゐたミュンヘンの南のテーゲルン (Tegern See) の湖畔から一たんミュンヘンに出て、インスブルック行きの急行をつかまえる。あいにくなことには朝つばらからしのつく雨である。

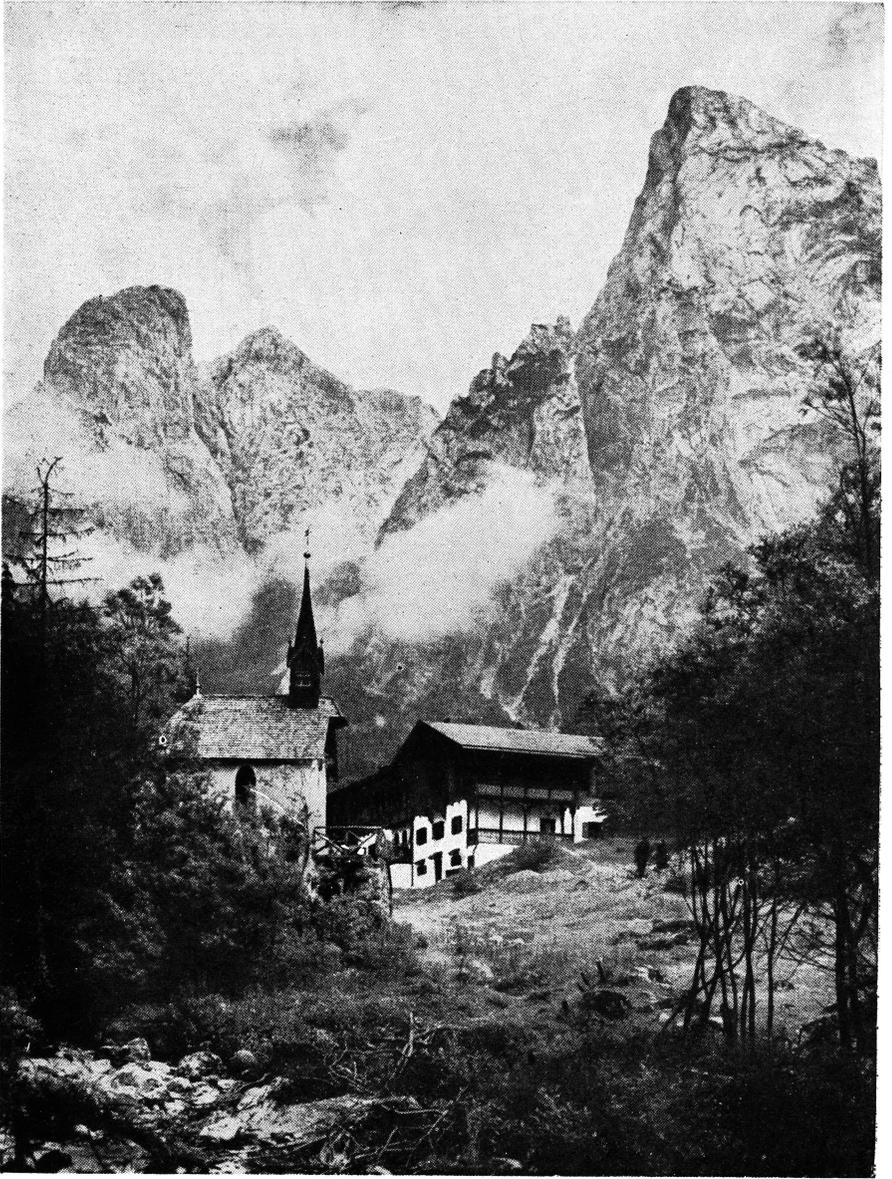
しかし十時頃ターフシュタインでおりました時には、雨だけはやんでゐた。インの流れを渡り、古い美しい街をぬけ、地圖をたよりに日本でのように重いリュックをかつ

いで獨りカイザー・バッハ・タールへ入る。道はなかなかよく、林を登りきると、アルムの中を、谷を南に深く見おろしながら東へ東へとたどる。

遊山客と初めのうちはポツ／＼すれちがつたが、やがてまたも雨がふりだす。雨衣をひつかけて際限のない道をたどる。案内書によればターフシュタインから小舎迄五時間とある。

とにかく荷がこたえてかなわない。それもその筈、ザイル、カラピナー、ハーケンから、第二部講習會のためのピッケル、アイゼン、食料といつたところを皆一人でしよつてるわけだ。とこゝろゝの茶屋 (Wirtshaus) で休んで汗をふく。相變らずティロールのクリームをのせたコーヒーはうまい。對岸の山は雨雲に被われ、陰慘な青黒い岩壁のすそをのぞかせている。

いゝかげん汗を流して、漸く谷沿いの道が橋を渡つて南側に来ると、間もなくヒンテル・ペーレンバードの小舎 (Hinter Bären Bad Hütte) (871m) につく。ターフシュタイン支部に屬するこの小舎は、タンネの林と草

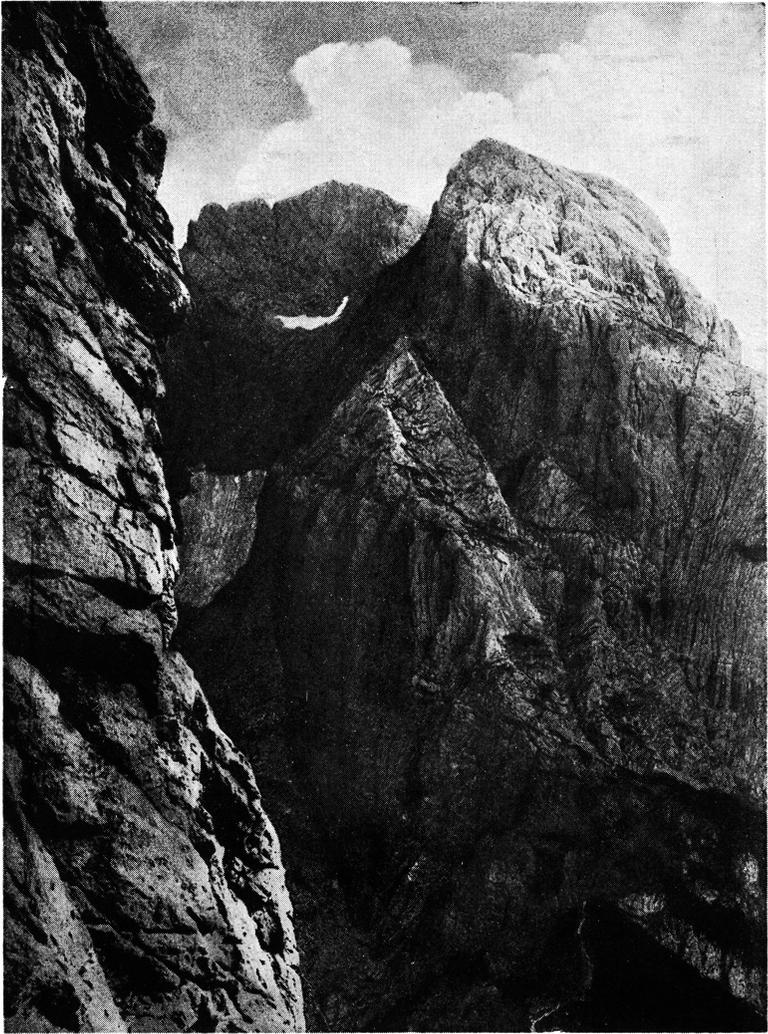


ヒントル・ベーレンバードの小舎

(背後は左からトーテンキルヒル 2193 m. 西壁、カールシュピツェ
2282 m.、クライネ・ハルテウ 2118 m. 西壁)



ブレダイクテウシュテウール 2115 m. 北尾根 (左) とフライ
シュバンク 2187 m. 北尾根 (右)



トーテンキルヒル 2193 m. (トーテンコップから)



ブレダイクテウシュテール北峰と主峰の西壁
(点線は講習会のルート)

原にかこまれ、番人のいる大きな宿だ。こゝからみると

トーテンキルヒルト、クライネ・ハルテッ (Kleine Hart)

の眺めは威壓的である。腹ごしらえをし、不用なピッケルとアイゼンを宿のおかみさんにたのんで小降りになった頃をみて出かける。もう夕方のけはいがする。峠へのつゞら折りの道をたどると、前後して登山者がやつてくる。多分我々の仲間であろうなどと思いつながら、五時過ぎに、それでも漸く小舎につく。石でたゞんだ三棟をよせ集めた二階建ての、むしろホテルともいゝたいような小舎だ。早速講習會で来たという、頭のハゲた眼のくぼんだスウェーターをきた中背のがつちりした人が、特別の部屋に案内してくれる。そこにはもう私達の仲間が十二、三人来ていて、あいさつする。

着物をきかえ、一ぶくしていると薄暗くなる。すぐさま、つきの人がベットをきめてくれる。夕飯の時、その人がナンガバルバットの生き残り、ペーター・アッシュェンブレンナー (Peter Aschenbrenner) であり、講習會指導者であることが明かになった。點呼があり、参加者

廿二名だとのことだつた。

雨は相變らず降つている。食後、すぐさまアッシュェンブレンナーから、明日の豫定が發表された。雨ならば十時、この部屋に集合、整備の點檢を行う、とのことである。晴れたら九時、しかし一應この部屋に集合のこと。

更に紙を渡され、これ迄の山行を各自明朝迄に書き出すこと、というのである。それが終つた後皆早く寝に行く。

4 第一日 裝備の點檢・繩の結び方

私達は中央委員會からの通達によつて、次の如き裝備をもつてくることを要求されていた。即ち、ザイル三十三米一本 (同支部より二人の場合には二人に一本)、補助繩四十米、ザイルリング一個、カラビナー五箇、ハーケン十本、ハンマー一箇、クレツテルシューズ、獨塊山岳會編東アルペン案内書、地圖、磁石、手帳と鉛筆等。

さて起きてみると相不變の雨である。朝食を皆ではこんでたべ、片づけてから、ルックに裝備品を入れて、部

屋に集る。

アッシュエンブレンナーが現われて、先づ各自の山行經歷をかいた紙が集められ、更に各自のザイル、ハーケン等を自分の前の机の上になうべることが命ぜられる。そしていよいよ裝備の點檢が、一人々々について始められる。

先づザイルから。ザイルがいかに大切なものであるか、そしていかにいたみ破損するか。破損し、いたんだザイルは決して使用してはならない。例えばこのザイルをみたまえ！こんなに破損している。そしてザイルは屢々點檢されねばならぬ。とくにこうして、よりをもどして内部を點檢しなければならぬ、等々。一人々々のザイルのよいもの、悪いものが點檢されつつ、皆に示されて説明される。更にハーケンの良いもの悪いもの、カラビナーの良いもの悪いもの、使つてはならないもの、が次々に示され教えられる。そうして又屢々こちら側から質問が出て活潑に討論が展開される。

幸なことに、私の裝備はむしろほめられた方で缺點

はなかつた。一應裝備の點檢がすむと、今度は先づ繩のまき方を教えられ、且つ自分のザイルをほごし、教えられた通りの仕方でもまきなをし、壁にかける迄にする。そして出来上つたものが、一人づつ點檢され、批評される。悪いものはやりなおしである。

その次にはいよいよアンザイレン、繩の結び方が示され、各自が練習する。

いつのまにか正午である。一時迄の晝食の休みとなる。午後は、更に色々なアンザイレンの仕方、サブザイルによるあぶみの作り方、ハーケン及びハンマーのもちあるきの方法、ブルジックの結びに至る迄、教えられ、且つ練習させられる。部屋中ザイルだらけになり、各自組になつて色々議論し、練り合うさわぎである。そうして漸く課目が終る頃、誰かが、晴れるぞと叫ぶ。今迄餘りに夢中になつてザイル遊びに氣をとられていた連中が一勢に窓のそとをみる。

雨はやみ、西の空が明るくなり次第に晴れてくる。夕食の仕度をする頃には、皆そとに出て、自然の素晴しい

ドラマにみとれて聲も出ない。

目の前のトーテンキルヒルが夕日にかざやき、いまにも燃え出しそうに紅い。上の方へとその深紅の色は燃え上る。なんとという色であらう。石灰岩の白を、ほんとうに染め上げる。

だがしかし、私達はこの雨が上部では相當な新雪をふらしたことに気がついた。この低さで眞夏に雪がふることは昨年、初めてカイザーで雪を経験しておどろいたが今は明日の登攀の喜びは暗い陰をさすものであつた。

カイザーには文字通りの氷河はない。しかし日本アルプス、穂高のように萬年雪ともいふたい雪溪が氷となつてのこる。一箇處氷河とみなされるものがある。氷河の出来る境なのであろう。

夕食時には皆ハリ切つてゐる。夕食後、たゞちに明日の豫定が發表され、同時にパーティーの編成の名前がペーターの口から呼びあげられる。

明日は、フライシュバンク北尾根登攀、そして二人づつのザイルパーティーが次から次へと編成されて行く。

私の相手は、ベリヒテスガーデン (Berchtesgaden) 支部のエルハルト・ゾンマー (Erhard Sommer) といふみるから登りそうな體つきをした私より背の低い青年であつた。

更に私達の總リーダーたるペーターの注意が續く。登路は各パーティーごとで研究しておくことゝ、明日は新雪が深いから鋏靴で登り、クレツテルシュエトは持參のこと。

エルハルトと私はザイルその他の準備をし、案内書を読んでおく。明朝出發は八時である。

私達は、仲間が十八人に減つてゐるのに氣づく。あとには既に失格したらしい。即ち八組のザイルパーティーが編成されたわけである。私達は今日一日で全くお互仲間になり Du (お前) で呼び合ふなになつた。そして誰一人苗字を呼ぶものもなく、リーダー、アッシュエンブレンナーもペーターと化した。

5 第二日 フライシュバンク

(Fleischbank) (2187 m) 北

尾根登攀

何故、新雪の第一日にこの尾根が選ばれたかといえば、近くで一番容易であり、かつ登攀距離が一番長いという理由による。

東アルペン案内書 (Ost-Alpen Führer) によると、登路の困難さの程度を大體次のような五段階に分けている。(1)「やゝかし」(leicht)。(2)「やゝむづかし」(mittelschwer)。(3)「むづかし」(schwierig)。(4)「大變むづかし」(sehr schwierig)。(5)「極端にむづかし」(äusserst schwierig)。日本で例えてみれば、第一度は綱なくして歩けるところ、第二度はまあ前穂の北尾根三峯といつたところ、第三度は小槍だろう。第四度になると、ハーケン、カラビナーが出て來、第五度は、アクロバティックになる。

そこでこの北尾根の記載をみると、第二度「やゝむづ

かしい」であり、二ヶ所「むづかしい」ところがあるらしい。

今日は素晴らしい天気だ。山々は新雪に輝いている。問題の北尾根はトーテンキルヒルの東となり、真逆かまに、そのナイフエッジを正面におとして來ている。

峠の上に一たんで、十字架のほとりをすぎ、エルマウエル・トール (Elmauer Tor) への夏道を下り、この道がこの北尾根の末端をこす、少し上のところから夏道を別れ、偃松をこいで尾根の上に出る。出る前で各パーティーは順々にアンザイレンする。新雪が深い。しかし尾根は順層だし、ナイフエッジの連続であるが、浮石一つなく素晴らしい岩登りがたのしめる。ピッチを早めて前進する。私達のペーターはグミナーゲル (ゴム鉄靴) の靴でアンザイレンもなく、先頭に行つたり、少しむづかしいところでまつていたりして、私達のパーティーの行動を注視して登り方の注意をあたえたり、しかつたりしてくれる。

しんがりは、ドレスデン組の年長者のパーティーがし

めている。やがて足の速い組とおそい組とでかなりのひらきが出来た。右手にはトーテンキルヒルが、左手には深いゴルヂュをへだて、ブレディクテッシュテール(Predigtstuhl)の西壁が、登れば登る程もの凄く見えってくる。

やがて尾根が少し平らになり、幅も廣くなつたところで先頭がとまつている。その上が大きな壁にさえざられている。これが第二の、そして今日が一番むづかしい箇所であろう。

先頭はクレッテルシューにはきかえている。

皆が集り、氣持のよい休息を、漸くあたつてきた太陽のなかにとる。

こゝで再び各パーティーの先頭交替が命ぜられ私が先頭となる。クレッテルシューでこの雪のついていない、壁の多い壁を登るのは、たゞ急であり手掛り足が、りが小さいというだけで、享樂するといつた方がよい位のものだつた。まもなく頂上が近づく。雪があつたがクレッテルシューのまゝで登りつゞける。

ふと、左手から、救急信號のような叫びをきく。パーティーも立ちどまり、プリズムで對岸のブレディクテッシュテールからゴインガーハルテッ(Goinger Hart)一體をみまわす。そしてヒンテル・ゴインガー・ハルテッ(Hinter Goinger Hart)(2195m)の頂上から右に走る夏道の下、オーバーハングした岩壁のすぐ上に、一人の人影を見出す。夏道があるので、散歩に來た一旅行者が新雪のため足を踏み滑らせて滑落し、漸くオーバーハングの上でとまり身動き出来なくなつていらしい。雪の上に明かに滑落した跡がプリズムによつてみられる。こつちも合圖を送つてな。おも登りつゞける。

頂上のひとときはたのしいものであつた。日なたぼつこをしながら、パイプをくゆらす。

さて下りは先年來て知つていたので、私達のパーティーが先頭を命ぜられる。頂上から一旦西側に下りクリスタ・テールム(2170m)側にまわり、そのシャルテから再び南東面に出る。エルマウエル・トールの峠を下るわけである。これはフライシユバンクのデアルファー・リ

ス (Düfler Riss) といわれるものである。そしてしばらく下つて壁がオーバーハング気味になつたところで、アプザイレン用のハトケンのリングをさがす。漸く首迄たゞきこまれたリングハトケンのリングを見出して、私達は早速繩をといてアプザイレン用の繩としてハトケンに通し、下になげおとす。十五米丁度である。先づ私達からおろる。次から次々と他のパーティーが下つてくる。

そこにはそんなに多くの人数がとまれないので、パーティーは私達に先きに下ることを許した。といつたところで私達の繩はアプザイレンに使はれているので、ザイルなしである。こゝから登路はオーバーハングの下でリスに入るのである。雪どけで岩は湿めり、なか／＼にむづかしい。

漸くリスに入り、更に下りつづけ、最後のオーバーハングに来て、私は突然自信を失ひ皆の來るのをまつ。相棒のエルハルトは右手の壁の濡れた小さなホールドを使つて巧みに降りきる。しばらくタバコをふかして待つていると、パーティーがやつて来て、ハトケンをたゞきこん

で私達のザイルで再びアプザイレンをするようにする。そして漸く、エルマウエル・トールの夏道に合した時には午後の四時頃であつた。この下降は、昨年は登つたが短いがかなりむづかしいものである。(第三乃至四級度)。全員そろつたところで、私達にはまだ遭難者救助の任務がのこつている。パーティーの指揮でパーティーを二つにわけ、一隊は夏道を登り、現場へ。他隊は、もし負傷していた場合の運搬用意と運搬の任務を與えられて待期する。私は後者に編入され、用意してまつ。しかし一時間たらずで皆は元氣な遭難者とともに歸つて來た。ほとんど傷はなく充分歩るけるが、恐怖のため半分死んだやうになつていたとのことだ。それはレーダーホーゼの半ズボンをはいた少年であつた。

私達は再び紙靴にはきかえみちたりた氣持で夕日にかがやくプレディクテッシュェタールの西壁をみながら夏道をかけおろる。そうして再び峠を登つて小舎に歸る。たのしい晩飯がまつている。普通晝食はほとんどたべないのだ。

夕食後、ペーターから今日のテューアの批評がある。正しい行動と誤つたものが、パートィー毎に一々批評された。私が下降に際しリスの最後のオーバーハンドの上で立ちどまつていたことについても、突然の身心の状態の變化についての一例としてあげられ、待つていたことの正しさを指摘された。

今日の登攀は新雪のため時間がかゝり、かなり困難な疲労多きものであつた。

明日の豫定はトーテンキルヒルの岩物でロックガーデン式練習とのことである。

6 第三日 岩登り練習

朝十時よりハーケン、カラビナー、ハンマーの装備でトーテンキルヒルの下の岩に岩登り練習に行く。

先づクレッテルシュューにはきかえ、ハーケンの打ち方の實習、ペーターの點檢、カラビナーのかけ方、繩を通し、各自アップザイレンの練習、更に各種のアップザイレンの仕方の講習、カラビナーと「ザイル・リング」による

最も合理的なアップザイレンの仕方の教授。それがすむと今度は二人づつ組になり、そばのフェーラー・ナーデル (Führer Nadel) に於けるカミーン登りをやらされる。

更に高等技術に入り、トラバースして、ハーケン間に手すりのように繩をはり、それを傳つて最後にアップザイレンしておること。

そうして一たん夏道に下り、晝の休みを日なたでとる。午後はオーバー・ハンドのりこしの練習から始る。私の相棒は今日は色々變る。初めはミュンヘンの醫者、ドクトル・ペッシュケ (Dr. Nohert Peschke) であつたが、午後はニーダー・ドナウのレオポルド・ウインベルガー (Leopold Winberger) で、道ばたのオーバーハンドを登るのだが、彼はたいした技術の持ち主だつた。

更にデュルファー (Düfer) によつて初めて考案されたザイル・トラバース (Seil Querang) をやり、次には「振り子トラバース」(Pendel Querang) である。最後に、「二重繩 (Doppel Seil) による「吊りあげ」(Zug) による大きなオーバーハンド乗り起しの實習、ハ

ーケンとあぶみの使用。かくして一日がいそがしい間に
くれた。一日中ペーターにどなられたり、ほめられたり
したわけだ。

今日、中央委員会からインスブルックのマリーネ(Ma-
riner)がやつて来た。彼はウエルツェンバッハ(W. Wei-
zenbach)と共に西アルペンで数々の初登攀をなし、ま
たドロミテのチベッタ(Civetta)や、クライネ・チンネ
(Kleine Zinne)の北壁で有名である。

夕食後、例の如く明日の山行と、パーティーの編成が
發表される。明日はブレディクテウシュテールであり
二つのグルッペに分れる。等一隊、四ザイルパーティー
はブレディクテウシュテール・シャルテから主峯の南
尾根登攀、第二隊は主峯西壁、デュルファー・ルート
(Düfer Weg)。頂上で二隊は合しシャルテ迄下り、更に
南に續くヒンテル・ゴインガー・ハルテウ北尾根に登
る、というのである。そして私は第二隊であり、相棒は
ドレステン支部の年長組の一人、クルテウ・シュスター
(Kurt Schuster)だ。フューラー・ブーフ(案内書)を

みると「極端にむづかしい」「高差約四百米、とかいてある。
第一隊の方は「大變むづかしい」のだそうだ。

7 第四日 ブレディクテウシュ

テール (Predigstahl)
(2115m) 西壁、エンテル・ゴ
インガー・ハルテウ (Hinter
Ginger Halm) (2195m) 北尾根

今日も素晴らしい天気だ。朝六時には小舎を出て一昨日
下つた道をエルマウエル・ツールに向つて登り、左の踏
みあとをたどつて西壁の下につく。そこで第二隊はクレ
ッテル・シューにはきかえ、第一隊に鉄靴もろともルッ
クサックをたくす。第一隊はそこから眞上にブレディク
テウシュテール・シャルテに登り、そこに自分達の靴、
ルックと共にデポする筈である。

第一隊のリーダーはペーターであり、私達にはマリー
ネが一緒に行く。私達は第一隊と別れてアンザイレンし
たぐちに左斜め上にリスをたどる。そうして主峯の頂上
直下に進む。すると大きなルンゼにぶつかる。下をみる

と殆んど垂直にルンゼは走り、下がきれていて、あとはるか下のガレがみえるばかりだ。そのルンゼの右にそつて登ると、その五米も幅のあるルンゼは、大きなオーバーハングの下に終る。右側から棚があつて、そのオーバーハングの中に入れる。若手の一人とアンザイレンしたマリネのパーティーが先頭になり、私とクルトの年より組がしんがりをおゝせつかる。

登路は、そのオーバーハングの下でルンゼを左にトラバースする。そして對岸の手がかりのない壁の上部に一本ハーケンがうつてある。先頭はこのハーケンにカラビナーをつけ自分の繩を通し、更にザイルリングをかける。このザイルリングを右手につかんで振り子のように左に體をふり、左手でそこでできている岩壁の裏につかまり左へとまわりこむのである。しかもこのまわりこむ岩は直下で全くきれ、大きなオーバーハングをなし、下まで全く目もくらむ空氣の層しかないのだ。

先頭がまわりこみ、まもなくマリネも裏にさえる。このようにして、次々とパーティーは消えて行く。私は

一番のしんがりをつとめ、カラビナーとザイルリングをばづしてもつて行く役になる。クルトがきえ、まもなく「やつてこい！」と叫んでくる。先づ、ハーケンのところ迄行き、ふり子を使つて左にまわりこむ。すると右足の下、下のオーバーハングの始まる場所に小さな足場のあるのをみつけ、そこからカラビナーをハーケンからはずし、體につけ更に上に登る。傾斜はおどろく程きつい。體が岩からはなされそうだ。その岩壁の途中にハーケンにつけたカラビナーによつてクルトは確保していかれる。手がより足がよりは小さいが、しかしかたい。クルトと顔見あはせて「素晴しい」と呼ぶ。ハーケンで私が確保しクルトは真すぐに登り出す。下からみていると足の裏から體全體が宙に浮いている。

かくて三、四回、三十米一杯に使つて登ると、左斜め上に通つている大きなバンドに達する。岩は縦に多くのリンネを走らせている。これを左にまくルートがあるがいきなりバントの上のやゝオーバーハング氣味の岩にとりつく。しばらくすると頂上が眞上なので皆の顔が上か

らのぞく。

最後に頂上につくと、第一隊も既に頂上にいる。たのしい日なたボツコと話し合いの一時がすぎて行く。「短いが、こんなに快適な登攀はなか／＼味えない」というのが皆の結論であつた。

下りは再び南稜の上迄とつてかえし、そこから左へ、即ち東壁に入つているカミーンを下る。途中カミーンのなかでチョットしたオーバーハングがあるが、今の私達にとつては問題にはならない。シャルテの草むらに坐つて、また一休みする。こゝから各自が銚靴を入れたルックを背負うことになるわけである。

それからはゴーンガー・ハルテウの北尾根にかゝる。狭い急峻な尾根であるが手が／＼り足が／＼りはあるし、快いリズムにのつて岩をたのしむ。頂上迄には五ツ六ツのピークをからんだり登つたりする。一ヶ所肩をかすところもある。

頂上では、ザイルをとき銚靴にはきかえ山々を眺める。下りは夏道をエルマウエル・ツールに下り、通いなれた

道を小舎に下る。

登つた西壁が夕日に眞紅にもえていて、みちたりた氣持を更にみたしてくれる。

8 第五日 トーテンキルヒル

(Totenkirchl) (2193m) くら
ルト・ウエーク (Herold Weg)

最終日はトーテンキルヒル行である。今日も二隊に分れ、第一隊はシュミット・カミーン (Schmidt Kammin)、第二隊はヘロルド・ウエーク (Herold Weg) である。そうして私とクルトは再び一緒に第二隊に編入される。今日の第二隊のリーダーはペーターである。

トーテンキルヒルは、頂上から北西に三つの大きなテラスをもつた尾根がのびている。その北東面に絶壁をもち數多くのカミーンによる登路がある。シュミット・カミーンもその一つである。そして更に面白いことには頂上の東側にシュネー・ロッホ (Schnee Loch) という氷河の小さいものを壁の途中にだきかゝえ、それからルン

ゼが北西に流れ下り北東壁の下を走り、シュテッカーパゼン峠に続く尾根の左におちて来ている。

ヘロルド・ウェークは、このルンゼの北に平行して走り、段々高まつて南にルンゼが折れこむ所で終る岩稜を登り、その曲り角からいきなり第IIIテラス、頂上直下にとりつく最短距離の道である。

私達は、最早下の部分はアンザイレンせずかけ登る迄にトレイニングされていた。そうして、この曲り角、いよ／＼壁にとりつくところでアンザイレンする。ペーターは例の通り、先頭を登るパーティーの登り方がなっていないとのゝしつている。そして私達の年より組は確實とみたのか、今日もまたしんがりをおゝせつかる。ペーターは私達の登る前にすでに上のぼつて行く。クルトと二人で、「やれ／＼助かつたぞ。どれゆつくりたのしもうや」と安慶する。

とつゝきがチョット悪い。今日は私が先頭だ。かぶりぎみでハーケンが打つてある。カラビナーを通し自己確保して登る。そうすると下からはみえなかつた大きな半

圓形を畫いている壁がそこに展開され、その左壁の中間にあるな／＼め右へ登つているバンドによつてこの半圓形の壁の中腹をトラバースする。バンドは途中で一度切れ下の段に始まるものにうつる。そこが悪くてハーケンが打つてある。右下はひどく落ちこんでいる。

トラバースを終えたとゴルデュになり、左手はつるつるの壁であり、右手の岩壁はついたての如く獨立している。そのゴルデュを通して第IIIテラスがすぐそこにみえている。そこに出るのかと思つていと、ペーターはこのゴルデュの左手の壁を登るのだという。これは一つのヴァリエーションで「極端にむづかしい」部類だそうだ。一番若いハリ切つたのが試みたが、リスはあるが左斜めに走るリスにはハーケンをうつつ割目一つなく、あまつさえ上の壁がかぶりぎみだ。對岸のついたての上で確保していたが、遂に四米ばかり墜落する。のこりの一人一人が試みたが成功しない。

最後にペーターがアンザイレンして試みる。先ず精細に岩もしらべ、遂にリスが左に走る頭の高さのところに

ハーケンを打つのに成功し、やゝ吊りあげぎみにその上に立ち、リスを登ろうとせずにリスを足がかりとして體一杯のばし、その上に手がかりをさがして左上に登り切るのに成功する。

私は例の如く、またしんがりでハーケンをぬきとるのに苦心する。そしてクルトの確保があるとはいへ、斜め左である。正直のところ、そこをどうして登つたかは今もつてわからない。

第IIIテラスからは頂上はすぐであり、鐵の十字架のそばで第一隊とも合したのしい頂上のいこいを享樂する。

下りはフューラー・ウェーク (Führer Weg) をたどり、第Iテラスからカミーンを下り練習場の上に出てなんなく小舎に歸る。

まだ夕食には大分まがある。着物をきかえると、小舎のうしろの芝原に集合とのことであつた。そこでペーターとマリーネをかこんで車座に芝生に坐つた私達にペーターが話をした。

「皆は烈しい岩登りをよくやつた。そして立派に講習

會を終了されたことに對してお祝いを申しあげる。しかし諸君は、決して忘れてならないことは、『岩登り』が『山登り』ではないということだ。少くともその一部である。岩をみて山をみない人々がとんでもない間違ひをする」といつて、彼はフライシュバンク東壁でおこつた少年達のパーティーの慘事を詳しく話してくれた。その時救援隊としてペーターは、カイザーで一番むづかしい壁の一つといはれるこの東壁を負傷者を背負つて雨の中をアップザイレンで下降することに成功したので。

そうして最後にいうのには「あなた方が後輩や若い人を山につれて行くのだつたら、まづこの後の芝山のようなところに連れていつて、山がすきになるように導くことが、岩登りよりもどれだけ大切だかわからない。ということをお忘れなくてもいい」といつて言葉をむすんだ。

トーテンキルヒルは夕日に燃え、聴き手の皆んなは深い感銘に聲もなかつた。忘れられない言葉と光景である。

夕食はお別れの御馳走であり、ティローラー・ワイン

の杯がかさねられ、壁にかけられてあつたギターははずされて、山の歌が次から次へと二部合唱でうたわれる。

この夜はおそく迄ペーターやマリーネをかこんで山の話に花が咲く。自分も日本の山の話させられる。

さてここで私達の仲間を紹介しておこう。年齢的にいえば、少年から四十代の人々迄があり、職業的にいえば、**医者、學生、高等學校生、職業學校生、労働者、務め人**といった各種の人々であり、そして各地の支部からやつて來た人々であつた。そしてザイルにつながれたこの友情はその後も長く續けられた。

例えばクルト・シュスターはドレスデンの職工であり、後に私は屢々ベルリンから彼を土曜日曜にたづね、ザクセンのスイス (Sächsische Schweiz) といわれる砂岩の

岩峯の非常にむづかしい岩登りをともし、エルハルト・ゾンマーには後にケルンテンの岩山で出會つたり家に招待されたりしたのでつた。

翌日、次の第二部講習會に参加する私達六人はペーターとともに朝早く峠を下つた。

この講習會の目的は大體困難さ程度は第四級「大變むづかしい」迄であり、後に中央委員會から送附された證書には、第三級の困難さの山々を、他人を導くことの能力があると記るされてあつた。

なをカイザーで最も困難とされるルートは、例えばフライシュバンク東壁、トーテンキルヒル西壁、クリスタ・テュルム東壁、プレディクテウシュエテュール北峯西壁等が敷えられることを附記しておこう。

アイス・ピッケル調査に就いて

日本山岳會器具調査委員會

シエンクとか、ペンド、ヘスラー等名を聞いただけであゝあの人かとすぐその姿、人となりを想像し得る様な作者に、自分の生命を託する山の道具を作つてもらへる人々は幸である。

我國に於ても先輩の熱心な指導と努力によつて後世に残る様な名作が、山ノ内、門田等の製品中には無い譯ではないが、元來ピッケル、アイゼンと云ふ様な登山用具が鑑賞品ならまだしも、夫に生命を託して氷壁をよぢ、危険を防止すると云ふ重大な役目がある以上、數本の名作が出来たからと云つて、他に百本も二百本も無責任な駄作が亂作されるのに平然としてゐたのでは何にもならない。

大體斯う云ふ登山用具はその製作工程が職人的手仕事

であり、使用目的が危険防止と云ふ特殊なものである以上、製作者と使用者相互の信頼と、目的追求の飽無き意欲がなければ仲々その發展は望めないものである。然し我國に於ける近代登山の發達の形式が歐洲アルプス直輸入であつた爲か、或ひは元々の國民性に基くのかは知らぬが、製作者はピッケル傳來以後數十年を経た今に到るも模倣に汲々とし、使用者も亦少しも夫を意としない程慣習の絆に引きづられてゐる。

我國のピッケルをづらりと並べて見る時、そこに殆ど個性と云ふものを見出し得ないのもその一つの現はれであらうし、更に始末の悪い事には戦後の多數の製作者達の目標は歐洲の名品ではなくて、山ノ内、門田と云ふ事になり益々スケールが小さくなつた事である。

元來登山の歴史は淺いの。忽ち數萬人の登山者が輩出すると云ふ甚だ不思議な國柄である日本で、その人達に一人々々個性の旺盛した曰く因縁淺からぬピッケルを持つてもらふ等と云ふ事になつたら夫こそ一大事だし、その必要も無い事勿論である。従つて、シエンクモデル、山ノ内モデルをどん／＼作るピッケル製作者でなければ到底この要求に答へては行けないし、當然、個性も何にもない事になる。従つて私達は今急に個性を持つて、もつと線の美しさを出せ、等と云ふ無理な事を要求する氣は毛頭ないが、何んな型でも良いからいやしくもピッケルを使ふ程の場所へ行く人達には安心して使へる安全確實なものを行きわたらせ度いと云ふ事だけが念願である。

斯うした新しい製品の内にも既に優れたものがあり、又將來も現はれるであらう事は否定しないが、夫以上に大切な事は總での製品が一定の平均値を超したものである事、即ち飛び切り上等も出来ない代りに生命の安全をおびやかす様な不良品も無くなると云ふ事である。

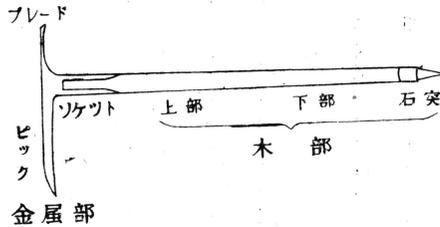
山岳會内の器具調査委員會は極めてさゝやかではあつ

たが、此の意味からピッケル、アイゼンの問題を採り上げ、從來に於ける破損調査並に戦後の各種作品の簡単な検査等を手始めにして將來は體位、體力との關係に於けるピッケル寸法の規格化、各種器具の検査法規準の設定を目論んでゐる。元來物を破壊せずその強度を知り、品質を検定する事は至難の業である。若干専門的な知識を持ち合はす者がゐないではないが、多くの方々の御意見御助言なしには到底なし得る事と思はれないので、今回は從來行つて來た調査事項の内ピッケルのみに就いて簡単に御報告して大方の御批判を請ふ次第である。

破損調査は昭和廿一年から廿三年に掛けての一年半許りのもので、全國の主要山岳團體に破損部位を示す圖面並に破損當時の天候、場所等の條件を書込む様にした調査票を送附し、その回答を基にして行つたものである。極く一部のものは現品を頂戴して破損部を調べたが、大部分は調査票のみが頼りでその原因を詳には知り得ず、調査數も四十に満たぬ程度で基より完全なものとは思はないが、破損は何の部分か最も著しいかと云ふ大體の傾

向は出てゐると思ふ。

第一圖



第一表

ピッケル破損調査一覽表

部位 破損率	木部			金属部		
	上部	下部	石突	シャフト	ピック	ブレード
	10	20	55	5	10	0
計	85			15		

第一表に掲げた數値は破損率とも云ふべきもので、我が集計した破損調査の總數とその部位の破損數との百分率で表はし、ピッケルが破損するとすれば數値の多い部分程壞はれる可能性が多いと云ふ程度の意味であるが御覽の通りピッケルの破損は木部が壓倒的に多く、金属部は僅か十五%に過ぎない事になる。

元來使用時日の経過によるピッケル木部の損耗は金属部に比して遙かに速く、毎季節激しく使用するピッケルは五、六年もすれば著しく腐蝕老化して木材固有の彈性を失つて脆くなるものである。木部破損のピッケルの使用年數を調べると何れも四、五年以上使用したもののみであるのも此事實を裏書きしてゐる事になる。従つて木部は最も破損し易いものではあるが製作者の責任に歸するものではなく、使用者が自己の使用状態に應じてその都度適當な手入れと修理を行ふべきものであつて、購入時に間違ひのない品物であるならば良いと云ふ我々の最低目的からすれば、残念乍ら調査の對象から除外して掛らねばならぬ事になる譯である。

第一表から明らかな如く金属部の破損率は僅か十五%で非常に壞はれにくい。然し木部の如くその使用状態、木目のすりへりの度合、觸感等から幾分でもその折損を豫想出来る場合は未だ良いが、金属部の破壞は單なる觀察からその破壞を豫想する事は全く不可能に近い。

斯様に登山者がその使用の過程に於て道具の損耗状態

破損の徴候を注意出来ない場合には如何にその破損率が僅少であつても、その原因の調査を忽せにする事は出来ない。

従来我々が入手した若干の破損ピッケル、破損アイゼン等の折損部位に就いて検討してみると、その原因を明らかに爲し得ないものもあるが、鍛造の際に生ずる疵——之は材料取りが大きく無理に餘肉を押し出し張りを多く出した場合、或ひは材料を無理に挾壓する場合等に生じ易いもので、ピッケルよりも寧ろアイゼンの爪の附根等に現はれ易い——或ひは先端に焼入れする場合、熱處理不適當に原因する焼割れ等を知らずに使用してゐた爲と考へられるものも多い。

その他豫想される折損の原因としては焼入後、焼戻し不十分な爲に生ずる組織の不連続、残留歪等である。

ピッケル使用上、破損の原因になると考へられる之等の諸缺陷を如何にして豫知し得るかと云ふ事になると大變むづかしい問題である。數字にして材料の強弱を表現する爲には夫を破壊してしまはなければならぬので、

ピッケル、アイゼン等の成品に對しては普通の材料試験法を適用する事は出来ないし、切斷して焼入部分の顯微鏡組織を視る事もその後で成品の使用が不可能になると云ふ點から考へて同じく不都合である。

結局、殘された手段としては、透過X線を使用して、内在する缺陷を發見する事、表面硬度を測定して組織の異常點、焼戻の有無等を發見する事、磁氣探傷法等によつて微細な焼割れを發見する事、等が考へられるが、經濟的な條件等を考慮すると第二の硬度測定による方法が最も簡便であらう。

昨年十一月、東京都に於て國民體育大會が催された際附隨的な行事として、ピッケル、アイゼンの展覽會を行つたのであるが、私達は此時に集つた戦後の新製品のパークスペクティブを得たいと考へて、前述の趣旨に由る簡單な検査を行つた。以下、その概略を御報告する次第である。

戦後、市場に現はれてゐる各製作者に招待狀を發し、集つたものは五種類であつた。

ケル、クローム構造用鋼を使用してゐる事である。確か

第二表 ビッケル粗材化学分析表

成分 製所	炭素	珪素	満 俺	クローム	ニッケル	燐	硫黄
A	0.34	0.11	0.24	1.11	2.65		
B	0.21	0.10	0.45	1.18	3.12		
C	0.28	0.18	0.37	1.08	2.12		
D	0.65	0.20	0.18			0.03	0.02
E	0.29	0.08	0.74	1.11	1.07		
F	0.25	0.16	0.43	1.4	3.6		

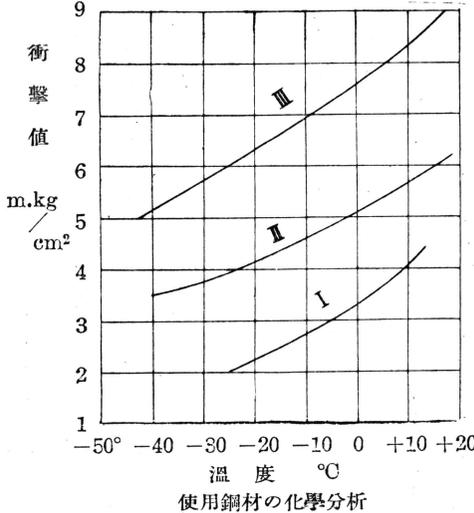
終戦によつて、軍需資材が放出され、材料の區分が非

常に混亂してゐたので各製作者が何んな鋼材を使用してゐるか調べる爲に、各々の材料に就て化学分析を行つたその内容は第二表を参照して戴き度い。尙、各製作者は實名を用ひず番號を附した點も御諒承願へれば幸である。

我々が之を見て奇異に感ずる事は殆ど總てが、ニッ

に粗材としてのニッケル、クローム構造用鋼が、強靱で低温脆性に對して優れた性質を持つてゐる事は認めるが又一方、鍛造の際の可塑性が少ない、熱處理を誤れば一文の値打ちもないと云ふ缺點を持つ。元來、何千人か

第 二 圖



使用鋼材の化学分析

C	Si	Mn	P	S
0.23	0.27	0.66	0.029	0.046

るビッケル使用者の内、低温脆性が云々される様な烈しい登山をしてゐるものが何%あるか考へて見れば、わざわざ作り難い材料を使つて、焼割れや鍛造割れの缺陷を持つたビッケル、アイゼンを作るより、鍛造し易い普通

鋼材を使つて缺陷のない製品を出してもらつた方が使用者側は遙かに迷惑をこうむらないで済む。

元來、鍛造によつて組織の均一化した鋼材で適當な熱處理を行つたものは、低温脆性もそんなに心配したものではない。第二圖参照。

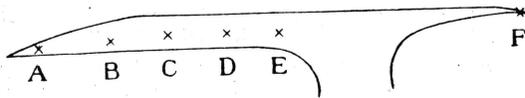
之は普通鋼材に就て、Ⅰは鑄込のまゝのもの、Ⅱは八七一°Cに加熱して五九三°C迄爐中冷却を行つて後、空中冷却をしたもの、Ⅲは同じく八七一°Cに加熱し四三八°Cで水中焼入を行つてから七八九°Cに再加熱し、五九三°C迄爐中冷却した後、空冷したものである。之等をアイゾット試験機により、種々の低温度の衝擊値を測り、之を $\text{kg}\cdot\text{m}/\text{cm}^2$ に換算して縦軸にとり、温度を横軸にとつてその關係を表はしたものである。

次に各製品の硬度測定を行つた。その位置は第三圖の如く、先端の焼入部分と然らざる部分とに分けて測定した。

測定法は、ロックウェル硬度計を用ひ、一五〇kgの荷重によつて鋼面にめり込む、金剛石圓錐の深さの逆數を

ダイヤルゲージによつて讀む、ロックウェル、C、スケールを使用してゐる。第三表参照。
 之によつて見る時、數字の多い程硬い事になるが、無暗に硬ければ良い譯ではない。

第三圖 硬度測定部位



第三表 ピッケルの硬度 (R.C.)

部位 製作所	A	B	C	D	E	F
A	70	48	39	20	46	68
B	60	46	52	48	42	26
C	56	20	17	25	20	25
D	53	38	36	30	27	48
E	45	14	25	27	19	63
F	64	57	56	39	31	67

各部三點づつ測定しその平均値を採つてある

大體、使用材料と考へ併せてピツク部分並にブレードの先端の硬さは六〇の近傍であれば良いが、夫以上では

脆く、夫以下では焼きが甘くて打撃を行ふと先端がつぶれたり、曲つてしまふ懼れがある。他の部分は、寧ろ軟かい方が良いが低温脆性の點を考へるとゾルバイト組織の硬度、即ち二五乃至三〇位の値を示してゐれば良く餘り硬いものは脆くなるし、硬さが均一でなく硬い處や軟い處が混在してゐるものは不良である。

以上の如く、今回試験したものに就いては、特に目立つた缺陷と云ふものは見出されてゐないが、熱處理が不適當だと思はれるものは二三ある様である。元來、斯うした展覽會に呈出される様なものは各製者が自信を持つて居られる品物ばかりなので、この簡単な試験から戦後のピッケルの良否を云々する事は出来ない。更に多くの製品を調べて見なければ分らない事が澤山ある様に思ふので結論めいた事は避けるが、私達器具調査委員會が持つてゐる山の道具に關する觀念について一寸説明をして置く。

從來、ピッケルは山男の魂と考へられ、武士の刀劍に譬へられて、一種の藝術品の如く扱はれて來たが、藝術

品と雖ども切れなけば駄目、折れてしまつては一文の値打もない。元來生命の危険を保持すると云ふ重大な役目を持つ以上、單なる鑑賞的立場からピッケルを云々するよりも、もつと嚴格な科學的な規準によつて判斷する様にし度い。之には更に多くの調査と研究を要する事であり、一朝一夕の事ではないが多くの使用者の御協力を頂ければ決して不可能な事ではない。

次に使用者側に御願ひし度い事は材料の優秀さに迷はされてはならない事である。前述した如くいくら良い材料でも製作法を誤れば却つて弊害が多い事を考へて、ニッケル、クローム鋼だから良いとか、尺物だから魅力がある等と云ふ下らない觀念を棄てて、自分の體力と技術に應じて、製品として間違ひのないものを入手する様心に掛けて頂き度い事、次に不良品にぶつかつた場合は、その儘泣き寝入りしないで廣く公表して頂き度い。自分自身でもまかり間違へば生命に拘はるのだと云ふ事、夫を知らせないで居るのは同じピッケルを持つてゐる他の人に迷惑を及ぼす事だと考へれば忽せに出來る事ではない。

斯うしてピッケル製作者と使用者相互の間の交流によつて使用者の注意と注文が製作者に傳はり、更に良い製品が試験されて行くと言ふ過程を経なければ、市場にあふれる不良品を一掃する事は不可能に近いと思はれ、今後の我々の調査に對し一層の御援助を御願ひする次第である。

以上我々が行つて來た、乏しいピッケル調査の概要を御報告した譯であるが、未だ始めた許りだし人数も少く目的の何十分の一に達したか何うかも分らぬ現狀である。微力な私達によつて何れ程の事が行へるか全く未知數であるが、多くの方々の御忠言、御援助を仰ぐ事が出来れば全く幸だと考へてゐる事を重ねて附加へておく。

調査委員

今	村	正	二
山	田	二	郎
越	智	英	夫
村	木	庸	益

白馬岳志雜攷 (中)

中 島 正 文

白馬岳の山名(三)

白馬岳といふ山名は、永く越中方面では現るることが無かつた。

黒部峽谷を挟んで峙つ立山・後立山二大山脈の間の擴大な地域は、加賀藩政の初頭より、御縮山オシマツヤマとして、厳しく諸人の出入を禁断し、奥山廻道を設けて、毎年時を定めて信越飛の國境を始め、山中奥深く巡邏警戒せしめた爲、一般世人からは隔絶し、一種の人外境の如く沙汰されたので、此の方面の山名地稱などは、勿論世人の耳目に入り得べくもなかつた。また此の地域の越後・信濃との境を爲す國境線上の名山大岳は、立山の背後に峙つか、又は北邊に連つて、極めて小さく從屬的に、越中平野から眺められて居た爲、朝夕馴染み薄く、今日ですら、大多數の越中人士には山名の如きも全然判つて居ないといふ有様である。この方面の始めて記録に現れて來たのは、加賀藩三代の前田利常侯の頃である。

加賀藩政の初頭慶安年中、前田利常侯に依つて針ノ木峠の測量と、黒部溪谷の調査が試みられたが、其の日程より判断して、三國境の最高峰と目されたる鐘ヶ岳には其の足跡は及ばなかつた如くである。次いで正保・延寶の最も信

用すべき御繪圖でも、現に手元にあるものは、何れも後立山方面は、山岳重疊とした描出で、國境の山名は總て省略してあるものである。従つて三國境などは掴み所の無いものとなつて居る。此等の繪圖は、幕府へ提出するもの故に恐らく防衛上または國境爭論上の不利を避けて、朦朧とした描寫を採つたものだらうと想像される。

この方面の始めて記録繪圖の上に姿を現したのは、元祿の交である。加賀藩に於ては、元祿の御繪圖作製の必要から、奥山廻役等關係役人をして、黒部奥山・越後・信濃國境方面を巡回せしめ、詳細な山中の模様を上申せしめ、繪圖作製に協力せしめた。この時出來たのが所謂元祿御繪圖といふものである。

當時、奥山廻役等の上申した三國境に關するものを拾つて見れば、

(奥山廻役宗兵衛留書) 元祿十年十一月

(前略) 越後信濃境目は鏈ヶ嶽峯通後ノ山尾崎、北ノ方ハ越後東ノ方ハ信濃ノ國境ノ由承及申候。

(同上留書)

一、越中・越後御境目鏈ヶ嶽より寺山迄ノ山、何も峯ヲ沿り御境目寺山、尾崎前山より東ノ谷下を涉り、越後荒澤川・大平川落合迄ハ越中御領ニ而御座候(下略)

(同上留書)

(前略)

一、越後境はちヶ嶽は、ゑぶりヶ嶽より南の方に當り申候。此間道程大概壹里程御座候。

一、同ゆきくらヶ嶽ハはちヶ嶽より南の方に當り申候。此間道程大概貳里程御座候。

一、同上駒ヶ嶽ハ、ゆきくらヶ嶽より南の方に當り申候。此間道程大概壹里程御座候。

一、越後信濃境鏈ヶ嶽へ上駒ヶ嶽より南の方に當り申候。此間道程大概貳里程御座候。

(後略)

此等の覺書と共に見取繪圖を提出した。それは『奥山御境目見通繪圖』といふものである。(挿圖参照)
如上の文書繪圖等に依つて、三國々境は鏈ヶ嶽を以つて當てたることを知り、其の記録振りや、また彼等の實地踏査して正確を期したといふ上申書より推して、此の重要地點の名稱は、餘程以前から藩廳や彼等の間には知られて居たものと、推察せらるるのである。

鏈ヶ嶽で最も注目されるものは、『奥山御境目見通繪圖』に畫かれた山腹の池と、信州へ越す道のことである。池は恐く熊池のことらしいが、信州へ越す道のこととは現時では判然せぬ。

(奥山廻役宗兵衛留書) 元祿十二年三月

(前略)

一、新川郡小川湯より鏈ヶ嶽江掛り山峯谷を越え越後國大所村と申在所江罷出申候へ共道と申ニ而ハ無御座候。

(同右留書) 元祿十三年四月

(前略)

一、越中信濃境鏈ヶ嶽より信濃國細野村迄大概道程四里程可有御座奉存候。

(中略)

一、飛州境上ノ嶽より越後境犬ヶ嶽迄ノ内ざら越并鏈ヶ嶽より信州江越道之外他國江越申道無御座候。

右の文書に現れて居る信州細野村、または越後大所村へ出る道は、大略當時の奥山廻りの定例登山路と變りは無いだらう、と考へられる。

この道は、黒部奥山が藩政の初期から、禁斷郷となつた爲、諸人の利用に任ぜられて居たのは藩政以前のことだらうと思ふ。

戰國時代などは、かかる高山深谷の細徑を利用して、軍事上の目的を達し、または交易上の巨利を占めるといふ幾多の冒險奇談の實例が存在して居る。彼の巷間に名高い佐々成政のサラサラ越の傳説も實にこの類で、越中では一部に此の鐘ヶ嶽道が、本當のサラサラ越であらうとの説さへ出て居るのである。この道は藩政時代に入つても、全然閉鎖することは不可能で、奥山廻役の巡回路であり、盜伐者や、採藥者や、岩魚釣が、奥山廻の目を盗んで、出入した山道であることは論を待たぬ。

さて、元祿以後、三國境、鐘ヶ嶽の山名は確然として定り、幾多の繪圖記録の上に現るゝことになつた。元祿の調査を反映した元祿十三年の『立山禪定並ニ後立山黒部谷等略繪圖』には、判然と『鐘ヶ嶽。信濃東越中西越後北三ヶ國出合。』と記されて居る。

次いで、享和年中の『奥山御境目見通山成川成御繪圖』、文化初頭の『奥山御境目並谷々川筋等略繪圖』等の、有名な加賀藩の黒部奥山秘圖を繕けば、何れも越中越後信濃三ヶ國の境は鐘ヶ嶽を以てして居るのである。

記録の上に於ても、前記の調査記録の外に寛文以降の彼等の見分登山記録が遺存して居て注目される。

(奥山廻役宗兵衛留書) 元祿十二年八月

一、私共儀毎々之通爲奥山廻七月廿七日在所罷立境川より大平川奥寺山下駒ヶ嶽江罷登越後境見分仕夫より黒部

川之内柳澤谷川より上駒ヶ嶽鐘ヶ嶽江罷登越後信州境見分任八月十四日に罷歸申候、當御領山之内御境目筋相替儀無御座候以上

元祿十二年八月廿五日

新川郡奥山廻

内山村 三郎左衛門

下梅澤村 市郎右衛門

太田本江村 宗兵衛

右の如き奥山廻役の登山報告書が、彼等の登山日記と共に、今日に遺存して居るので、寛文の昔から三國の境鐘ヶ嶽へ、彼等は毎歲たゆみなく登山して居ることが判るのである。

さて、當時三國々境に峙つ鐘ヶ嶽以下各山岳は、今日の如何なる山岳に比較され得るものか、前記宗兵衛留書や、各奥山廻り繪圖を按じて判断して見たい。ゑぶりヶ嶽は現在のゑぶり谷の源頭を爲す朝日岳のことであらう。越中では今もゑぶりヶ嶽と呼稱して居るものである。次の鉢ヶ嶽・雪倉ヶ嶽は、越中方面と越後方面とは、順列が顛倒して居るが、陸地測量部は越後の呼稱を採用して居るのである。續く上駒ヶ嶽は、當然白馬岳に該當する譯である。この上駒ヶ嶽の南方貳里の鐘ヶ嶽は、今日も白馬鐘ヶ嶽と云はれるものである。

當時上駒ヶ嶽が、何故に鐘ヶ嶽に一步も二歩も譲つて居たかと云へば、一に其の山容からであらう。上駒ヶ嶽は越中方面から眺めて、山頂は緩く傾斜し、近く野營に適する平を持ち、全體は圓味を帯びて女性的なるに引き換へ、鐘ヶ嶽は山容極めて屹峭であり、降雪も多く、全體的に尖鋭な感じのする山容で、仰いで好目標を呈して居た爲、之を推して目標としたのであらう。山頂の展望は、双方劣らず雄大至極であるが、後立山方面を見通す眺望は、鐘ヶ嶽が

些か優れて居ると云へよう。然し、後年に至るにつれ、鎗ヶ嶽も上駒ヶ嶽も見分の地點としては優劣なく、却つて上駒ヶ嶽の方が、登山道程上將又見分達成上の利便が次第に認識され、奥山廻りは此の地點に至るを以て足れりとする様になつた。今日白馬岳に登山して深く其の現實に感心するものである。

この地點は、信州越後への昔の間道があつただけ重要地點で、奥山廻役等が巡視すれば、必ず加賀藩領界の標記を残して來た。後年に至つては標木を建てたものである。

(大平村より奥山廻申覺帳) 享保十一年七月 内山村、三郎左衛門

(前略) 七月九日、水上谷泊り、但九日朝七つ時食を喰ひ夜明るを待居申候而上駒ヶ嶽江籠登則日歸りニ仕申候。

享保拾壹年、越中新川郡上駒ヶ嶽水流切越中越後兩國堺山

八月、役人、内山村三郎左衛門、西水橋勘左衛門

如斯幅四寸長サ貳尺厚サ壹寸三步の板ニ書付持參仕上駒ヶ嶽峯岩屋之内ニ隱入置申候 (下略)

加賀藩は、寛文年中福井藩と白山々頂の所屬を争ふて勝たず、又延寶年中支藩たる富山藩は、飛騨金森家と國界を争ふて敗るゝといふ失態を重ねた爲、境界問題には敏感であつて、奥山廻役等も此の間の事情を諒解して、萬一の用意をしたものと思はれる。

右の元祿年中の山名は、其の後長く變換を見ず、文化十一年十一月、藩廳へ上る「新川郡御縮山之圖」にも、三ヶ國境に屹立する山名は未だ鎗ヶ岳を以てして居る。が、間もなく文政時代に入つて、忽然と蓮花岳なる山名が出現して來ることになつた。之は加賀藩の地理測量からであると推せられる。

文政二年正月、越中國射水郡作道村の數學者石黒信由翁に、藩公よりの内御用として、加越能三州の地理繪圖作製の命が下された。

これから數年間、翁は老軀に鞭つて三州の測量に精根を傾けられた。文政五年九月、奥山地域の繪圖を完成する目的で、黒部峽口の舟見村の奥山廻役脇坂太郎右衛門方に滯留して、太郎右衛門等が奥山各地で測定した方位と、彼等の奥山智識と、在來の繪圖からと、三者を組合して精密なる野帖を作り、それを基礎として黒部奥山一帯の繪圖を完成せられた。この野帖の清記したものが、三州測量圖籍十二卷であり、完成した繪圖は、即ち加越能分間繪圖十三葉である。勿論黒部奥山一帯は、信由翁の踏査を見なかつたので、單なる概測圖に過ぎぬが、信由翁が各地から奥山の各峯頭の方位等を測定せられ、距離の決定も試みられたので、前記の奥山廻役等の智識と相待つて、在來に見ぬ奥山一帯の正確な繪圖が出来上つた譯である。

此の繪圖に於て、上駒ヶ嶽は始めて三州の御境目となり、南方に小蓮花・大蓮花の二峯を現出せしめ、更にこの附近國內へ不歸嶽・鍵ヶ岳を現出せしめた。

けだし、蓮花山の名稱は、當時黒部奥山の伐木頻々として行はれ、一方採藥者盜伐者の入山も多く、彼等は越後へ走り、信州へ下り、爲に兩國との交渉漸く繁く、何時しか蓮花岳の山名が、越中山廻役杣人足の間が高く知れ渡り、遂に彼等日常に使用することになつたのであらう。一つには、又、鍵ヶ岳の名稱が、其の尖鋭なる山容からして、漸次現旭岳に移りつゝあつたので、三國に境の鍵ヶ嶽との混同を避けてのことだらうと考へられる。尤も石黒信由翁は國境方面の製圖に際して、越後頸城郡の繪圖や信濃安曇郡の繪圖など、多く參考として居られたので、蓮花嶽の佳名なると、謙信採鑛に絡まる傳説の有名なると、又奥山廻役等の現在使用しつゝあること等、彼是考察せられた上、三州御繪圖の上に現出せしめられたものと考へられる。

今三州測量圖籍に依つて、現在地と彼是對比して見れば、新に現出せる大蓮花は、舊來この方面最高の山岳たる鐘ヶ嶽に置き換へられ、現在の白馬鐘ヶ嶽に擬せらるべきである。小蓮花は即ち之に隣る杓子ヶ嶽といつてもよいだらう。上駒ヶ嶽は在來と變りなく白馬岳である。この上駒ヶ嶽の南側へ、三國々境點を持つて來たことは、大いに注目すべきことだと思ふ。此の國境地點のことは、既に文化十二年の地方文書に現れて居る所である。

(笹川村縮方並山繪圖) 文化十二年四月、伊東次郎右衛門

一、越後御境は上駒ヶ嶽迄之所、此邊も信州御境同様ニ而山深通路立ヶ所一切無之候得共境關所より壹里半許上ニ大平村と申所有之村下ニ而越後荒澤川落合夫より下もを境川と申候。

思ふに、最初黒部奥山の智識尙幼稚な時代は、著名な目標になる秀拔な山を境界目標として、鐘ヶ嶽即ち大蓮花を選定したのであつたが、其の後奥山廻役等の登山見分を重ねるうちに、實際の地況が段々判明し、國境線たる山脈が實際上駒ヶ嶽に於て交ることが、判明したのでかく改めたのである。只上駒ヶ嶽の南側へ持つて來たのは、將來國境確定見分等の場合、頂上より向側へ三分許り降りた所が、國境なりとする當時の風習に従ひ、自己に有利に記入したものの如くである。

上駒ヶ嶽の南側の國境たることは、石黒信由翁の各著書にも明記されて居る。「増補大路水經」の中には、新川郡境を『信濃國境、十四里十町。山地。鷲羽ヶ岳ヨリ上駒ヶ岳南方。越後國境。九里六町。山地。上駒ヶ岳南方ヨリ北海迄。』と明記せられて居る。

かく炯眼な信由翁も、上駒ヶ岳と蓮花岳とは越後に於ては同一の山の稱呼であることを見抜かれず、鐘ヶ岳の著名にして雄峻なるに欺かれた奥山廻役等の言を信じて、之に大蓮花の山名を與へられたものの如くである。之は信由翁

の罪ではないが、翁自身の登山を見ず、奥山廻役等の智識を採用せられた過失であると云へよう。

白馬岳は信州に於ては、兩替嶽・薬師嶽等と取り違ひられ、越中に於ても上駒ヶ嶽と蓮花嶽との分離あり、山名の變轉には全く驚愕の外はない。

信由翁の加越能三州繪圖完成の後は、大蓮花の名稱は今日まで傳統して居て變りない。

今参考として、奥山廻役脇坂太郎右衛門が、大蓮花山頂にて測定した各方位を掲ぐれば、左の如きものであつて、今日でも略々正確と稱し得るものである。

(三州測量圖籍) 文政五年九月 石黒信由

一、大蓮花ニテ視ル

劍ヶ嶽 申二度七。立山 未廿一度六。小蓮花 丑五度四。エブリ 子八度一。加州白山 申十二度三。

さて、圖籍の中で、大蓮花の側方に畫かれた不歸嶽・鎗ヶ嶽は、今日では何れを指すものか。

鎗ヶ嶽は、山容よりして現在の旭岳であることは、地元の人々も齊しくいふ所であり、又當時の藩選と見るべき『三州地理志稿』の中に、『鎗ヶ嶽。在上駒ヶ岳之西。』といふのでも推察し得られる。不歸嶽は夜澤清水谷の源頭方面の地獄の存在する所で、俗に云ふ朱殿坊など一帯の稱呼である。現在の不歸岳は不歸谷の源頭に聳ゆる二〇五三米のものであるが、此の不歸岳とは違ふものである。

(黒部下奥山御境目廻御用扣手帳) 慶應四年、佐伯新左衛門

(前略) 六月廿四日、曇天ニ候得共押而蓮花山江御横目方等五人杣頭七郎右衛門作右衛門召運相登ル。姫川・丹波島相見ゆる、外ニ相見不申事。外杣不殘岩茸取ニ遣リ日暮ニ罷歸ル。

右の如く往昔越中地元の人々は、單に蓮花山と越後の稱呼と同様な呼び方をして居て、滅多に大蓮花と云ふ稱呼や書き方をしなかつた。

さて、大蓮花・小蓮花・上駒ヶ嶽の鼎立せる山名は、明治六年の越中國圖・明治十一年版の越中地誌略附圖・明治十六年の大屋愷欵作の越中地圖・等は勿論のこと、明治二十七年富山市中田書店發行の富山縣管内圖に至る迄、前記信由翁の三州分間繪圖を宗として踏襲して居るのである。

然るに、其の後越中方面では、上駒ヶ嶽と蓮花岳を漸く混同して考へられ、平凡なる山名の上駒ヶ嶽は漸次忘れられ、大蓮花のみ越中第一の高山にして、三國々境に屹立するものと喧傳せられるに至つた。特に明治三十四年の小學校用の課外教誨書『越中地理歴史』の下新川郡の部に『山岳。大蓮花山・小蓮花山・後立山・鎗ヶ嶽・雪倉ヶ嶽等高峻にして、大蓮花山は國中第一の高山なり。』といひ、次いで下新川郡志稿では、『大蓮花山は信濃の北安曇郡、越後の西頸城郡、及び我が郡に跨りて、高距二九三四米に及び、白馬岳と稱せらる。(地質調査所富山圖幅には、白馬岳とあり、測量部の地圖には大蓮花山とあり。』といふ記述が、最も明白に山名の變遷を物語つてくれる。

此に至つて、上駒ヶ嶽なるものは、遂に消失してしまつたのである。

明治四十四年測圖の、陸地測量部の五萬分の一地形圖が世に出でて、三國の境白馬岳の山名が信州側の稱呼に依つて出現するや、諸所の稱呼は一變し、長く白馬岳に落ち付くことになつた。鎗ヶ嶽といひ、大蓮花といひ、上駒ヶ嶽といひ、朝夕之を仰望親炙する人達に依つて、永年の間に其の稱呼位置が、自ら變轉して行くことは、不可思議に堪

へないが、これ又人跡未到の深山幽谷といへども、畢竟人間世界のものといふ感が、深く興趣を覺ゆるものである。さて、以上熟々越中・越後・信濃三國に於ける白馬岳山名の變遷を考察すれば、終始變らぬ稱呼は蓮花岳の山名である。また白馬岳の山名も、世人の思ふが如き新しく發生したもので無く、藩政の初頭より稱へられたと見るべく、其の位置は山麓千國村・鹽島村の双方より眺めて、多少の逕庭があつて、其の爲山名にも異を立てて居るのであるが白馬岳の稱呼は消失せず、永く存続して今日に至つた。従つてこの白馬岳の名稱が、又必ずしも代掻き馬から出發して居るか何うか、多少の疑問を残す點、大いに興趣を喚起させられるのである。

更に越中に於ける鐘ヶ嶽の名稱は、信州側と相通する唯一の山名でありながら、遂に其の後國境内に引き退り、大蓮花といふ越後側の山名を採用するに至つたことは、謙信の武名と、銀山の聲價とが、強く作用して居る山名として山岳地名研究上大いなる興趣を興へてくれるものである。この大蓮花が後年に至つて、實際の三國境といふこと、此の方面最高の山岳なりといふことが混和して、上駒ヶ嶽の地位に代換する結果となるの珍事もあつて、山名研究に更に更に興趣を重ねてくれるのである。

大日岳の山名

白馬連峯の小蓮華山には、大日岳の異名があることは、近代の登山書に現れ、地元の人々の齊しく口にして居る所である。

此の大日岳の異名は、明治初期以前の地理書繪圖類には少しも姿を現はさぬもので、其の發祥の年月當否など、漠然として確示することの出來ぬものである。

(白馬登山案内) 大正八年、高山館

白馬鐘ヶ嶽頂上に祠のやうな石がある。神體は何か、何時頃から祀つたか詳かでない。口碑には岳の地藏様で風神として祀つたと云ふが、實際の石像は、大日如來の座像であつて地藏様ではない。其の像は天狗の岩窟に安してある。

北の大日岳に奉祀された大日如來(立像)と同時代で、同一意味に於て建立されたものであらう云々。

(白馬行) 中部山岳第十五號・影山茂

小蓮華は一七六八・八米の海拔である。又の名を大日岳といはれて居る。頂に祠を建て、大日如來が祀られて居る所より起因して居る。白馬連峯は割合と人里近いのに宗教味に乏しい。立山方面のやうに、信仰を目的とする登山者の足跡は勿論のこと、記録傳説等にあつては殆どないが、唯大日岳の頂に、百五十年前、南小谷村千國の源長寺の僧が、大日如來の像を安置したと云はれ、一名「風よけ地藏」の稱があると云ふ。

源長寺は曹洞宗で、大町靈松寺の末寺である。明治二年一度廢寺を宣せられたが、後に又復活した。

如上二つの記事を仔細に考へて見れば、兩筆者共單に地方の傳説を聞いて記述せられたもので、實際に登山して大日如來または地藏様を、實見して居られぬやうである。

抑々百五十年前以前と云へば寛政享和の時代に當る。其の直後文政年中には、千國村對鹽島村新田村との村界山論が勃發したのである。

知つてか知らないでか、小蓮花山頂へ大日如來を安置したことは、此の方面は千國村の境域なりといふ伏線を張つ

たものか。又或は文政爭論以後急に安置したものと。何れにせよ、大日如來の安置なるものが、爭論の前後へ現るべきであつたが、其の事の見えないのは何うしたことか。

さて、も一つの大日如來たる白馬鎗ヶ嶽頂上の石像の大日如來が安置されたのは、明治初年のことであるといふ。之は神城村の長谷院チホコノイノが上せたものといはれて居る。長谷院は眞言宗であつて、之も明治初年一旦廢寺となり、後又復活を見たものである。

この二つの大日如來は、白馬館の記事の如く、同じ時代同じ風神として祀られたものとするれば、明治初頭を溯り得ること、諸種の條件からして先づ有り得ないことであらうと思ふ。恐らく鎗ヶ嶽温泉の悲惨事の後日供養として、風神を封じたものでないかとも考へられる。

前の越後糸魚川小學校長月橋正樹氏は、數十回の越後口白馬登山の經驗者であられるが、一日このことを伺ふと、大日岳の地蔵は相當新らしい明治中葉のものと思ふが、破損して居たと語つて居られた。海拔九千尺の處、風雪百餘年間では、石造の佛像など果して幾許の形狀を保ち得たか。古からざる石像こそ、其の造立年代を無言に物語るものでないかと思ふ。

何れにせよ大日岳なる山名は明治末期に出來た山名と斷じて間違はないであらう。

尤も明治二年迄は加賀藩山廻役が此の國境邊を巡回監視して居たので山頂の風よけ地藏様の建立など許容され得る餘地の無い筈である。許容されるとすれば明治以降のものに間違ひない様である。

白馬登山考

白馬岳登山の濫觴といはれ、又白馬岳の山名が世に現れ初めたのも、共に明治十六年の夏、北安曇郡長窪田畔夫が時の大町小學校長渡邊敏を伴うて、白馬登山を行つたことに因源を爲して居るといはれる。

然し、往昔に於て大蓮花と云ひ、鐘ヶ嶽と稱し、上駒ヶ嶽と呼ばれた頃は、全然一人の登山者もなく、無名の山岳として忘れられて居たか。越後方面に於ては、遠く戰國の末葉、上杉謙信によつて、蓮花山の金銀が採掘され、蓮花温泉を開湯して、傷病兵の治療に任せたと傳へられるので、人跡は既に元龜天正の昔から此の深山幽谷に印せられたと見るべきである。この傳説は確實な文献を伴はぬので、所謂傳説の域を脱せぬのであるが、當時富國強兵を旨とする時代であり、戰國時代各武將の強烈な採鑛熱を見ては、單に傳説なりとして片付けられぬものである。

其の後元和三年六月、高田藩主が蓮花銀山開發の目的を以て、山内見分を試みた記録が、山麓大所村に遺存して居るが、當時最高峯の大蓮花方面まで、隈なく探險調査して銀山を見立てたことは確實で、此の記録（後に掲載する）こそ、蓮花山一帯に人跡を印した最も初期の記録であらうと思ふ。

其の後越中方面の登山では、慶安元年七月、加賀三代藩主前田利常侯に依つて試みられた黒部峽谷探險の壯舉であるが、此の時は針ノ木峠を主として、黒部峽谷の方は従とされた爲に、三ヶ國の境鐘ヶ嶽見分登山の壯舉は、決行されなかつたものゝ如くである。但し利常侯は此の見分登山の決行を命する直前、慶安元年江戸を發して歸國の途次、信越の間道根智越を志し、蓮花山下大所村に一泊せられた事實が、微妙院公御夜話に載せられてある。此の時利常侯は、蓮花山は三國の境を爲して居り、古來越中小川温泉へ抜ける間道が存在して居ることなど、黒部奥山の地理狀況に付いて大所村の山岸七兵衛等の古老から縷々説明を聞かれたことだらうと思ふ。是に於て、何事にも慎重な侯は、此の藩の東邊の重要地點が放任されて居ることに危惧せられ、俄かに途上から立山山麓芦峠寺村佐伯十三郎を召致し藩臣の黒部探險の案内役を命ぜられた如くである。

此の探險の結果、黒部奥山が軍事上經濟上の重要地なることが判明し、從來の禁斷郷は益々強化せられ、奥山廻役の創設ともなつたのである。

鐘ヶ嶽道の記録に就いては、元祿十三年黒部奥山見通繪圖の他に、奥山廻役宗兵衛留書がある。(之等は前章にも掲げて置いた。)『鐘ヶ嶽より信州に越申道之儀御假繪圖に道形無御座候得共、先年三郎左衛門信州江罷越申砌、此道ヲ罷通候。併しさら越同時に極たる道筋は無御座候。』とあるものや、『新川郡小川湯より越後大所村迄廿里程、内拾七里程小川湯より越後御境目迄。』などの記述がある。

鐘ヶ嶽道は恐らく戰國以前から拓けて居たものであらう。越中・越後・信濃に通ずるこの間道は、謀者・密貿易者・軍使等には最も安全な捷路として、彼等が往來したことは想像されることである。殊に戰國の末期此の道の末端たる信州細野方面には、小谷七人衆の鹽島勘兵衛あり、越後大所には同じく山岸豊後守あり、新川郡の武田方の雄たる立山衆徒や、其の他の武將土豪と、氣脈を合はせる一條のよき捷路を爲したといつてよい。この有利な間道の存在すること、また針ノ木峠の有用なこと等を、見聞せられた加賀藩初代の前田利家侯によつて、先づ黒部奥山廻役の先驅である黒部奥山監視の元縮内役なる者の任命を見、次いで三代利常侯に至つて奥山廻役の創始となり、固くこの道は閉鎖されてしまつた。然し一部の人々には秘かにこの道の存在することが知られたと見えて、諸書に越後上陸越や、信州針ノ木峠越と混同した話説を傳へて居るのである。

さて鐘ヶ嶽道を越えた最初の記録は前記宗兵衛留書に見ゆる元祿の初頭、内山村三郎左衛門が所要あつて信州へ此の道を辿つて越えたと云ふ記録である。三郎左衛門は、小川温泉から越度峠を越え、柳澤から櫻薙五枚尾の嶮を攀ぢ、清水平から鐘ヶ嶽に掛つて、後年奥山廻りの定例道となつた山道を辿つて行つたことと想像される。鐘ヶ嶽・上駒ヶ嶽の壯快なる登山も、一期の思ひ出として決行したことは勿論であらう。彼の山日記記録で、今日に遺存して居るも

のが、七、八冊も數へられるが、この時の日録の散佚は如何とも残念千萬である。

次いで元祿十年七月、加賀藩御繪圖御用の爲に、奥山廻役太田本江村宗兵衛・下梅澤村市郎右衛門の二名が、上駒ヶ嶽へ山内見分登山したことが、宗兵衛留書に見える。續いて元祿十二年八月には、奥山廻役内山村三郎左衛門・下梅澤村市郎右衛門・太田本江村宗兵衛の三名が、上駒ヶ嶽を究めて鐘ヶ嶽に登攀した旨、覺書に認めて居る。恐らく彼等こそ、確實な記録上の白馬岳・白馬鐘ヶ嶽の最初の登攀者であらうと推察せられる。

(奥山廻役宗兵衛留書) 元祿十年十一月

(前略)

一、上駒ヶ嶽に登り、下駒ヶ嶽の方御境目と見通し候而、夫より鐘ヶ嶽・がきが嶽・後立山・此山かへらずが嶽・犬ヶ嶽難罷越候故峯通御境目ヲ見通し罷歸申候。

(中略)

一、越後信濃御境目は鐘ヶ嶽峯通後ノ山尾崎北ノ方ハ越後東ノ方ハ信濃ノ國境ノ由承及申候。

(下略)

(奥山廻役宗兵衛留書) 元祿十二年八月

私共儀每々ノ通爲奥山廻七月廿七日在所罷立境川より大平川奥寺山下駒ヶ嶽罷登越後境見分仕夫より黒部川之内柳澤谷川より上駒ヶ嶽・鐘ヶ嶽江罷登越後信州境見分仕八月十四日罷歸申候(下略)

時は元祿の中葉、早くも白馬岳に奥山廻役等の續々たる登山を見て居たことは、以て偉とすべきことではないかと

思ふ。殊に奥山廻役等は地方豪農であつて、加賀藩の百姓代官を勤むる人々である。よくも十數日に亙る困難なる登山を、實行出來たものと感歎を禁する能はぬものがある。

元祿以降、加賀藩奥山廻役は、杣人足八名を従へて、隔年毎に下奥山たる上駒ヶ嶽を経て、鑓ヶ嶽に見分登山を施行して居たが、寛保年中奥山方面に、盜伐事件が頻發したので、人足も増加し、登山期間も延長して二十日以上とし、奥山一帯を綿密に見分することとなつた。後年登山見分の範圍も、後立山まで含有することとなり、天保以降は此の見分登山を毎年施行することとして、明治維新に及んだ。

彼等の登山路日程は、何の様なものであつたか、彼等の日記を掲げて検討して見たい。

(黒部下奥山御境目廻御用扣手帳)、慶應四年、佐伯新左衛門

(前略)

六月十八日。北又泊

小川温泉辰刻比出立、湯元親司オヤジ見送りいたし段々小川谷通り罷登り餓鬼咽ウヂニ而一休、ヲヤス谷ニ而一休、ギヨキ落シ中食、夫より横山峠登詰。但此所ハ御縮山と山崎村と御境也。ブナの木に先々より登山人の姓名記有ル、小川之水源也。

夫よりサカサマ谷川へ下ル是ハ北又川江落合黒部川へ出ル也。北又川之縁藤橋ニ泊ル。四里半。

同十九日。晴天。柳澤泊

北又出立、吉足と申場所ニ而山指越いたし小山ニ候得共至而早く夫より内山むげの川原に而小休いたし夫より東方ニ當り横越ニ山走り至而早ク暫ク也、夫よりから谷川原ニ而一休いたし杉谷大桂の下タニ而中食致し谷通り

餘程登り峯起いたし柳之上谷罷下り、八ツ時比柳澤小屋場江着、夫より柳澤川見分いたし候處致而深ク早々爲取掛七ツ半時迄橋掛渡す。

筒井氏杉木氏初登山に付酒貳升あじ壹尾宛杣等ニタラセル。

同廿日。晴天。

辰刻比柳澤出立小屋場向より川上江横越ニ三町斗り登り、夫より小瀧有ル瀧通り拾丁斗り登り追分と申處ニ而一休、追分より拾丁餘笹原登り皮小屋と申場所ニ而小休先年中食所也、皮小屋ニ而丑ノ十五度ニ當ル朝日と申高き山有ル、内山なにかげ亥ノ廿七度に當ル、夫より十五丁斗り山竹原罷登り候處刈安坂と申而至而急也、夫より櫻雜小穴と申而少々平有る此處ニ而一休、峯通三丁斗相進ミ櫻雜窪例年之小屋場ニ而中食いたし一統相休居候處俄ニ風雨ニ相成り無據櫻雜窪に晝泊り。

同廿一日。晴天

辰上刻出立、櫻雜峯ニ而休、砥石谷ニ而一休、例年之通石ニ名前書付、小猫ニ而小休、夫より猫ノ躍場へ四ツ半時比着、同所ニ而中食、夫より清水平例年之小屋場江九ツ半時比着いたし候處雪消水六ツか敷候ニ付同所より下段ニ下り候處猶又先年小屋掛罷在候處ニ水流有之ニ付清水平下段ニ小屋爲打同所ニ而立札左之通相調杣頭江爲持す。

目付役 勝見字太郎

山田安之助

加州境目見分

山廻役 筒井武平

佐伯新左衛門

杉木彌作

慶應戊辰年六月、杣召連登山。

右清水平下段ニ而兎壹疋杣頭與十郎召捕山中相樂ミ、同日雷鳥三羽杣共之内取參り早々杣頭作右衛門江料理申付味噲つけにいたし候。

同廿二日

大風雨に而朝食事も相成不申出立六ツケ敷案申罷在候處四ツ時頃より晴天ニ相成り一統悦入四ツ時比より清水平下段出立、祖母ノ平ニ而一休、夫より壹丁ひつり相通り不歸谷向水流之場所ニ而一休、夫より横越ニ登り詰七丁斗り下り少々登り先年より蓮花山小屋場江八ツ半時頃着。

同廿三日

曇天ニ候得共押而蓮花山江御横目方等五人杣頭七郎右衛門作右衛門召連相登る。

姫川丹波嶋相見ユル外ニ相見へ不甲事、外杣共不殘岩茸取ニ遣日暮ニ罷歸ル。

同廿四日

曇天早朝蓮花山小屋出立清水平ニ而一休、大鼓山ニ而一休、猫ノ躍場ニ而中食、夫より樫雜峯通七ツ時頃柳澤小屋場江着いたし暫く相休例年之通橋木取除爲致候事。

同廿五日、曇天

柳澤辰之刻頃出立から谷川原ニ而一休いたしサカシマ谷通横山峠打越小川温泉へ八ツ時頃着。

如上の日記を平たく記して見れば、先づ初日は小川温泉を早朝出發して南下し、横山峠（越道峠）を越えて黒部奥

山へ入り、倒谷川サカシメニシと北又川の合流點下手の川縁の藤橋に達して一泊する。この藤橋は橋の名から来て居るものである。第二日は早朝出發、カラ谷川の出合で大休止して杉谷峠（横山峠とも云ふ）へ掛る。この峠の大桂は古來有名なもので、各奥山廻役等の必ず休息して行つたものである。杉谷峠の難路を越えて柳又谷へ下り、川岸の柳澤小屋場に第二夜を送る。此の日柳又川に架橋するのが例とされて居る。

第三日、柳又川を渡つて樗薺の尾根に取り付く。樗薺谷へ越ゆる鞍部柳峠へ出て、間もなく追分である。右折すれば深層谷道であるが、左折して現在の猫又山の尾根道である樗薺蓮花道へ掛る。先づザラク坂より樗薺の尾根へ出て、皮小屋・カシナギ小穴等に一休しつゝ樗薺に達して第三日の夜營をする。右の地名は一寸圖上に示し難いが、樗薺谷寄りの尾根の一小窪地である。

第四日は樗薺窪を出て樗薺峯へ登り、砥石谷を経て、猫又山の一角たる小猫に達し、間もなく猫の躍場へ出て中食となる。次いでナル谷の源頭近く聳ゆる五枚尾の嶮を越え、須吳の峯を左に見て、清水平に至つて第四夜の野營を営むのである。須吳の峯は朝日岳とも稱し、現在の清水岳北端の名稱である。

第五日は清水平から蓮花山下小屋場に至つて見分するのであるが、此處は現在の村管小屋の附近である。

第六日は蓮花山に登山し、諸方を見渡して見分し、用の無い人足は、總て岩茸採りに出すのが例とされて居る。

さて此の時代の蓮花山見分登山といふ蓮花山は、各種奥山日記の記述振りを比べて見ると、大蓮花といはるゝ白馬鎗ヶ嶽のことではなく、上駒ヶ嶽といはるる白馬岳に登山する謂のやうである。享保時代は上駒ヶ嶽を以て、下奥山見分地點として居たが、以來この附近に盜伐者や、藥草採りが頻りに出沒して奥山を荒すので、再び元祿時代の如く、鎗ヶ嶽見分登山を再興し、遠く後立山迄も見分道程を延伸したのであつたが、弘化二年に至つて、後立山見分を廢止し、蓮花山止りの見分登山に改められた。尤も越後信濃の國境の見分は上駒ヶ嶽へ登山すれば充分であり、祖母谷・

祖父谷・餓鬼谷方面は、須吳ノ峯へ登山すれば充分見分出來得るので、當時上駒ヶ嶽を見分登山の終點として、之を蓮花山頂見分と號して居たものゝ如くである。

文政の三州測量圖籍も、丈久の越中新川郡組分繪圖の如き權威ある繪圖に於ても、下奥山見分道程の終點を上駒ヶ嶽として居ることは、極めて注目すべきことである。

(黒部下奥山御境目廻御用扣手帳) 慶應四年六月、齋木新左衛門

今般黒部下奥山御境目筋爲見分御横目足輕中同じ私共儀前十四日在所出立小川谷より登山仕横山峠を越夫より黒部奥山北又谷柳澤谷深層谷猫又谷通須吳之峯江登り祖母谷祖父谷等見分仕候處、異變之儀無御座候。夫より須吳之峯通り清水平を打越蓮花山頂等江罷登り越後信州御境目筋見分仕尤成限り相進後立山谷餓鬼ヶ谷得と見渡候得共御境目筋前々之通聊相替義無御座候(下略)

依而此段御達申上候以上。

慶應四年七月

御郡所足輕
山廻役兼帶 筒井武平

奥山廻役 齋木村新左衛門

奥山廻加入 石割村 彌作

新川御郡所

如上の登山は、蓮花山見分登山の直線コースであるが、之に後立山・祖母谷見分の任務が附帶すれば、コースは相當違つて來る。

即ち第三日は、柳澤小屋から柳峠を経て追分に出て、此處で右折して深層谷道を取る。先づザラク坂の嶮を左に仰ぎ、カシナギ谷に下り、次いで樫雜峠に登り、深層谷に下りて深層小屋場に至つて野營する。

第四日は、深層峠を越えて猫又谷に入り、猫又小屋場に至つて一泊するのであるが、此の日は相當に難路に惱まされるのである。

第五日は猫又峠を越えて祖母谷に出で、後立山（鹿島槍岳）へ志すのであるが、蓮花山登山には、猫又峠の途上から尾根を絡んで、須吳の峯へ攀ち、清水小屋場へ達して一泊する。此の道程は直線コースより一日の遅延を見るが、祖父谷祖母谷を見渡し、見分するには必須の道とされ古來より拓けて居たものである。

さて蓮花山に登山し見分を了へた翌第七日は、蓮花山下小屋場を出て、清水平・猫躍場・樫雜峯等を一氣に駆け下りて、柳澤小屋場に達し一泊する。先きに架設した橋を切り落すのが例とされて居る。

第八日は柳澤小屋場から、小川温泉まで下つて山旅を終へ、一兩日滞在して山中の鬱氣を拂ふのも、亦例とされて居る。

以上二つのコースは、古來から開けて居たもので、各書に散見されるものである。今日は樫雜道並に深層谷道は共に利用されず、所在を失つて居るが、交通機關の具はらぬ昔時に於ては、最も合理的に至便な道であつたことは、今日地圖を按じて見て、深く了解出来るものである。因に、三州測量圖籍には、深層峠よりの見通しとして、「猫又峠、己廿七度。カシナギ峠、亥廿七度。」と記入せられて居る。今日圖上に所在を求むることが出来る興味ある記述である。

さて此の間、越後方面では、蓮花銀山見分が天保十年に行はれ、天保十三年よりは、豊後國金山師善九郎等に依つて、採掘が行はれることになつた。當時高田藩並に善九郎等に依る山内見分調査は頗る周密を極めたと見るべく、白馬岳方面は隈なく足跡を印したとと推察するに難くない。特に天保十三年蓮花山等大所村領繪圖など、山内の詳細

極まる繪圖が出来る等、此の方面は銀山採鑛着手と相待つて、頻りに入山者を見ることになつた。弘化三年蓮花温泉開湯と共に、更に入山者が加はり、三國々境の蓮花登山者をも見たことだらうと想像せられる。

さて、越中・越後方面の蓮花山登山見分の盛んなるに引き換へて、長く人々の耳目に入らなかつた信州側白馬岳登山も、探査して見れば速く藩政の初期より山名を存し、登山者も必ずしも皆無だつたとは考へられぬのである。只此の間直接の記録を缺いて居るので、確言し得ぬのが残念である。

享保七年五月、松川入の山地に就いて、細野村と新田・鹽島村との間に争論が勃發し、遂に乗鞍ヶ嶽へ、幕府並に松本藩吏が登山見分する大事に至つたが、要するに松川南入・北入の入會權の問題が主だったので、人跡を斷つて聳立する白馬岳には、一言半句も觸れずに終つた。

この山論は結局大町の大年寄役等の仲裁で、二十餘年もみ抜いで落着した。

次いで勃發したのは、文政七年の千國村と新田村鹽島村との山論であつた。之も勿論山麓の草干場の境界歸屬の問題であつたが、延いては白馬岳に至る廣い兩村境界確定の争でもあつた。之は境界見通の基點となる白馬岳の名稱が、双方共に異を立てて居るので、仲々埒明かず、幾度か法廷で争つたが結審せず、年月を経過し、天保十三年に至つて時が仕てくれた様に解決した。

如上二つの山論の際には、山々の繪圖も立派に出來、山名地名なども双方共に明確に書き出したのであるが、單に草干場の争奪や、村界の決定だけに、人跡斷絶した白馬岳の所屬などは、差まで問題とならず、標點となる白馬岳のことも、嶽へ見通しといふ一語で簡単に片付けられたやうである。従つて白馬岳見分登山など見なかつたことは當然であつた。

次いで此の附近で起つた問題は、山林伐木のことであつた。天保九年、江戸西丸焼失再建の爲、御用檜材を、黒部奥山祖母谷附近から伐り出すことになつたが、其の搬出路は信州側であつた。

請負者は江戸の中村屋七兵衛で、白馬岳を越して信州細野へ搬出したが、當時の記録が散佚して居て全貌を求め難いが、拙藏の「新川郡山地繪圖」の記入には『御造營之刻杣三百人之内松倉ノ淺次郎先達ニテ二十六人ヲ以テ伐出ス。』『此邊御造營之刻初而伐出し有。』

とあつて、白馬岳登山は勿論のこと、信州側からする黒部祖母谷方面の道路も拓けたことと想像される。當時白馬岳へ登山する信州側道程は如何なる箇所を辿つたか、想像するも興趣ある問題である。

此の間、越中方面では、享保の初頭と加賀藩醫の黒部奥山採藥のことあり、降つて文化文政時代には、屢々奥山伐木のことがあつて、奥山へは相當人口も入り込み世の視聽をも浴びた。又越後側では、蓮花雪倉銀山は斷續しつゝ採鑛を續け、蓮花温泉又人口に膾炙して、世人を吸引して居たのであるが、如上三國共大蓮花の峻嶮を越えて相犯す事件も發生せず、明治維新を迎えたのであつた。

明治三年、加賀藩山廻役は廢止となり、奥山の解放を見ることとなつたが、一帯は官山として國有林となり、依然世人の入山を拒んだのである。かくて稀に訪れるものは、採藥者か、金山師か、盜伐者か、岩魚釣で、時代はかかる奥山の深山幽谷に目を付ける者なく、何時しか山徑荒廢湮滅して、後世登山家をして人跡未到の地なりと呼ばしむるに至つた。

彼等は後立山連峯に、神祠佛龕なく、又一つの登山記録あるなく、従つて人跡も稀なりと斷じ、總て之れ處女地の如く論じて居るのであるが、事實は然からず、越中方面に於ては、毎歲奥山廻役の見分登山を見て居り、越後側に於ても屢々山師達の銀鑛探査の見分登山を見て居たのである。此の神祠佛龕なき事實は、加賀藩の境界を爲す黒部奥山

一帯、即ち飛驒・信濃・越後國境の特徴であつて藩是として自他國人士が登山して、國境線を紊るが如き營造物の建立を、奥山廻役に於て武力を以て一切禁絶したが故である。

顧るに白馬岳の登山は、戰國時代越中小川温泉を起點として、鍵ヶ嶽を攀ぢ、越後大所村、又は信州細野村へ出る間道の所在に依つて、人知れず試みられて居たことを知るのである。

次いで藩政期に入つては、天保年中の越後國蓮花銀山見分に依るを嚆矢としよう。其の後承應以降、加賀藩奥山廻役の制度創設に依つて、毎歲黒部奥山への見分登山が行はるることになつたので、白馬岳の登山道など逸早く拓けたものである。此の間この地帯は藩の伐木や、採藥者や、盜伐者の登山相次ぎ、山中の人跡は想像以上に頻繁を極めたことは、奥山廻役等の諸事留書が物語る所である。只此の間の事情は、禁斷郷黒部奥山なる爲、關係者も口外を禁ぜられ、世に表はすこともなく消失せしめたので、現代に至つて人跡未到と誤認せらるる結果となつたものである。

信州側松本藩の山廻役も、水野家の時代に既に見分を實施して居たが、此の方面の國境山岳は、平野より直に創立して展望自在なる爲、單なる麓山の展望所に登つて見分し、満足して居たことは、彼等の見分日記が物語る所で、高山大岳へは一步も踏み込むことを爲さず、村々邑々を巡回して引き上げたものである。之れ一つに六万石の小松本藩の財政がかく爲さしめたのかも知れない。

享保以後の山論に際しても、白馬岳一帯は單なる目標物以外の何物でもなかつた。文政の山論以降は、記録繪圖より判じて、村民の登山は稀に試みられた如くであるが、定かではない。天保の御伐木には、勿論信州人士大勢の登山を見たことであらうが、其の記録を何處に求め得べくもなく、登山の状態また確示し難い。

かくて藩政時代、信州側に白馬岳登山記録皆無であつたか。否、必ず登山史實は存在すると確信するのであるが、

其の發見は今後に待たねばならぬ興味ある問題であらう。

明治維新後、文明開化の風潮は、此の深山幽谷の存在を忘却させて、各方面の入山は一時大いに衰へた。信州方面に於ては古來猥りに岳の神聖を汚さば、天變地異一時に至ると信ぜられただけ、一時人跡を斷つこととなつた。

然るに、明治中葉より白馬岳登山の簡易にして津々たる興味あることが世上に發表さるるや、俄かに注目の目標となり、登山者相踵いで至り、山岳界の寵兒となつたのである。思へば、時勢の變遷と人心の歸趨は、實に計り難く、興味深いものといはねばならぬ。

追悼

榎谷徹藏氏を偲ぶ

西岡 一雄
藤木 九三

榎谷さんの關西岳界における存在は、關東における木暮さんにも似て『岳人の父』として慕われていた。それだけに、その逝去は限らない寂しさと呼んだ。殊に戦後のドサクサがまだ充分に恢復しない際とて、その訃報を知つたのも亡くなられてから一ヶ月も経過してからで、殆んど岳人の誰もが葬儀にも参列できなかったのは痛ましい限りであり、J・A・Cの關西支部としては一夕哀悼の集りをもち、御遺族の代表をお迎えして故人を偲び、せめてもの冥福を祈つた次第である。

いつたい、榎谷さんが遺された大きな業績については、關西の岳界ではあまり知られていず、むしろ關東の人々の間に著名であった。というのは、榎谷さんが活躍した時代が、わが國山岳界の黎明期であり、山登りというよりは探検時代に属している、日本アルプスといつても關西ではまだ一般的に馴染が薄かつたからであつた。したがつて榎谷さんは常に關東における小

島、高野さんあたりの山岳界の元老連が對照となつていて、關西の岳界には殆んど相棒といつたものがなく、常に孤軍奮闘といつた形であつた。そして榎谷さんの業績が「山岳」誌上に發表されるごとに岳界の問題となり、紀行以外に雜録欄などを通して花々しい論戰を交わされたのは目ざましかつた。殊に關西にあつては、スポーツ・アルビニズムの先驅としてR・C・C（ロック・クライミング・クラブ）が結成を見るに當つて、榎谷さんに大黒柱となつて貰つたことは、そうした榎谷さんのパイオニア・ワークに寄るかかつたわけで、一時事務所を榎谷さんの宅に置き、テキストとして發行した『岩登り術』の發行所ともなつており、葛の葉を意匠とするR・C・Cの徽章も、氏にお願ひしてできたのだつた。

榎谷さんが山に關心を持ち初めたのは、徒步術に常人以上の關心を有たれたお父さんからの『親ゆずり』ともいふべく、それに子供の時から繪筆に親んだためらしい。それは恰もウィンパリーの經歷にもにて、榎谷さんの本職が畫家であることは知る人も少く、晩年矢崎千代二氏からパステル畫を學んで、しばしば個展を開かれたので、初めて畫家であつたと悟つた人も少くなかつた。その上榎谷さんの趣味は極めてひろく、音楽・映畫・劇はもとより、語學にかけては英、獨、佛に通じ、あらゆる方

面に天才的なするどいひらめきが見られた。殊に話術にかけての研究は手に入つたもので、榎谷さんのデユスチュア入りの山の話は他の追従を許さなかつた。しかも榎谷さんの山の智識は世界の全般にわたたり、ヒマラヤの研究にかけても見識が高く、なんとか生前中に氏のヒマラヤに關する研究を纏めておきたいと寄々仲間て語り合つたほどだつた。そうしたわけで、榎谷さんは單に岳人として許りでなく、關西における文化人として社會をリードした分野は極めて廣かつた。

榎谷さんが日本アルプスに踏みこんだ最初は明治四十年で、乗鞍と槍ヶ岳に登り、その紀行は「山岳」第三年・三號に『槍ヶ岳の嶺』という題で、頂上から望んだ二葉のスケッチが添えられ、晝號の紫峰が用いられている。またこの年三月にはすでに冬山をこころざし、吉野川の上流にマッターホルンの形にそびえる高見山の雪中登山をこころみていることは偉とせられてゐる。

槍ヶ岳の初見參にひきつゞいて、翌四十一年には有明から中房を経て燕、大天井、常念、蝶の縦走から上高地に下つて燒に登り、さらに歩を轉じて吉田口から富士の頂上を極めて大宮に下る二十五日にわたる山旅を敢行し、引きつゞいて四十二年には御嶽、西駒、八ヶ岳、甲斐駒をおとすれ、それらの成果は「山

岳」第五年・二號の『甲州駒ヶ岳』および同三號の『信飛越國境脊梁山脈登攀記』のタイトルとなつて發表されている。この前後が榎谷さんの山歴のもつとも華やかな時代で、その精力の絶倫と、意氣のさかんであつたことは偉とするに足らう。

右の記録でもわかるように、榎谷さんのアルプス入りは毎年くわだてられ、しかも年を追つて難コースを踏破しており、明治四十四年にはアルプス中に殘された最難關といわれる後立山の大縦走をくわだて、祖父岳を振り出しに鹿島槍、鳴澤、赤澤、スバリ、針ノ木に出で、さらに蓮華、北葛、七倉、不動から鳥帽子に向い、黒岳、鷲羽を過ぎて槍をきわめて上高地に下り、山中二十四日間にわたつて三十四座の頂に立つという偉業を完成している。その頃の後立山といへば、白馬三山をのぞいては餘り知られておらず、大黒越えとか、針の木越えなどによつてその附近のピークが個々に登られた程度で、尾根傳いの大縦走はほとんど人跡を絶つという難コースであつた。この山行は同年八月三日に大町の對山館を發足し、籠川入りで爺の種池をへて鹿島槍に取りつき、それから三千米突を上下するスカイラインを南走したもので、その野心的なプランの完成は當時の山岳界をアツといわせたものだつた。(後立山山脈峰傳ひの記)『山岳』第七年・二號)そして途上著しい峰頭からはそれぞれ周觀寫生をはじめ、水彩畫、スケッチなど七十三個の收穫を収めた

いうから、その得意さは想像されよう。そしてこの時の山行を基礎として書いた『北アルプス瑣談』（第七年・一號）中の割物岳、三ノ澤岳あるいは東澤ノ頭などと命名された呼稱をめぐつて、賑やかな論争がくりかえされたのは、當時の岳界の情勢を知るエピソードとして特異な文献である。（『北アルプス瑣談に就て』「山岳」第七年・三號、『再び北アルプス瑣談に就て』「山岳」第八年・三號）。

それにしても、榎谷さんのこうした記録的な山行の多くが、常に單獨で決行されていることは特に偉とされる。それは當時の關西方面の情勢として已むをえぬことで、その頃の關東方面で企てられたものが概して山仲間協力によつて行われたのと同じく對蹠的だつた。従つて榎谷さんはそれぞれの地方の獵師や岩魚釣りを案内として同伴したもので、多くの場合獵師横澤類藏がリーディング・ガイドとして従つていた。

その頃の逸話として、榎谷さんの面影を憶はせるものは、明治四十一年、中房から燕、大天井のコースを辿つて二度目の上高地入りをした時、偶然にも清水屋で日本山岳會の長老大平晟氏と會見して、ともに山を語り、山登りを論じたものだつた。その時の模様について大平氏は「山岳」（第四年・二號）に『燒岳』という一文を寄せて次ぎのように書いている。

『（前略）況や隣室同好の客あるに於てをや。客は榎谷徹藏氏、大阪の人、名刺の交換によりて、互に山岳會員一味の士たるを知り、談話は忽ち山岳に入りぬ。氏は山岳趣味を其得意の水彩畫に於て發揮し、昨年既に此境に遊び、槍ヶ嶽、笠嶽等を窮め、本年復、中房温泉より燕、大天井、常念、蝶の諸岳を跋渉して此の地に入り、筆を神祕の境に馳すること數日、その快心想ふべきなり。』と、漢文句調で語られていることが、特に『あの頃』を憶はせるとともに、正に山の兩雄の會見ともいふべく、榎谷さんが初めて知己を得たよろこびも察しられては、笑ましい。もつとも、その頃の關西岳人として知られた人々に今村幸男、加賀正太郎、田中喜左衛門、塚本永堯などの諸氏があり、それぞれパイオニアとして活躍していたが、榎谷さんは畫人としての立場からか、常に單獨で山入りしていたことが特長とされる。しかもその業績は廣く、かつ深く、當時「大阪朝日」にいられた長谷川如是閑氏がプロモーターとなり、一戸直藏、河東碧梧桐兩氏を誘つて企てた針ノ木から槍にいたるいわゆる『日本アルプス縦斷記』の記録的な山旅も、榎谷さんのアドヴァイスに負うところ少くなかつた。

さらに、榎谷さんの業績として大きなものは、先きにも些つと觸れておいたが、日本アルプスにおける冬山に先蹤者としての足跡を印していることだ。すなわち大正十二年の十二月から

翌十三年の一月にかけて飛驒の高原川をさかのぼつて大多和峠から有峰に入り、當時名古屋の伊藤氏が藥師岳の麓の眞川に建てた小屋を根據として、元且の上ノ岳の頂上を極めていることだ。その紀行は「山岳」第十七年・三號に『雪の上ノ岳へ』として發表されているが、おそらくJ・A・Cの機關誌に載つた冬山紀行としても古典的なものに屬し、平明・淡白な行文のうち、冬山のユニークな情操があふれた珠玉の文である。

榎谷さんの山行が、常に單獨行であるといつたが、もちろん例外もある。上ノ岳行には關西の山スキーの先輩である山口季次郎君や筆者も參加したほか、大正十三年の北海道行には中原繁之助君が同行しており、阿寒に登り、屈斜路から摩周湖に長期の旅を試みている。

わたし達は曾て、榎谷さんが大阪の梅田近くに居を構えていられる頃、R・C・Cの所用で時々お宅を訪ねたが、その頃すでに、氏の紀行を集められた手記『山紫水明』は、おそらく二十巻近くに達していたと思う。それはお手のものゝ凝つた意匠の装幀で、口繪や挿畫はもとより、文章は敷卦を透して克明な細字でしたためられた努力の成果であり、一字一句をおろそかにしない凡帳面な性格の一端に觸れた氣がして、襟を正さないでいられなかつた。この貴重な文獻（同時にそれは畫獻でもあ

る）は、未發表の稿本として死の間際まで書きつゞけられ、全三十一巻に達しているが、まつたく敬虔の念なくしては觸れることのできない努力の結晶である。

榎谷さんが、畫の先生として甲陽中學に通われていた頃、わたしも甲子園に居を構えた關係で、しばしば先生を畫室に訪れ、またわたしの宅にも來られて親密な訪往を交わした。その度にアルプスを語り、ヒマラヤを談じ合つたが、氏がヴェトリオ・セラの寫眞や、その他の文獻の挿畫から複製された緻密なヒマラヤの畫集を見せられて感激したものだつた。甲陽をやめられからは、主として畫作のための自由な山旅をつゞけられ、年に二、三回は大町や上高地を訪ね、得意のバステル畫の個展を催うして悠々自適されていたが、作品としてはやはり水彩畫の方が味があり、傑作もこの方に多かつたようだ。いつたい岳人といえは、何となく頑強一方で粗野な感じを思わせるが、その點榎谷さんは瘦身で、神經質でありながら、人をそらさず、得意なアゴ髭をたくわえて、いつもニコ／＼顔で人に對せられ、若い岳人たちにとつて眞に慕わしい好々爺であつた。

榎谷徹藏氏年譜

明治十六年八月十四日 大阪市北區中ノ島に生る。
同 廿三年 府立師範付屬小學校入學。

明治廿九年

四月より五ヶ年間上田涼次郎氏につき日本畫を習得。

同 卅二年

滋賀縣彦根中學校に入學。

同 卅三年

大阪府立第一中學校(後の北野中學校)に轉、常に組長を通し特待生となる。

同 卅四年

四月より三年間山内愚遷氏につき洋畫を習得。

同 卅五年

北野中學校友會誌に赤目四十八瀧探検記を載す。

同 卅九年

檢定試験により中等學校教員免許を受く。箱根、日光の旅を行う。

同 四十年

八月初めて日本アルプスに向い乗鞍、槍ヶ岳に登山。この年三月高見山雪中

登山。同五月比良に登る。十二月日本

山岳會入會(會員番號一三七番)。

同 四十一年

八月有明山、中房、燕、大天井、常念、蝶ヶ岳を経て上高地に入り焼ヶ岳に登

り、一轉して吉田口より富士登山、大

宮に下る。この行二十五日に及ぶ。

同 四十二年

八月木曾眞弓峠を越え玉瀧に入り御岳登山、上松に下つて西駒ヶ岳に登り、

同 四十三年

さらに八ヶ岳、甲斐駒を踏む。十一月には秋の木曾路に繪畫旅行に出ず。

八月木曾駒に再度の登山を試み、さらに白馬岳を訪れ大黒、五龍、唐松、八方尾根を縦走す。十一月には高野山付近跋涉。

同 四十四年

八月大町より籠川入りで白澤に二日滞留の後、扇澤から祖父岳に登り、布引を経て鹿島槍を極め、さらに岩小屋澤、新越乗越、鳴澤、赤澤、大スバリ、マヤクボ、針ノ木、蓮華、北葛、七倉、不動

烏帽子、黒岳、鴛羽、双六、槍ヶ岳を経て上高地に出ず。この間二十四日山中に寝て三十餘座を踏んだのは記録的な山行であり、特に蓮華——烏帽子の縦

走はこの行によつて初めて成功した。

「後立山山脈峰傳ひの記」(山岳七年・二號)を發表。右紀行中二、三の山名

が問題となり、「榎谷氏の割物岳および赤牛山について」「机上談山」ある

いは「續机上談山」などの項で論議の

悼 追

大正二年

的となり、これに對し榎谷氏は「北アルプス瑠談」その他で活潑に應酬す。この年三月富士山麓の繪の旅。

一月伊吹登山。八月劍、立山に登り、五色に向い廿三日間にわたる山生活。

同 三年

一月伊吹、靈仙に繪畫旅行

昭和五年

同 十年

十一月日本山岳會幹事(後理事と改む)十月日本山岳會評議員。

同 九年

冬の但馬路へ繪の山旅に出で蘇夫岳、妙見山に登る。この年四月甲陽中學に迎えられる。

同 十三年

三月八ヶ岳東面の旅に出で、小諸をへて大町。五月上高地、八月日光、谷川岳、榛名。十二月には冬の山中湖、榛名に繪の旅。

同 十一年

洋畫家矢崎千代二氏につきバステル畫法を習得。一月紀州熊野路へ旅行。

同 十四年

一月榛名。三月箱根および榛名。六月榛名。七月淺間高原より榛名。八月裏

同 十二年

四月大町へ早春の繪行脚。五月熊野再遊。十月秋の上高地へ一週間、さらに富士より函根、一轉して駒、風風、鋸へ寫生旅行。十二月末から翌十三年一月にかけ大多利、有峰を経て眞川小屋に入り、元朝上ノ岳の頂上に立つ、日本アルプスの冬山としては記録的な快

同 十五年

五月伊那、大町方面。八月十和田、笹川、榛名、大町など二十三日間の繪の旅。十月山中湖、河口湖、四谷方面を

舉で、平藏、福松、宗作など立山案内人總動員の形であつた。

同 十三年

關西の新鋭な岳人で組織されたR・C。

同 十六年

六月初夏の大町から四谷。八月赤城、

同 十七年

榛名、上高地へ二十一日にわたる繪畫の旅。十月秋の上高地、大町、青木湖。

五月新緑の宇奈月を訪て上高地入り。

九月鹽原、草津、榛名。十月秋の黒部。

十一月小豆島寒霞溪。

同 十八年

四月櫻の伊那谷を訪れ、さらに野澤、

黒澤。

同 十九年

甲陽中學を退職。

同 廿一年

「繪の旅」三巻を編む（未發表）。

同 廿二年

八月逝去。

飯塚篤之助君の思い出

冠 松次郎

飯塚君は昭和二十年五月の大爆撃で遭難された。淺草の既橋近くの事務所に居られたので、令閨と女中と三人で隅田川の方へ逃げて行かれ、恐らくそこで行衛不明になつてしまつたらしい。誠に御氣の毒なことである。

飯塚君と私の交友は大正五年頃から始まつた。飯塚君の家は淺草黒船町の酒の老舗で、私の兄嫂の親戚づきであつた。

山の好きな彼はある日突然私の家を訪ねられた。私はその頃越中の方の山をよく登つていたので、山の話が自づとその方へうつり、楽しい初對面の幾時間かを送つた。

是非一度越中の山行に同道したいと云うので、私はその時計畫していた早月尾根登攀のことを話すと非常に喜ばれて行をもにされた。それは大正六年七月の末であつた。

その頃には劍岳は、長次郎谷を最初として別山尾根、三の窓谷、平藏谷、それから頂稜の縦走がなされ、八ッ峰や源治郎尾根などが登攀の興味をそゝつていた。しかし劍岳富山方面の長大な尾根——早月尾根（後に名づけたもの）——はまだ誰にも登られていなかった。私はその前年劍岳の頂から、直下を西北に延びている美しいこの尾根を見て、早月川の谷から登つて劍の頂を極めて見たいと思つた。

それで芦峯の佐伯軍造を頼んで、飯塚君と共にこの尾根の登攀を試みた。

その頃は火窓の山でモリブデンの採鑛をやつていたので、鑛石や物資の運搬等で早月川の谷は相當賑はいでいた。早月尾根の突端の松尾平から小窓まで索道がひかれ、池の平には飯場が幾棟も建てられていた。

私たちは伊折の酒井と云う家に泊り、そこで登山の仕度をした。翌早曉顔を洗いに裏の田圃へ出て東の方を見ると、曉の空

が水のように澄んで、その空との境も分らない位軟かな線を描いた劔岳が、大窓から小窓、三の窓の水晶のような岩の屏風を連らねて玲瓏としていた。劔の頂のすぐ下の處は残雪が一つ明星のように光つていたのは殊に深く私たちの心をとらえた。

あゝ、あの雪のある處まで、と二人とも云い合せたようにその方を眺めていた。

白萩川のブナクラ谷の落口から反對のキワラダンを攀ちて早月尾根にとりつき、一九二〇・七米の三角點のある峯に上り、木の間や藪の中をかき分けて三角點を捜し出してひと息入れた。

この三角點は下手のバンバシマの方から上げたもので、それから先は劔岳まで全く人跡のない尾根通しだった。曉方だけは少しの間よく晴れていたが、毎日々々霧が深く視界のとざざれている中を、未知の長い尾根を林のやうな偃松をくぐりながら、途中で露營をして劔の頂下まで登りつめた。

下の方は偃松が深かつたが、上の方は偃松が低く、美しい草地をめぐらせて残雪が現われて非常に歩きよくなつた。私たちは最後に崩れ易い岩の壘壁を攀ちて劔岳の頂に立つた。その時には非常に愉快であつた。二人で握手して喜んだことも覚えてゐる。越中の山の人も初めてなので皆喜んでゐた。(冠松次郎「劔越え」山岳十三年一號参照—編者)

それから長次郎谷を降つて劔澤へ出た。計畫では黒部別山と

内藏の助平を見て立山へ登るつもりであつたが、黒部別山西面の藪のひどさに尻ごみしてその方をあきらめ、劔澤を登つて立山の頂稜を雌山に詣でた。

丁度大汝に來たとき、小さな祠の上につゞく岩の平に立つて、私は飯塚君と展望に興じていた。立山東面の谷の深さ、森林の立派さに吸い込まれた。

鬱蒼とした針葉樹林の下から谷底まで埋めている新緑のやうな潮葉樹の大森林を見てうつとりとした。後立山の峯の裾と立山の峯の裾とが黒部川によつて縫い合されている、その緑の衣は眼も綾に絢爛としていた。

するとその中にたつた一ヶ所森林の縁が冗けて灰色の壁が露出しているのに眼をとめた。その立壁の懷に凝つた碧玉のやうな深い水の色に私たちは思はず眼を光らせた。

あゝ！君、黒部が見えるぞ。美しいなあ、あの深い淵の色、黒部の明眸だ、と私たちは思はず悦に入つた。

君、あそこは一體どこだろう、スバリの下には違いないが、と話しをしていると、雌山の方から神官がやつて來た。

早速つかまえて聞くと、それは御山谷おやまやんの落口の淵だと云う。

御山谷は降れますかと云うと、御前谷おんぜんやんの方は瀑があつて悪いが、御山谷は割合によい谷だと云う。あそこで釣ろうものなら半日で大きな岩魚が五十や百はとれますと云う。

私と飯塚君とは、來年こそ御山谷を黒部のあの美しい淵のある處まで下つて見ようと約束した。しかし飯塚君が都合が悪しく、翌大正七年には私一人で芦峯の春藏を連れて御山谷を下つて黒部川の上流を歩いた。

話はそれだが、私等は立山の頂で別れた。飯塚君は東京に用があると言うので下山し、私は立山からイタヤ峠を中の谷へ出て「平」に下り、それから黒部川を東澤まで溯り、赤牛岳から主稜を縦走して槍ヶ岳を越えて上高地へ下つた。

これが飯塚君との最初の山行であつた。

大正十三年十一月、笛吹川の紅葉が地に委して荒寥とした冬枯の頃、私は飯塚君と乾徳山を越えて黒金山二二三一米へ上つたことがある。乾徳山は以前に登つたことがあるが、黒金山はこの時が初めてであつた。

徳和から雜木林の中をぬけて乾徳山の南の、カヤトの高原のような處に登り、前宮から乾徳山の頂に上つた。富士山、南アルプスの新雪の姿を眺め、甲府盆地を下に見ながら私たちは頂の岩場を登つて行つた。旗竿岩、アミダ岩、ヒゲソリ岩など、云う累積した巨岩を越えて頂につくと、岩の間に小祠が富士山に向つて安置されていた。

これから行こうとする黒金山は全く黒木に被われて、その丸

い頭を笛吹川の西澤に延ばしている。その後ろから國師、奥仙丈の悠大な山波が延びて、奥仙丈の南の山のツルを越して金峰山の肩巾の廣い頂が見え、五丈岩がイボのように尖つていた。秩父の峯々が蒼々として彼方に連らなつて紺青に冴えてすばらしい小春日であつた。

乾徳山は南側の甲府向はカヤトの高原のような處だが、反対側は狭く急で、岩場つゞきになつて行くと、頂上を越えて黒金山につゞく岩場つゞきを下つて行くと、ボサが山稜を埋めている。白檜の矮い林の間を石楠やドウダン、ワセボの類が密生してなかなか歩きにくかつた。それでも二つ程の隆起を越すと立派な捩尾根となつて下生えも少なく、深い山奥の幽邃な氣分に満ちてきた。

短い初冬の陽は黒金山の手前で没し、私たちは焚火の周りに集つて合羽を冠つたまゝでまどろんだ。初冬の夜營は恐ろしく寒くまた長かつた。木枯がゴウ／＼と音を立てながら尾根を渡り、鞍部を越えて谷間に消えて行くのを聞きながら時々眼を覺まして焚火に枯枝を添えた。

翌朝は霜に凍つた山稜の苔の深い森の下に登り、肌をきるような西北風に身をすぼめて登つて行くと、林が漸く矮くなり、破片岩の露出となつて黒金山の頂に上つた。頂はなだらかに廣く頂點に三角櫓の柱が一本残つていた。東南は森林が深く、西

北はザクがひかれ、偃松や石楠花などの灌木となつてゐる爲展望はよい。西澤の源流がすぐ下に見えるし、里の方の眺望がなくなつた代りに奥秩父の山々は西澤の彼方にずらりと並んでゐる、一番立派だと思つたのは、奥仙丈岳から鳥居峠の方へ走つてゐる大きな山のツルだつた。秩父にこんな悠大な支脈は他にはなさそうに思つた。私たちは乾徳山と黒金山との間の谷間を降つてまた徳和へ出て歸つた。(冠松次郎「乾徳山から黒金山へ」山岳二十年一號参照—編者)

飯塚君との山行はまだあるが、主なものはこの二つで、これとはともに初登攀であつた。

こんな思い出を書いていると、生前時折家を尋ねてこられたり、日本山岳會の集りの歸り途に新橋の橋蓋で夜食をとりながら話し合つたことが浮んできて、故人の面影が偲ばれてならない。どうせ一度は元素に還る人の身だが、こんなことを考えると悲しくもあり、またなつかしいものである。

悼

略 歴

大正六年八月 日本山岳會入會(會員番號五五四番)。

昭和九年—十一年 理事。

昭和二十年五月 爆撃により戦災死。

宮崎武夫を偲ぶ

浅井 東 一

私に宮崎武夫の話をするお鉢がまわつて來た。高等學校の三年間を別に暮しただけで、小學校からずつと一緒で、京都大學を卒業したとき、もうこれで彼との永年の腐れ縁も切れたと思つていたら、私が十二・三年母校の研究室で遊んだ學句の果てに流れていつた先は、豫て宮崎が勤めていた大阪市役所だつたのだから、よつぽど切つても切れぬ仲らしい。これで對手が女でもあれば、少しばかり話は面白くなるのだが、あのヒゲ面の宮崎では味も素氣もない話より仕方がない。それにこんなに永い間同じユースを通つて生活してしまふと、彼の特徴即ち私の臭氣となつてしまつてゐるので、何が彼の彼たる所であつたのか、私には全く解らなくなつてしまつてゐる。ただ私にはなくて、彼にあつたものを二、三拾つてみよう。

大人になつても子供のよう矢鱈に甘い菓子が好きで、合宿食料の中などに羊羹でもあれば、いつの間にか自分のルックにしのべて置いて、ウマイ物や甘いものを食い盡して、合宿の臺所が寂しくなりだす頃になると、ポツポツ嬉しそうな顔をし

ながら、例のしのばせてある奴を出してくる彼だつた。糖分が好きだつたせい、年がら年中歯痛に悩んでいた。大學の二年の夏だつたか、宮崎と二人で徳本峠を越えたときの歯痛は一番印象が深い。口には餘り出さなかつたが、よつぽど痛たかつたとみえて、歩いている最中に急にウーンと云つてへたつてしま

うのだつた。齒の虫穴に沃丁を注ぎ込んだり、アスピリンをのませたり、醫學生たるもの何とかせよばなるまいと、ありつたけの智慧を絞つて介抱することしばしで、やつと御神輿が上るのだが、ものの二時間もすると、悲壯なヒゲ面をして再へたつてしまふ。これでも朝になるときつと元氣を出して、なかなか滞在しようなんて弱音は吐かなかつた。この時の齒痛では中毒を起しはせんかと心配した程、連日大量のアスピリンをのんだが、到頭槍肩の小屋だつたかで、齒ぐきから膿が破れ出てけりがついた。もうそれから後はウナらなくなつた。齒の痛くないときは虫だらけのラングイ齒を剝出して、低いウメクような聲を出しながら笑つていることが多かつた。シーンとした山の夜焚火でほのかに彼のヒゲ面が照し出されているとき、この低い笑い聲を聞くと、始めての人はゾーつとするそうだつた。これに『ヂンギス笑い』なる名があるのも非常に特徴があるからである。吾々面倒臭がりの作る小枝の焚火では満足せず、とてつもなく太い木を捜してきて、ジャン／＼火を燃やすのも彼の

癖の一つであつたが、この大燃しに温りながら、『ヂンギス笑い』を聞いていると、吾々は何だか私達の山旅の條件の一つが始めて充たされたように満足感を味わうのだつた。

山へ行けば人間自然の姿に歸るのは誰でもだが、彼のように飾り氣のない自然人になり切れる人間も少なからう。腹がへつていて、うまいと云へば、吾々の三、四倍位の飯を喰う時がある。餘り喰うので胃が一パイになつて、食つた物が口へ逆流してくる。『アー出てきた』と云いながら、出てきたものをまたムニヤムニヤと咀嚼して嘔み込む。他の人間がやつたら汚ならしいが、宮崎がやると牛が反芻運動をやつているように、全く自然に見える。山へ入つて四・五日経つと箸を使うのも煩わしくなるのか、オカズなどは簡単に手でつかんで食い始める。少少腐りかけのものでも意に介せず食つたが、時々失敗して腹をこわすこともあつた。晩年は少し怪しいと思つたら、神經質の私がいまず食うのを待つていて、『お前が食う位なら大丈夫やろ』と食い始めた。食物に無頓着であつたと同じ位に格好もなかなか振つていた、或洋行歸りの登山家が『宮崎の仲間が風體が餘り汚いので一緒に山歩きするのにしりごみする』と云つていたそ

うだが、さもありなんである。この敬遠に値する汚い連中の中に私も入つてゐることは申すまでもない。宮崎はよつぽど吹雪かないと、なかなか彼の自慢のソフトを脱いで、耳かくし帽に

換えたりしなかつた。茶色で毛の立つた、昔はさぞ立派であつたであろうと想像されるステットスンだつた。これを被つて、アザラシの皮を肩から脇に斜に懸け、下腹をぐつと突き出して滑つている様子はなかなか堂々以上のものでつた。デンギスカンの名はこれから出たものだつた。アゴ髯に雪が着くと益々立派さを増した。彼の父君は軍醫で、小さいときを北海道で暮したせいもあるのか、スキーはなかなかうまかつた。ほんとうの磨きは弘前高校時代にかかつたものであろう。高校時代の彼と私とは本州の兩端である弘前と山口とに別れていたので詳しくは知らないが、このデンギスカンの偉容をした彼はスキーを履いて北の國の山を随分歩き廻つたものらしい。

山ではこんなに無造作であつた彼も、家庭では相當うるさいおやじであつたらしい。母堂に聞いた話だが、出勤前の支關で奥さんと猛烈な口論が始まつて納まらず、母堂のこまられたことが度々あつたそうである。奥様は勝氣なハキハキした方だつたから、この夫婦喧嘩はなかなか面白かつたろうと思う。この奥様は宮崎がなくなつてから更に戦災に合い、二人の子供さんを抱えて生活のために涙ぐましい苦闘をされたのだつたが、昭和二十一年に大流行を見た發疹チフスでなくなられた。この賢婦人の御薫陶を受けたわけかも知れないが、學生時代の無造作な宮崎も年と共にキツチリした人間に變つて來た。チョット近

郊のスキー場へ若い女の子の一隊にお供して出かける時など、例の髻は綺麗に剃つて、リユーとしたスキー服などを着込んでいるのを見るようになった。茶色のソフトもいつの間にか全く被らなくなつてしまつた。しかしよく考えると、この綺麗ずきも或は彼が昔から潜在的に持つていた性質かも知れない。京都時代に居つた下宿の部屋など、床の間に軸物代りにスキーを飾つて、掃除も割合よくしてあつた。雪やけで黒赤まだらな、ちよつと人前には出られそうもない面をしていた彼にも、なかなか魅力があつたものとみえて、宮崎の大好物の六方焼を持つて、吉田山の上にある彼の下宿へ日參した女性もあつたらしい。その六方焼を食いながら山の話をするのが楽しみで、吾々も亦彼の室を屢々訪れたものだつた。

彼の綺麗好きと離せないのは『デンギスの禪』である。宿營準備を終つて、澤に下りて米を洗いながら、ちよつと上流を見ると、既に遅し！、デンギスの禪が、一端を石に壓えられて、ヒラヒラ溪流の中に晒されているのだつた。何故か知らないが水を汲むに都合よい場所より定まつてちよつと上流に禪を流す癖があつた。お蔭で宮崎の禪の汁入りの飯を食わされた人間は少なくなつてあろう。市役所の役人なんて云う職業がこんな風に彼を段々キツチリした人間に變化させたのかも知れないが、その最初の著明な現われは彼からくれる手紙に見られた。これ

はカーボンペーパーで書かれていて、その寫しが必ず彼の手元に残っている仕掛けである。吾々の山仲間なんて何れ劣らぬズボラ揃いで、手紙をもらつてもポケットにネジ込んだまま用件は忘れてしまうことが多かつたので、この法によつて、何月何日これこれの件に就き手紙を差上げたが、返事を早くおこせなど云われると、なかなか吾々には痛たかつた。このカーボンペーパー式の彼は何時の間にか吾々の仲間では代用のきかない貴重な存在になつて来た。白頭山へ行く頃（昭和九年十二月—十年一月）には既に最良の會計主任であつた。あの時京都驛を出發する朝、親切な友人が心をこめた果物の籠や菓子箱をくれたのは嬉しかつたが、三時になつても四時になつても、會計主任宮崎は汽車辨を買つて呉れそうにない。飯はどうしてくれると問えば、『今日は晝飯も晩飯も抜きや。もううた果物で充分カローリはある筈や。』萬事この調子で引きしめてくれたお陰で、比較的多人數での長期登山だつた白頭山行にも餘り經濟的苦痛を感じずにすんだのだつたと思う。蒙古へ行つたとき（昭和十三年八月—九月）はこのカーボンペーパー式に磨きがかかつて、會計に天才的なガッチリさを見せてくれた。餘り締められるので同行の若い連中などには氣の毒な氣もしたが、あながち締めるばかりでなく、大連行の船の中などでも、一行の食慾が減退して来たことを見て取ると、次の食事には皆が食堂に行く

までにちゃんと特別料理を注文して、テーブルに並べて置いてくれる程の女房振を發揮したものだつた。

永い間一緒に山旅をしていると、いつとはなしに夫々の人間の性格に應じた仕事の分擔ができ上つて、一つの仲間が一人の人間の身體のような機能を發揮しているものである。この仲間からポックリ特殊機能をする人間が抜けると、どうも全體の運轉がガタガタになつた感じがする。私達ズボラ者には眞似の出來ない宮崎が居なくなると殊更その感が深い。白頭山行のとき吾々が作つた、そして今でも登山家の間で用いられているヤッケにも、饅頭形のポラー天幕にも宮崎の細かい心使いと努力が縫い込まれているのであつて、今となつては特になつかしい氣がする。

私が大阪市立病院へ來てから時々東雲町の彼の自宅を訪れたが、二階の床が抜けはせぬかと心配する位本を積んだ中に小さい机を置いていつも勉強していた。天王寺中學時代生駒山の麓にあつた宮崎の家にも行つたことがあるが、當時は唯の腕白小僧で、あのガサガサした宮崎が大人になつて、こんなに本に埋まつて讀書しているのを見ると、昔の宮崎とは別の人間が坐つているようにさえ思えた。昔はともかく、東雲町時代はなかなか山の物知りだつた。私がビルマへ出發した昭和十九年頃はフイリッピのカラコルムの譯の仕上げをやつていた。大阪で出し

ていた『ケルン』の編輯にも相當大きい役割を演じていたようだった。あの雑誌もとうとう倒れたが、あの長年月最初の氣品を失わずに頑張り續けたのには、宮崎のカーボンペーパー式才能と努力が與つて力があつたといわねばなるまい。宮崎の『蒙古横斷』の本ができ上つたとき（昭和十八年六月）私の診察室へ本と一緒に金子若干を持つて来て、『お前にはケルン時代に何度も原稿を書かして、ロクに原稿料も出さなかつたが、この本で少し金が入つた。これだけで許してくれ』といつて無理に置いて歸つた。それは『ケルン』が廢刊になつて一・二年も経つた頃ではなかつたかと思ふ。『ケルン』は宮崎一人で經營していたわけでもないのに、自分のポケットに入つた金を出して、

こんなにあやまつて廻つていた所に山男宮崎の面目躍如たるものがあるように思われる。戦争中大阪市役所で市民疎開の世話役をしていたため、晝夜晴雨を別たず活動して、終に急性肺炎で倒れたのだそうだが（昭和二十年六月八日）、宮崎のことだから、他人様の困つてゐるのを見ると、自分の健康が破壊されつつあることも忘れてしまつて、無茶苦茶走りまわつたのである。宮崎は最後まで自己犠牲を忘れ得ない美しい山男であつたに違いない。

故人の追悼文などというと、美點の數々を書き並べなければならぬのに、その反對のものになつてしまつて、宮崎に對し

て申譯ないように思うが、淺井はこんな奴だと百も承知してくれただンギスだ。悪く思うな。

略 歴

昭和七年五月

日本山岳會入會（會員番號一三六四番）。

昭和十三年—十六年

理事。

昭和二十年六月八日

急性肺炎にて逝去。

湯淺巖君のこと

小 原 勝 郎

この戦争のために、多くの惜しい人達が還らぬ身となつてゐる。昨年の夏、私は復員してみても、先づ山仲間間の消息を知つた時、其の犠牲者の中に湯淺巖君があげられているのを聞いて、私は何ともいられない氣持になつて了つた。

顔に針でも刺される様な雪混りの強い北風を堪え、デッヘルをし乍ら彼のステップを切る後姿はもう見る事が出来なくなつた。次のフェース迄の足場を決め、急斜面の堅雪にバランスのとれた姿勢でピッケルを振るう自信あるあの姿は忘れ得ぬ映像となつて了つたのである。彼は一九三六年に行われたナンダ・コート遠征隊員の一人であり、一見人並より貧弱そうな身體を

もち乍ら多忙な準備期間の休養もなく、長い山麓迄の旅行、登頂への苦闘を終え、其間粘り強い意志とバネのある體力と敏捷な動作で登攀隊員として活躍をした。九月二十九日の頂上攻撃の際のことを濱野が部報に『あと二、三百米と云う處で、彼の踏み出した斜面の足下から雪崩が起り、危い一瞬、その時彼は動物の様な鋭い動作で、ずれ落ちる雪の面から三、四歩横飛びに跳んで危機を脱した』と書いていたが、學校の部室の片隅で靜かに山の本を讀耽つている彼の姿を、若し知らぬ人が見たらあの男がそんな勇氣と機敏を身につけ、危険からスルリと體をかわず事の出来る男かと疑うかも知れない。その彼がマリアナ島の何處で、どうして、どんな氣持で還らぬ身となつて了つたのか、痛々しくて私は聞く事すら辛い。

彼の山への熱情は非常なもので、常に山を想い、山について考えていた。そして暇を作つては山に入つていた。普段は口數の少い方だつたが、山の話になると相當多辯になつた。私は山小舎の爐邊や、部室や、或いは私の家で夜遅く迄、山について眞剣に彼と語つたものである。彼の山に對する態度は、身を以つて山に眞正面からぶつかると大膽なものだつた。少くとも、學校山岳部は日本の山岳界に於ける第一線であり、正統なるスポーツ・アルピニズムの態度こそ攻撃的でなければならぬと、靜かではあるが力のある彼の言葉は、私の耳底に未だ新しく殘

つてゐる。然し彼とて初めから、よきパイオニヤーでは無かつた。私は隆々たる彼の記録よりも、むしろ微笑しき些細な事柄がしきりに懐しく想い出されてならない。讀者の中には湯淺巖君を知らぬ方々も多いであらうし、こういう種の本に個人的な感情のみで想い出を記す事は、どうかと一應は躊躇はしたが、何かの機會に湯淺君の思想や記録等に接した際に、こういう面も合せて、丸味のある岳人湯淺君として輪廓付けて戴ければ私の喜び此の上も無い。

彼は昭和五年の春新入部員として、立教山岳部に入部して來た。當時私は教室には出なくとも、部室には一日も缺した事なく通い詰めていたが、そこで色が黒く小柄で一寸猫背ぎみの彼が、殆んど人と話をする様子もなく山の本や、地圖を書棚から出して、埃ぼい部室の片隅で讀んだり、ノートしていた姿をよく見かけた。

その夏の第一次登山計畫のメンバーが發表された時、彼の初めて山行に私も行く事になつた。乗鞍から笠、烏帽子を経て劍の合宿に入るため、平の小舎からカリヤス峠を越え、尾根路から五色の小舎に泊る事にした。その日の小舎は大入滿員だつたので、遅く着いた私達は煙い屋根裏に寝かされて了つた。夜中に餘り煙いので眼を醒して見ると、仄かなランプの下でリュ

ツクを側に置き、手に小さな袋を弄んだり、幾重にも包んである紙包を開けて何か算えていたりしているので、どうしているのかと聞いてみると、一寸恥かしそうな顔で『これはお祖母さんが出かける時、若し路に迷つた時に食べるので、決して山を下りる迄は手を付けてはいけないといつて渡されたのです』と私に米が三合程入っている袋とビスケットの紙包を見せた。其夜寝られぬ儘に、彼が大阪で生れ、お祖母さんに育てられた所謂お祖母さん子だということ、山岳部に入つた動機は美しい勧誘のボスターのためではなく、小さい時から自然を愛し、將來は良き登山家になり度い氣持から入つて来たこと等、煙い屋根裏でボソボソ長い間話したが、これが話らしい話をした最初だつたと記憶している。この米袋の一件で合宿中、リトダーから準備會で決められた物以外に持つて来たこと、登山には生命ともなる可き靴の油を忘れて来たことで叱られていた時、一つの辯解もせずに頷いていた姿など、今から思えば懐しい印象である。劔の眞砂澤での合宿では、例年の如く殊に新人には猛烈な基礎訓練があつたが、精進以て努めていたのは痛ましい程だつた。

其の頃から彼の心の奥底には、雲表に聳ゆる理想の山々に挑戦すべく、トレーニングとして自ら苦しい試練に當るのを、むしろ喜びとしていた様にも思われた。豫科二年の六月、七月に

早くも二回の單獨行を行つてゐる。單獨行は行動範圍に自然制限を受けるけれども、山を最も早く知ることが出来ること、思索を鍊るに好い機會だといつて、其の後もよく出かけていた様だつた。其の十二月の岳川側より明神岳の雪稜と岩場は、彼の同行は初めての冬山だけに心配していたが、立派に惡場をこなしていたのには驚かされた。特にトラヴァースの時の足頸のきかせ方や、ザイルさばき等の技術的進歩は、新人とは思えぬ程目覺ましい進歩を見せていた。當時の山の仲間はずん々辛辣な諷名を附けるのが上手が、早速『グロ』と命名されて了つたのは、流石に腐つたらしい。最初の中は正面にグロちゃん等というものなら、碌に返事もせずに例の黒い顔で、下唇を突出して横眼で睨んだりしていたが、終いには諦て了つたのか『何んだい』と靜かに返事をしてゐる譯を聞く様にもなつた。そして手紙やメモの終りなどには、自ら『愚郎』と書く様に迄なつた。山によつて結れた仲間に対しては特に寛大だつたらしい。

豫科三年の十二月には嚴冬の後立山縦走を斯波と試み、惡戦苦闘の末初縦走の記録を作つた。立教大學山岳部々報第五號の報告に『一定したをして登し防寒具、食糧等を持つて、天候其他の状態の最悪な嚴冬に於て、山頂から山頂へと前進を續け其の途上に於て遭遇する色々な困難に打勝ち、同時に其の氷雪の色々の經驗を得たいと云う動機のもとに……』と書かれてあ

る様に、彼の山に對する思想は山と取組合つて、これを征服して行く動的な面が主流をなしていた。と同時に又、緊張した山行の間には峠路を、高原を、そして溪流にそつて彷徨う靜的な半面をも楽しみ感傷的な詩人にも似た心情の持主でもあつた。

豫科三年の終りにリーダー會は彼を副リーダーに推薦した。

當時の部は部員の整理をし精銳主義をとつていたが、彼はその中堅となり、足跡を益々廣め經驗を積み、全く部の推進力となつた。其の頃からは彼の變屈ともみられる性質にも變化をみせて來て、部員の誰彼ともよく語り又親まれて來た。山に行かぬ時は部員を誘つては、マラソンやラクビー、サッカー等とトレーニングを怠らなかつた。或る冬山の前だつたか、何んでも寒い日だつた。一人残らずマスクをかけた珍妙なマラソンの一團が、長崎グラランドの方から歸つて來るのに會つたので、先頭の彼に聞いてみると、防寒頭巾（毛糸編で被つた時眼だけ出るもの）を使つた時、息がきれいな様にトレーニングしているのだと得意になつていたが、彼獨特の創意には、仲々面白いのがある。これと同じ様な話で、風の猛烈に強い尾根での事、突風で幾度か浮きそうになる身體を、ピッケルをクラストした雪面に叩き込んで、平蜘蛛の様になつては風を避け乍ら長い時間かゝつて登頂し、キャンプに戻つてから悠々とワインド・ヤツケやズボンのポケットから拳大の石を幾つも捨て乍ら、不思議がつて

見ていた私達に向つて、ユーモアたつぷりに『我輩新案のワインドテクニクだ』と、皆を笑せた喜等印象には餘りにも強すぎる。

本科に入つてから直ぐに部のリーダーとなり、部の計畫は勿論下級部員の指導に力を入れていた。本科二年の終りには總務になり、須賀、清水、濱野等と相俟つて内外共に活躍した事はいふ迄もない。彼の多くの山行の中にも特に後半は、後立山連峯中の秀峯である鹿島槍ヶ岳を中心とする、東尾根、天狗尾根、又は北槍北壁と其の基底に當るカクネ里等全く彼の心を捉えたといつてもよい程だつた。別けても東尾根に對する攻撃だけでも、昭和七年十月、同八年四月、同九年一月と二月に攻鬪し、遂に五回目の十年十二月、山本、中島と共に完登してこれも初登攀の榮冠を獲得している。又平和そのものゝ山間の村落である鹿島村の何時も吾々が厄介になる狩野さんの家での生活は、頂への動的な活動の前後に味う、靜的な心身の憩いの場所として、醇朴な村人と共に非常に愛していた。

彼は學校を終えてから召集で永い間滿洲へ行つていた。其の間よく防寒服にスキーを穿いた寫眞等入れた手紙を送つてよこした。何年か後の春、除隊した知らせと早速鹿島へ入ろうといふ誘いの手紙を受取つたので、彼は大阪から私は東京からと別々に立つて、其の翌日に鹿島村の狩野さんの家で落合うこと

にしていたのに、どうしたのか其の日に来ないので私は翌日一人で西侯の小舎に行き、冷澤の上部へ遊びに行つた。その夜遅くもう半分諦めかけていた處え、例のペレーを被り飄然と現れた。そしてリュックを下し乍ら『やあ、えらい目にあつた。出かけ様と思つた晩、急に見合をさせられて了つたが、心は此処に飛んで行つて了つているので、一寸も氣乗りがしないので相手の人には氣の毒だつた』と軍隊で仕込まれたのか、臆さず物をいうところは一寸私を面喰はせたが、こんな會話から始まり何年振りかで、然も二人にとつては心の故郷とも云うべき鹿島槍の内懐に抱かれた西侯小舎での再會は、涙の出る程嬉しかつた。その夜は焚火を挟んで、夜遅く迄語り合つたのはいうまでもない。そして吾々は遠く又は近くに全層雪崩の轟然たる音を聞き乍ら、澤一面を荒しているデブリを越え、國境尾根から會て心魂を打込んで戦つた岩峰や、印象深いルンゼを目のあたりに眺め乍ら、最も氣儘に歩いたりして實に幸福な二日間を過した。次の山行を約束して別れてから、間も無く再び召集を受けて渡滿した知らせが來た。

其の後私も中支へ行き、野戰同志で近況を知らせ合つたりしていたが、彼からの最後のものは「横須賀郵便局氣付」になつていて、『貴兄曾遊の地に來り懐しく風物に接している……』といつた通信であつた。滿洲から内南洋に轉屬したのである

う。思えば日數からいつても、あの時の山行が彼の最後のものになつてゐる。然も彼が入部して初めての夏山に行を共にし、最後の鹿島槍も一緒だつた事は單に偶然として片附けられない様な氣がする。彼の残した數多い輝かしい記録は永遠のものであり、小さい乍ら我山岳部が多くの困難に打勝ち、正統的登山意識のもとに山と取組んでいる思想こそ、彼の残した遺産である。短い生涯ではあつたが、彼の生命は山岳と共に永却に吾々の中にある様な氣がする。(昭和二十三年記す)

湯淺巖氏略年譜

大正二年十月一日 大阪市西區西長堀北通五丁目に於て生る。

(父護氏)

昭和五年四月 立教大學入學、山岳部入部。

五月 扇山。三ツ峠。

七月 乗鞍岳より笠・烏帽子・立山・劍岳への縱

走。劍眞砂澤生活。

九月 山上ヶ嶽(大峯山脈)。

十一月 雲取山より日原川。

十二月 湯澤スキー合宿。三國峠越。

昭和六年一月 湯之小屋生活。

二月 菅平・猫岳・鹿澤行。

五月 仙ノ倉山。

六月 八幡山・野呂川下り。
 七月 後立山縦走。上高地行。燕頭山・鳳凰山・大武川下り。
 十月 谷川岳。
 十二月 關スキー合宿。
 十二月 穂高・明神岳。
 昭和七年一月 乗鞍岳。
 二月 八ヶ岳。
 三月 大井川西俣より悪澤岳・鹽見岳。
 四月 奥穂高・ジャンダルム・北穂高岳。
 五月 奥多摩海澤懸親天暮行。
 七月 穂高潤澤合宿。
 七月 槍ヶ岳・黒部上流・薬師岳及下廊下。
 八月 常念岳。木曾駒ヶ岳。
 九月 苗場山と清津川。
 十月 三ツ峠岩登練習。
 十月 鹿島槍・爺岳。
 十二月 後立山縦走。
 八ヶ岳。
 三月 八峰キレット小屋生活。
 四月 山岳部委員。
 四月 鹿島槍東尾根。
 五月 日原ヒユツテ懇親行。

七月 剱岳眞砂澤合宿(八ッ峰・源治郎尾根)。剱岳・窓附近。
 八月 高瀬川・槍・穂高縦走。
 十月 北岳・甲斐駒・鋸岳。
 十二月 小谷温泉スキー合宿。北岳バットレス(サポート)。笹ヶ峰牧場スキー行。
 昭和九年一月 鹿島槍東尾根(未登)。
 二月 鹿島槍東尾根(未登)。
 三月 立山川入り・立山・大日岳。
 四月 剱岳・源治郎尾根。
 五月 七ツ小屋山。
 六月 三ツ峠懇親行。谷川岳一の倉澤。
 七月 穂高潤澤合宿。
 八月 剱岳・池の谷。頸城の峠越え。
 九月 瑞牆山。
 十月 剱・立山谷。北岳バットレス(第四尾根)。
 十二月 鹿島槍東尾根。剱・パンバ島。
 昭和十年二月 八ヶ岳。
 四月 山岳部總務委員。
 四月 平標山と仙ノ倉山。
 五月 刈寄山懇親行。
 七月 穂高潤澤合宿。槍ヶ岳と燕岳。鹿島槍と爺岳。
 八月 乗鞍岳。



名 譽 会 員

(前列左から田部重治氏・高野鷹藏氏・鳥山悌成氏 後列左から
三枝守博氏・中村清太郎氏・加賀正太郎氏・横有恒氏)



フルバータの記念アイヌ・ピッケル
(本部にFrom Fred D. Ayres and John C. Oberlin
と銘記されている)

十月

八甲田山。裏妙義山。槍ヶ岳北鎌尾根。

昭和十年十二月

鹿島天狗尾根。

昭和十一年一月

熊の湯スキー行。白河スキー場行。赤城山。

二月

八ヶ岳硫黄岳。

三月

立教大學卒業。

五月

遠見尾根。

七月—十二月

ガルワール・ヒマラヤのナンダゴート遠征

隊の一員となり十月五日登頂に成功す。

昭和九年七月十八日 マリアナ島に於て戦死。

雜 錄

新 名 譽 會 員

會は一九五〇年四月十九日の役員總會の席上、長老會員十數名の候補者中から慎重な銓衡の下に左記八人の方々を名譽會員に推薦決定した。

秩父宮 殿下

三枝 守博氏 (一九〇六年三月入會)

鳥山 悌成氏 (一九〇六年五月入會)

加賀正太郎氏 (一九〇八年五月入會)

中村清太郎氏 (同 右)

田部 重治氏 (一九〇九年十二月入會)

近藤 茂吉氏 (一九一〇年十二月入會)

榎 有恒氏 (一九一四年二月入會)

よつて會の名譽會員は現在の高頭仁兵衛氏・高野鷹藏氏・武田久吉氏・山川默氏(何れも發起人)に加えて十二名となつた。

本會の名譽會員は長く會に對して多大の貢獻をされ且本邦登山界に顯著な業績を残された長老會員中から、定款第七條の規定に基き役員總會に於て推薦されるものである。

名譽會員の推薦は久しく途絶えていたことで、戦後は勿論はじめてのことである。今回名譽會員となられた方々の業績等は會報第一五〇號及一五一號に概述されているから茲に更めて總説の要はなからう。

會は、日本の登山界に嘗て一つの時代を作り、後至者に大きな影響を與えられた、これら名譽會員の方々を招いて、久し振りにその風貌聲咳に接したいと云うような意味から、同年十一月二十四日神田YMCAに於て晚餐會を開いた。幸い挿入寫眞に見られる高野・三枝・鳥山・加賀・中村・田部・榎の七氏が出席され、五十餘人の新舊會員が集い久々の盛會だつた。席上名譽會員の諸氏から夫々意義深い感想が述べられ、後進の會員は好き先輩を持つことの幸福を想つたのだつた。食事が終つて程近いクラブルームに席を移し、此處へ驅せつけられた武田會

長も交えて一同歡談に時の移るのを忘れた。毎年十二月に催される云うアルバイン・クラブのアニユアル・ディナーの眞似をする譯ではないが、年に一度は大先輩を圍んで老若歡を盡すような晩餐會を持ちたいとは、出席した凡ての人々が懐いた感でもつたろう。(會報第一五三號參照)

當日出席されなかつた多くの會員各位のために、名譽會員の紀念撮影を挿入した次第である。

アルバータの紀念ピッケル

アメリカン・アルバイン・クラブの會員であるJ・C・オーバリン、F・D・エーレンス兩氏が二九四八年夏、マウント・アルバータの第二登頂に成功し、一九二五年の初登頂時、櫃有恒氏のパーティーがその頂に残してきたピッケルを持ちかえり、ニューヨークのA・A・Cの山岳博物館に納めたと言ふ話は、當時日本の新聞にも報せられてわれわれの記憶に新たなことであるが、その後兩氏等と文通を交わしてきた會員三田幸夫氏の手を経て、兩氏から本會へそのピッケルの模様が紀念としておくれられ、現品は一九四九年十二月無事到着した。尙右には左記の手紙が添えられている。

November 1, 1949

In commemoration of the first ascent of Mt. Alberta by Mr. Yuko Maki and his party on July 21, 1925 we are happy to present to the Japanese Alpine Club an ice-axe engraved "Mt. Alberta-1925-J.A.C.". The successful ascent of this difficult unclimbed mountain, after so long a journey, was a notable achievement and Count M.F. Hosokawa and the Mainichi are to be congratulated for their aid in sponsoring the expedition.

The head of this ice-axe has been silver plated in order to recall the legend of the "Silver Ice-axe" on Mt. Alberta.

Since the time of the second ascent of Mt. Alberta in 1948, we have had most pleasant contacts with those members of the first ascent party still living, and from whom we have each received a handsome Nata with inscribed sheath.

This ice-axe is an expression of esteem and carries with it our best wishes for future enjoyment of the mountains.

Signed

Fred D. Ayres

Signed

John C. Oberlin

(Mt. Alberta-1948)

おくられたビッケルの頭部は、其の手紙にもある通り、「アルバータの銀のビッケル」と云う傳説に従つて銀色に鍍金され

「Mt. Alberts-1925-J.A.O.」と刻まれ、すつきりしたアッシュの柄には贈り主兩氏の姓名が焼きつけられている。(挿入の寫真参照)

會は兩氏等の厚意を多とし一九四九年十二月二十六日、當時の隊員榎有恒氏をはじめ三田幸夫氏、田村靜一氏(舊姓橋本)を招待し(早川種三氏は都合で缺席)、役員一同晚餐を共にしつゝ、懷舊の一夕を過した次第は會報第一四九號既報の通りである。

其後當日の記念寫眞を添えて會から鄭重な禮狀を差出し、ビッケルはクラブルームの一隅に置いて廣く閲覧に供することゝした。

從來「山岳」の末尾には年度中の會務報告其の他の記録が一括掲載される慣例であつたが、既に會報も大體定期的に刊行され、その方に委細収録されてあるのと紙面其の他の都合で、今回は會報に掲載し得なかつた寫眞等を除き、凡て省略したことを諒とされたい。

一九五〇年度本會役員

會長 武田 久吉

理事長 松方 三郎

理事 堀田 彌一 谷口 現吉

藤井 運平 今井友之助 望月 達夫

林 和夫 關根 吉郎 辰沼 廣吉

神山 勉 濱野 正男 今村 正二

崎田 熙 鈴木 正俊 千谷壯之助

小野 幸 村山 雅美 杉本 義信

村木 庸益 村山 雅美 山田 二郎

評議員 榎 有恒 神谷 恭 沼井鐵太郎

辻 莊一 藤島 敏男 三田 幸夫

津田 周二 伊藤秀五郎 今西 錦司

成瀬 岩雄 島田 巽 山崎 春雄

篠田 軍治 入澤 文明

(支部長在職者)

藤島源太郎(越後) 伊藤彌十郎(福島)

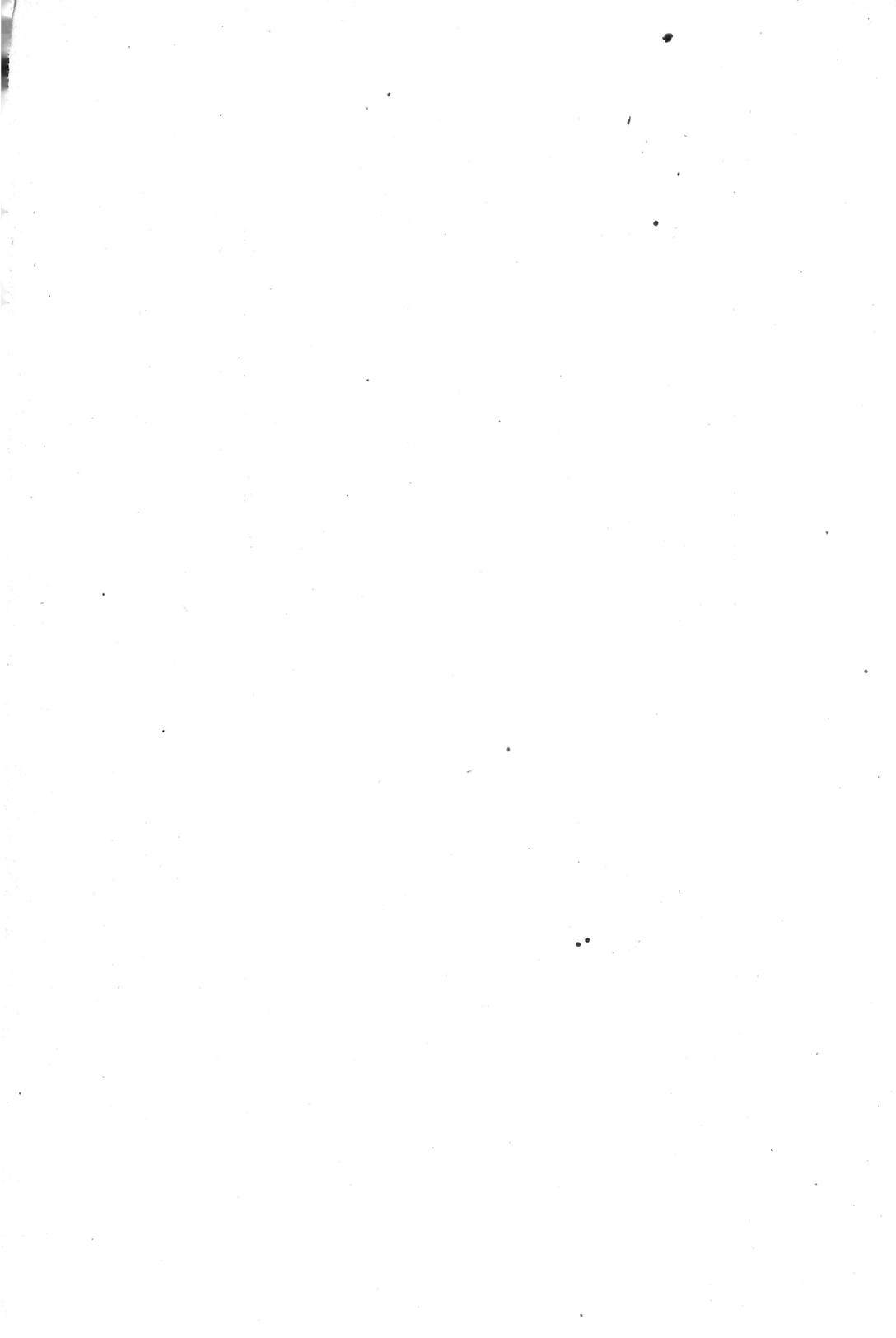
大澤伊三郎(山梨) 後藤 幹次(山形)

佐野 勇一(山陰) 尾崎 喜八(信濃)

貴堂 武時(富山) 大室 貞一(靜岡)

監事 石原 憲治 中屋 健一

主事 原 全教



「山岳」投稿規定

- 一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要はない。
- 一、原稿の採否は山岳編集委員会で決定する。
- 一、原稿は返却しない。
- 一、研究並に紀行には、その概要を付けること。
- 一、紀行には成る可く概念図を添付すること。
- 一、写真は光沢印画紙に焼付け、必ず説明を付けること。
- 一、地名、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。
- 一、編集者は原稿の一部を削除又は訂正することがある。
- 一、校正は編集者に一任されたい。

送り先 東京都千代田区神田駿河台四ノ六

日本山岳会「山岳」編集部

本号編集委員

田邊 主計
成瀬 岩雄
望月 達夫

昭和二十六年六月一日印刷

昭和二十六年六月十日発行

定価 二〇〇円

東京都千代田区神田駿河台四ノ六

発行所 日本山岳會

日本山岳会内

編集者兼 望月 達夫

東京都港区赤坂溜池五

印刷者 株式會社技報堂

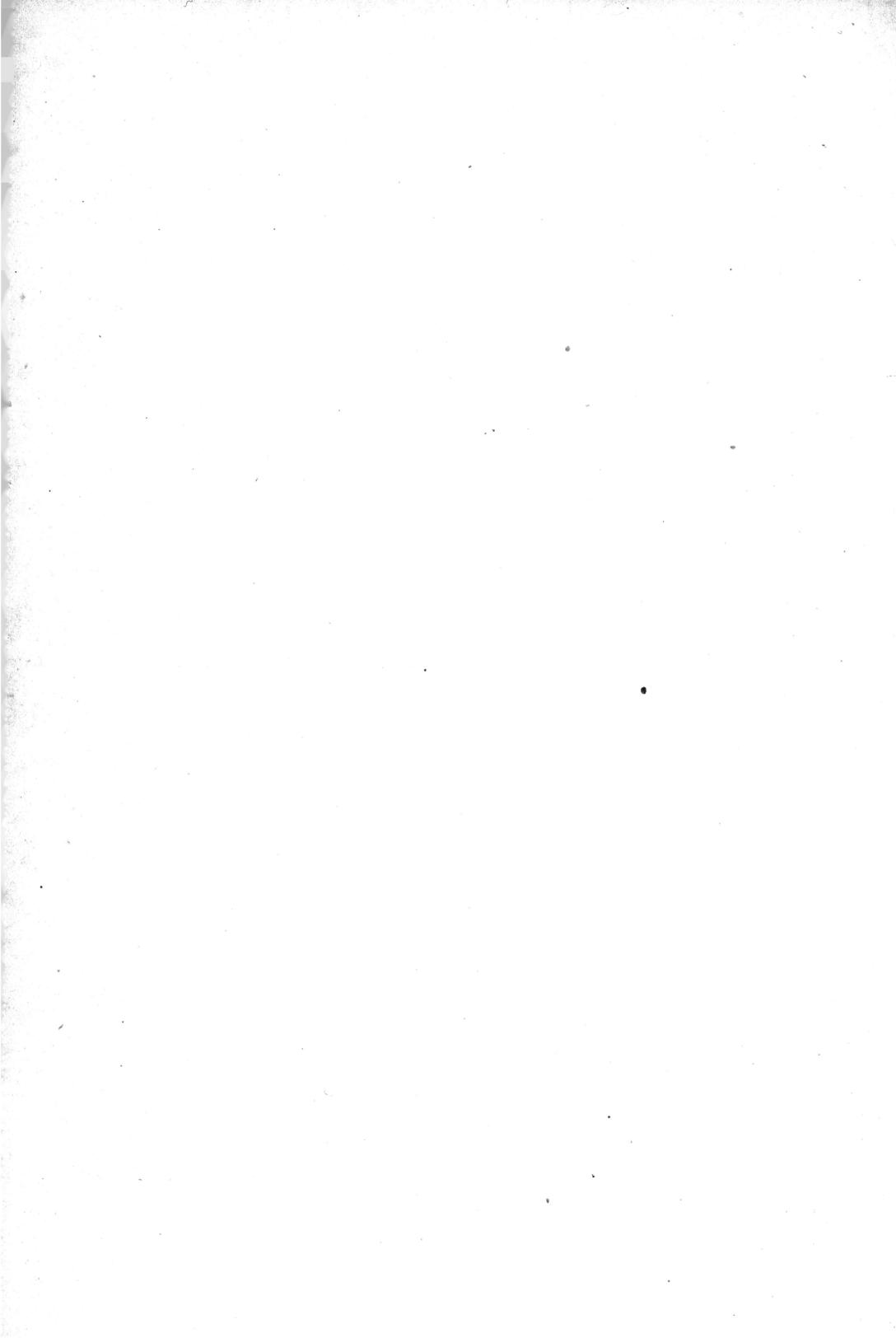
東京都千代田区神田駿河台二ノ一

発売所 茗溪堂書店

電話神田(25)二〇四四番







好日山莊

日本最高

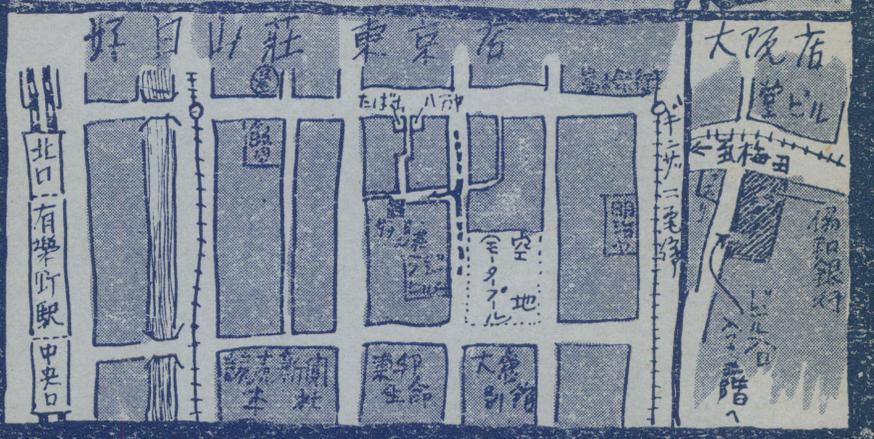
山と水と果

品專山店

多年實地使國北極研究
改良に力を盡したる名作

東京市 東京聲軟工銀西二五
東許京揚(由) 3600-

大阪市 大阪市北区堂比ル前
協和ビル三階



The Journal of
The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XLV 1950